



University of Pennsylvania
ScholarlyCommons

Department of East Asian Languages and
Civilizations

School of Arts and Sciences

2016

Takeshi Kaikō – 開高健 (1930–1989)

Cecilia S. Seigle Ph.D.

University of Pennsylvania, cseigle@sas.upenn.edu

Follow this and additional works at: <http://repository.upenn.edu/ealc>



Part of the [East Asian Languages and Societies Commons](#), and the [Translation Studies Commons](#)

Seigle, Cecilia S. Ph.D., "Takeshi Kaikō – 開高健 (1930–1989)" (2016). *Department of East Asian Languages and Civilizations*. Paper 9.

<http://repository.upenn.edu/ealc/9>

This paper is posted at ScholarlyCommons. <http://repository.upenn.edu/ealc/9>

For more information, please contact repository@pobox.upenn.edu.

Takeshi Kaikō – 開高健 (1930–1989)

Abstract

It has been 27 years (as of 2015) since the death of Takeshi Kaikō, Japanese writer, novelist, essayist, journalist, and a recipient of many literary prizes. This essay comprises of correspondence between Kaikō and myself, which lasted for 14 years since I first wrote to him in 1972 from necessity to ask some questions on his novel “Darkness in Summer” (夏の闇), which I was translating. We became good friends. Many years later, his long-time editor and publisher commented that Kaikō evidently told me things that he never told his long-time editors. I told him that was because I was not a woman to Kaikō, just a friend.

Kaikō is still an object of research and study among scholars and interested readers. I believe these letters will disclose a side of Takeshi Kaikō that cannot be learned from reading his published work.

Disciplines

Arts and Humanities | East Asian Languages and Societies | Translation Studies

開高健氏のこと

開高健が亡くなってから26年近くなる。26年といたら赤ん坊が生まれて一人前の成人男女に成長して結婚し、子供を作り、一家を構えてもおかしくない年なので、いつの間にそれだけの時間がたったかと不思議に思う。そうして彼が生きていれば私とあまり年が違わないので同じく髪は白くなり、体重は減り、目が悪く、背中が痛く、エネルギーが日に日に低下してあまり動きなくなっている筈だと思うのであるが――これは信じられない。私も2015年の12月に八十四才になるのでこの二三年記憶喪失に悩まされているのだが・一歳年上の彼に関して絶対にそんな筈はない、と思うのである。徹夜の仕事に全身消耗して身動きもできなくなってぶっ倒れているときでも、世界のどこかで何か起こっている時、どこかの新聞社に後援するからそこへ行かないかと誘われると忽ち体中にエネルギーをみなぎらせて出かけてしまう人だったからである。開高健にはそのイメージしかない。

開高氏の死からひと世代経った今なぜこういう物を発表しようと思い始めたかと云うと、長い間――2008年の12月から開高記念館へお貸ししていた開高氏と私の文通の束が7年の後やっと帰って来たからである。順序不同になっていたもので、一応全部読んで日付はないものの、封筒の日付を推測してみたり、書いてある事実から判断してみたりしながら全部並べてみた。その中には牧羊子女史の手紙も入っている。

2008年の12月に、日本の（杉並と茅ヶ崎）開高記念会から「来年が開高氏没後20年になるので開高氏について質問したい」というお電話があり岩城利守様と写真家の、たしかアリモトタカシ様のお二人が来られた。その時手紙の箱を持ち出して見せたら、借りたいとおっしゃった。私はぼんやりできちんとしない人間だから、箱に入っているものを数えもせず、コピーも取らず、領収書も貰わず、全部渡してしまった。急な事だったので何通あったのか知らなかったが、開高氏の手紙は確か71通か、それ以上あったはずである。向こうに着いてから記念会側が数えてくださったところによると、全部で170通あったらしい。そういう私の不用意さだったから、帰って来た手紙が全部で136通(開高氏の手紙59通と牧羊子女史の手紙5通を含む)しかなかったのだが文句はいえない。

それまで、一度も読み返すことはなかったのだが、今度初めて続けて読んでみて、今更ながら開高さんの人間像に打たれた。多分多くの人々が『開高像』を語り、書いているのだろうけれど、私なりの、彼の知られざる一面を新しく知ったような気になり、ほかの方達にも知っていただきたくなった。それには彼の手紙を皆さんに読んでもらうのが一番だろうと思う。いろいろ説明するよりも、なぜ文通したのか前後の事情がわかるように私の手紙も読んでもらうのが一番簡単だろうと思ったのである。人の知らない開高健の優しさなど、私の主人のガンが発見された報告の手紙の返事に、

「あなたがいま萎れると御主人にひどくひびきます。せせらわらって鼻歌をうたって看病して上げることです。泣くのはトイレで、ひとりで。」

と書いてくださって私をさらに泣かせたが、今でもその優しさには涙が出る。

手紙がどういうわけか3 4 通ほど帰って来ていないので事情がわからないところもあるが、彼が闇三部作の最後の作にどれだけ苦闘したかなどよくわかるだろうと思う。

それからもうひとつ若い方達のために参考になるかもしれないと思うのは翻訳書の出版事情である。これは本当に苦労したからいろいろ手紙の中に書いてある。26年も後の今日の出版事情はぜんぜん違うかもしれないが、私がもう嫌になって翻訳をやめてしまった理由もお分かりいただけると思う。

しかし自分が若いころどんなに傲慢で好き勝手なことを言い散らしたか、すっかり忘れていたので、今度はじめて気が付いて恥ずかしく慙愧にたえないことも事実である。若いと言ってももう四十才くらいだった。やはりその年頃の間人は働き盛りと言うのだろうか、それで自信を持っていたのだろう。今から見ると全く恥ずかしい。同じ世代の開高氏はもちろん非常に才能のある作家だったからその頃は自信満々だった。けれども彼の完成した膨大な作品集やさまざまな文学賞の受賞経歴を見ればそれは当然であった。一介の文化機関の職員、その後大学教師だった私とは比べ物にならない。

開高氏と文通を始めた理由は、必要に迫られて、である。1970年代のはじめ、ニューヨークのクノッフ (Alfred Knopf) 社に日本の現代文学の本の評価を時々頼まれていた。クノッフ社にはその頃ストラウス氏という日本語の出来る編集長がいて、新しく出版された日本現代文学の本を送ってよこしていた。なぜ私が **Reader** に選ばれたのか覚えていないが、多分その頃旧師の E. Dale Saunderson 教授と三島由紀夫の『暁の寺』を共訳していたので教授が推薦してくださったのだろう。そのうちに開高健の『夏の闇』が送られてきた。私はその作品に感動してクノッフ社に出版を推薦した。そうするとストラウス氏がそんなにいるならお前が翻訳しろとおっしゃった。翻訳を始めて見ると分からないところが出てきたので開高氏に手紙を書いたのである。その頃はタイプライターは英字のしかなく、日英語のコンピューターもなかった。全部手書きで、開高氏もご自分の住所の入った原稿用紙に、実に可愛らしい丸っこいきちんとした字で手紙を書いて下さった。

❖ (この印は2015年につけた註。)

=====

1972年9月17日

開高健様、

初めてお便り申し上げます。御作の『真夏の闇』の翻訳をお授かりしております瀬川淑子 (Cecilia Segawa Seigle)でございます。

ストラウス氏のお言葉に従い、直接いろいろおうかがいしようと思いペンを取りました。

先日いただきましたベトナム語の **spelling** 及び「死の影の谷云々」の原文は非常にしあわせました。

（❖これがわからない。初めて手紙を書いているのに先日 **spelling** をいただいたというのはどういうことなのだろう。全然記憶にないが、質問だけを出版社におくったのかも知れない。）

詩編を全部ひっくりかえしてみても『ド畜生野郎云々』は出て来ないことはわかりきっているので、どうしようかと思っていた所で、しかも下訳がちょうどその箇所に来ていましたので、有り難く使わせていただきました。お心遣いありがとうございます。

今日は下記の間所について御指示を受けるべく書いております。なお、十月二十二日から十一月二十七日まで日本へまいりますので、その間にできれば御挨拶かたがた御相談に上がりたく、ご都合をおうかがいいたします。私が自由になりますのは十一月四日頃で、その後ちょっと関西九州の方へ行き、結局東京へ帰れるのは十一月十日過ぎになると存じますが、十一月十三か十四日頃にお目にかかることが出来ますでしょうか。その頃日本に御滞在でございましょうか。これにつきましては、又、十一月始めにでもお電話申し上げてご都合をおうかがいいたしたいと存じます。

翻訳は英語に直すと、日本語の面白さがなくなって、本当に感じが違った作品になりますので、それが一番心配で、どうしようかと思っています。つくづく日本語の難しさを味あわされます。

では下記のご解答をお願いいたします。お返事が十月十五日くらいにこちらにいただければよろしいと思いますが、その後でしたら、私が日本でお目にかかってから直接いただいても結構です。でもなるべく早くいただければそれだけ早くすみすみますから。

第二草稿まで終わり、今三番目の草稿と取り組んでいる所ですから、自分で稿本を持って行けなくはないのですけれど重くなり、方々へ回りますので、やはりクノッソ社にコピーを送っていただくことにいたします。

P. 7: 女が絶望から力をぬきだしてその無限界さにおびえきっているのだと（これは彼女の力のより所は「絶望」であり、その力によって生活乃至(ないし)情事をおこなっているのに、動力源の絶望があまりに深くていくらでも力が出て来るのでおびえている...という意味でしょうか？)

p. 12: 「たくさんの水が流れたのさ」（これは時と情事にたいする **reference** で、それをさりげなく女が「橋の下をね」と外すのだと思いますが、何か古歌の引喩でしょうか。ご教示ください。

（❖これは私が日本の“濡れごと”という言葉にひっかけて変な方に想像したらしい。それで **Water Under The Bridge** と言う俗な表現を思い出さなかった。然しそれは「覆水盆に返らず」という諺と同じなのでこの男女が過去のことを後悔していたのかと不思議に思う。）

P. 14 : ひっぱたいてやろうと思ってるうちにふとうなずいちゃったりして. . .
(ただ彼らのからかいを肯定してうなずくのですか、それとも彼らの中の一人の誘いに対してうなずくのでしょうか。)

P. 69 : 帝力何ぞ我にあらんやーこの引用の源と意味。そんな辞書が手元にないので困ります。

(❖これは最後のあたりに書いてあるように『十八史略』からの引用であって私は知っていたはずなのに、と恥ずかしく思う。)

P. 69 : 対立物の止揚。Aufheben 何とかという哲学語だとおもうのですが、**Sublation of the opposite** なんて言ったら英語で意味をなさないので、全部ドイツ語で何ていうのか教えてください。

P. 82,88 : 自然は意志なき偉大。これは二度ばかり出て来ますが、**Nature is greatness without will** とでも言うのですか？誰の言葉なのでしょう。

P. 91 他 : さかんに「独立的に排除して」が出て来て、一種の流行語にちがいないとおもいますが。**Quotation mark** がここに特についているのはなぜ？**"solely and exclusively"** でよろしいですか？特別な言葉があればお教え下さい。

P. 103 : 拈華微笑 : 出典は知っていますが、何とも訳しようがありません。**Smile of enlightenment** としておいて、**note** で説明を付けてもよろしいですか？

順序不同になりますけれど。

P. 100: ドンカンと ショロンの スペルを教えてください。

P. 101 : ミト河

P. 113 : プーロコンドール島

P. 161 : アイモ って何でしょう

P. 210 : ウアラウブ **Vacation** でよろしいですか？ドイツ語でもなさそうですね。

P. 46: できますものは云々、もちろん落語の言葉なんだろうが、説明したって始まらないから、普通に訳しておいてもよろしいですか？

P. 61 Schaumbade)

P. 37-38 Negleced Dandy)

P. 53 Slumberette)

Eau de toilet)

P. 54 half crystal)

これらは意味をなさないので、それぞれ、**bubblebath, studied casualness, convertible bed, toilet water, cut glass** でよろしいですか？切子は純然たるクリスタルか

ガラスで、half crystal なんてないそうです。Eau de toilet はもちろん意味は通じるけれど普通アメリカではトイレットウオーター と言ってるからその方がいいようです。バブルバスもそう。バーデタスの方は私もドイツで使っておぼえてるんですけど固有名詞らしいからそのままにしておきます。

P. 55 : 女ってこわいわよ。

Never underestimate a woman でよろしいですか？

P. 207 : はげしく舌打する気配がした。本当に舌打ちしたのですか？それとも舌打ちするような口調だったということでしょうか。

華夏は Chinese summer じゃなくて Central China (中原)

玉粒は pearly grain でお米のことですか？Pearly rice としましょうか？

T'is Central China というのと、T'is Chinese summer と言うのでは、後者の方が感じはよろしいですね？どうお思いですか？

P. 185 : ホイアン、コンツム、ニャチャン、ボーグエンジャップ将軍、これらは普通の新聞には出ていません。お手数でなければ spelling を御教示下さい。御面倒でしたらどこかの図書館へ行ってしらべます。

ウンコちゃん、ネズミちゃんっていうととてもかわいらしくて感じがいいのですが、My darling Shit, My beloved mouse なんていうとぶちこわしですから、そのまま Unko-chan, Nezumi-chann にいたします。よろしいですか？初めに意味だけはあきらかにしておきます。

P. 133 : 時代おくれのブロークの詩。William Blake じゃありませんね。Rupert Brooke ですか？ ちょっと心あたりがありません。Spelling をお知らせください。できれば first name も。註をつけないとアメリカ人はブロークなんて知らないようです。

(❖こんなこと、それから他のいろいろな質問も、今ならばグーグルでちょっとみればすぐ出て来る事なのだが、1972 年ごろはインターネットなんて私は知らなかった)

以上、ずいぶんいろいろめんどろなご質問をおかけいたしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

Cecilia Segawa Seigle
William Penn House, Apt. 908
1919 Chesnut Street
Philadelphia, Pa. 19103
USA

宛におねがいをいたします。

Cecilia Segawa Seigle (瀬川淑子)

(❖これらの始めの質問に対してたしかにお返事の手紙をいただいたことは、最後の方に書いた『ごぞんじ開高健』の引用によって明らかになる。その手紙はどこにあるのかわからない。)

=====

1972 年 12 月 5 日

開高健様、

滞京中、お忙しいにもかかわらず、お会い下さり、又思いがけない珍味を御馳走くださいました事、心から御礼申し上げます。

執念怨念のこもった白子をたっぷりいただきましたので、風邪にもめげず元気に帰ってきました。開高氏の文章の粘度の高いのも、日頃白子をたくさん召し上がっていらっしゃるからではないかと存じます。ああいう物をしょっちゅう召し上がっていらしては、胸さわがしく、息がつまり、血がたぎって、お酒を飲まざるを得なくなるのも当然と存じます。わたくしなど、そんなこってりしたものは（つまり美味しいものは）とんといただかず、アメリカの、間のびで大味でまずい物ばかり食べておりますので、うさばらしのお酒などいらないのでございます。

鯛めし、鯛茶、たいへんおいしうございましたよ。さまざまのお心遣いありがとうございます。信楽のお茶はたいせつにこちらへ持って参りました。私はいつも日本でお茶をたくさん手に入れては飲まずに古くしてしまうのですが、大平さん（とおっしゃいましたっけ）の効能書があまり見事でしたから、乾燥した冷たい所に密封して保存しておき、時々とてつもなくお高いヨーカンなど買って来たり、鮭茶を作って（燻製の鮭だけは絶品がありますので）いただいたりしますからね。

今日お昼に家へ帰ってみましたら、『輝ける闇』と文庫本がもう届いておりました。びっくりして、あわてて御礼を申上げる次第です。キンベンなる日本人はあくまでもキンベンにして真面目なるかな、と思いました。今夜たのしみに読ませていただきます。与太呂さんのお相手をなさって、口でドタバタを演じていらした時のあなたは面白い大阪人でしたが、お帰りのときの歩き方を見てると、あざやかに変身して（今の流行語の意味ではありません）すこし気取った、東京の知識人の中ではもっともスマートな部類に入る歩き方（而して孤独）をなさるので感心いたしました。ヤマトの歩き方の汚いのを御存知なので、歩き方を練習なさったのかしら。どちらにしても「シラフの女を相手じゃあ酔ったふりも出来ねえ、面白くもねえ」とお思いになった事でしょう。まことに申し訳なく存じます。しかしアルコールにアレルギー性人間がお酒を付き合いのために飲もうとするのは、脚の曲がっている人間が脚をまっすぐにしようと思うくらい無駄な事なのです。

(❖これについてその時思っていたのは、私の母がいつも日本人の下手な歩き方を批判していたことである。彼女は「西洋人の女の歩き方の綺麗な事！」と感嘆していた。そういうお説教を聞いていたので私も歩き方には気をつけていた。)

私の方は存分たのしい思いをさせていただいたので、非常に有り難く存じました。翻訳の方は十二月三十一日までにストラウス氏に送れるかも知れません。クリスマス時分、又ガタピシするので、落ち着きませんが、最善をつくします。

『拈華微笑』—麻薬のエキスパートにきいてみたのですが、やはり Trip とか High とか stoned とか、スラングじみた言葉しかないのだそうです。しいて探せば、expanded consciousness とか heightened consciousness とか言えない事もないそうですが、あまり clinical な言葉ですから、ねんげみしょうの境地とは程遠いようです。もう少し考えてみます。

私、フィラデルフィアに帰って来てほっとしました。東京ではあちらを見てもこちらを見ても、わいわい浮き上がって、年中おみこしを担いでいるような騒ぎ。それにお金もうけの話ばかり。本当にいやでした。よほど心をしっかり保っていないと、自分の視界をうしなってしまうそうです。

開高さんがアラスカへいらしたり、信越の山奥へいらっしゃるわけがわかります。フィラデルフィアは、今や古都の中にはいってしまって、アメリカと日本の位置が転倒したような気がします。日本人も日本も serenity を (日本人の trade mark であった所の serenity を)失ってしまって、私がこちらへ帰って来てそれを見いだすとは何と皮肉な事でしょう。日本はわずか二年の間にだいぶ変わってしまいました。二年前にもその活気に驚いたのですけれど、それほど心の貧しさを感じませんでした。テレビの阿呆らしい事、もうけ話の空虚なこと、雑多な物質の底なしの涌出、人々の浮き足——まさに豆カスの時代こそ情熱の持てる時代だったのです。ジャン・ジュネが感化院時代のことを世にも素晴らしい時代だったかのごとく、情熱をこめて書きつづったように、私たちも何もなかった少女時代の方が心豊かだったのではないかと思いたくなります。

私はもう失われた日本を探しに行く事は止めようと思います。しかし亡霊が私をじっとさせてはおかないので、1937-39 年代の、私のあまり知らなかった時代のことを情熱をこめて書いた小説をもう一度出して手を加え、坂本オニ Editor 様に送ってみようと思います。清書だけに半年もかかりそうですけれど、苦笑されて脇に放り出されてもそれで気がすむでしょう。

翻訳が Strauss 氏のお気に召すかどうか。開高氏にご満足いただけるかどうか。三島の『春の雪』と『奔馬』のようにストラウス氏が全部書き直し、というようなはめになったとしても、とにかく最終のものがあなたのお気に召すものであるべきだと思います。そうして文学作品として読めるような翻訳でなくては。

私は今の、あまり性に合わない勤めをやめて、日本語から英語になり、英語から日本語になりへの訳だけでくらすたらーと思います。今の所がやめられないのは、高給を食んでいるというのでは少しもなく、やはり、一応苦勞して得た学位を学位として扱ってくれるアカデミックな雰囲気があるからです。何にも所属しない一介の翻訳者になるのは **security** も **dignity** も失われるような不安があります。でも翻訳者としてたてるのなら明日でもやめます。

新潮社で、キンベンにして良心的、クソマジメで四六時中シラフでいるホンヤク者はいらないかと坂本オニ **Editor** 氏にきいてくださいますか？

ではまた。さまざまの御礼まで。

詩人の、田園的なお名前のおくさまにおよろしく。

瀬川淑子

Cecilia Segawa Seigle 拝

=====

開高健氏より

日付無し。1972 年 12 月 30 日受信

フグと白子とタイめしとお茶と私の歩き方をほめてくださった手紙をありがとうございました。この一年（これまで毎年そうでしたがー）旅館や安下宿や三文ホテルを泊まり歩いて暮らしていたのですが、いささか疲労をおぼえ、財布もぺたんこになったので、たまたま家へ帰ってきたところで拝読した次第です。私は 41 歳のサン・ファーム（家なき児）であります。この 12 月 30 日で 42 歳になります。17 歳の頃に憎みに憎み、とてもあんなになるまで生きてやるものかと思いつめ、また生きられそうにないと思いこんでいた、そういう年頃のヌラヌラしたおっさんとなるのであります。おっさん。オッサン。ところで。

他日ちょっと用があってドナルド・キーン氏に手紙をさしあげたところーあなたが『夏の闇』を訳していることを書きそえておいたのですがー返事があって日本語で書いているのですが、とてもあなたのことをほめていました。この春フィラデルフィアにキーン氏は三島さんのことを講演にいったのですが、そのあと、あなたから手紙をもらった。あなたの意見はとくに『暁の寺』についてキーン氏のそれとは異なるのだけれど“すばらしく頭がよくて表現がハッキリしている“ことについてたいそう感銘をうけたのだそうです。だから『夏の闇』の訳もきっといいものになるでしょうと私をはげましてくれています。ソーンダース氏もあなたのことを激賞していました。前便とおなじように今度も私は、たよりにしていますと書くよりほかないのですけれど、よろしくおねがいいたします。

致酔性飲料のことなら私は多少、心得と経験があるつもりですが甘いもののことはもう 20 年近くも口にすることがないので、全くわかりません。しかしお手紙を読むとヨタロのお茶を飲みたいけれどそちらではヨーカンがべらぼうな値がするとありますので、ヨーカンを別便でお送りすることにしました。“虎屋”のを選びましたが、私はまった

く無知ですから、御満足頂けるものやら、どうやら。お茶がなくなり、そして、ヨタロのでよかったら、手紙で遠慮なくいってください。外国にいるときに母国の味がどれだけ深刻な影響を持つかについては私もいささか経験がありますから、手に入るものなら何でも送ってあげられます。

東京では腐った年が逝きかけ朽ちた年が生まれつつあります。
またお便りをください。

瀬川さま

ごぞんじ

=====

1972 December 26

開高様、

月並にまずはクリスマス、新年おめでとうございます。
クリスマスの騒ぎでとうとう年末までにストラウス氏に原稿をお送りする事が出来ず、
23日に電話で許可を得ました。

大奮闘の結果、本当によくなりました。自分ではかなり満足していますが、ストラウス氏のお気に召すかどうか。ソーンダース氏と訳した『暁の寺』はソ氏が自分の好みを入れてずいぶんスタイルを変え、ついでに意味も変えてしまったのではないかと思います（ソ氏の安部公房訳には大分誤訳があります）私はもう見るのもいやだったので、『暁の寺』の最後の稿のコピーを受け取ったまま放置してあります。私の翻訳はもっと素直なのです。

『夏の闇』は友人をやとって少し手を入れて貰いました。彼女は50いくつのメイン・ラインの上流育ちで旧式だから、セックス描写に大分肝をつぶしたようです。

『輝ける闇』全く感心しました。いただいてすぐ読み、すぐストラウス氏に電話をかけました。「これを出さない事には」と言ったのです。ところが彼は落ち着き払って「私もちょっと目を通したが私は『夏の闇』の方が好きだよ」と言うのです。『輝ける闇』を読んでこそ『夏の闇』が生きて来る事、それなしには『夏の闇』は一人よがり聞こえる所もある事を強調したのですけれど、彼はウームというような曖昧な声を出して、「まあ、この翻訳の結果を見て、四五年（！）してから考えよう」などというのです。私は『夏の闇』の売れ行きを見ていたら『輝ける闇』は出っこないのでそういいました。つまり、スト氏は『夏の闇』が売ればもう一つを出そうというのですが、二つ出してこそ両方売れる可能性はあるけれど（そうして文学的にも意味があるけれど）『夏の闇』だけで売れる筈はありません。大衆受けしないに決まってるから。売れないと決まっていたら、文学のために両方出すべきです。（というのは変なリクツかしら）。彼は戦争に近すぎる、というのです。私は戦争に近いからこそ market value のある事、しかもこれはどちらの味方という旗色もなく、単に人間的な立場から書いてある事を言ったのですが、ストのくそジジイは結局はおそれているのです。

私は今度の大爆撃で本当に心をいためています、大部分のアメリカ人と同様無力感を感じるばかりです。クリスマスパーティーの一つはペンシルヴァニア大学東洋学部長、旧師のB博士の家でありましたが、彼はパーティーに集まった人々に、爆撃に対するプロテスト状に署名するかどうか訊きました。もちろん全員署名したのですが、こういうささやかな運動が日に日に増加していても少しの効果もないのです。

『輝ける闇』をアメリカンに読んでもらいたいのはこの為もあります（私は少しも政治的じゃないんだけど）ちょっと退屈になる所もありますけれどね。（ベトナムの哲学者文学者の集まり、マルロウの手紙）

私はほんとうにベトナム人には動かされます。先生の所でクリスマス前日の昼の正餐をいただいたのですが、テーブルに、白いリネンに白糸で丹念な刺繍をほどこした世にも見事なテーブル掛けとナプキンが置いてありました。ビックというベトナムの学生がつくって先生に贈ったものなのです。ビックは私が中国語を勉強していたころクラスに居た、子ねずみのおどおどして時々白い眼でちらりと人をにらむ人でした。私達学生は皆なんとかして彼女の気持ちを浮き立たせようといろいろやったのですが、滅多に笑わない人で、二十五六だというのに、十四くらいの身体つきをしていました。北からフエに逃げたので、北を嫌っていて、カトリックでもないのに小さい空色の聖母のメダイを腕首にかけていました。彼女の学力は低かったのですが、B教授は本当に親身も及ばぬ世話をしあげ、あらゆる努力を重ねて、とうとう修士号だけ取らせました。あんまり彼女に表情がないので、私はあの人にはB先生の誠意がわからないのだろうか時々腹立たしく思ったのですが、B夫人が「ビックはこれを二年もかかって作ったそうですよ。妹さんがこれをベトナムから持って来て、お姉さんが二年間どんなに苦心して作ったか話してくれました」と説明なさった時、彼女が先生の親切をどんなに感謝していたか初めて知り、教授の人格と照らしあわせて涙をこぼしました。（この頃年のせいでよく泣くのです。『輝ける闇』も読んで泣きました。）ベトナムの人達に比べて私達は若いころに戦争を経験していながら、案外その傷あとの浅いのを不思議に思います。不正な戦争を憎む心だけがあの戦争からうけた焼き印だったようです。

『流亡記』も感心しました。文章に感心したのです。しかしあれは非常に文のうまい優等の学生が作り上げた精緻な宝石みたいな所があって「お話」ではないので、訳してみたいけれど骨折り損のくたびれもうけになるだろうという予感がします。高等学校の国語教科書用です。でもうまい事はうならせるくらいうまいから頭を下げます。

ではいいお年をお迎えくださいませ。

羊のおくさまにおよろしく。

Cecilia Seigle 淑子

=====

Early January 1973 (開高氏から)日付なし。

お手紙をありがとう。『輝ける闇』を激賞して下さったうえ“ストのくそジジイ”をののしって下さったので新年早々、胸がスッとしました。去年の暮れにあなたの手紙に返事を書き、同時に「虎屋」のヨーカンを送ったのですが、10日ぐらいかかるといってましたから、もうそちらにつくころでしょう。そのあとでひどい風邪におそわれ、暮れからズッと寝たきりですごしました。去年の12月30日に私は42歳のオッサンになったのですがそのとたんにくしゃみ、吐気頭痛におそわれ、ひどい目に会ったわけです。あまりののしったので歳が怒ったのかもしれない。

さて。

『輝ける闇』は1968年に出版したのですが、ニューヨーク在住のスト氏は何度も考えなおしてから出版しないことにしたという手紙を当時くれました。いっぽう彼はドナルド・キーン氏と電話で相談もしたらしい。キーン氏はそれ以前に私から送っておいたのを読んでくれたうえ、肯定的な手紙をくれ、ことに私が日本の戦争とダブらせて書いた点を注視し、スト氏には最終のジャングル戦の部分を圧倒的だといって推選してくれたらしいのですが、いろいろあった末、スト氏の答えは、ヴェトナム戦争が終わってから出版したいという意見であったらしい。キーン氏の最近の私宛の手紙にはそうあります。

私は作者ですから客観的に自分の作品を評価することがなかなかむづかしいのですが『夏の闇』はハッキリ、『輝ける闇』の第二部と意識して書きました。もちろん『輝ける闇』を読まなくてもわかるよう独立的なものとして扱う態度はつらぬいたつもりです。このことは出版直後にスト氏の手紙でハッキリつたえておきました。しかし、たとえば『夏の闇』の主人公がヴェトナムへいこうとして女と別れる場面で、女に戦争の話をしてくれと迫られたときに、ストーリーとしてはその話をしてやっただけですが、本文には暗示的な点描しかあらわれていません。すでに『輝ける闇』であれだけ濃密に書き込んだ以上、もう一度繰り返すことはあるまいと考えたからです。あなたの手紙で『輝ける闇』を読んでいなければ『夏の闇』には一人合点と思われてしまう要素があるという指摘はおそらくこういう個処をついているのではあるまいかと思います。非常に正確で痛いほどです。そのほかにもあるかもしれません。全体がすでにそうです。なぜ主人公が寝てばかりいるかも、『輝ける闇』を読んだ直後に『夏の闇』を読めばよくわかるのではないかと思います。けれどそれはざんねんなことにあなたぐらいなのです。

『輝ける闇』が（この表題はハイデッガーが現代そのものを定義したことばですが）あってこそ、それゆえの『夏の闇』です。あなたのおっしゃるとおりです。作者としては二冊を同時に読んでもらいたいというのが本願です。第3部がまだ完成していないし、どうしていいかも、まだよくわかっていないのですが、第1部と第2部についてはもう完了したのですから、ハッキリいうことができます。第3部が完成したら全3冊を一つにした形の本を出版し、それでもって発端からあらためて読んでもらいたいという声を世間向けに発射してくれるよう新潮社にたのんであります。新潮社ではOKしてくれました。

さてスト氏がもう4、5年してから『輝ける闇』をだしたいとあなたに答えたのは“ヴェトナム戦争が終わってから”とキーン氏に対して答えたのと同じです。あの戦争が終るのにと4、5年かかるとスト氏が考えているかどうか、その判断の根拠は、となるとわからなくなりますけれど、スト氏の考えの原則は読めているわけです。

けれど、めちゃくちゃな北爆ということのをのぞけばもうアメリカ兵はヴェトナムでは死なないですんでいるというのが現状であり、あとは交渉でどう”面子“の仕上げをするかだけがアメリカにのこされた仕事です。（それからあとでヴェトナム同志の殺しあい、ほんとの内戦、または内戦にひとしい暗殺合戦があると覚悟しておかなければなりません。．．．）つまり、『輝ける闇』が出版された1968年当時とは客観的状況が質的に大きく変っているのであるから、スト氏がもう一度、『夏の闇』の名訳を読んだ後であらためて『輝ける闇』を読みなおせばあなたと私のいうことがよくわかるのではありますまいか。相互補完的なものであることがピタッとわかるのではありますまいか。いずれの作品においても血みどろになって殺しあうどちらのイデオロギーも支持できないのに、かといって自身の内面に安住していることもできない男の巡礼的物語なのですから、スト氏がビクつくことは何もありますまい。そういうふうに説いてみてはどうでしょうか。もう彼は名訳にも目を通してのことですからよくわかるのではありますまいか。あなたからいいですか。私からいいですか。私がそういってるとあなたからいいですか。（アメリカなら女からいったほうが効果がありそうですけれど、どんなものでしょう）

この点についてお返事を下さい。二人してスト氏を励ましてやればいいのです。ここ

しばらく私は会っていませんけれど、糖尿がアタマへきてなければまだちょっとは汚染してない部分がのこっているのではありますまいか。

長い手紙になりました。

ヨタロのお茶はまだありますか。

瀬川淑子さま

ごぞんじ

=====

1973 Jan. 3

開高健様、

年末のある日、重い重い荷物が二つドタリと着きました。一つは一ヶ月以上前に、九州を旅行していて博多の井筒屋から送らせたもの。もう一つはT.KAIKOとあるからハテ何やらんと不思議に思い開けてみると、虎屋のヨーカンで「お歳暮」と書いてあるではありませんか。少女時代から家を飛び出して二十年もこちらにいる人間は、おせいぼなどというものは上げた事もいただいた経験もないのでしばらく呆然と眺めてから、やあら私の若い姪におせいぼをこんなに頂いたけれど、どうしようか、とききました。

彼女は美人ではないけれど、時々こましゃくれた可愛い顔をして分別臭い事をいいます。「ヨーカンだから、古くならないうちに食べさせてやろうというお心遣いから航空便になさったのはわかるけれど、その内容を重い重いヨーカンにしたのは賢明ではありませんね」とまことに筋の通ったことを申しました。彼女はヴァイオリニストで小説なんか読んだ事はないので――性教育の為に少し読むといいんだけど。

カイコー氏の名前は彼女の心の中に、20何ドル分もの切手をはって、ヨーカンが航空便で送って下さったヘンなおじさん（オッサン？）として、永久に残ることになるでしょう。

（❖これは私の間違い、その後彼女の家へいって見ると彼女はいろいろと文学全集をそろえていた。）

姪にききますとお歳暮というものは普段お世話になってる人に上げるものだそうで、私は開高氏のお世話などした事もないし、ヨーカンが好きだとは言った覚えもないので不思議に思っていますと、開高健氏の御降誕祭第四十二回記念日に手紙が舞い込みまして、信楽のお茶が美味しいと言った事と、ヨーカンがベラボーに高いと言った事をこじつけて、多分御自分のお誕生日を人に祝わせてやろうという寛大なお心持からお恵み下さったものだとなりました。

これからあまり美味しいもの云々だのお高い物云々だの、かるがるしく口にすべきではないという事がよくわかりました。開高さんは餓えている女の子に御馳走するのがお好きだからいいけれど、私はそんなつもりで申上げたのではなかったの、ほんとうに恐縮いたしました。ヨーカンというものがこちらでどうしてお高いのかよくわかった次第でございます。虎屋のヨーカン「夜の梅」は昔海軍将校で戦死した義兄が戦争中にふんだんに持ち帰っていた頃からのおなじみでなつかしく思いました。

今朝ストラウス氏に原稿をお送りしました。持って行こうと思ったのですが、今度いつニューヨークへ行けるかわからないので、早い方がいいだろうと思ったのです。ごらんになればわかりますが、タイプした人が下手なので、自分ですればよかったと思い、後悔していますが、稿もよく思えたり、悪く思えたり――お気に召さなかったらごめんなさい。ちゃんとそうおっしゃって下さい。私はスタイルについてのいい忠告を友人から受けたかったのですが、その方はちっとも相談に乗ってくれませんでした。タイプしたのはそのオバさんです。

キーン氏やソーンドース氏のおっしゃることをまともに信じてはいけません。アメリカ人はいうことがなくなると共通の知人のことをほめるものです。つまり「今日は、どうも、その、いいお天気ですな」「イヤ、全くそうでありますな」というのと同じです。

こちらは美しい一月二日、空が忘れな草色をしていて、枯れ木が何ともいえない美しさです。この手紙はオフィスで書いているのですが、オフィスの窓から空も樹木も見えると東京にくらべて幸せな事だと思います。世の中は朽ちているけれど私は腐りはしないぞ、という気持ちになります。

ご親切を心から感謝しています。

お元気でよいお年をー

Cecilia 淑子

=====

1973、January (開高健氏より) 日付無し

しばらくお便りをもらっていませんがお元気ですか。

小生はあいかわらずですが、ヴェトナムにいかうかと思っています。しかし、東京のヴェトナム大使館がヴィザをだしてくれないので、どう工作したものかと弱っています。この一週間中には○か✕かがハッキリすると思うのですが、いまのところどんよりしています。もしいけたら私にとっては三度めなのですが、おそらくこの国へいくのはこれがさいごとなるでしょうし、私も身にとって”一時代の終り”となることでしょう。行かないまえから行ったあとの感情を書くのは奇妙なことです、そう予感しています。

クノッパからの手紙のコピーを同封します。“ストのくそじじい”は文面だとたいそう感動しているようです。作品が外国語になっていきるか死ぬかは訳者の腕ひとつなのですから、あなたの御努力にはお礼の申上げようありません。ほんとに御苦労さまでした。

文面どおりにうけとっていいものであるならばあなたが最初にリーダーとしてストラウス氏につたえたこの作品の印象とあなたの訳からストラウス氏がうけとった印象とはまったく一致しています。ストラウス氏の手紙を読みくらべてみると、コトバまでおなじです。“enthusiastic”です。で、あるならば、『輝ける闇』についてのあなたの見解やキーン教授の見解などをストラウス氏につたえ、もう一度プッシュしてみようかと思っています。これは1968年に発表した作品ですが当時はアメリカにとってV国問題はピークだったときで、和平協定できてアメリカ兵が血を流さなくてもすみ、あと一ヶ月もたてば一兵のこらず撤退しようといういま、おそらくV国と聞いてアメリカ人がイライラしたり、だまりこんだり、叫びだしたりすることはもうないでしょう。私にはそう見えます。どんな作品も読者の住む時代の心で読まれるものですから、やさしく、やわらかく、低くもう一度読みなおしてごらん、と彼の毛むくじゃらの耳にささやいてみようと思います。もう一度読んでごらん。英語で読んでごらん。それもフィラデルフィアのシーグル夫人の英語で読んでごらん。と。

今日の手紙はこれだけ。

これから羽田空港までいってペストの予防注射です。サイゴンはいく菌の天国ですからね。今夜は酒を飲んではいけません。

シーグル夫人さま

ごぞんじ

=====

(❖上の開高さんの手紙と下のサイゴンからの手紙の間に私の手紙があったはずである。)

=====

1973 February 26 (開高健氏より)

いまサイゴンにいます。これが三度目です。これが最後になるように祈っています。

“和平協定”は調印されましたけれどアメリカの撤退と捕虜返還だけが唯一の収穫みたいなもので、現実には何一つとして解決されていません。田舎ではあいかわらず流血がつづいています。毎日少しずつ減っていくようですが、ここの軍墓地では毎日埋葬がつづき、その悲鳴。その号泣。エアコンがよくきかないのでモルグの死臭のひどさ。

その後ストラウス氏は何かいってきたでしょうか。『輝ける闇』も訳すように決心したといってきたでしょうか。ヴィザ入手のために奔走していたのでその後私はストラウス氏に手紙をだしていません。二、三日中にこちらからだすつもりでいます。いい返事があるといいのですが。

お手紙を下さい。

しばらくここに滞在します。

C. S. シーグル夫人さま

ごぞんじ

=====

1973, April 13

開高様、

御無事に、何のタマにも当たらず(東南アジアはまだぶっさうだそうですから)お帰りになったこととおよろこび申し上げます。御無沙汰申上げております。

ベトナムからお手紙をいただきながら、お返事差上げなくて失礼いたしました。実はベトナムなどという外国(いかにも外国という感じ)へ手紙なぞ出した事のない人間なのでどうしたらいいかわからず、グズグズしている中におそくなっていました。

先日シャピロ氏から電報が参りましたでしょうか？キーン氏が御親切に開高さんをお名指しになったのだそうで、その後どうやって私のオフィスの番号を見つけたのか知りませんが電話がかかって来ました。Ugly Japanese Travellerの事をお書きになりますか？

開高さんならうってつけでしょう？しょっちゅう旅行をしていらっしゃるし、『夏の闇』にもずい分鋭い観察が出ていましたものね。「開高さんが書いたら、アンタ訳すか」と云うから、ハイハイと言っておきました。よろしいですか？だからしっかりいいのを書いて下さい。

その後スト氏は『輝ける闇』の事をウンともスンとも言って来ません。この間ニューヨークで四五日すごしたので、電話をかけたら（金曜の午後）金曜日は会社を朝11時半に退出して田舎の家へ帰ってしまうんだそうです。そうして月曜日の午後遅くひょろりと帰って来るのでしょうか。一週間10時間位しか働かないのじゃないかしら。そうしないと血圧が上がるんじゃないかしら。

私なんぞ一週間40時間キチンと働いて、しかも家では奥様業をちゃんとしてるんですからね。超人的です全く。それで今、フィラデルフィア・マガジンという此処では一番いい雑誌に日本人の妻について記事を書きつつあります。よく此方で黒人の女性は黒人である事、女である事で、二重の損をしているという事を云いますが、私などは、女である事、minorityに属すること、しかもアメリカに住むアメリカ人の日本人の妻である事において、相乗的な損をしているのでその事を声を大にして言ってやるつもりです。

フィラマガの編集長に電話して書くよと言った時、彼があんたどうしたの？Identity Crisisがあるのかい、といいますので、Identityに問題なんかあるもんか、Identityがはっきりし過ぎて日本人の奥さんである事から逃れられないから困るんだと言ってやりました。よく書けたらお目にかけます。

おついでの際に坂本忠雄様（虎雄？鬼雄？）に、いつかの原稿をお返し願いたく候とおっしゃって下さい。使わない原稿は返送しないのが原則ですが、私はアレが要るのです。アホらしい小説にもならない小説だけれど、個人的な（センチな）思出があって執着があるので、どうしても返していただきたいのです。船便でよろしいですから。かえしてくれなや化けて出てやると言っておいて下さい。私くらいの年になったら化けて出るのなんかお手のものです。

五月の初めに11日ほど主人といっしょにウイーンとブダペストへ行って来ます。短い休暇ですけど、なかなかお休み取れないのです。これは楽しみにしています。昨年ちょうど同じ頃、メキシコへ行きました。Ugly American と Ugly Japanese の相乗です。

こちらはどうかお天気がめちゃくちゃで、暖かい冬でいいなと思ったら震え上がるような四月が来て、二三日雪がちらつきました。

では又、これは激励文ですから Ugly Japanese をしっかり書いて下さい。

Cecilia 淑子

=====

1973、5月14日（開高健氏へ）

サイゴンからの速達のお手紙ありがとうございました。

(❖この手紙はみつからない)

まだあちらにいらっしゃるのを知り、びっくりいたしました。この手紙は東京へ送るか、サイゴンをお発ちになる20日までにはもう6日しかなく、郵便のあてにならない世の中で、それではとても届かないだろう、と思ったり、又東京から回送なさるとすれ違いになるかな、などと思っています。まあ、書いてしまってから決めましょう。速達にするほど緊急に申し上げたい事もなく、天地をゆるがすような重大な事はついぞ言ったためしはないので、気長く冗長な手紙を書いてからゆっくり東京へ送るかも知れません。

ブダペストもウイーンもようございました。本当にワインも飲めないとは貧乏くじを引いたものだと思えて感じていた所、開高さんの真っ先におっしゃったのがワインの事なので、やはり私は大分損をしてるなと思った次第です。

ワインの味はブタペストでもグリーンチングでも、ちょっぴり味わった所によるととても美味しく、グリーンチングなんか、ちょっとシャンペンみたいに軽いので、5ccくらい飲んで赤くなって陽気になったくらいです。『夏の闇』の、あのワインの描写は全くうまいと思うけれど、私には描写の絶妙さがわかるだけで、味はわからないので、頭だけで共感して、感覚的にはフリジッド、でも先には2ccでもアレルギー反応を起こしたのに、5ccも飲んで大丈夫な所を見ると少し飲み助になったのかも知れません。そうして今に開高氏の恍惚状態まで完全に理解できるかも。

辛党の反対は甘党というのは実は正確でなく、私はお菓子もちっとも好きではないのです(❖2015年の現在は甘いもの大好き。変わったものです)

かえって辛党の好きな、うにだとか塩っからいものが好きなので、ウイーンでも見るからにきれいなお菓子を見ても欲しいとも思わず、ちょっぴり食べても少しも美味しいとは思いませんでした。ハンガリーの食事はしつこくて、有名なレストランでも美味しくなかったし、ウイーンではあちこちで食べてみて、ドライ・フッサー、三人の騎士ですか、あの有名な所でだけやはり美味しいと思いました。とにかく私には飲食物の効能少なく、開高さんに満足なおつきあいが出来ないでお気の毒に存じます。

ドイツには一度、三週間、お大名旅行をした事があるのですが、ウイーンは初めてなので、そのクラシックなエレガンスをたのしみました。小さい町なのですね。

お手紙のこと。五月の初め、又、スト氏に電話をかけて、何度目かに、又『輝ける闇』のことを言い出してみたんですけど、あの人ガンコですね。脳ミソは軟化してるかもしれないけれど、意志の方は硬化しています。

頭から「アメリカ人はもうベトナムの事を聞くのはアキアキしている」というのです。問題にしないような口ぶりです。たしかにアメリカ人は今ベトナムの事はいやになってるので、その点は認めます。今度お書きになった手紙が効果をもたらすかも知れません。又、少し待って見たら、リヴァイヴァルでベトナムが問題になるかも知れませんし。今はもうウオーターゲートの話で持ち切り、毎日面白くてしょうがないんです。

ストのお祖父さん、本当に分らず屋なんです。初めから終わりまで、私は『夏の闇』は好きだが『輝ける闇』はきらいだ、というのです。まるで自分の趣味が天下を風靡する権利があるかのようです。あれほど自信をもってものが言えたら結構ですね。私も音楽のことではよくああいう傲慢な、断定的な言い方をするので、改めて反省したくらいです。

それはそうと、ベトナムにお発ちになるすぐ前に、私が書いた手紙は届いたのでしょうか。(❖この手紙はなくなったようだ)。

スト氏の質問および訂正、それに対する私の返事のコピーをお送りしたものです。私の解釈が間違っていたら悪いので、もう一度おたずねいたします。でもスト氏が又独断で自分の解釈通りにするかも知れません。あなたのベトナム行きとすれちがいに東京に着いたのかも知れませんが、どこかにある筈です。

私の小説（ともいえない）の原稿を読んでやろうとのご親切なお言葉ですが、どうぞお読みにならないで下さい。私は恥ずかしくて死ぬ思いをするでしょう。他人の評は大いばりですが、自分では書けないんです。昔から「自分で書けない奴が評をする」と役割は決まっています。私は坂本氏に出して下さいと言ってお送りしたのではなく、小説の本の一部を、脈があるか、厳正な評価を頂けばあきらめられると思ってお願いしたのです。坂本さんは「頭の少々ヘンな奴がヘンな事を言って来たが面倒臭くてかまってはられない」と思っているのでしょうか。だから、ただ、坂本さんに「かわいそうだから返してやれよ」とおっしゃっておいて下さい。自分でお願ひすればいいのですが、それはもう既に、原稿と一緒に送りした手紙に評に関係なくお返し願ひたいと書いておいたので、再三たのむのは面伏せですから開高さんにおねがいしたのです。本当にお読みになってはいけませんよ。処女作も何もないものです。この年になって処女作もないものでしょう。もちろん幸田文さんみたいな方もいるけれど。本当に書ける人間ならばとっくの昔に書いてるはずですよ。

姪のところに家から雑誌が来て（婦人公論という）その一つに開高さんの御一家の写真や、奥様、お嬢様の記事が出ていました。奥様はきりりと知的で頼もしそうだし、お嬢さんはお奇麗ですね。オヤ、これは開高さんに似ても似つかない奇麗なお嬢さん（失礼）と思いましたが、開高氏にも美男子的要素が多分にあるという事かな？そういえば芥川賞をもらった頃の開高氏はもっとやせて素敵でしたよね。コトブキヤとか何とかいうお酒屋の広告書いていらしたでしょう？

御反省下さい、42歳のねとねと・にちゃにちゃしたオッサンも、奇麗な清純なお嬢さんを創り出す力があるのだと。御両親がトップ芸術家でいらっしゃる道子さんはさぞ才能に溢れていらっしゃるのでしょうか。絵もお上手ですね。いくらしょっちゅう旅をしてるお父様でもさぞおたのしみだろうとお察しいたします。子供のない私にも姪が来てるので少しは親のたのしみがわかって来ました。

ベトナム、カンボジアあたりでは相変わらず混乱、爆撃、小ぜりあいが続いているようで、無事にお帰りになったのはやはり目頃のお心がけのよさのたまものと思われます。

アイルランド、イスラエル、リビア、色んなところで流血は毎日起こっていて、殺したい人達がそうするのは勝手でしょう、と腹を立ててみたり、なぜこう、うまく行かないのだろうと心配してみたり、自然淘汰には殺し合いが必要なのだろうと観念的な結論を下したりしています。

でも結局私などが囚われているのは眼前の事で、今夜のこんだては何にしようとか、土曜日のパーティには何を着て行こうとか、そんなつまらない事ばかりです。私がくちくちくそんな小さい事で心をわずらわしていると、主人は詳細は放ったらかしで、ニクソン政権はあと何ヶ月で壊滅するかとか、今後五年の日本の経済発展の予測とか、大きな事の議論にばかりふけています。彼の趣味は音楽と、高級カメラで下手くそな写真をとることと、反 **Establishment** の議論をすることです。

急に暑くなり、先週水曜にニューヨークへ行って窒息しそうでした。ストじいに会いに行ったら、小山のような、雌牛のような老人が、のろのろと仕事をしているところを見て来ました



こんな感じ、つまり首がない。海坊主です。

Editor がとても上手に手を入れてくださり、それに対して訂正や評を7ページ程書いて持って行ったのです。専門家だけあって、やはり推敲がうまいと思わざるを得ません。少し遠慮して、お上品に婉曲に訳しておいたところを、ずばりずばりと直してあります。少々ショッキングだけれど、もともとがショッキングな所も多いから、全体的効果がよければそれでいいと思います。

その原稿を、私の友人（始めに見せて、あまり手伝ってもらえなかった人）に見せしめのために見せると、感心してはいましたが、一方、「こんな風にしては **slick** で普通の読み物になってしまう。少々日本的で不自然でも、異国的な表現がある方がいいのに」と申しました。

私は彼女の意見とは反対で、題材が非常に **sophisticated** だから、スタイルもニューヨークの **sophistication** の先端に行く連中が、すらすら読んでおかしくないようなものでないといけなと思います。**Editor** 訂正の間違っている所、いい足りない所、原文のオリジナリティが失われた所は抗議しておきましたが、多少の妥協はやむを得ないと思うのです。

ストじいは、こわれたレコードのように、又同じことを繰り返して言いました。「『輝ける闇』は止めよう、もし、三部作の最後のものがよければ、それを出し、その時に又『輝ける』を再考してみよう」といいました。でも、「もう一年くらいしたら、私は半分隠居するから（今働いている時間を半減したら一体何が残るでしょう！）そうすると、日本語を読む人は全然いなくなる。そうしたら、この課はどうなるかわからない」といいました。私は、くそくらえ、そんなにもったいぶる奴に頭を下げてやるもんかと思い、冷然としていました。訳者は、ヒベットさんもサイデンステッカーさんもキーン氏も皆大学教授で、えらくなってしまうから、安い報酬で訳本なんかする気のない人達ばかりです。出すのなら自分で書いた本を出す方がよほど功績になるのですから。

とにかく彼は自慢たらしい事をしばらくしゃべり、私は壁に並んだ彼の写真の作品をほめておきました。現像も自分でするのです。写真の腕の方が **Editor** としての腕よりもいいのではないかとも思います。推敲した人は二人らしく、その他にスト氏の字が入っていますが、それはほんの二三カ所きりなのです。せんに『春の雪』の訳が全然なっていないくて、全部書き直したといばっていたのは、自分がやったのではなく、配下の女性 **Editor** がやったのです。彼女の功になって『春の雪』は賞をもらいましたが、その同じ人が手を入れてくださったのです。

私はプール文化とか避暑地文化（とくに海岸の）が大きらいなので、この夏は大体フィラデルフィアにいます。八月に四五日カナダのストラスフォードのシェークスピア祭にお芝居と音楽会のために行き、その他はメインやペンシルヴァニアの山の中で週末キャンプをします。九月になったら、6日から23日まで、アフリカへ行って来ます。ケニア、タンザニアです。まだ確定していませんけれど、多分行けると思います。動物を見に行くのです。行けばライオンの背中を撫ぜるくらいの事はしたいけれど、それは危険だそうでジープやミニバスに乗って望遠鏡をもって追っかけるのだそうです。どうも人間のすることは馬鹿げていますね。

ニューヨークタイムズにとうとうお書きになるのだそうで――**magazine section** の記事は面白いものが多いから、お書きになって格が下がるという事はございません。申上げるのは、私は経済の事何一つ知らず（旅行の事ならもっとやさしかったのですが）ちょっと心配だからです。あまり難しいしかつめらしい事はお書きにならないで下さいね。

お暑さの折りから、お体御大切に．．．云々

Cecilia Segawa Seigle

=====

1973、6月26日（開高健氏より）

◎ お手紙ありがとう。

- ◎ キッシンジャーとト（❖北ベトナムのレ・ドク・ト顧問）の第二次和平調印のあった2日後にトーキョーへもどってきました。脳の右半球にはニョクナムがしみ込み、左半球に日光があたりすぎてボンヤリしています。この手紙は例のお茶の水のホテルで書いているのですが、今週末、日光の山奥の湖へいきます。そこの冷たい、青い水で右半球と左半球を洗い、ヤブウグイスの声を聞き、65センチの野生のニジマス釣り、ヴェトナムミゼイションを落としーちよっぴりと大事な所をのこしてーそれから下界へおりて“社会復帰”です。
- ◎ お手紙にはわらいました。ストラウス氏のポートレートが雪ダルマのように見えますが、私が二度ほど会ったときはまだ首がありました。
おっさんの頑固はよくわかります。『輝ける闇』については先便のとおりデイチャムチャムでいきましょう。私としてはこの秋頃から第3部にとりかかるつもりです。おっさんが同封のような案内をあちこちに送った結果ではあるまいかと思いますが、スウェーデン、ドイツ、フランス、イタリアの各出版社からホンヤクの申出がありました。（おっさんの案内では舞台がスカンディナヴィアとベルリンになっていますが、これはパリの間違いです。パリとバド・ゴードスベルク（ボンの郊外）と、ドイツ、オーストリア国境とベルリンとヴェトナムが背景です。おっさんは糖がアタマへきてる気味があるようです。ついでのときに訂正をいうといってください。案内はおっさんが新潮社へ送ってきたものです。ついでにキーン教授の手紙をコピーして同封しておきます。
教授は日本へきましたから近日中に会って食事をします。きっとあなたのことが話題にでるでしょう）
- ◎ 山の湖でニューヨーク・タイムスの原稿の内容のプランをたてます。
あなたと棒組になると千人力です。ガンバリますぞ。
メインにキャンプにおいでになるらしいですが、あのあたりは釣師の天国なのはです。うらやましい。うらやましい。
これから私には小説を書くという地獄がはじまります。しばらく世間から姿を消します。
- ◎ あなたの手紙はいつも聡明とお茶目さんがあるのでたのしみです。また下さい。

シーグル夫人さま

—デイチャムチャム—

=====

上記の開高氏の手紙に同封してあったキーン教授の手紙

1973年、4月2日

その後御無沙汰いたしました。『夏の闇』特装本を頂きまして有難うございました。早速お礼の手紙を差し上げるべきでしたが、ちょうどその本が届いた頃『夏の闇』（特装本でない方）を読んでいましたので、お礼と一緒に感想も述べようと思い、それ以来ずっと失礼して来ました。実は三月十日ごろから一週間ばかり日本にいましたので、連絡をとろうとしましたが、開高さんはサイゴンへおいでになったと言われて、がっかりしました。

ともかく、『夏の闇』はすばらしい小説です。変な言い方ですが、余韻が好いです。読みながら読者が語り手の感情に参加するようになり、語り手の倦怠の原因を当ててみるよりも、その倦怠の必然性を直接に感じるような気がします。パリ（？）やボン（？）の風景などが全く問題外であって、語り手の頭の中の風景は間接的に読者に伝って行くと思います。最近、飯田蛇笏の俳句を多少読んだのですが、何処かで開高さんの小説に似たような味がありました。

最近、大学の雑用が多くなって来て、自分の時間は午前九時前と午後十一時過ぎになって来ました。この手紙の乱筆はそのせいでしょう。疲れています。

私は十一年前にベトナムで一週間を過ごしました。単なる観光客として、ユエ等で見物しました。ユエは僕がその時まで見た町の中で一番気に入ったの一つでした。雑音の全然ない町でした。現在思い出すと泣きたくなります。

では御健康を祈ります。今年の夏、東京でお目にかかれたら幸いです。

四月二日

ドナルド・キーン

開高健様

=====

1973年、8月1日

開高様、

いよいよ籠城という、大阪夏の陣の片桐且元のような悲壮なお手紙をいただいて、早速慰問文を、と思いながら、今日まで怠けてしまいました。実は同情すべきなのか、羨むべきわからなかったのです。小説を書くのが身辺一大変事で、生易しい決心や努力では出来ない事、又一朝事成れば、泰山を一人で動かしたごとく、或は百人の美女と一夜を共にしたが如く（こんなはしたない事をいうのは今読んでるフィリップ・ロス（Roth）の影響です）消耗するものだとは、お手紙や、お目もじしたときのお言葉から拝察いたしました。けれども私も凡人、layman, outsider には、寝食を忘れて書き物に没頭するという事は、たいへんロマンチックな情熱的な事に思われます。やってみたくてもその才能も実力もない人間には、一週間お風呂に入らない辛ささえ垣根の向こうの緑のように見えます。

でも今度は日光でお湯にはさんざん入れ、食物も山小屋のおじいさんのまかないなどではないのでしょう。奥日光といえば湯元か鬼怒川か川治か。湯元ならば、イタヤと南間ホテルに泊まったことがあります。イタヤは大昔に母や姉と、ナンマは六年前に主人と行きました。どちらもあまりきれいでなく、廊下ばかり上ったり下りたり、迂曲してえんえんと続いていたような気がします。鬼怒川の方へは行った事もないのです。

私はいつかもし未亡人になったら、人里離れた山奥の、大原の寂光院をもっと俗気を抜いて、淋しくした、つまり昭和二十三四年ごろの、あるいはもっと遡って1185年ごろの大原にして、そこにひきこもって四季を眺め——ここで、人は「歌でも詠んで」「随筆か回想録でも書いて」「写経でもして」と書くところでしょうが、私はまだその所を決めていないのです。人間年を取れば何をなすべきか、一大イマジネーションを要する重大関心事です。今から何をしてやろうかと、たのしみにあれこれ考えているのですけれど、その頃になってももまだ開高氏と知遇の間柄にありましたら、もっと面白いだろうと思います。子供じみた、ちゃらんぽらんな事をいってもいい相手は他にあまりいませんので。

(❖「未亡人になったら、人里離れた山奥」へ引きこもってとか何とかその頃は思っていたのだが、未亡人になってから何年もたつ2015年にはまだ俗界でごそごそしている。歌も詠まず、写経もしていない。若い時にいい加減な約束をするものではない、とこの年にして思う。)

此方は二三日煮つまるような暑さかと思うと、急に温度が下がって、今日などエアコンが寒いくらいなのです。ドル価のように動揺してあてにならないのです。昔の「よき時代」は、夏は暑く、冬は寒いものと決まっていたのに、何もかも乱世のきざしか、狂ってるのです。男の子は女の子みたいになるし、女の子は男の子よりたくましいし、面白いには違いないけれど、ユーザーのきかない人間の常として、私はきちんと決まりのいい事が好きなのです。

キーン先生にお会いになりましたか？私はいつぞや、私の手紙から一年くらいして下さった御親切なお便りにお返事しなかったので、ザンキに耐えないのですけれど、先日の日本文のお上手なのに驚き入り、ますます書けなくなりました。彼のお弟子等から、日本文がお上手だとかねがね聞き知っていたのですが、あれほどお達者とは存じませんでした。私の日本文よりよほどお上手じゃございませんか。何語にせよ、私はコトバの難しさをつくづく感じているので、中でも難しいと云われる日本語をこなす外国人を見ると、中共のアクロバットを見るように頭から感心してしまいます。キーン教授は、日本語を大人になってから習得なさったのでしょうか？日本に住んでいらっしゃるわけでもないのに、よくあれだけすらすらお書きになれますね。友人に、東京に長年住んでいて、日本語がめっぽううまい英国人や米国人が何人かいますけれどあんなに書ける人はいません。ナイショですけどソーンドース氏などキーン先生の足許にも及びません。

そのえらい先生が言葉を尽くして『夏の闇』をお褒めになったのだから、開高さん御満足でしょう？いつかトラヤのヨーカンでも送って差し上げたら？それともキーン先生は辛党かしら。

今おくれればせながら、さっき申上げたように Philip Roth の Portnoy's Complaint、ポートノイの繰り言を読んでいます。する事がないので、ロス氏のものでも訳そうかと思うのですが、彼の作品はもう日本でも出ているのでしょうか。出ていなければ直接彼に当たってみます。彼ずっとペン大で教えています。

日本語の訳を出す時にはどうすればいいものでしょうか。著者から許可を取って訳してから出版社に交渉するのでしょうか。それとも出版社に先に当たってみるのでしょうか。御教示いただけますか？私は訳すのは早いし、どちらかと云えばやはり英語から日本語に訳す方がずっとやさしいのです。ただタイプで打てなくて、手でえっちらおっちら書くのはおっくうですが。

(❖この二三年あとにワープロが現れたので日本語でもチベット語でも何でもコンピューターで打てるようになった。)

こちらで評判になってるものでも出る当てさえあればどんどん訳しますが、今まで出版社にあたってみた事がないので何もしていません。Roth, Saul Bellow, Bernard Malamud, などという作家たちは、ユダヤ系のアメリカ文学で一家を成していて、相当な尊敬を受けている人達ですが、その民族性や文化が、私はユダヤ系のアメリカ人と結婚しているお蔭でわりと理解出来ますし、用語や口調の特徴もよくわかっているので、翻訳してみたいと思います。

日本人は外国でベストセラーになるものは片端から出版する癖があるのでポートノイなどもうとっくの昔に出てるかも知れませんね。

どなたに御相談すればよいかお教えいただければ幸いに存じます。

スト氏がもっとあなたのものの訳でも下さればこんな事を考えなくてもいいのですけれど。私は何か自分に取って意義のある仕事をしていないと死にそうなのです。

東大出版局から出るようになって『家』の英訳の話が持ち上がってから一年半になるのにまだもたもたしています。もう少し手を入れてほしいと書いて来たので、それもやらなくてはならないのですけれど、それはもう飽き飽きしているので、ゆっくり時間をかけるつもりでいます。

カナダのストラトフォードの「シェークスピア祭」行きは、始めはほんの四五日といていたのにとうとう十日間になってしまいました。ケベックへ行って、メインへ下りて、そのあと、フィラデルフィア・オーケストラの夏の音楽祭のあるサラトガへいきます。主人は毎夏フィラ・オケの夏の住処に顔を出すのだから今年もどうしても行くべきだといっているので仕方がありません。フィラ・オケは九月十日に文化使節として中共へいくので、主人は羨ましくってしょうがないのです。メインのキャンプはその旅行のついでという事になりました。

メインから帰って来て二週間したら、ケニヤとタンザニア行きです。こう遊び歩いているわけは、もうどうせ長生きする命じゃないし（もう50年も生きるってことはぜったいありませんからね。30年もおぼつかない）主人は私より先に死ぬに決まってるし、ドルはどんどん値下がりして、なけなしのたくわえは役にもたたなくなるだろうし、ストイックに籠城してみても小説一つ書けるわけではないし、遊べるうちに遊びましょうという事になったのです。だから私は非常に物わかりのいい妻になって、主人が賭博で負けようが他所の女性と遊ぼうが、文句は言わないつもりなのですが、あいにくそういうことをする人ではないので、私の真価を発揮できないでいます。

それにつけても籠城やほつつき旅行の完全な自由を開高さんにおあげになる奥様はまれにみる賢夫人だと感嘆にたえません。

ではお体にくれぐれもお気をつけ下さいませ。ニューヨークタイムスによると、サラトガ温泉の水をあんまりまり飲むと身体に悪いそうで、日光の水も化学成分は大同小異と存じますからあまりガブガブお飲みにならないように。

かしこ

瀬川淑子拝

=====

1973年、8月??（開高氏の手紙）

手紙をありがとう。

ちょっと身体の内部にトラブルをかんじたので山からおりてきたところでした。お医者さんは過労だろう、寝てなさい、別にどうってことないといひます。この2月からヴェトナムへ行って、いわば5ヵ月間ぶっとおしでずっと真夏だったわけで、ちょっとぐらいどこかおかしくならなければかえって妙かもしれません。

ロス作品は『ポートノイの不満』という題でとっくに邦訳がでています。わが国は万事せつかけですからな。このバスに乗りあわせていくのはしんどいですぞ。ところでニューヨークタイムスマガジンの原稿「一億人の自殺者」という題はつけたのですが、まだ仕上がっていません。もうすぐやります。いずれあなたのところへ回送されるでしょうから、よろしくお願いしますぞ。

そこへもう一つ。ニューヨークタイムスそのものにもちょっと書かないかという手紙がありました。これはストラウスのおっさんお推選らしい。短いものです。何を書いてもええそうで、メ切日もありません。

これから頭のなかを点検してみて何を書きたいか考えてみます。この二つがこの夏の夏休みの宿題みたいなものです。

秋から新作にとりかかろうかと思っていますが、なかなか調子が戻りそうにないので弱っています。

キーン教授は目下東京の文京区のアパートに住んでいます。このあいだビフテキを一緒に食べました。いろいろ話あいましたけれど、彼はあなたのことをたいそうほめていました。海坊主に英訳を見せてもらったのでしょうか。

アラスカの州知事が来年の夏、釣りにこないかといって招待してくれました。おうけしように思います。アラスカのキングサーモン釣りのことを私が週刊朝日に連載したあと毎年たくさんの釣師がアラスカヘドルを落としに出かけるようになり、同州に取っていわば私は“好もしき外人”というわけなのでしょう。いくとなればカメラマンをつれて2ヵ月ぐらい。野宿して、スリーピングバッグで寝て、手つかずの処女林、処女湖処女川でしばらくヘンリーソーローのまねをやってみたいと思っています。それまでは働く。働く。働く。

また手紙を下さい。いつも書くことですが、あなたの手紙はたのしいのです。卒直で、痛烈で、オチャッピーで。よくマスタードがきいています。

セシリアさま

—ごぞんじ—

=====

1973年8月30日（開高氏へ）

迂闊な話ですけれど、『夏の闇』の扉の、黙示録の英訳を探すのを忘れていました。スト氏も何とも言わないし．．．それにしても本が出る前に思い出してよかったと胸を撫で下ろしました。私は昔カトリック信者だったくせに、背教者になってしまって、聖書も持ち合わせておりませんので、一昨日図書館へ行って、黙示録を一頁一頁めくって探しました。わりと始めの方にあつたので助かりました。始め、スト氏に開高さんに手紙で訊くと書いておいたのですけれど、それもめんどくさく、柄にもなく何年ぶりかで聖書を開くというしおらしい行為に至ったのです。スト氏には知らせておきました。

八月十九日の夜、十日間の旅から帰ってみると、校正刷りがとどいていて、「八月二十日迄にお返しあれ」と書いてあるのです。しょうがないから電話で断っておいて、仕事を休んで一日それにかかり切りで **proof-reading** をしました。とてもすらすらうまく行っている所と、あまり文章がなだらかとは言えない所があるのです。主な難点をあげますと、

◎ 呆れたことに、“．．．”としてある所が例外なく全部抜き去られ、二人の会話で一人が沈黙している所まで、一つの引用符の中で、一人が勝手にしゃべりまくっているように印刷してあるのです。私は全く心配になってしまいました。所々、会話の途中でなく、雨の中で声の聞こえない所、つぶやきのききとれない所で、“．．．”というのがあり、それはクノッフの **Editor** がおかしいから、と取ってしまったのですが、ちゃんと残しておいた所まで削除してあるのです。これは厳しく抗議しておきました。

◎ 変な所でつづりが切られている事。行がかわる時、つづりの切り方は勿論シラブルによらなければならないのですが、日本語の **Bash-ō** (芭蕉)や **K-ōtō** (江東)District は彼らが知らないのだから仕方がないにしても、英語のつづりまで変なのが続出するので呆れてしまいました。この間スト氏に、コンピューターで印刷なさったのですか、と言ってやりました。ストちゃんは不審そうにいいや、普通のやり方だよ、と言いましたが、専門の印刷屋があんな言葉の切り方をするなんて信じられません。

◎ 気になる事は初めに訳した文章から、自分で何度もかえ、**Editor** が変え、してる間に少し意味がちがってしまった所があるのです。たとえば、「その頃は自分を殺す事はなく」とかなんとかいう所が、「その頃は私は自殺的でなく．．．」なんて事に変えられてしまっているのです。これは英文で読めば至極自然だし、心理的に **suicidal** な人間というのはよく使われる言葉なので **Editor** の推敲したものを読んだ時には何とも思わなかった個所なのです。それから非常に込み入っていて、私にはよくわかっているのだけれど、どう説明してもそれでは英語が喜劇的になるという所など、**Editor** が私の見た稿から又かえてしまっているのもあり、原文と全くピタリと意味が同じでない所は数カ所あるとおもいます。ゲラ版にするのかと思ったらそうでなく、いきなり頁に印刷してしまったのです。

◎ 原稿にはちゃんと入っているのに、二三行ぬかして印刷している所があって、私は心もとなくなってしまう、スト氏に一行一行日本語と照らし合わせていると、すごくおそくなるけれど、そうしてほしいか、とききましたらその必要はない、といいました。脱文は皆印刷屋のやったことらしいので、それは訂正してもらえんと思います。

◎ いつ読み返してみても会話のかたいのに絶望しています。出来るだけ砕いたつもりですし、短い所は皆とても自然に行っていますけれど、長い、こみいった固い会話になると、外国映画のダブインみたいです。よくフランスやイタリー映画に英語をダブらせたもので、いかにも間のぬけたのがあります、あれみたいに聞こえる所があるのです。私は始めからこのいきいきした会話がどうして英語に再現出来るか、非常に疑問に思っ、て、書評を頼まれたときにもうすでにそれを指摘しておいたのですが、今またそれを改めて感じています。

一旦活字になってみると、短所と長所がまざまざと見えてしまうもので、ああ、あそこはこうすればよかった、ああ訳せばよかったと後悔しているのです。始めは日本語に近すぎて、なるだけ忠実に訳そうとしますが、だんだん自然な英語に変えて行くと、なんべんも書きいれ、打ち直した稿は、目がちらちらして、客観的に冷静に見られないものです。下訳ではぜったいに解釈の間違いをしなかったと思いますし、今でも日本文を読み返せば意味の不明なところはありません。だけれど、大統領選挙が思いのままにならないのと同じで、下から選んで行くうちにアレヨアレヨという間もなく、大変なヤツが最終的に選ばれてしまう、あれと同じです。時間も限られ、能力も足りず、量で圧倒され、疲れきると「もういいよ」ということになるらしいのです。だから、註も、何と阿

呆な事を書いたものかいなというのがありますよ。もう少し書きようもあろうに、大急ぎで、このくらいでよかるという感じのものが。

でも原文のいいところはやはりよくて、あのババリア（らしい）山の湖の辺り等はなだらかに行っています。印象が鮮明で今度あのあたりへ行ったら、アッここだ、と人はすぐわかるだろうと思う位。始めの方がすらすら行ってるし、お終いが、又何ともいいのです。あの最後の東だわ、西だわ、とっているうちにどちらもけじめがつかなくなるという所が、うならせるくらいよく書けていると、いつも感心するのですが、英語でも印象はあざやかだと思います。

願わくは、読者の辛抱と興味の長続きせん事を。しかして最後まで読了されんことを。訳して筋が面白くて読む本ではなく、文章のおもしろさ、性格の描写の魅力で読む本なので、下手な訳文では開高氏は浮かばれません。結果がおもわしくない場合、責はぜんぶ私にあると存じます。お許してください。

でもね、今読み返してみて女の人（あのたくましい女性ながら）心の切なさが痛い程わかって、あわれで涙が出ました。私は泣き虫だからそれが本の評価にはならないでしょうけれど、何度読んだかわからない本が又泣かせたのだからえらい。自信を持ってください——というのは変かしら。開高さんはお涙ちょうだいのつもりで書いたんじゃないんですものね。

実は私は最初の「トキちゃん云々、赤ん坊云々」という所はきらいだったのです。感傷的だと思って。そうして憎悪の種がなくなればガタンと来るのは当たり前じゃないか、何も目新しい事ではない、と思っていたのです。でも今度ゆっくりゆっくり読んでみると、いちいち納得が行くばかりでなく、全くそうだよ、ということになったのです。私は赤の他人のように客観的になって読めないのだからこれも正しい評価とはいえないかも知れませんが。

ドイツへ行ったとき、（まだ一度しか行った事がないのです）バド・ゴードスバークで、丘の上の中世のお城を改造したホテルに泊まりました。そうしてテイエポリの絵のあるピンク色の教会や、丘の上のガラスばりのレストラン喫茶店や、ボンの大使館の沢山ある所、大学のあたりも、通訳と運転手つきであなたのいわゆるタンクを乗りまわしました。私の通訳はボン大学の学生で、いろんな事をおしえてくれました。

あ、それから、言い忘れましたが、広告の中のスカンジナビア云々は一番始めに私が書評をした時の名残かも知れませんが。でも私はそんな事を書いたおぼえはないけれど、とにかく描写はラテン・クオーターやセーヌから、汚いウンコ通りから、クロアサンやパステイスから、かたつむりから、どうもパリらしいけれど、さかんに北の町北の町と書いてあるし、グログのことも出て来るし、スカンジナビアかなと思ったことがあるのです。訳を始めた時にはもうパリもボンもベルリンもはっきりわかりましたけれど、それをストちゃんに言うのは忘れたようです。海坊主は又、ぬーっとしてるからしらべもせずに、いいかげんなことを言ったのでしょう。だから私の責任かもしれない、ごめん

なさい。あのスイスに近いらしい山の中の気取ったホテルは、そんなのをババリアでいくつも見かけたので、目に見えるようです。此方では、カナダのロッキー山脈、バンフやジャスパーなどという所へ行ったとき、そんなホテルに泊まりましたが、自然はカナダのほうがきびしくて、ババリアあたりのやわらかみを欠くようです。

今年のカナダの旅行は2700マイル走りました。とても楽しかったのですが、主人ったら車のトランクいっぱいキャンプ道具を詰め込んで行ったくせに、とうとう一度もキャンプしなかったのです。毎年キャンプキャンプって騒ぐけれど、結局いつもしないのです。1970年の夏私が日本へ行ってる間、彼は生まれて初めてキャンプして（50いくつにもなって）それが病み付きで道具を買い込んだのですが、それからやったのは一度だけ。彼ほんとうにマンガみたいで。今度のアフリカ行きの為に、彼はわざわざニコンのニッコーとかいう300から50までのズームレンズを買ったのに、ニコンのライトメーターがきかなくなってしまうと、修繕は一ヶ月以上かかると云われて絶望しています。私はほくそえんでるんです。あんな重いものを持たされるのはごめんだから。彼はその他、日本で買ってきたニコンカメラと、スイスのアルパというカメラを三つ、レンズを五つ六つ、つまりかたつむりのように全財産をもっていくつもりでいるらしいのです。腕前は下手になるためによほどの修行を積んだであろうと思うくらい下手なのです。私達は来週の木曜日にたちます。アフリカから書くかもしれません。今度は珍しく、日記をつけてやろうなんて思っているのですが、どうだか。

（❖その時は彼の腕前をくそみそに言ってるけれど、彼は写真コンテストで一等をとったこともあるから、それほど下手ではなかったのかもしれない。）

ごきげんよう、
セシリア淑子

=====

1973年、9月（開高氏より）日付無し

同封してニューヨーク・タイムス・マガジンの原稿を送ります。アメリカ人向きにと思って書いたし、訳しやすいようにと思ってかきましたので、ひょっとしたら日本文としてはキザにひびくところがあるかもしれません。よろしくおねがいします。

このあとニューヨーク・タイムス本紙に5枚ほど。何を書いてもいいし、〆切日も設定しないとのことですが、引き受けました。何を書くか、まだ考えていませんが、できたときはまたまたよろしくおねがいいたしますぞ。

『夏の闇』はフランス、イタリー、オランダ、ドイツ、デンマーク、スウェーデン、ポーランドなどからひきあいが来てるそうです。来年一月にあなたの名訳本がニューヨークで出版されてからがたのしみとなるでしょう。われわれはだまってニヤニヤ笑いながら眺めていたらいいのです。成功、不成功にかかわらず．．．

英訳本を参照はするがホンヤクそのものは日本語からやりたいといってきたガリマールその他に対しては『輝ける闇』もできたら同時にやってくれといって新潮社本を送ることとしました。かねてからのわれわれの希望です。容れてもらえるかどうかは、いっさい、先様まかせです。オリオン・プレスというエージェントがやってくれています。

今度はあなたが東京へおいでになったら、ドル、フラン、マルク、ズローテイ、ギルデン、いろいろなお金で一すこしずつでしょうけれど一マツサカ・ビーフの炭焼ステーキ、お箸で、醤油をつけて、といういい店へ御案内します。これはうまいですぞ。

では、また。

C. S. シーグル夫人さま

一ーごぞんじ一ー

=====

1973年、11月29日

開高健様、

随分長らく御無沙汰いたしましたがお元気でいらっしゃいますか。

私はライオンにも喰われずに帰って来てもう二ヶ月近くになります。そのあいだに原稿を送っていただいて、訳して、ニューヨーク・タイムス紙に送ったのですが、ウンともスンとも言ってくるので、電話をかけた所、あれは使わないことにした。又今度日本語の文章をのせるときにはよろしく頼むということでした。

その時そのバンデイ夫人が、もちろん翻訳代は払いますとおっしゃったのですが、そんな雀の涙みたいなほんやく代なんかどうでもいいよと心の中で思ったのが通じたのかどうか、未だにいただいております。

記事を出版しなかった理由はもうおききおよびと思いますが、ニューヨーク・タイムス紙にとっては目新しい内容のものではないからです。N.Y. タイムスの、特にマガジン・セクションの記事は相当程度の高い、内容的に充実した読み物で、書く人達は題材について行き届いた調査をいたします。それで日本の工業化についても、一般に知られていること以上の事実についての情報を望んだわけでしょう。日本の一流の作家でいらっしゃる開高さんにそんなことを注文するのがそもそも間違っていますけれど、抒情的に工業化を嘆いても駄目なのです。そう云うわけですから、折角の原稿が無駄になって、おきのどくに存じますけれど、ご了承ください。

その後お元気でいらっしゃるのでしょうか。あちこちで『夏の闇』を出しそうで私も人ごとならず嬉しく存じます。ステーキは必ず押しかけて行って御馳走になります。来年の春に。その前に開高さんはアラスカへ魚釣りにいらっしゃるようになるのですけれど、私はアラスカへ行く予定はなし、真夏にフィラデルフィアへいらっしゃいというバカはまずいないので、暮れ迄お目にかかれませんが、それまでに何か小説は出ませんか？

私、今すこし退屈しているので何か訳したいと思います。ストじいはこの頃ますますトニーヨー病が嵩じて、オフィスに出たり出なかったり、もう長い命じゃないようです。「オレがいなくなったら日本語を読める人間はいない。この課は消滅するであろう」と威張っていたことですから、死んでも気持ちがいいでしょう。

退屈なので日本文学の争点とか現代日本文学史なんてものを真面目な高校教師のように読んで見たりしていますけれど、全く文学のようにつかまえ所のない評価の難しいものはありませんね。それを又生み出してそれで生活することの困難さもよくわかります。作家が次々に行きつまって自殺してしまうのもよくわかります。でも開高氏はどう見ても自殺型ではないので、私は安心してしています。魚釣りを心からたのしめる人が自殺なぞする筈はないし、第一その頭の中をのずくと、才能がもくもくと雲のように沸き上がって……

どうぞいいお仕事をお続けになってください。
オフィスでいそいで書いて乱筆乱文ごめんなさい（ただしゆっくり書いても乱筆乱文）

Cecilia Segawa Seigle 拝

=====

1973年、12月19日（開高氏の手紙）

天井裏のネズミがコトリとも音をたてなくなったみたいにあなたからの便りが切れてしまったので心配しています。それに、もうぼつぼつ一九七三年もすりきれかかっているので、短い御挨拶をお送りするわけです。

ニューヨーク・タイムス・マガジンの原稿30枚ほどを苦心して書いて送りましたところ、問題の扱い方はとてもいいけれど問題そのものがわれわれにはおなじみでありすぎるので使わないことにきめた、お金は送る。アトランティックやハーパーズに原稿を廻してみてもどうかという編集長の手紙がきました。“問題そのもの”とは全日本が都市化しつつあることと汚染のことです。さんねんとは思いますが、もともと私はソシオロジストではなく、ノヴェリストなのだから、不名誉でも何でもありますまい。むしろサバサバした、といったところです。アトランティックにもハーパーズにも廻す気はありません。推薦者のドナルドキーンさんに会ってその手紙を見せ、小説書きは小説を書いていたらいいのだとウソブイテ、お酒を飲みあいました。

十一月にはヨーロッパへ講演旅行にいきました。安岡章太郎、犬飼道子、三人でパチンコ玉みたいにいそがしい道中でした。四年ぶりにパリにいったのですが、おどろいたことに、そしてわびしいことには、あのフランス人たちが朝からせつせとはたらきはじめています。世知辛くなり、ゆとりがなくなり、息苦しいことでした。フランス人がはたらくようではこの世紀も、もう、おしまいです。フィニです。いままで彼らは、ニューヨークや東京は犬の都だ、パリは猫の都だといってイバっていたのですしそれが犬にと

って魅力だったのですが、彼らも犬に成り下がってしまったようです。オ、ラ、ラ、というところ。

ぼつぼつ第三部にとりかかります。来年上半期中の仕上げたいものと思っています。

全作品集12巻が新潮社から出版されはじめましたが、各巻ともにあなたとストラウス氏にとどけるようにと、たのんでおきました。それから別便で、68年と今年のヴェトナム・ルポをまとめた本を、お送りしました。

いいクリスマスを。

二メートル近い御主人にも。

セシリア

セガワ

シーグル様

ごぞんじ

=====

水曜日、1973年12月26日

開高健様、

天上のねずみが鳴りをひそめたように私がおとなしくなったそうで驚いています。確かにアフリカへ行く前と、あちらから葉書を出したあと、御無沙汰したのですが、十一月の終わり頃、お便りしたと思います。それで少しはガサガサというくらいの音はしたはずなのに。

書かなかった理由をもうしあげますと、New York Times の Mrs. Bundy が、公式に開高氏に通知するまでは書かないでほしいとおっしゃったからなのです。それを馬鹿正直に守ってねずみのようにチンと静まり返っていたのです。ネズミというものはそもそもチンと静まりかえれるものであるかどうかは別として。

それに天井裏のねずみがコトリとも音を立てなくなったというのは1973年12月という時点においては、はなはだ *anachronistic*, 観念的であります。開高氏、あなたは小説を観念的表現と心得ておいでですか？体験的に天井をねずみが走り回るのを聞いたことがおありなのですか？え？

この頃は日本でもねずみのいるような古めかしい、奥ゆかしい、おもむきもあるしゴミもあるというような天井は消え去ってしまったのではありませんか？でたらめを（たとえ *metaphor* にせよ）言うものではありません。

私は読速力が衰えたと見え、この頃では全頁を一目で読み取るという芸当ができなくなつたので、あの **opening sentence** の一行目だけ見て、それが **metaphor** であることに気付かず、オヤ、開高氏はこの手紙をネズミも寝静まった丑三つ時に、ネズミの住む神さびた古家で書いていらっしゃるのだろうか。さてもゆかしき極みであると感じがいしたのですゾ。それが体験から来ないものであるとすれば、はなはだ現実から浮き上がった比喻では有りませぬか。ケシカラヌ、とながなが小言を申上げておいて、それからおもむろに季節の御挨拶と御礼をもうしあげます。

お手紙ありがたく拝見いたしました。お変わりもなく大活躍をなさっておられます由、心からお慶び申し上げます。クリスマスと新年のおよろこびも、少しもよろこばしくもないに関わらず、常習に従うべく、ちゃんとカードを何箱も買っておきましたが、おかしなもので、毎日顔を見てる、出しても出さなくてもいい人には、名前だけ書いて切手をはって郵便箱に放り込めばいいので、そういうのがどんどん先にたち、言葉をそえなくてはならない大事な友人は一番あとまわしになり、しかも日本行きは切手を何枚はらなくてはいらないか(重いカードと長い手紙で)郵便局迄行かなければならないというめんどくささです。自然多くの名前がクリスマスリストから落ちて行きます。

『サイゴンの十字架』をお手紙と同時にいただき、その次の日に全集第一巻を受け取りました。たいへん嬉しく、読むのをたのしみにしています。たいていは読んだものなのですけど、「円の破れ目」、「二重壁」なんていうのは初めて。四日間ニューヨークへ行き昨日帰り、又すぐ友人の家へクリスマスディナーに行きました。今日はすでに働いています。恒例のクリスマスパーティは出席をことわって、イヴをニューヨークで過ごし、「石庭」という日本のレストランへ行きました。焼き肉がわりとおいしく、バーテンやコックは日本人だけど、ウェイトレスは着物を来た韓国人のお嬢さんたちという所です。私や主人やアメリカ人の友人たちが日本語で話しかけても知らん顔をしているのはおもしろかった。

27日から1月1日にかけてパーティが七つ程有ります。私はこの季節は横着にかまえて誰も招かず、のこのこ出て行ってゴチソーになるばかり、しかも飲めずにシラフでガアガアいってるので株取引場と同じ。味気ないですテ。

そんな風に毎日遊び歩いているので少しも高遠な思想は心に湧いて来ず、開高氏の御本も(ニューヨークへ行く直前にいただいたのです)まだ開いていないというテイタラクです。氏の御本を読むのは襟を正し、臍下丹田の状態でとご承知ください。

今教育テレビで毎週一時間半ずつ英国版『戦争と平和』をやっているのです、それだけを見て、本もあの厚いやつを読み返しています。ひょっとすると開高氏の戦争随想のなかにトルストイがとっくの昔に言ったことをみつけるかも一々しかし、だからって開高氏の感銘の記録の価値が下がるということは有りません。主人に「トルストイは戦争の狂気についてわりと透察していたのね」と云うと「当たり前だ」と申します。主人は哲学的な文章の一行も書いたことはないけれど、戦争の不条理 **absurdity** についてはトルス

トイ、開高健なみの洞察をもっているらしいのです。頭の中の内容で人間がノーベル賞を勝ち得る者ならば、彼などさしづめ平和賞の候補者くらいにはなれます。しかし彼はテレビのチャンネルの切り替えさえも面倒だという人間ですからね。

ニューヨークでブロードウェイのショーを見てがっかりしました。八年くらい前、英国の四人のインテリ青年が **Beyond the Fringe** という風刺寸劇を連ねたものをやって、大当たりでしたが、日本にも来たでしょうか。私たちはそれをニューヨークでもフィラでも見て、面白かったのでよくおぼえているのですが、そのメンバーの二人が今 **Good Evening** というのをやっていてすごく評判になっているのです。割と信用のおける批評家たちが褒めそやしたので、早くから切符を手に入れたのしみにしていたんです。けれどすっかりがっかりさせられました。まるでハイスクールか、せいぜい大学の下級生の寸劇です。しかも二番煎じのアイデアが多く、いくら前に当たったからと云って、覚えている人も多いだろうと思うのですが一脚本を自分たちで書くのでその責めは全部彼らにあります。そんなに限られた創意力だったのかと幻滅を感じました。（自分の創意力の欠如は棚にあげて）。それをみんな喜んでワアワア笑いながらみているので腹が立ちました。やはり寸劇とかコント風のものは政治的社会的風刺性がなければ無意味なドタバタ、ギャグになってしまいますね。小説やフルサイズの劇ならば思想抜きでも芸術性だけでも独立できるとおもうのですけれど。

それからちょっとシークなフランス映画を見て、気の利いたイタリー喜劇を見て、お天気がよかったので全くのおのぼりさんになって、こちらへ来て二十年このかた一度も上ったことのないエンパイアステートビルという怪物に登って来ました。日本人が多勢いました。日本人は必ずああいう所に登りたがるもので、私もその例外ではありません。本物のニューヨーク人はあんな所へは登らないでしょう一子供は別として。本物の東京人も東京タワーに登らないのでしょうね。私はあそこは二回も登っているからよほどのおのぼりさんということになります。

日本は石油不足がトイレットペーパー不足という所まで響いているそうで、まるで風が吹けば桶屋が何とか的です。なるほど経済力は浅いし、人間はエゴイストに出来ているのでしょう。若い人達は戦争時代の物質不足がそれほど身にしみているとも思えないのに、右がトイレットペーパー不足だと云えば、それっ、左が砂糖不足と云えばそれっ、とパニックを起こすのは、つまり自分さえよければあとはどうでもいいという精神なのでしょう。だから大企業に簡単にあやつられてしまいます。それよりも団結してボイコットして値段を制御すればいいのに。トイレットペーパーがないくらいは何でしょう。ビデを使えばいいんです一というの「パンがなければお菓子を」というのに似てさにあらず、アメリカでもビデなんか普通の家庭にはないけれど、即席に工夫すればいいのです。

どうも開高さんに書いてるといつも変なおしゃべりがとりとめもなく出て来てコントロールできなくなります。ちゃんとした **respectable** な、そして **respectful** 手紙が書けなくてごめんなさい。

ヨーロッパで講演をなさったとか、何語でお話になったのですか？そうして何について？犬養道子さんはいろんな外国語がお上手なのでしょう。開高氏もずいぶんお読みなれるらしいけれど、お話もなさいますか？パリ人が働くのはイタリー人がウソをつかなうなるのと同じくらい驚異なのかしら。でもフランス人はわりと律儀だと思うけれど、パリで又ウンコ通りへいらっしゃいましたか？私汚いのはいやだけれど、あのゾーモツ料理をおいしくたべさせる店があれば行ってみたい。私はごく当たり前の人間だからゾーモツ料理はふつうきれいなんです。Tripe だとか羊の脳だとかもあまり美味しいと思ったことはありません。でも書いていらっしゃる描写があんまり美味しそうだから……

開高氏は怠けて眠ってばかりいるようなことをおっしゃってるうちにちゃんと『サイゴンの十字架』が一冊できるほどの原稿を書いていたのだと知って感心しました。あなたの怠けてるっていうのはあまり信用しないほうがいいですね。魚を釣ってるというのもどうかな？何かほかのものを釣っていらっしゃるのでは。私はビデの工夫なんてのはうまいけれど、勉強はしたいしたいというばかりで実行に移さないからダメです。

ではくれぐれも御自愛くださいませ。そうして1974年がすばらしい年でありますように、あなたにとっても世界の人々にとっても。

ご家族の皆様にもおよろしく。

御本重ねて御礼もうしあげます。たいへん嬉しうございました。全集が全部来るのを楽しみにしています。出来たら何か訳したい。

Cecilia 淑子

=====

1974年、1月8日（開高氏、新潮社クラブから）

さきに手紙をだした直後にクノップの本を入手しました。クノップからオリオン・プレス（私のエージェントへ送られ、それが新潮社経由で届けられたという次第です。カヴァーの画の女がちょっと妙ですけどしっかり作られた本です。

私は英語がいくらか読め、いくらか話せますけれど、味あうこと、吟味することはまったくできません。ことばとことばのひびきあいや、リズムの照応や、文体にあるメリ、ハリ、照り、というような大切なことになると思うと盲目同然だと思っています。けれどカヴァーの裏にある紹介文のなかに含まれている批評のことばを読んでもみると、どうやらあなたがたいそういい訳をして下さったらしいと感じられるのです。すでにキーン教授はあなたのことを激賞していましたが、他にも英語と日本語と文学が同程度に鑑賞できる人に読ませて意見を聞いてみようと思っています。

昨日、ニューズウィークの東京支社が、この本の書評が掲載されることになったので著者の写真がほしいという電報がきたといって、写真をとっていきました。顔には何も期

待していませんが、どんな書評がでるか、そちらの方を楽しみにしています。（トシはとりたくないものですナ）

このクラブで毎日寝たり起きたり、スパイ小説や鳥獣虫魚のことを書いた本を読んだりして。第三部はつらいものになりそうですぞ。

お手紙はここに宛てて下さい。

セシリア・瀬川淑子・シーグルさま

ごぞんじ

=====

1974年、1月24?日（開高氏の手紙）

明けましておめでとう。

去年は長い手紙をありがとう。

おかげであなたがまだ生きていること、それもピリピリと、いきいきと活性状態にあることを知りました。いつかも書いたと思いますがあなたの手紙は辛辣さと無邪気さと優しさがあるので好きです。今年もトーンを落とさないでやって下さいな。

年が明けて早々に、つまり1月7日に新潮社のクラブに入りました。これから4ヵ月かかるか、5ヵ月かかるかわかりませんがここに籠城です。『夏の闇』のときには通算5ヵ月かかりました。

私はお守りや、ジンクスや、ゲンを半ば信ずるものですから、前回によかったことを全部踏襲しようと思っています。飲むもの、食べるもの、それからパンツを夜ふけに洗面所で自分で洗うことなども。これなど、いきづまったときには、最高の気晴しですゾ。じゃぼり、じゃぼりというわびしい音が身にしみましてね。外国にいるときもずっとこれはづつけていました。独身紳士におすすめできる手仕事のナンバーワンであります。

去年新潮社の沼田六平太という人物がニューヨークへ行ってストラウスのおっさんと会いました。沼田氏は私の親友であり、よき少数の理解者の一人なので、もう永いつきあいです。ニューヨークのおっさんは1974年にはおれは半引退するからそれまでに開高に第3部を仕上げるようによく言うようにと、念を押したそうです。小生としてもできることならおっさんの糖がアタマにまわりきらないうちに仕上げたいものだと思っているのですが、うまくいってくれるか。どうか。

この第3部を仕上げると『輝ける闇』以来の一時代が私の内部で終了することになります。ほぼ10年間でした。経験そのもののことを考えると30代の3/4と40代の初めです。おそらくこういうしんどい三部作を書くことは当分ないでしょうから、私とし

ては張り切らないわけには行きません。けれどよくある事です、張り切りすぎるとプツンと切れちゃうこともある。

酒は断やすな。火をつけすぎるな。思いきって飛べ。しかし高くあがりすぎると空気がなくなる。といったところです。むつかしいところです。非常にむつかしいところです。

また手紙を下さい。

私も書きます。

セシリア・セガワ・シーグル夫人様

ごぞんじ

=====

1974年、1月30日

開高様、

今日のお手紙もこの前のお手紙も有り難く拝見いたしました。

この前お便りしたのはクリスマス直後で、たしか12月26日だったと思います。

その日の夜から今日迄に色んなことが起こりました。あなたの御本が出て来たのもその一つですけれど、そうしてちょうど一ヶ月前に開高氏は又もや一つ年を取ってますますテカテカムクムクニチャニチャした中年後半紳士におなりになった筈です。これは悲劇であって、決しておめでたくはないので、お祝いは申し上げます。

主人はどうも身体の調子がしばらく尋常でないのでクリスマス前に親友で主治医のところへ行き、12月26日の午後はバリウムのテストが予定されていました。今迄もたびたび診断やテストに行き、いつもどこにも故障はないといわれているので気にもとめませんでした。夜その友人から電話があり、テストの結果、1月1日に入院、3日に切開手術ときまったから用意するように、ということでした。主人はその時私にガンだと申しました。彼の専門は歯科ですけれど医学もいちおうやっていますから、やはり身体のことには知っています。このところどうもそうだろうと思っていたと申しました。私はあつけにとられ、又いつもの冗談だろうとしばらくは信じませんでした。

元旦まで普通にしていってパーティに行ったり友達に会いに行ったりしました。1月3日の手術はたいそう長く、私はもう駄目だ、と思ったくらいです。でもまあ何とか結腸の大きい腫瘍と、脾臓と、そのあたりの瘍をぜんぶ摘出しました。けれどガンはもう肝臓の一部も侵しているらしいのです。今日で、手術後ちょうど4週間、彼は先土曜日に観劇に行く所迄こぎ着けましたが、それはすっかり回復したから行ったのではなく、今シーズンの切符が4席ずつ買ってあって、ずっと前から友人を招いてあったからです。偶然この間はその医者夫妻を招いていたので、健康の方を確かめると、自分で行く気があれば大丈夫だろう、私がついいるから、と云われて行ったのです。真っ青な顔をして、40ポンドくらい軽くなって、そろりそろりと、まるで狂言の太郎冠者みたいな足取り

で劇場の廊下を歩いたのですけれど、やはりその次の3日ばかりは起き上がれませんでした。

今日はもう大分いいようです。私にとっては希望をもったり絶望したりの毎日です。主人のこと色々言いましたけれど、これ以上愛せないと思うくらい愛してるので、肝臓ガンで亡くなるとわかってしまうと私も生きる望みがなくなりました。今迄未亡人になったら、とか、どうせ長くはないでしょう、とか、おなかが痛いと言っていると、あ、ガンだ等と冗談を言い合っていたのですが、それは全く（少なくとも私は）夢にも思わなかったからこそ、なのです。体力が回復しだい、ニューヨークへ行って、ガンの大権威者にプランを立ててもらい、化学治療を始めることになっています。それも同じ病院の放射線治療部長の友人や、いろんな友達が頭を集めてきめたことなので、それが一番いいとはわかっているのですけれど、どれほどの効果を奏するものかはわかりません。治療といっても病気の進行を遅延するだけで快復というのではないのです。

そんなふうで、私は何も手につかず、毎日オフィスに通って普通に働いてはいますけれど、夜は彼のベッドの傍でテレビを見たり本を読んだり手紙を書いたりするだけ。このお返事も今日のを頂いて、やっと書かなければならないのに気がついたのです。

一昨日のニューヨーク・タイムス紙に出た書評はいいとは申せません。評者はこの本に特別東洋的なものを感じないこと。西と東が会ってしまったことに不満を感じているらしいのです。アメリカ人ってどうしてこう「異国趣味」なのでしょうね。主人公の自意識の在り方、強さが西欧のそれによく似ているのはたしかですけど、それは作者が西欧的な心理分析描写ばかりしかない現代に生きているからで、わざわざアメリカ人のまねをしてるのじゃないのだということがわからないんですね。人間の心の動きに西も東もへったくれも有りはしないでしょう。どの書評もそうですが、翻訳については何ともいってありません。（ということは特別よくも悪くもないということ）兎に角、私の師のソーンダース氏はずいぶん褒めて、よくできたと言って下さいましたが（私はクノッフ社の編集者がうまく手を入れてくれたんだと白状しました）私は会話がやはり固すぎると思います。原作の日本語の会話のよさが出ていません。どうしても直訳になり、二人の人が生き生きと血の通った言葉で話しているようにきこえません。

原文の192頁（英語のp.179）、217頁（p.203）などの“...”

という所をやはり削っていて、一人の人が立て続けにしゃべっているように印刷されています。あれほど抗議しておいたのに。

その他ゆっくり読みなおしていません。Newsweekに記事が出るといいですね。それでもベストセラーにはならないでしょう——ということは名誉なことです。今のベストセラーなど本当にTrash。私は初めに海坊主のおっさんにこれは売れませんが、しかしながら日本文学のために訳すべきです、と云っておいたので、売れなくても私のせいじゃない。売れなくてもどの図書館でも必ず買ってくれる筈です。でもヨーロッパではどんないい訳を出してどんどん売ってほしいですね。これは開高氏のinternational fameの為ではなく、氏に天井をネズミの走らない新しい家を建てていただく為でもなく、ひ

とえに、おいしいビフテキをごちそうになってやろうという私の野心から発した言葉であります。

私はもう一度だけ主人を日本へ連れて行きたく思います。彼は11年間に二度行っただけです。もちろん日本がどんなに破壊されつつあるか、毎日四方八方から聞きますけれど、今年の暮れとお正月が見せたい、その頃元気でいてくれるかどうか。五月迄に元気になってくれれば、ユーゴスラヴィアへ10日、九月に南米へ二週間行きます。去年からもうその予定をたてていましたから。もうその頃は闘病だけで起き上がれないかもしれないし、カクシャクとしてどこへでも行けるかもしれない。もうどのくらい？と医者に訊いても答えてくれないのです。早く死んで欲しい人はいつまでもずうずうしく生きてるのに（ニクソンみたいな人）私の主人みたいないい人がこれから苦しまなければならないのは本当に不公平です。これから飛行機事故でいっしょに死ぬるように、なるたけたびたび飛行機に乗ることにします。

陰気なことばかり書いてごめんなさいね。次はなるべく明るい手紙を書きますからね。開高氏、うちの主人はちっともお酒をのまないのに肝臓ガンになったのにあなたはしょっちゅう飲んでピンピンしてるのはどういうわけですか？ひょっとするとあなたも侵されてるかも知れないから検査してもらってください。

くれぐれも御自愛を。

淑子

=====

1974年2月8日（開高氏より）

お手紙を有難う。御主人がたいへんなことになってさぞ心をそれに占められていらっしゃるだろうとおもわれるのにわざわざ N.Y. タイムスの書評のコピーまで同封して頂き、恐縮しています。

御主人のことについては何と申上げていいのかわかりません。こういうときはだまっただまでいるほうがいいのかもかもしれません。あなたはずいぶん気丈なひとだと私は以前から思っていますけれど、それに、そのことは今度の手紙のあちらこちらによくにじみでているのですが、だからよけいに悲痛さがつたわってきます。私はガンのことはよく知らないのですが、発見能力が高まったせいか、年々、日本でも発病年齢が低くなっていくようです。早期発見さえすれば何とかなるということを聞かされたり、山の木に寄生するサルノコシカケというとぼけた名のキノコを煎じて飲むと治ると聞かされたりもします。事実としてそういう事例もあるのだそうです。これはロシアの民間療法でもあるのだそうです。しかし、だからといってそれが百発百中というのでもないらしい。ヴェトナム戦争やロケット競争などに使った金を（アメリカだけではないのですが．．．）

ガン研究のほうにまわしていたらもうちょっと何とかなるのではないかと、以前サイゴンの蒸暑いアパートで考えたこともありました。三年ほどまえに私はノドにハレモノができたように感じ、ガン病院を三つか四つまわり歩いて、あらゆる角度から点検してもらったことがあります。もしガンならハッキリそういつてくれと一人一人のドクターにたのんだのですが、どの先生もウヤムヤでした。

私はジャングルやバナナ島やラゴス湾といったぐあいには九死に一生を得てかろうじて生きのびてきましたがいつもそのあとでこれからの人生はオマケだ。したい放題やってやるぞ。そう思いきめ、そしてろくに何もできず、あいもかわらずのことを繰り返しています。そういう見方で眺めるなら戦争中に空襲や機銃掃射で生きのびたときは14才の子供だったのですからそれから以後ずっとオマケを生きてきたのだともいえます。

だからガンだと宣告されたら、電話を切り、友人とも会わず、何にも書かず、妻と家にたれこめて茶をすすりながらマス釣りの本でも読んですごそう。そして **what will come** を待つあるのみ。そう決心していたのですが、そのうちに何となくハレモノはひいてしまい、ドクターたちも冗談しかいわなくなっていました。けれど、いつか、もう一度、おなじ決意をおなじ過程を踏んで固めなければならないのでしょう。一度だけでなく、ひょっとしたら何度も．．．

今日はこれだけ。

本や書評についての感想は次にします。

ことばの職人であるはずの小説家もこうなるとがんばってくださいとしか申し上げようがありません。がんばって下さい。元気をだしてください。あなたがいま萎れると御主人にひどくひびきます。せせらわらって鼻歌をうたって看病して上げることです。泣くのはトイレで、ひとりで。
よけいなことを申上げたようです。

セシリア・瀬川・シーグルさま

開高健

=====

1974年2月13日

開高様、

おやさしいお手紙を有難く拝見いたしました。御忠告を身にしみて感じ、たいそう元気づけられました。冗談一つおっしゃらないで、パリパリの原稿用紙に大そういい字で書いてあるので、私のいつもの乱筆乱文が恥ずかしく、申しわけなくなっていました。あなたの字は丸っこくて、奇麗にそろっていて、何時も感心しているのですけれど、やはりいい小説を書くにはコクのある性格のある字を書くことも必要なんですね。私には

姉が三人いますが、母と、上の姉二人は昔の女で、お習字の先生についてすごく字が上手いのに私とすぐ上の姉は戦争っ子で筆の持ち方も知らないくらいなのです。まあそんなことはどうでもいいとして。

御忠告に従って至極快活にしています。一日ずつしか考えない、割と充実した生活に戻りました。主人も少しずつ元気になって、まだ働きませんが、音楽会等、時々行けるようになりました。2月4日、2月10日、2月12日ともう三回も行って、その度に自信が生まれてるようです。昨夜のはフィラデルフィア・オーケストラで、演奏が大そう気に入ったので、あとで楽屋にオケの連中に会いに行きましたら、皆主人が痩せてしまったのでびっくりしていましたけれど、元気そうに見えるとウソを言ってくれました。私はしめしめこの分だと．．．とほくそ笑んでいるのです。

本当に開高さんのように生死の境を何度も通過していらした方には、その後一生がボーナスで、何だか年中お正月のようで変でしょうけれど。

ニューヨーカーとニュー・タイムスからの書評をお送りします。ニューヨーカーは御存じの如く歴史ある生粋のニューヨーク人文化人の雑誌、ニュー・タイムスの方は新しく出てきた、若々しい、活気のあるインテリ雑誌です。ニューヨーカーはニューヨーク・タイムスほど不親切でなく、ニュー・タイムスは好意的でさえあります。この二つは取ってる雑誌の中に偶然見つけたもので、他にまだいろいろ書評が出ているかも知れませんが、そのうちに探してみます。これでアメリカ人の批評家が必ずしも低能でないとおわかりになったと思います。でもニューヨーカーの評が言っているように、主人公がなぜ眠ってばかりいるのか、ベトナムに関してちょっとはっきりしないくだりがあって、それが説明の替わりなのか知れないがよくわからない、という風なことが書いてあるのは、私が始に懸念した通りですので、ストじいに「それみたことか」と言ってやりたく思います。二三の人が翻訳をほめてくれました。その度に、「いえ、あの、クノッフのおばさんが．．．」とどぎまぎして言うのです。（この通り私は気丈ではないのですゾ）

『夏の闇』は本当にいい勉強になって、今一年以上ものばしのばしにしていた『家』訳に、怠惰のからだに鞭打って（オーゲサだね）手をいれているのですけれど、その悪い所がすぐわかって、やっと少し目が見えて来たという感じです。この調子でどんどん訳してクノッフのおばさんに見てもらわなくても完璧と云われるくらいになったら！70になってでもいいからーなんて考えています。

（❖ところが70になっても80になっても駄目ですよ。現実はいきびしいもんです）

私が大学の一年生で此方へ来た時、お世話になった家の、アメリカの歴史に出て来る名家のおばあちゃまが、80いくつで死ぬ一ヶ月くらい前に博士号を取りました。私はその頃 Ph.D なんか興味がなかったので、さても物好きの媼よ、と思ったのですが、この頃は高齢にも関わらず何かしてる人を見るとすごく感心します。それは人生を生きて行くことが物好きよりももっと多くのものを必要とすることがだんだんわかって来たからです。そんな人達は、時々のおマケ、ボーナスで遊ばないで、ものすごくガッチリした実用的な買い物をする人に見えるのですけれど、ボーナスだけでは足りなく、まず健康

から、硬化していない頭から、湯気のたつような意欲から、いろいろ必要です。私が70迄長らえたら、開高氏の作品のもっといい訳を出しますからね。私は気丈だと云われてがっかりしました。本当にそうかしら。そうかもしれないわね。たしかに主人の大危機だということ始めはオンオン泣いてるけど、その中に勇気リンリン巴御前みたいになっちゃうんですものね。でも、「アンタ負けぎらいだね」と云われると腹が立ちます。たしかに負け好きではないけれど、あまり勇ましい女性のように思われたくはありません。私達の友人の間では（とくに主人の友人たちは）私のことを半バカくらいお人好しの、虫も殺さないやさしい日本の女の子だと思っているのです。そのイメージをぶっこわさないでください。

この前、開高さんもガンになってるかも、なんて冗談を言ってごめんなさい。ずいぶん失礼なことを言ったものですね。咽喉ガンの心配をなさったのなら、その苦しみだけでも実際にその経験をしたのと同じでしょう。未知、不確定から来る不安は、病気そのものと同じ位、あるいはもっとたちのわるい苦痛ですからね。お許してください。たとえ無害な腫れ物でも、帰って来ないように祈ります。

第三部の闇はどうなってるのでしょうか。クラブでお書きになっているということは新潮社が待ち構えていて、坂本氏みたいな、鬼のような人が傍で見張ってるってことなのでしょう。どうぞしっかり。

では又、本当にお手紙（お忙しい中で）有難うございました。又お便りいたします。

Cecilia 淑子

=====

1974年3月13日（開高氏より）

ニューヨークに“リテラリ クリッピング サービス”という書評の切抜きを仕事にしている会社が有ります。“夏の闇”がクノップから出た直後にそこから勧誘がきたので、とりあえず50ドルの口を申し込んでみたら、あちらこちらの新聞にでた書評を切抜いて送って来てくれましたので新潮社の出版局にコピーをとってもらい、あなたに送りました。こういうことは全部クノップでまとめてくれているのではないかと思います。念のためにというわけです。

シカゴのサンタイムズという新聞にでたのがよろしい。ウォルステンという人物は日本文学と歴史の専門家だということですが、どういう人物なのでしょう。もしごぞんじなら教えていただけませんか。新潮社でも調べにかかっています。この人は日本文学にずいぶん通（つう）であるらしき気配です。

あなたの訳をたいそう評価しています。

御主人はその後どうですか。

夜ふけのトイレで忍び音を漏らしていらっしゃいますか。

今日は用件だけです。

C. S. シーグルさま

ごぞんじ

=====

1974年4月29日

(開高氏へ)

お恥ずかしい程の御無沙汰をしてしまいました。

お元気でいらっしゃるかどうかおききするのも気がひけるくらいです。

私はドルと円の為替レートのように上がったり下がったり自信を得たり失ったりして生きています。お手紙や新聞の切抜き御本など送っていただいてありがたく思いながらもお便りする気になれないでいました。

主人が一時わりと元気になったあと、三月の半ばに悪化して入院し、その後退院して変動しながら毎日ねたり起きたりの状態です。でも治療が少しは効果を奏して来たのか、この二三日だいぶ気持ちがいいようで、ユーゴスラヴィアへ行けるかも知れないね、等と大言壮語しているので、不可能なのはわかっていながら少し明るい気持ちでいます。五月になるとどこかへ行きたくなるので、私はムズムズしているのですが、彼の体力が回復しない限りとてもどこへも行けません。

寒い冬でしたが、ようやく暖かくなって、今日など夏のような暑さ（外は）です。

さき程、中央図書館の文学部の司書長の方（知らない方です）がお電話下さって『夏の闇』を読み終わった所だ、とてもすらすらと読めて翻訳に感心して終わりの所を見るとわが隣人の訳だというので大感激して電話を差し上げる、とのことでした。隣人というのは、図書館は私のつとめ場所の建物からは、Parkway と Logan Square という公園地をへだてて、ちょうど向かい側になっているからです。Parkway というシャンゼリゼーをかたどった大通りを囲んでいろんな Institution が有りますが、その一つです。とても文学的だといって褒めて下さいました。作者にお伝えしておきましょうと約束しました。時々そんなふうにほめて下さる方もあります。

文学のわかる人はいいのですが、わからない朴念仁は内容に恐れをなすらしいのです。音楽会などへ行って顔見知りの人たちが書評を読んだよと云ってくれるのですが、ニューヨーク・タイムスの書評を読んだ人達は本を読む気にはなれないらしいので、やはりその影響力は相当なものらしいのです。でも今日電話を下さった方など、本当に口をきわめてほめたたえるという調子でしたから、他の人たちにも読むようにすすめて下さるでしょう。司書長というのは（しかも文学部の）相当影響力があります。

この手紙むりして書いてるのおわかりでしょう。どうしてもユーウツで、人に手紙を書く気になれないのです。ユーウツな時に輝かしい春はますます重荷になるものです。ローガン・スクエアには噴水があり、花園があり、チューリップやつつじが今を盛りに咲いていますけれども、悲しく思うだけです。

お仕事ははかどっていますか？私も何か熱中できる仕事がほしいと思います。スト爺は五月一日で引退ですから、そのあとほんやくの仕事はくれないでしょう。ストじいのお友達が別れに彼と関係のあった作家やほんやく家の手紙を集めて記念のポートフォリオを作ろうというので、手紙を書いてくれと云い、私も一つ書きましたけれど、彼の35年の出版生活の間にはずいぶん色んな人に意地悪しただろうと思います。手紙の中で私はすこし皮肉を言ってやったのです。コンチクショウ生意気な女め、と思うでしょう。

では又、もっと自信のある時に書きます。今はだめ。

ごきげんよう

セシリア淑子

P.S. 考えてみるとユーウツの原因のひとつはウオーターゲイトの主役者の二人であるミッチェルとステニスが陪審で無罪になったことと関係してるようです。

=====

1974年5月2日（4月29日に書いた私の手紙とすれ違いになったらしい）

いつぞやこのクラブから手紙をだしましたがそれきりあなたから便りがありません。もう何ヶ月にもなります。

いつも手紙を出すと、テニスのボールのようにすばやくあなたから便りがありました。それが習慣のようになっていたものですから、不安です。

あなたに頂いたさいごの手紙では御主人が手術後ちょっと元気になり、音楽会いもでかけられるようになったとのことでした。ニューヨークへ本格的な手術をうけさせにいくつもりだということでもありました。

私はずっとこのクラブで暮らしています。第三部の新作は何度もフリダシに戻っては“再出発”でほとほとくたびれてきましたが、今月からまたまた“再出発”です。イヤになってくるくらいで、私はこの作品を憎みかけているといってもいいほどです。8月と9月、かねがねのアラスカ州政府の招待でアラスカの原生林へ釣りの旅行に出かけるつもりでしたが、作品がそれまでにとても仕上がりにませんので一年延期することに決心しました。何ととっても私は文士であって釣師ではないのですからね。

『夏の闇』はずいぶんたくさん書評がでました。近日中にコピーをとり、まとめてそちらへお送りしましょう。

あなたの沈黙が大きな不幸の結果でないことを祈っています。

C. S. シーグル様

ごぞんじ

5月2日

=====

1974年5月10日（開高氏へ）

お手紙おそれいりました。御心配おかけいたしました。私のと行きちがいになったようですね。あまり生きのいい手紙は書けませんけれど、とにかくお返事だけは差し上げます。お天気のお話でもいたしましょう。何もいうことのない人みたいに。

一昨夜、昨夜、霜だったとか。しばらく暑くて皆だまされて冬服をしまい込み、夏服を出したのです。風流に言えば衣更です。そうしたらまた寒くなって風流どころじゃなくなりました。もう夏が来たんだから順序として秋になるのもあたりまえ、なんて負け惜しみを言っています。折角つつじが咲いたのに雨や冷たい風でたちまち色あせてしまいました。一月にユーゴスラヴィアへ行ってた人が、二週間、空前絶後の大雨でさんざんだったと言っていました。地球の上だから雨が降るのも当たり前でしょうけれど、大雨のデユブロブニックなんて魚のいないアラスカみたいなものでしょう。

そんなふうにお天気がどこでも変になっているのです。天地異変は乱世（乱政？）のきざしなんていいですけど、まさにそうです。

（❖その頃もう地球温暖化の兆しがあったのだろうが、まだそんなことは言ってはいなかった。）

主人はいつもの状態でよくもなくかくべつ悪化もせず、体重は下がったっきり、消耗していて食事するのも努力を要します。でも一日に一回くらいは外出して（歩くのはしんどいと云って、歩いて七分くらいの自分のオフィスにも車で行って）非常な努力を続けています。たちまち疲れてすぐ伸びてしまうのですけれど、又眠るとわりと元気を回復します。もともと丈夫な人だからでしょう。

肝臓がはれているらしく、横隔膜が刺激されてしゃっくりが出て止まらないので、強い薬で抑え抑えしています。毎日のむお薬が十種類くらい。日本人は薬好きで、ふつうの人でもその位のむそうですけど、私はめったにのまないで、おなかの中で変な化学反応が起こるのではないかと心配しながら見えています。

アラスカ行きを延期なさったそうですね。残念でしょうけれど、アラスカは鮭が逃げたり絶えたりするような所ではありませんから、作品を完成なさってからゆっくりいらっしゃる方がおたのしみになれるでしょう。

二三日前からやっと思いなおしてあなたの全集を始めに来たものから読み始めています。どれも楽しく読めますけれど、翻訳したらいいだろうなと思うものとそうでないものと、私の好みにも合い、翻訳にも適しそうなのは「円の破れめ」「フンコロガシ」「一日の終り」など。「なまけもの」はたいへん面白いけれど話が本筋に入る前が長くて、二つ

に割れてしまうんじゃないかと思います。「二重壁」は作者にとって大切な作品ではないかと思うのですが、とても内的でプライベートで私小説（ではないのに）色が濃くて、ほんやくに適さないのではないかと思います。私はここでは今迄知らなかった作品のことだけ言っているのです。まるきり見当ちがいだろうと思いますけれど、まだまだ読んでいないものが多いので、次々に読みたいとおもいますけれど、今ほんの始めを読み出した「穴」と言うのも面白そうですね。ウイーンのにせ美術学生の独白は日本人には面白いけれど、此方の人には珍しくないのじゃないかしら。

とにかく、私の好きなものを勝手にやくしてクノッフに送って見たらどうでしょう？クノッフが駄目なら（短編ですから **Collection** の長さにくつかまぜないとだめ）一つずつでも **New Yorker** に送って見たらどうかしら。ニューヨーカーはニューヨーカータイプというのがちゃんとあって、すこし空とぼけたような「一日の終り」なんて私の好きな小品はどうかと思うのですけれど、どうお思いになりますか？

翻訳権とかなんとか、新潮とややこしい手続きがあるのでしょうか？今の所私にとってそんなことはどうでもいいことで、もっとやってみたいからーそうしてサイデンステッカーさんみたいに上手になりたいからの話なんですけれど。

開高さんがやってみろとおっしゃれば二三あたってみます。その前にストじいにちょっと手紙を書いて「これから訳したものを契約なしに送ってみるがよろしいか？あなたはもう半分棺桶に足を突っ込んでいるのだから、次の人を紹介してくれ」くらいのことを言ってあたってみましょうかしら。

先日頼まれて書いた手紙のお礼がスト氏から来ていましたが、ずいぶん沢山のひとから祝辞を貰ったらしく、感激して声がノドにつまったような短い手紙でした。

とにかく開高氏の作品はですね、持ち味のトボケた所が英語じゃ出せないのです。『ロビンソンの末裔』なんてのは実に語り口がおもしろいけれど、それがどうして表現出来ますか？

（❖これは私にはできないのであって、上手な人ならばできるだろう。私はある時期から翻訳がいやになってもう大分前に全然やめてしまった。）

アメリカのヒルビリーなんかにもちょっと共通するかも知れないトボケた味がありますが、へたすると饒舌になるだけで、まるきり持ち味が出ないでしょう。昔からのをいろいろ読んでみると、やはりずいぶん上達なさったな、と思います。昔のは饒舌すぎますゾ。『輝ける闇』や『夏の闇』は上手に間引きが出来ていて、風通しがよくなっているのです。これからも風通しをかんがえて書いて下さい。

何回も書き直しをなさっている由。その辛さを御同情申し上げます。私は作家でなくてほんとうによかった！なんて負け惜しみ。この頃はガマンしなくちゃならないことばかり多いので負け惜しみを言って暮らしています。

では又。乱筆乱文、いつものことですがお許し下さいませ。

セシリア淑子

=====

1974、6月6日 (開高健氏より)

- ◎ ごぶさたしました。
- ◎ 目下私は群馬県の日光寄りの山のなかにある旅館で一人で暮しています。野立看板もないし、ネオン也没有せん。朝と夕方には鳥が夕立でも降るように鳴きしきります。私は小さな部屋で寝たり起きたりしながら鬼火のように明滅する自我や回想を眺めて修行にはげんでいるのであります。
- ◎ 新潮社クラブ宛てのお手紙は拝見しました。御主人はまずまずとのこと。何よりでした。何しろむつかしい病気ですから第三者としては慰めも励ましも無力で、コトバが浮いてしまい、うかつなことはいえないという配慮ばかりがさきにたってしまいます。けれど、人間はいろいろと不思議をかくした動物ですから気力一つでどうにでもなるということがよく起ります。御主人のまえでは笑顔しか見せないこと。ジョークやユーモアに精力をつぎこみ、自分でも演技だか本態だかわからないというところまで持って行く事。家をでるとき帰ってくるとき、一秒の隙もなく輝いていること。大きな声で笑うこと。
- ◎ 6月3日の『ニューズウィーク』の国際版に『夏の闇』の書評がでています。ずいぶんたくさん書評がでたので、いずれそのうち記念にコピーをとってアルバムにデモしてそちらへ送りましょう。
- ◎ 前便の手紙で全作品集のなかから適当なのを選んで訳してみたいとのことでしたが、白紙委任状をお渡しします。何でも、どのようにでも、あなたがいいと思う方法で料理して、どこへでも出して下さい。私としてははずかしさがばかりがこみあげてくるので何もかもおまかせする次第です。
- ◎ 新作は二進も三進もいかなくなつて戦術的迂回です。一昨年この宿に一ヶ月ほどゴロゴロしていたことがあるのでやってきたわけです。六月の終りには東京へもどっています。だからこの手紙のアドレスは東京にしておきました。

C.S. シーグル様

ごぞんじ

=====

1974年6月18日

開高様、

お手紙拝受いたしました。Express にして下さったのはどういうわけかわかりませんが、それを配達人がいつものように郵便箱へ入れる替わりにアパートの管理オフィスへもって行きましたので、いつもより受け取るのがおくれました。此方の郵便システムは非常にみだれていて、速達なんぞというと特におそくなるようです。根性がねじまがっているみたいなのです。日本の急行がかえって鈍行であった時代のごとく、絶対にアテにならないものだとは御承知ください。市内配達が一週間もかかったりすることたまにはあります。そうなるともう古新聞を読む楽しみか、昔の忘れていた手紙を読み返すようなものです。

第九巻の「岸辺の祭り」がとても好きだったので翻訳にかかり、たちまち雑用に追われてしばらく手を休めています。読後感がとてもスカッとして、戦争だし、あなたのおとくいの汚い臭のお話なのに明るくてさわやかな感じ（何だかレモン清涼飲料の広告みたいになりましたね）です。

九巻ではやはり『夏の闇』が圧巻ですけれど、「決闘」もいいと思いました。その後読んだのは、一週間くらい前にいただいた第六巻の「お化けたち」「森と骨と人達」。など。「笑われた」にとっても感動させられました。それは私がはなはだアテにならない批評家であって、何の小説よりも毎巻の「頁の背後」というのに非常に動かされ、全部揃ったら翻訳したいと思っていることと通じます。事実にはぶつかる（或は事実らしく真に迫ったことにぶつかる）一も二もなく感激してしまうという単純さがあるからです。「笑われた」で、牧羊子さんらしい人物の賢さ、強さ、おおらかさに全く魅せられてしまいました。『夏の闇』の女性の会話のはしばしに似た所も感じられますけれど、Mlle 夏の闇は哀れさ、弱さがあるのに、Mme 笑われたはハツラツとして、木星のようにどっしりし、金星のようにきらめき、水星のように落ち着きはらっているの、私、一も二もなくです。好きなのを少しずつやってみましょう。ストじいから次の編集長の名前と後をよろしくたのむというような手紙が来て、すぐに短編を訳したい由を書いたのですが、すでに田舎へ行っていて（引き払っていて）秘書のシンシアがていねいな手紙をよこし、手紙を回送したむねと私の手紙のコピーを後継者のエリオット氏にも上げた旨を行って来ました。それきりです。

先日ペンシルバニア大学で同窓生週間というのがあり、一週間日本についていろんな講義が有りましたが、私もヘンな同窓のよしみで、日本文学についてしゃべってくれないかと云われ、一時間半で1350年間の文学史をしゃべりました。これはこのごろはやりの団体旅行が10日で35カ国見物するのより難事でありますぞ。それで大飛ばしにとばし、そのために事前にとっても簡潔ながら要をついた Bibliography を渡しました。その現代の最後を飾るのが誰あらん、開高健なのであります。それですこし宣伝をしておきました。

そうして今日 Japan Society of Philadelphia という（New York の Japan Soc.の支部みたいなもの）を今度作るかも知れないとか言うので、20人ばかりの日本愛好家の会議があり、そのランチの時横に座ったアメリカ・スバルの社長という人物にも宣伝しておきました。彼は幸い New York Times の書評を読んでいなかったもので、大喜びであなたのお名前と Darkness 云々を書き留めてもって行きました。

私の主人の従姉が又電話をよこして、開高さんは才能が有る。目の付け所、感覚、行き届いた計算した書きぶりもいい、らぶしいんもいい、と云いました。はっきり言ってるからいいと。おどろいた。65くらいのおばあさんですよ。私のほんやくを又口をきわめて褒めてくれました。だってね、クノッフの専門家が手を入れてくれたんですもの、うまいわけですよ。彼女は私や、他の素人の感心した最後の場面を“最後だけはちょっとがっかりしたわね。あまり月並みすぎて”と言ったので又驚きました。やはり専門の作家—編集者は違うのかなと思いました。でも買って読むのは私どもみたいな一般読者ですからね。日本的感情家の一番代表的なのが感心すれば、アメリカの純真な読者も感激するはずです。

主人の健康は先週はすごく調子がよく、4回も夜外出して食事することが出来ました。気分のいい中に少しは冒険しなくちゃ駄目だ、などと言って。その前の週は今にも死ぬかと思うほど衰弱して、私は泣きの涙でしたのに（私は芝居が下手だから悲しいときに大声で笑えと云われても笑えないんです。）今週は昨日と今日、あまりよくありませんが、ちゃんと外出したから大丈夫です。オフィスへ行く元気がある間はますますです。私も主人もこの六ヶ月で十才くらい老けたような気がします。

御新作、無理押しをなさらないで、しばらく鳥の声や山の旅館のことをお書きになったらどうかしら。無理押しをなさるとそれが作品に出ますよ。生意気を言うようですけど、無理をなさってるところは途端にわかって、途端に面白くなくなってしまいます。しばらくごろごろして題材の転換をして小品をお書きになってるうちにひょこりと大物が出てこないかしら。

よく陶器を作ってる人がろくろをぐるぐるまわして何回も何回も形を変え、最後に思いがけない形（といっても奇抜だという意味でなく、始と違ってるというだけの意味）のものを竈に入れてるようですけど、小説もそんなものじゃないかしら。だけどろくろでブンブンやるわけにはいかないし、いちいち一字ずつ手でハコを埋めていくのだからなんとも御苦勞な作業だと思います。私はもうこの頃は日本字はますます下手になり、ますます字を忘れ、といって英語も完璧でなく、書くのがめんどろになるばかりです。「そんな気がしますけれど」と書いてるつもりで「そんな木がしますけれど」なんて平気で書いたりするのだから驚いてしまいます。音が同じだとなんでもいい当て字になるのです、考えないで書いてる時。

いつか島崎藤村について論文を書いて川副国基教授にみてもらったら「だいぶ誤字があります。字引を手許において調べてお書きなさい」なんて言われました。誤字どころか

形にならない字を書いて自分でも、これなんだっけなんて言う始末。モーロクしたくないものですなあ。

「太った」の中の太ったオッサンがハロルドをとっちめてだまってしまう所、全く同感です。やっぱりあかんなあー なのです。南京のこと満州のことなど言われると一言もありません。でも私達戦争を少しでも知ってる時代でよかったと思います。少しも知らない連中、全く自分の刹那刹那しか考えない無責任で浅はかな若者を見ると腹がたつより情けなく、情けないより腹が立つのでイヤになります。そんなヤツの一人が今ペン大で博士号をとりつつ有るのですが、姪を引っ掛けていいようにしてるので、私は気が顛倒しながらも忠告——というより私の意見はいうけれど、一言も叱言はしないでいます。自分ながら聖人みたいに寛大なのです。内心ではそいつを野球バットでブンなぐってやりたいんだけど、そんなことをしても姪が首ったけでいる間は駄目。彼女が痛い目にあって、自分で目をさますまで他人には何もできません。あなたの奥様にどうすればいいかわかおうかしら。全く私は自分の子供をもたなくてよかった。ではごきげんよう、又書きます。

セシリア淑子

=====

1974年、6月末か7月始め？（開高氏の手紙）日付なし

本を二冊送りました。一冊は対談集、一冊は妙なもの。これは一昨年とてもお金にこまったときにセッパつまって書いたものです。戯作ですが全篇ことごとく食談だというユニークさがあります。

けれど二冊とも私の本願の道のものではありませんから、わざとサインは避けてました。昼寝の枕にでもしてください。

やっと山から下りて来て、あなたの手紙を読むのはたのしかったけれど、仕事は止まったきりです。おそらく九月頃から再開することになるでしょう。今日はボヤクのをやめます。

お手紙で「岸辺の祭り」をホメて頂いて嬉しかったのですが、「兵士の報酬」というのもちょっといいのではありませんか？

新潮社だけではなく、いろいろ友人があなたの名をおぼえて、私にたずねるようになりました。知る人ぞ知るです。自信をもって仕事をして頂きたいです。“シャープだ。勤勉。すごく勤勉だ。ビーヴァーだ” といって前置きしてから解説・紹介・宣伝することにしています。“ビーヴァー” というのは的中しているとおもいませんか？

今日はこれだけ。

御主人は今日のぐあいはどうですか。

シーグル様

リップ・ヴァン・ウィンクル

=====

1974年7月7日

開高様、

質問箇所をただす為に書こうと思っていた矢先、あなたのお手紙が舞い込みましたので、行き違いにならずにすみしました。山から御帰宅なさいましたそうで、暑いのに御苦労様。さっきこの紙の上に日付を書きましたら、今日は七夕だと気がつきました。この頃では日本の七夕も大々的にコマーシャルになってしまって昔の情緒はないそうですね。昔のことを思い出したら色々なつかしい思い出も沸き上がりますけれど、ここでセンチメンタルになっていては日が暮れてしまいますので先へ進みます。

御本を送って下さいますそうでいつもおそれいます。此方からもお送りするようなものが有るといいのですが、自分のものはなし、何を差し上げたらお気に召すかわかりません。何か御注文はありませんか？

「兵士の報酬」という作品はまだ拝見しておりません。配本予告によりますと第八巻に入っていてそれは既刊だそうですけれど、まだ頂いておりません。多分今太平洋上を動きつつあるのでしょう。

さて、キンベンですからまず質問にかかります。下記の事項をお答え頂きたいのです。もちろん全部「岸辺の祭り」からです。

- ◎ 1。久瀬：クゼ、Kuze でよろしいのですか？ クセではないでしょう？日本の姓名というのは実に気まぐれで、この頃は特によみ方のわからないのが多くなりました。以前にこうだと思っていたものがまるきり違った読み方で出ているからです。一番簡単に平凡な中島、山崎などでも、ナカシマ、ナカジマ、ヤマサキ、ヤマザキというのはローマ字で書けばちがいますからね。
- ◎ 2。P. 23（全集第九巻の）
 チュドー通り：Spelling?
 Café ブロダール：Spelling？これや、次の二三はフランス語ですが、思い当たりませんので。

ブラッサンス：Spelling？私はフランスの流行歌を知らないのです。

Café ジュヴェール：Spelling？

グウエン・フェ大通り：Spelling？

◎ 3。 P.25

ドンナイ川：Spelling？

ショロンはCholon, 『夏の闇』と同じですね？

4. レロイ大通り：Spelling？これはフランス語の Le Roi ではないでしょう？
ベトナム語ですか？

キョン：Spelling？この可愛い動物そっくりなのをアフリカで見ました。デイクデイクというもの、私もこんなひ弱な動物がジャングルでよく生きながらえるものだと驚嘆しました。驚などがひょいとさらって高みから落っことして殺して食べるのだそうです。同じような動物かしら。

◎ 5。 P.29

同慶も『夏の闇』とおなじで Don Kan でしょう？
コンガイ：Spelling？

◎ 6。 P.32

コカはCoka?? それともコカコーラのCocaですか？
セギ：Spelling？これは飲み物？それともCigaretteのことかしら？

◎ 7。 P.40

南無阿弥陀仏のベトナム読みのSpelling？これはいい加減でよろしいでしょうか？
ちゃんとスペルがきまっていますか？

◎ 8。 P.41

トッケー：この名はよく聞きますので動物辞典を見れば有ると思いますが、手元にございませので、Sp がすぐわかればお教えてください。Tockay ですか？

[❖こんな質問を今見るとイライラする。簡単にグーグルで調べられるものばかりだからである。昔といってもそれほど月日はたっていないのに。時代の変わりようが激しく信じられないくらいである。]

◎ 9。 P.43

チュム：Chum? Chum だと英語のチャムと同じスペルだからちょっと混同するかもしれませんね。他に何か...?

◎ 10、P.47

ダダオデイクオックミイ！これは打倒帝国美でしょう？中国語と似てるじゃありませんか。美の位置がちがうだけで。Da dao di Kuok mi! ですか？

◎ 11。P.51

バストス：Spelling?アーヴィン風に言うと「このたばこきいたことないよ」

ああそうそう、アーヴィンは Irving ですか？

◎ 12。それから Charlie っていうのはベトコンさんのことだけかと思ったらどちらのベトナム人にも使ってあるようですね？そういう、右か左かわからないまぎらわしい所があるのですか？ 区別があるのですか？

◎ 13。P.53

バサック：Spelling?これは地図には出てるかも知れないけれど、聞く方が早い。香河は Ch'uan だったら川で、Chiang だったら江だけれども、どちらの字もなまっているのでしょうか。Hunchiang? Jang?

クラシャン：Spelling

◎ 14。P.58：田中が胸に手をおき、眼を閉じてる所。手は一本？二本？

◎ 15。P.60

ガジュマルの木：Spelling

◎ 16。それから、川を渡った船は一艘か二艘か。つまり単数か複数か。小さい船だと書いてあるのでーそうだと沈みそうな気がする。これは私がそういうつまらないことを心配するたちだからです。

◎ 17。トランペット、ギター、マラカスは、それぞれ単数か複数かお知らせ下さい。それで大分感じが違って来る。一つずつだと船は沈まないでしょう。

こんなこと心配するのやはり私がビーヴァー 的だからかしら。

でも **Beaver** っていうの、あまり好きじゃありませんよ。その動物が嫌いだというのはなく、**Busy as a beaver** とか、**work like a beaver** とかいう表現のイメージはですね、非常に俗ですし、小さい鼻をうごめかして、その辺の木切れや葉のついた枝をめったやたらに前足で抱え込んだり口にくわえたりして、何だか目的もわからずに泳いだり、アタフタしてる動物みたいです。ただ本能で動きまわってるんですね。あら、こういつてるうちにだんだん私に似て来た。私も目的があんまりわからずにエネルギーを消耗しますから。でもアタフタはしてはいません。落ち着き払ってエネルギーの無駄遣いをしているのです。

「岸辺の祭り」の以上のことがわかればもう出来たのでタイプを打って、主人の従姉にどう思うかきいてみてから **Elliott** 氏に（**Elliott** だっけ？）コピーを送ってみようかと思っています。でもこれは短編だから、クノッフも扱いにくいでしょう。色よいお返事が有れば他のも送ってみます。

その考えが一つと、もう一つは、私はまだまだベトナム問題は今後一つの主題として蒸し返される可能性が大いにあると思うのです。何年かたって **Revival** ブームを起こす一つの研究問題です。例えば「終戦」という文学主題のように。だからベトナムを主題にして、一つの全集「アジア人の見たベトナム戦争」というのを出したらどうかとエリオット氏に聞いてみようかと思っているのです。そうしてその内にあなたの作品数個、その他、あなたの文学的レベルに達するものだけ厳選してベトナム人タイ人中国人などの作品を集めたらどうかと思うのですけれど、文学的にそのレベルのものが集まるかどうか。短編ただ一遍として **Atlantic Monthly** とか、**Harper** などに送って見るのもいいのではないかと思います。

もう一つやりたいことは、サイデンステッカーさんの **Kafū the Scribbler** という本を御存知でしょうか。永井荷風の伝記及び短編を一冊にまとめたもの。ああいう形式であなたの生涯（まだピンピン生きていらっしゃるのに失礼！）と作品を紹介出来たらと思うのですけれど、それにはうんと時間がかかるので、何か **Grant** みたいなものが取れて一年でも二年でもかけて書くといいのですけれど、**Grant** というものは奨学金の高級なもののように、科学者にはよく出ますけれど文学のためならよほどの功績の有る人でないと……という印象を持ちます。**Guggenheim** でも私がもっと本でも出してれば願書が出せますけれど、今の状態ではなかなか。でもこれを一つの目標として下地を少しずつ用意したり、短編を訳したりしてみようと思います。あなたの問題意識、あなたの非常に切実な戦後の生活、イスラエルやアウシュヴィッツ、ベトナムなど、何かこと有れば何もかもおっ放り出して飛んで行く、よくいえば体当たり主義、**s'engerger** のスピリット、悪く言えばオッチョコチョイぶり、そして世界の駆け歩き、食べ歩き、釣り歩き、ことごとく非常に面白いと思うのです。山之口獏という人の詩に、

「かやうに私は面白い男であると私も思うのです。面白い男と面白く暮らしたくなって私ををっとなににしたいかってせんちめんたるになっている女はそこらにいませんか。さっさと来てくれませんか女よ」

というとてもつまらない詩があるそうですが、あなたも「かように面白い男であると僕はおもうのですが」と一つ世界中に発表したらどうでしょう。実は **Newsweek** の記事をまだ見ていないのです。ニューススタンドで買おうと思ってるうちにあっという間になくなってしまって、その中図書館へ行って探します。その中でもうそういう風に宣伝してあるかもしれませんね。

では又。主人は少し落ち着いています。でも弱ってるので私はどこへも行けず、お買物にも何ヶ月も行っていない始末。

ごきげんよう

Cecilia 淑子

=====

1974年、7月か8月（開高氏から）

返事がたいへん遅れました。

あれから私は山をおりて一度トーキョーにもどり、イワナを釣りにやる八甲田山深くわけ入りましたが一匹も釣れず、ついで下北半島の太平洋側へ転戦してスズキを狙ったけれどこれまた釣れず。ついで青森へでて奥羽本線にのり、酒田市へいき、最上川の河口でスズキを狙ったけれどまたまたダメ。

それぞれ釣り荒らされて場荒れしてるとか、冷水塊が沖にすわったままなので例年より季節がおくれてるとか、狂ってるとか、七・八月より九・十月のほうがいいんだとか。いろいろのことをいってその土地その土地でなぐさめられましたけれど、いずれにしてもエイハブ船長はむなしく空間衝動を抱いたまま、なつかしの文学カンゴクへかえってきたという次第。

お問い合わせの件、同封してお送りします。

それから短編集、ニューズウィークの書評、「兵士の報酬」の入った全作品一冊、航空便で新潮社から送ってもらいました。短編の訳は前回申上げたようにいっさいおまかせいたします。ガンバって下さい。わからないところは何でも聞いて下さい。

御主人のくあいはどうですか？

C. S. シーグル様

エイハブ船長

=====

私の、1974年7月7日の質問に対する開高氏の返事

1. 昔私はフランス語の **Que-sais-je**（私は何を知っているのだろうか？）をもじって久瀬樹というペンネームを使って小遣いかせぎの短文を書いていたことが有ります。

それを思いだしてこの作品で使ってみたのです。他意はありません。だからクセです。

2. チュドーは **Tu Do** (自由)です。
「ブロダール」と「ジェヴェール」二つともキャフェの名ですが、正確な綴りが思いだせませんから、勝手に作りましょう。キャフェの名だからかまいませんでしょう。一軒は **Café Chien** (犬)、もう一軒は **Café chez-Nous** (我が家)としておきます。ブラッサンスは **Brassans** です。
3. ドンナイは **Don Nai**. ショロンは **Cholon**.
4. レロイは **Le Loi**. **V** 語. 昔の **V** 国の英雄の名。キョンはあなたが見たアフリカのデイクデイクとおそらくおなじ動物です。“キョン”のつづりは知りません。デイクデイクでいいのでは。
5. ドンカン is **Don Kan**. コンガイ (**congai**)は娘. 女の子カワイコちゃん。
6. コカは **Coca**. セギはジュース。 **Segui**
7. ナムアミダブツはナア・モオ・アア・ミー・ダー・ファット. **V** 語のつづりは **Na Mo Aa Mi Da Phat**.
8. トッカーはおそらく **Tockay** でしょうが、“小さなトカゲ”とやっていいのでは。
9. チュムは **V** 国の焼酎です。ドブロクを蒸溜した密造酒。だから **Moon shine of rice wine** となるのかしら。
10. ダ・ダオ・デイ・クオック・ミーはお説の通り打倒帝国美。 **Da Dao Di Quoc My**
V 語は南方中国語の一分派なので、漢字に直せる言葉が多い。発音だけがちがう。
.
11. バストスは **Bastos**. アーヴィンは **Irvine**.
12. チャーリー。二種類ある。ふつうチャーリーというとアメリカ兵のことですが、アメリカ兵がヴェトコンさんのことを。 **VC** を、 **Victor Charlie** と呼ぶことがあった。バーでアメリカ兵がコンガイにオゴってやらないと，“ユーチープチャーリーナンバーテン！ (“**Numbah Ten!**")”といわれた。作品に出て来ます。ツヅりはこうして下さい。
13. バサックは **Basac**.
香河をフンジャンと呼ぶのは華僑ではなかったか。現地の **V** 人は **Ta Trach** と呼んでいたような気がする。アメリカ人のなかには語義通り **Perfume River** と呼ぶ習

わしがあった。これのほうを通じやすいかもしれません。クラシアンはフランス語 crachin.ジトジト降るこぬか雨。

1 4。手は二つらしい。

1 5。ガジュマル。Banyan Tree.

1 6。一そう以上でしょう。

1 7。楽器はそれぞれ単数であるような気がします。

=====

1 9 7 4 年 8 月 末

エイハブ船長様、

ヴァーモントへ二週間足らず行っておりまして、一昨晚帰って参りました。その出発寸前に受け取った速達のお手紙と「兵士の報酬」の入った第八巻を持って行き、お返事を書こうと思っていたのですが、山にあてられて手紙なぞ書く気がしなかったの、そのまま帰って参りました。質問に一つ一つお答え下さってありがとうございます。

『新しい天体』と『午後の愉しみ』が留守中に来ていたのですぐ両方読ませていただきました。まず始めに読んだのから順を追って申し上げますと、『新しい天体』は仮説の人物と官庁という仮構がかえって効果を妨げている他はたのしく読ませていただきました。架空の人物と背景（官庁で予算をふくらませる仕組はよく知られているので意図なされた所はよくわかるのですが）なしに開高氏の経験としてずばりとお書きになった方がよかったかと存じます。でも開高さんはいつもながら食物の描写がお上手で、食物に興味のない私まで食欲をそそられて、今度帰ったらぜひ行ってみたいと思う所ばかりです。でも『夏の闇』の食物の印象があまりにも鮮烈なので何が一番おいしそうかという、やはりパリの臓物の煮込みを思い出してしまうのです。あのヒロインの言い草じゃありませんが、たしかにあなたのお供をして行けばおいしい物に喰いはぐれるという事はないらしい程の食通でいらっしゃるね。

対談集はこれはもうあんまり面白いので圧倒され、しかも、読み進むに連れて更に面白くなり、最後の渡辺一夫氏あたりになるともうおしまいになるのが悲しい位でした。開高氏、あなたは何たるたくみな座談家である事よ。二年前の冬にお会いした時私がロクにお話も出来ない愚鈍で無知な人間であった（今でもまだそうですが）事を今にして惜しみました。あの場合相手がツーといえはカーと受けるような人間ならばあなたはいく

らでも面白い話題を展開なさった事でしょうね。何でも合の手というものは大切に、いかな博識饒舌の開高氏でも、落語家じゃあるまいし、ひとりで飲んでしゃべるのは面白くないでしょうからね。それにしても氏は博覧強記でいらっしゃる。あなたのように何でも読み、何でも覚えていて何の話題についてもいっぱししゃべれる（しかもたいそう面白い）という方は作家としては稀少では有りませんか。対談のお相手の方もそれぞれ博学で感心しましたが、たいそう筆が立ってしかも話術がたくみというのは両刀使いのようなもので、どちらも出来ない人間にとって羨ましい限りです。こうやって開高氏の色んな知らなかった面をだんだん拝見して、おおいに後悔してこれからはあまり生意気なことは言わないことにします。

ヴァーモントへ行ってる間にニクソンの引退演説をテレビできいて少しせいせいしました。けれど最後まで何という偽善者だろうと驚嘆にたえません。

山の中に写真の学校があって、そこの講習に休暇かたがた行ったのです。35人くらいの男女の写真天狗が集まって（私はもとより下手ですが）特大級の sea lion (トドというんでしょうか、せいうちでしょうか)が年を取ってよごれた象みたいになった感じの老先生の講義を聴きました。その人は腰骨をはずしたとかで polio の子供が使うような松葉杖でヨタヨタ歩く後から、まん丸い奥さんが丸椅子をかかえて走り回って座らせたりドライブしたり、そんなハンデキャップにもかかわらず、意気軒昂たるものでした。彼らよりも十才以上も若い私の主人が、講義さえ疲れて聞ききれない様子なので、つらく思いました。写真は私よりも主人が興味を持って行きたがったのに、結局何かを得て帰って来たのは私の方で、彼は講義に出ないでホテルで寝て居る事が多く、野外実習にはもちろん全然出ませんでした。

肝臓のガンは外見でもわかるくらい肥大していますが、でもまだ床についたきりではないので慰められます。けれどそれが慰められるべきものかどうか。問題は彼がどう感じているかにかかっているのですけれど、あのおしゃべりだった人が何も言わないでじっとしているのを痛ましく思うばかりです。

乱筆乱文ごめん下さいませ。では又。

セシリア淑子

PS: 今ちょっと思い出したので付け加えますが、昨日のニューヨークタイムス日曜版の付録雑誌にアメリカの食べ物がいかにまずいかという記事。ミシェランの編集者に英国のレストラン番付を作らせたところ、三つ星も二つ星もなく、一つ星がちょろちょろとあったきりなので、物議をかもしたけれど、アメリカも三つ星どころか二つ星もおぼつかないと書いてありました。全くアメリカの食事はまずくて（英国よりはましだと思いますけれど）ちょっと美味しいのはフランス料理、しかも純粋のじゃないのです。結局、安くてわりにおいしいのは支那料理くらいという事になるそうですが、開高さんの御本にも書いてあったように、材料を吟味する事がまず大切で、フランスの三つ星のレストランのシェフなぞ、トマト一つ探すにもフランス中歩き回るのだと書いてありまし

た。何しろミシェランはフランスの外の三つ星はブラッセルズのヴィラ・ロレインだけという点の辛さです。私たちはフランスでは三つ星のレストランへ行った事が有るけれど、ブラッセルズではヴィラ・ロレインで予約が取れなくて一半年くらい前に予約しないとダメだそうで一つ星のところへ行きました。それでも結構美味しかったけど、しょっちゅう味痴の作ったものばかりたべてるので私の舌がほんとに味ツンボになってそれで食物に興味がなくなったのです。ミシェランの editor は日本のお店をどう評価してるんでしょうか。東京のマキシムなんての、全然ニセモノだと云っていませんか？

=====

1974年、9月25日

開高様、

同封の手紙をエリオット氏に「岸辺の祭り」と一緒に送ります（明日の朝）。主人の従姉妹（『夏の闇』をほめてくれた本職の作家）が「岸辺の祭り」もとても褒めてくれました。今までベトナムの事はちっとも実情がわからなかったけれど、これを読んでスッカリわかったような気がする。描写がとても生きてるし、まるで眼に見えるようだ。プロットの中のアイロニーもとても良くきいている。感激した、と云いましたよ。私もこの作品がとても好きなのです。「兵士の報酬」もいいけれど、これを先に読んだので、この方が印象が強い。

翻訳してるといろんな事が見えて来て、構成があまり symmetrical なのがちょっと気になりましたけれど（死体の山、ボート、ceasefire, ボート、死体の山。そうして田中がいつも知らせに来る。まるでギリシャ劇の messenger みたいに）さらさらと読んでるとこれは気がつかないものなのです。だから読者は感心して読むでしょう。

主人はもうダメです。私は毎日泣きの涙で、しかも彼のオフィスを彼の雇用人として働いていた若い歯医者に二足三文で売らなければならなくなったことを悲しんでいます。私はお金はどうでもいいけれど、長い間彼があれほど良心的に最善をつくして quality 一本槍で打ち立てて来た功績をチンピラの商業主義の人にとられてしまうのが悔しくて泣いているのです。それで仕事を家に持って来て少しやっていますけれど、その片手間に翻訳なんかするのは慰めになります。

彼はすっかり弱って一ヶ月あまり寝たきりですが、病院へ行くのは拒みます。無理も有りません。死にに行くのと同じですもの。アメリカの病院は健康な人でも病気になるほどそっけないのです。

では又。エリオット氏がうまく反応してくれるといいですね。

Cecilia 瀬川 Seigle

=====

1974年九月末（私の9・25の手紙への返事）開高氏より：

ずっと新潮社クラブで過ごしていたのですが，“戦術的後退”でちょっと自宅へもどってきたところです。そのためお手紙が回送されるのに手間どり、少し遅れて自宅で入手しました。

「岸辺の祭り」のホンヤク御苦労さまでした。エリオット氏からいい返事がくることを祈っています。エリオット氏宛の英文のお手紙を読んで『青い月曜日』もスイセンして頂いていることを知り、うれしく存じました。両方ともうまくいくといいんですが。ロシア語版の『青い月曜日』がモスコオで出版されて、もうそろそろ送られてきていい頃なのですが、何しろあの国はああいう国なので一オカシな表現ですガーセについて始まらない。ジッと待つしかありません。けれど、おくられてきたら、さっそくそちらへ一部送りましょう。それをエリオット氏に送ったら何かの参考になるかもしれません。

ニューヨークにはロシア語の自由な文学理解者は沢山いるでしょうし、クノップの関係にだって一人ぐらいいはいるでしょうからエリオット氏を傾かせるのに何かの役にたつかもしれません。

何もあなたにして上げられないので、またお茶とヨーカンでもお送りすることにしましょう。御主人が日本茶をお好きなら、いれてあげて下さい。頑張ってください。陳腐な月並文句しか今日は出て来ません。何か送ってほしいものはありますか。何でもいって下さい。遠慮は無用です。

C. S. シーグル様

ごぞんじ

=====

1974年11月11日（開高氏より）

前便のあとでしばらく便りがないので心配しています。

前便の後半に御主人のことを“あきらめている”ということばが見られたので、またしてもわらわれるかもしれないけれど、ほかにもっといい考えも浮かばなかったものですから、お茶とヨーカンを航空で送りました。

無事につきましたか？

前回もお茶とヨーカン。あなたにムダ使いをするといってお叱言の手紙をもらったことをよくおぼえています、コリもしないでおなじことをしたわけです。男って無器用なもんですよ。

御主人の具合はどうですか？

今日はちょっと用件です。

手短にすませます。

中世以来の伝統として毎年フランクフルトで“ブッフメッセ”といって年に一度世界中の出版社が集まって本の市場を開きます。そこで各社の新刊のデモンストレーションや情報の交換をやり、ときには最終日のパーティに余興としてポルノ映画を上映したりすることもあるそうです。

マ、それはどうでもよろしいが。

新潮社は毎年このブッフメッセに参加することになっていて今年も沼田氏という人がいきました。この人は私の係りの人ですが、毎年でかけます。新潮社内では海外部長ということになりますか。彼はフランクフルトのあと、あちらこちらと回り歩き、ニューヨークへ行ってクノップ社のエリオット氏と会った。エ氏はストラウス海坊主氏の後任の人物でライフ社出身らしく先任者の文学業績を継承するものの自身の趣味としてはルポや歴史や伝記といったものの出版により多くの興味が有るらしいと観察されたという。しかし「岸辺の祭り」と『青い月曜日』の出版については積極的に目下検討中だと答えたという。エリオット氏宛のあなたの手紙のコピーは沼田氏が羽田をたったあとで私のところについたので沼田氏とこの件につきあらかじめ打ち合わせができなかったのは残念です。

クノップであなたの提案をどう消化してくれるか。その後のことはわかっていないので、ただグッドアンサーを待つとしかいいようがないのですけれど、沼田はパリでガリマール社やストック者の編集者とも会い、両者とも現代日本文学に積極的な関心を濃くしましたという。とくにガリマール社は高級な雑誌 n.r.f.

(❖ *la Nouvelle Revue Française*) を持っているので開高氏の短編を検討した上でそれに発表したい。とりあえず英文訳のコピーを見せてくれないかとたのんだそうです。

もしお手元に「岸辺の祭り」の英訳のコピーがあればさらにそれからコピーを取って一部送っていただけませんか。こういうことは私のエージェントであるオリオンプレスや新潮社から直接あなたに申し込まなければいけない筋合いのものであるように思うのですが、とりあえず私がお願いの手紙を書くことになりました。

『青い月曜日』のロシア語訳はモスクーのプログレス出版社の B. V. ラスキンの手で完成したのですが、この人は今年六ヶ月、東京に休暇として来ていました。私はウオトカやジンを何本となくいっしょに飲んで女論や文学論を交換したのですが、モスクーに帰ったらすぐにロシア語の『青い月曜日』を10冊送ってくれるようにとの約束を取り付けました。東京にそれが着いたら一冊をあなたに、一冊をエリオット氏に注釈付で送ることにします。ラスキンは英語がわかるのであなたの訳の『夏の闇』を送ったところひどく感動したのですが、内容の一部のためにモスクーでは完訳本がだせないといって悲しんでもいました。これはポーランドでもチェコでも同様です。私はあなたの訳本をモスクー、プラハ、ワルシャワ、パリ、ロンドン、それぞれの私の友人の日本文学研究家に送ったのです。この人たちはみんな日本語と英語ができるので『夏の闇』を二度読んだことになるわけです。みんな絶賛の手紙をくれましたが社会主義国の人たちはいづもかなしく抑制的です。毎度のこととはいいいながらちょっと怒りたくなくてもきます。

いつまでおなじ愚をつづけていくのでしょうか？

用件というのはそういうことです。

「岸辺の祭り」のコピーがつくのを待ちます。

いつもと同じようにいそいで書きました。

もう一度かさねますが、御主人様は？

C. S. シーグル様

ごぞんじ

=====

1974年11月14日

開高様、

お手紙頂きました。この前のお手紙の後、ヨーカンとお茶を送ると書いてあったので慌てて送らないでほしいと手紙を書いたのです。そうしたらその翌日手紙を出そうと思って階下へ行ってみると、ドシンと重いものがもう来てたので絶望して出すのをやめにしたのです。その後絶望することばかり。

何からお話していいか、まず主人を亡くしました。10月24日深夜、大学病院で、これはもう覚悟をしたことながら、あまりにもあっけなくて、かわいそうで、情けなくて、私は近年他人のお葬式でよく泣きましたけれど、それはただただ夫の死の予感であったとしか思えません。

開高さんに、主人に会っていただけなかったのがとても残念です。それはそれはいい人でした。毎日方々から山のようなお悔やみ状、彼のためにガン研に献金して下さった方達の名前を知らせる通知状があとからあとから参ります。私はこれほどまで他人に愛されていた人なのかと今にして有難く、十一年いっしょに幸福に暮らせたことを感謝しています。世間なみにいう「偉い人」いわゆる名士じゃなかったけれど、私や友人や彼の患者にとっては欠点だらけの偉人であったわけです。

11月17日に **Memorial Service** をします。追悼会です。これは教会がいっぱいになること請け合いです。遺体は本人の希望でごく少人数に来ていただいて美しい公園のような火葬場で荼毗にふしました。それで12月19日にこちらを発って、日本へ遺骨の一部を持って参ります（こちらでは勿論灰と云いますね。真っ白になるのだそうです）東京に何日か滞在するかまだ決めていませんけれど、山口市のお墓へ持って参ります。瀬川家のです。私がこちらで亡くなってもあちらで亡くなってもいいように。

1月8日にまた日本を発ちます。東京にいる間にお目にかかれますか？
他にも沢山のあいたい人が有るので、早めに御予定をうかがいたい。

クノッフ者のエリオット氏からは同封のつれない手紙が来ました。この人はとても冷たい人だと判断します。海坊主はいくら私悪口いってもあたたかいところのある人でしたよ。お手紙もとても **friendly** だったのです。私はこの手紙を見て、何と冷ややかな、文学のわかりそうにない人だと思いましたけれど、その直感あたりましたね。クノッフもとんだ人をやとったものだ。

でもあきらめませんよ。「岸辺の祭り」を気持ちが落ち着き次第どこか又送ってみます。

私の訳のコピイを是ゼラックスでとってお送りします（すぐに）。ただ、私の訳から仏訳にされるのはイヤですよ。わたしは開高さんのためただ働きをするのはかまわないけれど、ガリマール専属の英語はわかるけど日本語はわからないというヤツにもうけさせるのはいやよ。ちゃんと日本語からやってもらって下さい。私は個人の為には尽すけれど、大会社（たとえば新潮社）に **exploit** されるのはいやですよ。でもガリマールはクノッフみたいに名門の会社だから、あなたの作品がそこから出るとは結構です。

それからーと、そうそう、おヨーカンとお茶、どうしてあんな重いものを航空便になさるの？奥様が何とかおっしゃらなかった？私はヨーカンなんてあまり好きじゃないと申上げたつもりですけどね。もしお送り下さるのなら、小倉屋の、思いっきり塩を吹いたカライ鹽昆布の佃煮か、柿の種がほしいとその送らなかった手紙に書いたのですよ。よくよくご記憶ください。

おヨーカンはアメリカ人の友達に半本づつ切ってあげました。残りの4分の1くらい私がいただきます。お茶は新しいうちにのまなきやならないのに、あんなに送って下さってどういうおつもり？あんな量をこなすのに私は五年くらいかかるのですよ。日本茶あまり飲まないから（あまりというより、全然）今度かえたらうんと佃煮と柿の種や入船屋の他の辛い鹽せんべいを買って来ますから、何も送らないでくださいね。これは本当にまじめにお願いしているのです。いつも送ってばかりいただいてるから頭が痛くなる。何かお酒を買って行きましょうか、空港の **Duty Free** 店で。御注文がありますか？でもコードンブルーなんていうとブチますよ。あれは **Duty Free** でもすごく高いんだそうです。ではまた。

セシリア淑子

=====

1974年、11月末（開高氏から）

ひょっとしたら.....と思ってはいたのですが。
御主人にはとうとうお目にかかる機会が有りませんでした。残念に思っています。何と申上げていいかわからないのですが、深くお悼み申し上げます。長い忍苦の看護の疲れもたいへんでしょう。

お手紙によるとずいぶんたくさんの人から遺徳を慕われていらっしゃるようです。あなたの愛の支えによることもさぞおびただしくあったことと推察します。徳弧ナラズとは外へのことも内へのことも意味している名句ですが、御主人の徳はあなたのそれでもあろうかと想像します。

東も西も人情紙風船の時代にあなたのような人に最後まで見もられて旅にでられた人はやっぱり終わりを完うした人です。

一路平安と申し上げます。

あなたの手紙がいつかのようにではなくて細部までハキハキしていたので安心しました。ずいぶん成熟なさったと思われることが有ります。失われたものはあなたにしかわかりませんが、得られたこともあって、それはいくらか私にわかるようです。立派にふるまわれました。

◎ 12月に日本へ御出でになるようですが、是非お目にかかりたいと思います。日はあなたの方で指定してください。フィラデルフィアから手紙でも。あるいは東京はついてから電話でも。

◎ 「岸辺の祭り」のコピーはフランスへ送りますけれどあなたがおっしゃるようにその英文から仏文にホンヤクすることはやめてくれと厳に申添えます。フランス側もその意志はないようです。英訳を読んだうえで日本語のわかるフランス人に訳させるといってようです。ひょっとしたらパリの東洋語学校で教授をしている J. J. オリガスあたりがやるのかもしれませんが。これは私の友人です。「兵士の報酬」を教室のテキストに使うといってきたことがあります。

こういうことは前便に書添えるのをついウツカリして私が忘れていたことです。おわびします。あなたを傷つけるようなことはいたしません。御放念を。

◎ エリオット氏のことは残念でしたが、あなたと東京で会ったときにゆっくり話しあいましょう。

◎ お土産は何もありません。気をつかわないでください。

C. S. シーグル様

ごぞんじ

=====

1975年1月10日（牧羊子さまへ）

一昨日風邪のために飛行機の上昇と下降の度に鼓膜の破れるような耳の痛みに悩まされながら帰って参りました。

昨日は熱を出して私のオフィスに顔を出し、お土産物を配ったあとは家に帰って牧様からいただいた御本を読み始めました。たいへんなご馳走にあずかったお礼を申上げる前に御作に目を通しておきたかったからです。

南園でも、貴方のお料理の御知識の豊かなのに驚かされたのですが、作品はまず年代順にと思って読み始めた「おかず咄」が面白くてやめられず、今読み終わって呆然としている所です。いくら召上がるのがお好き料理するのがお好きとは云え、その徹底的な凝り様、その熱意と努力は、とても凡人の及ばざる所です。

今迄牧様は詩をお書きになり、文をお書きになり、非常な才女でしかも知的美人でいらっしゃる事を雑誌その他で漠然と存じ上げておりました。それに開高様の作品中、判然と自伝風なものの中に出て来るすばらしく明るく、かしこく強い女性に強く惹かれ、一度でもお目にかかりたいものだと思って、年の暮に開高氏が再度河豚料理に御同伴くださり、もう一度どこかへ連れて行ってあげようとおっしゃったとき、もう御馳走はたくさんなので、奥様にぜひお目もじしたいと申し出たわけでした。お目にかかりたいなどとはおこがましく、私などお話もできない高みにいらっしゃる方なのだと今にして恥じております。わざわざ場所を選び、材料を、メニューをえらびして美味しい中華料理でおもてなし下さったお志、本当に勿体なくかたじけなく存じます。心から御礼申し上げます。そのお料理のあと、「おかず咄」をよませていただく事はまことに感銘深うございました。人間は何にせよこれだけの努力をつまなければ本当じゃないんだと自分の不勉強が恥ずかしく情けなく、鞭うたれる思いでした。それは勿論料理のこのみであるとは思っていません。何にせよ好きな道は徹底的につきとめるという態度が自分に欠けている事を思い知らされたのです。

思いやり一つでさえ、あれほど愛していると自分でも思い、公言してはばからなかった主人の食物も、いくら私に料理の心得がなく、主人は不平を言う人でなかった、と言っても余りにもなおざりにしすぎたと後悔にかられています。私の作るものを気に入ればおいしいといって食べてくれ、気に入らなければ何も言わずにいた人の事を考えると涙が先立ちます。料理には無関心だと自分でも言い、私にもそう思わせていたけれど、本当にそうだったのかしら。それとも不満を抑えて幸福そうな顔をしていたのかしらと不安にもなります。

いずれにせよ、貴方ほどの努力を尽くしてこそ本当に妻の愛情と言えるものなので、今にして自分の怠惰が悔やまれてなりません。と言って主人を亡くした今は、一人でお料理をしてみても仕様のない事で、私としては牧様から学ぶべき事はその徹底した探究心と若々しい情熱であるべきだと存じます。

お酒も煙草もいただけない上に食物もそれほど好きでないとあつては人生が薄暗いだろうとご同情を受けそうですね。全く人生の楽しみの重要な一端が欠除しているのは人間的にも不完全なのだろうと思います。それに女のくせに子供がほしくないというのですから――きらいなのではなく赤ちゃんは大好きで可愛いのですけれど、一人前に育てる自信がないのです。

でもおいしいものの描写を読むのは大好きで、牧さまの流麗な文章のそれを読ませていただくのはほんとうにたのしかったです。しかもそれは一々材料の選び方から料理の仕方まで入っている親切なよみもので、主婦にとっては一石三鳥、教養と指導と娯楽を兼ねた稀有な書物という事になります。深い教養が抽象的なものでなく、実生活にそれほど躍如と役立ち、まがうかたない幸福の源となっているという実例を瞭然と見せつけられました。あのナマズかアンコウのように悠大にしてサメのように行動的な知識人である開高氏がしょうこりのない放浪性の奥底に帰巢本能を持ち続けていらっしゃる所以が判然とした次第です。この妻にしてこの夫あり、御立派だと思います。

開高様は言葉の魔術師ですからそれ程おいしくないものまで垂涎を催させるように描写なさるのがお得意ですが、牧様は言葉の使い方がご主人様に似ていてさにあらず、料理を堅実に、虚飾のない美しさで描写されているので、それはもうかけ値なしに美味しいものなのだという気がいたします。遠くに離れていると描写の方がかえって楽しいものです。たまに日本に帰ってなんだかんだと大騒ぎして、なつかしく覚えているものを皆食べてみても、あっけなく、却って遠くから思っている方が食物でさえロマンチックでいいと思うようになります。ユーモアがあって若々しくしかも緻密なお嬢様の絵も四季の香りゆたかな牧様の詩も、どこまでもゆきとどいた、よそよそしさのないあたたかい御本であると感じました。

たびたび御馳走になった上この御本を読んだ後で、私はもし開高氏がアメリカに現れたらどうしようかと心配しています。

が、とにかくアメリカ旅行はぜひお二方で、とお勧めしたいのです。私は自分の料理でおもてなしする事は初めから諦めていますし、それほど味覚の肥えた方を御案内するほどのレストランもございません。有名な所のお料理でも私でさえ、なんだ、と思うくらいですから、おいしいものばかり召し上がっていらっしゃる開高氏御夫妻はがっかりなさるでしょう。でもまあこんなものだという事をご紹介するために有名なところへ御案内はいたします。

奥様御同伴でいらっしゃり、私の貧しいキッチンをお使いになってでもお口にあうものをお料理しておあげになる方がいいのではないかと思います。私のアパートはダブルベッドがおいやでさえなければいつでもお二人をお泊めできます。

ちっともいい所ではないのですが、私が仕事に出かけている間お気楽にお使い下されば、と思います。お料理に一番 **basic** な道具さえないとおっしゃれば、近くの **Bon Appétit** というキッチン道具屋へ行行って買い整えますよ。材料をととのえるいいマーケットが近くから全部消滅したのは痛手ですが、レッドイング・マーケットという有名な市場もあるし、イタリアン・マーケットという汚い町のイタリー露店そこのけの雑然とした市場では泥のついた野菜やまだ眼を動かしている魚を売っています。

食物の恨みは末代までというそうですけれど、私は自分が無神経なために恨まれている方でしょう。ですから私がお料理するとかえって人を追っ払う事になりかねません。

（でも主人のお客たちは上手だと言ってよくほめてくれたのですよ）

そういう私の欠点をはっきりお断りした上で、それでも一度はこちらにお二方で来ていただきたいものと熱望しております。

新年そうそう牧羊子氏にお眼にかかる事ができたのは、悲惨であった1974年に比べて1975年はいい年になりそうだと幸先よく感じられます。今後ともよろしくご指導のほどをお願いいたします。

この手紙を終わり次第、開高氏へのお礼状はおっぴり出して（氏は新潮社クラブに閉じこもって、1日百円のお料理で艱苦に耐えていらっしゃると存じますが、奥様からよろしく御礼お伝えくださいませ）『自作自演の愉しみ』を読ませていただきます。風邪で今日は仕事を休みましたので心おきなく読書が楽しめます。ではまた。

お寒さの折から皆さまお体おいとくださいませ。

かしこ

シーグル瀬川淑子

=====

1975年、1月16日（開高氏より）

過日はいろいろと。

もうフィラデルフィアへもどって気持が落ち着きましたか？

毎日のあれこれのこまかい仕事でとりまぎれて暮らしていらっしゃいますか？

先日のあなたはよく食べていらっしゃいました。ときどき砂糖の城のようなデリカシーが覗くのですが、灯や皿や食卓の輝きにそれとなく消えて見えるのはいいことでした。

あの翌日、私はふたたびこのクラブにきました。悪夢の再開です。庭もノラ猫もすべて去年とおなじです。すし屋のおっさんは平家物語を読むのをやめました。何かわかりませんが自分で書くことをはじめたのですが、60枚でストップしたきりだそうです。ヒマがなくて、と舌うちしています。

さて。

海坊主に手紙を書きました。よたろであなたがおっしゃったように、去年のあなたのエリオット氏宛の手紙と、氏のあなたへの返事、それぞれコピーを取り、直、「岸辺の祭り」もコピーをとり、すべて同封して送ったのです。要するにストラウス王朝とエリオット王朝の空気のちがい、匂うもののちがい、匂いに敏感な私たちの不安、おっさんはえらかった、父よあなたは強かった、優しくかったということ、いろいろなことを書き、何とかかなりませんかというてみたのです。おっさんはひどいV嫌悪症ですから「岸辺

の祭り」にはアタマをふりますまいが、『青い月曜日』は何とか考えてみようというかもしれません。

全作品集はおっさんのところにも全巻送ってあるので、何巻に入っているか指定しておきました。

全作品集も終わりましたし、あとは何とか第三部を仕上げるしかありません。書きたいことがたくさんあるのにペン先へでてきたがらないのはほんとに困ったことです。ダムが満水なのにタービンが回らないようなものです。

また手紙をください。

毎度書きますがあなたの手紙はうれしいのです。

C. S. シーグル様

ごぞんじ

=====

1975年1月19日

開高様、

お手紙有難うございました。

訪日中いろいろ御馳走になっておきながら礼状も書かない不埒なヤツと思し召したでしょうが、ちゃんとスギニョーには書いてあるのですゾ。スギニョーというのは膀胱炎の事ではなく、あなたの「過ぎたる女房」である牧羊子氏の事です。

東京で昔の友達が集まってくれたとき、一人が「私たちは全くすぎたる旦那をもっているのだからノンノで『すぎ旦那の会』というのをやってるのだ」と言っていました。私の主人なんかも全く「スギダン」だったのですけれど、私は一体彼のために遠くまで買い出しに行ったり、何時間もキッチンに立って食事の用意をして上げた事があったかしら、と牧さまの「おかず咄」を読んでザンキの涙をひとしおこぼした事でした。それで私は全く「足りんによう」であり、お宅様のはすばらしい「過ぎにょー」ですから敬意を捧げなければと思い、ただちに5ページにわたる長文を書いたわけです。その中で開高氏を無視したわけではありません。敬意も謝意も表してありますからおひまの折におよみ下さい。

全く私はお宅の奥様に敬服傾倒してしまいました。家事が少しも無駄でないと言い切れるだけの事をし、その上なんといろいろな勉強をしていらっしゃる事でしょう。すばらしい詩や文は言うまでもなく、何でもなさる事が第一級という充実さですね。本当に知的に美しい女性とはこういうものかと感嘆しましたが「足りん旦那」である開高氏が何ヶ月家をおっぼり出しても必ず帰っていらっしゃるの、大本のところでびしりと尽され

ていらっしやるので、結局深い深い愛情を捧げていらっしやるのだとよくわかりました。お二方ともおえらいと思います。凡人にはできないことです。

私は最後になって東京で風邪をひいてしまい、帰りは本当に辛い思いをいたしました。飛行機の高度が変わる度に死ぬほど耳が痛いので一つまり風邪であちこちの粘膜が腫れて空気の圧力差に調節できないので一バーサーやスチュワーデスに訴えたのですが、温湿布だのアメ玉だのと非医学的なものをすすめるばかりで、別になすすべも知らないもののようでした。飛行機ではそういう客もままある筈ですのに、日本航空のサービスは悪いですね。

帰って二日ほど休み、それからあちこちから食事や演劇や映画や音楽会への招待がしょっちゅう来てるのですが、そんなに親切な友人に囲まれながら、生き甲斐がないなんて泣いてばかりいます。日本から帰ったらこうなる事はわかっていたのですが、此方は静かで落ちついたので、物思いさせる事が多いのです。

私は自己憐憫は一かけらも感じないので、主人の事を考えるとかわいそうで（という事はつまり自分がかわいそうという事かしら？）めそめそ泣き出したらきりがありません。友達に言わせると泣く方が健康にはいいというので、それもそうだと思って泣いています。小説によく趣味で泣くという人がいますが、私は趣味で眠ったり、お風呂に入ったりはしても、泣く所までは到達していません。今の所あまり生甲斐がないので、泣くとおおいに生甲斐を感じるから泣く、という所まで達したらたいしたものだと思いますが（つまり実存主義ですからね）と言ってもやはり泣くと頭痛はするし、顔も腫れぼったくなってみつともないから、出来る事なら泣かないほうがいいのです。

先夜、再度わたしはむしゃむしゃとよくいただいたようですね。牧さまの御本によると、あなたは身体中胃袋だという、みみずみたいな方らしいけれど、お見受けした所、よたろでは何も召し上がっていらっしやいませんでした。白子と鯛の頭と、それから何やらちょいちょいと。南園でも他の人以上ということはなかったでしょう？私はそこに出してあると何となく頂いてしまう、出してなければ何も食べないという風に怠け者です。この間は奥様がわざわざ材料メニューをよく吟味して下さったお料理だから、これは後学のために、と一生けんめいに片付けたのです。とても美味しかったという記憶があるので、さて何をいただいたのだっけ、と下さったメニューを出して褒賞状でも読むように捧げ持って眺めたのですが、思い出したのは北京ダックの皮（あれはいちばん美味しかった）と一番始めのジャオツの皮に包んだ豚と貝柱と、最後の非常に美しいピンクと黄色のお菓子と、それだけしか思い出せず、あとは漠然と美味しかったと思うだけです。たしか湯があったがどんなスープだったっけ、と「上湯煎粉菓」という字を一生懸命眺めて考えるのですが思い出せません。情けない客では有りませんか。セシリアには御馳走をしてやっても何の効果もないと思し召せ。これからは私に御馳走するのはおそばかお茶漬けくらいにしてお置きなさいませ。

今度の旅で牧さまの鴨の皮の次においしかったのは津和野という町の遊亀という店の山菜料理、福山のみそ漬の鯛、高山のとろろなどです。わたしはあまりこったものはわからないのです。

昨夜も友人夫妻が食事とフィラオケの音楽会（切符は私のですが）に連れて行ってくれて、何だかたくさん食べたあとで苦しかったのは覚えているのですが、食べて愉しかった記憶はありません。それよりも日中にひと泣きしてから雨の中を懸案の買い物に行き、気が晴れて、帰りに Crêpe 専門の店に入ってお昼がわりにコーヒーと Crêpe suzette を食べたのです。お店がガラ空きでたいへん気持ちよく、おいしいというより久しぶりにたのしい思いをしました。混んでいるレストランに一人で入るのはイヤなものですが、ガラ空きの中に一人というのはなかなかいいものです。

開高氏は一食百円のお食事でいかに生きのびていらっしゃいますか？書くためには少々欠食粗食なさった方がいいのですよね。あまり頭に栄養が行くと眠くて書けなくなるから。

第三部のご成功を祈ります。沼田氏、吉武氏によりしくお伝え下さい。

「父よあなたは強かった」というのは何となくこっけいな噴飯ものの軍歌ですが（内容は厳肅極まりないのしょうけれど）「海坊主よあなたはやさしかった」というと詩になるではありませんか。

海坊主よあなたはやさしかった
土用の海のうねりの中に
糖尿病の頭を浮かべ、
ぷかりぷかりと白い雲を追っていると
あなたの頭のなかには限りなく
やさしい幻想とマルティニーが浮かび
開高も三島も大江も
みんな翻訳してやろうと
寛やかな気持ちになるのだった....

というような。

『青い月曜日』もそのように OK になるといいですね。
では又書きます。

奥様お嬢様にどうぞおよろしく。
奥様に二冊の御本もとてましたのしく読みましたとお伝えくださいませ。

かしこ、

瀬川淑子 (Cecilia Segawa Seigle)

=====

1975年2月1日 (牧羊子より)

お風邪はその後よくなりましたか。心身ともにお疲れの多い、多忙の日を重ねられて、少し無理がもちこされてのお熱だったのでしょうか。日本よりもそちらの生活の方がお永いくらいに暮らしなれていらっしゃる方と伺っております、何となく自分の感覚で海の向うで、あれほどおむつまじくいられたご主人様を見送られて後のお住まいに、熱を出してお休みになていらっしゃる瀬川様を思わずにはられません。すぐにもお見舞いの返信をしたためなくちゃあ、と心ばかりあせり乍ら、一月中はとうとう昨年末から持ち越した仕事にあぶられる塩梅で、すっかり意志と違って今日まで失礼申し上げてしまいました。深くお詫びします。

瀬川様がたいへんタフな方とはかねがね伺って居りましたが、今だと、お風邪で事務所を休まれたその日に、たわいもないざれがき本にまで事細かく目を通して上で、この上なく心くばりなされた、びっしりの文字の手紙をするするとお書きになされた事に、本当に感嘆申し上げてしまいました。

ご主人様はきっと、他に較べもののないほどの、そのまめやかな優しさを深く愛していらっしゃるのだなあ、と実感致しました。食べものなどはこの本質的なものに較べれば何程のこともありません。真に聡明で謙虚でなければにじみ出てこない貴方様のやさしさに抱かれて、ご主人様は倖せな方だったのだと心底存じます。当然、瀬川様も、何ものにもかえられない一度きりの人生で、最高の佳い思い出をご自分の胸のうち深くに包まれた、選ばれた幸福の人でありますことを深い感動をもって偲ばずにはられません。

ご主人様の志のあとをつがれて、ご主人様とともに歩まれたアメリカの土地で仕事をつづけられるご意志のほどがさすがしく、私はもう年を重ねて人生も終りに近い最早修正のきかない身であれば、せめてわが豚女ようやくこの春慶応の仏文を卒えますが、娘にあやからせていただきたいと願うほどでございます。勇氣と知恵と優しさを、ほんの爪の垢ほどでもよろしいから譲って頂きたいと思います。私は横文字はさっぱりですが、娘は何とか仏語ですが、将来は留学するチャンスもあろうか、と思いますので、真底そのように思うわけでございます。

さて、ヨーロッパへは二度ばかり参りましたが、アメリカ大陸は何故か、まだ一度もご縁がございませんでした。不思議なことにあれほど■■■■世界中を股にかけて歩いてきたと豪語する開高が恐らくアメリカの土を踏んでいないと思います。私はとにかく開高は目下の書下ろしさえ終れば、瀬川様にガイドしていただける、未知のかつ充分に魅力のあるこの壮年の国へ旅に一日も早く立ちたいことだろうと存じます。どうかその節はご迷惑でしょうが、よろしくお願い申し上げます。旅の魅惑に較べれば食べることなど

問題ではないし、また土地土地のものをそのくらしに合わせて堪能できる人ですから、自然に放っておいて頂いても、うまく過ごせる楽しみをすぐみつけてくれます。きっと渡米しても、かえって逆にご馳走をみつけてくれるかも知れませんよ。私までおさそい頂きましたお礼をもうしあげます。前に面倒な手びきをお願いしてしまい厚かましい無調法お許してくださいね。とにかく小説家というものはいつも飢えていなければいけないことになっているので、何を思いついたり考え出すことか、とうてい凡人の及びもつきかねますが、少なくとも家や故国を出ていられるという実績をあげているようですから、あまりご迷惑ばかりおかけしてしまうことにもなるまいか、と安心していているところもあって、どうぞよろしくなどと気易くおたのみしてしまうようです。作戦の前線へも参加したりしてますから、戦前派の中では、かなりきびしい生活条件でもきたえられていると思っています。大陸を横断することが出来た場合、もうそれだけで充分ありがたく、食事のことなどご放念頂きまして、少しも気にはいたしませんことですよ。

別便で灰ワカメをお送りしました。シダの灰で乾燥ワカメを保護したものですから、何年でも、濡らしさえしなければ保存できます。見たところ、おそろしいほど真っ黒ですが、何度も水をとりにかえて洗って下されば、自然のワカメの新鮮な緑色があらわれます。シダの灰ですから、この黒い粉まつも決して毒ではなく、むしろ毒下しの活性炭ぐらいの効めがあるくらいのものでございますからご心配なく。洗いはもしそちらの水がたいへん硬度の高いものなら一度煮てさましたもので、はじめの一、二回は洗われるよく落ちるかも知れません。それほどでなくとも、ぬるま湯ぐらいのものでどんどん湯をかえて洗われるとやはり早くきれいになります。一応黒い汁が出きってから、新しい水にしばらく漬けて置かれますと、乾燥がゆるんで、約二倍から二倍半ぐらいにワカメが増量します。漬け汁もいくらか黒ずみますから、そこで、二、三度新しい水で洗い直しますと、積み立ての鳴門ワカメが姿をみせるはずでございます。増量しますので、予め水処理なさるとき分量を決めて適当に小分けしてお使いくださいませ。

水洗いしたものは生のままキャベツやキュウリと合せてソイがございましたら日本風の二杯酢仕立て、あるいはドレッシングで和えてサラダ風にしてもおよろしいかと思えます。味噌汁の実になさいますなら、汁が出来上る寸前切ったワカメをお入れになって、もう一度煮上がりそうなときまで、つまりあまり最初から煮込みすぎないで、さっと熱を通すくらいでワカメの風味がいただけるはずでございます。

コンソメスープの実にも合いますでしょうね。小さな別の佃煮は四谷の錦松梅。正月に私どもにおみやげとしてくださっ貝新の佃煮から、きっとこのようなものがお好きらしいと存じ、到来物で、すでに味見も別のでいたしました上でのものですから。貝新の佃煮は正月に大阪のテレビ局に呼ばれて仕事に出かけましたとき半分を開高の実家にとどけました。開高の母もまた甘いものより辛いものが好物故、たいへんよろこばれました。これもおくれればせながらお礼申し上げます。

要領を得ないことを永々と判じにくい拙字で思いつくまま走り書きしました。よろしく御解読のほどを。

くれぐれもご健康にお気をつけ下さって、いっそう良いお仕事を实らせて下さいますように。

二月一日

かしこ

牧羊子

瀬川淑子様

=====

1975年2月10日（牧さまへ）

牧羊子様、

私はもう恐縮するのをよそうと思います。ただお志を嬉しく、かたじけなく、頂くのが一番いいのじゃないかという気がします。十一ページにわたる達筆のお書信をいただいて、そのすみずみ迄行届いたお心遣いに感嘆しておりましたら、昨日航空便の小包がとどきました。親姉妹でも至らない深い思いやりが、そのきちんと包まれた紙の包み目折り目、紐の結び目にまで見えるようで、またしても感嘆恐縮してしまいました。自分がそういう事に本当になげやりで、如何にして手を抜くかということにかかずらってばかりおりますので。

そうして見事な、私どもなぞお眼にかかった事のないようなわかめと、大好物の錦松梅（実はこれが錦松梅という名前なのだとは一月に日本でおそわったばかりなのです）。あれほどていねいにご説明いただいたのだから御礼申し上げる前にためさなければ、と（食いしん坊のお話ですけど）お水を何度も替えて、お言葉通りにきれいな緑になったのをきうりとみつかん酢でお酢の物にいたしました。そうしたら本当においしくて用意したものを全部一度にたいらげてしまいました。

私は正直な所、日本のお酢の物、というよりいわゆるおなますが大きいなのです。こちら風のサラダは大好きなのですが。それで日本風なお酢の物は作ったことがないのですけれど、これはたしかにおいしくて、やはり材料がいいとこんなに違うものかと思いました。日本風のお酢はみつかんのすし酢しかないのものでそれでごまかしたのですけれど、胃袋が、急に新鮮で美味しいビタミンもヨードもたっぷりな海藻がもこもこワサワサ入って来たので吃驚したでしょう。

錦松梅も東京でちょっといただいて来たものとは全然違った良質美味なもので、やはり舌の洗練された方のおえらびになるものは違うと感じ入りました。それにしてもさんざんご馳走になったあとですのに、病気で寝ているのがあわれだとのやさしい思いやりから面倒臭い事を几帳面になさるご親切は普通の方ではないと、またしても思ったわけです。本当に涙が出るほど嬉しくありがたく存じました。そうしてこちらから一体何をお送りしていいかわからないので、困っている事も知ってくださいませ。フランスやオランダのチーズがありますが、書いていらっしゃるものからあまりお好きでないらしいので一々考えてみます。先日みたいに、自分がいくら佃煮が好きだといって味もたしか

めないで差し上げたのはあまり無神経にすぎたとあとで気がつきました。それまでは牧様がそれほど味の権威でいらっしゃることを知らなかったばかりでなく、お宅での味覚の占める位置を全然しらなかったからです。開高先生のお上手な食物描写のお上手なのはやはり小説家だから観察が鋭いのだなあ、エピキュリアンなんだなあ、くらいにしか考えていなかったからです。

風邪はおかげさまで回復いたしました。少しずつ気持ちも落ち着いて参りました。この所は忙しくするのが一番の良薬とばかり、忙しくして、一人ででも、友人とでも音楽会へ行ったり、映画を見に行ったりしています。

『自作自演の愉しみ』を拝見して感じたことですが、牧様は本当に博識でいらっしゃるばかりでなく、科学者特有の探究心がおありになるので、何事もゆるがせにしないできびしく研究していらっしゃるのですね。あまりに『学』がおありになるので、失礼な言い方ですが、時にはそれがかえって邪魔になっているのではないかとと思われることもあります。つまりあまりおつむがよすぎて、頭の廻転が早すぎるので読者のついて行けない所、文体が硬くなる所など気がつきました。それは私がまるでミーちゃんハーちゃんの情操レベルにいますので感嘆するとともに、難しいなあと思うことが多いからです。

私が好きなのは『自作自演の愉しみ』一群と『くりやのくりごと』の一群です。これは本当にもう生活、土地、人間と直結しているので楽しいのです。牧様の文章には若々しさを感じさせられるので好きですが、そのひたむきな気取らない正直な情熱はこちらに伝わって来るようです。難しいことをおっしゃっている時も情熱的なのですが、それは軒昂とした学校の先生調の情熱になります。それでついて行ける範囲のことを書いてくださっている時が一番楽しいのです。特にお家でいろいろな花樹（私も大好きです）の手入れとか、お料理のこと、旦那様との大阪弁のやりとり、など、お話をなさる時が一番親しみやすく感じられます。歌舞伎文楽の評も非常にすぐれているとは思いますが私が無知なのでついていけません。書評はいつの場合にも面白いし（知ってても知らなくても）特にすぐれた解説は解説を読む方がおもしろいくらいなので、楽しく読ませていただきました。

私は中国の青銅や陶器（特に宋の）が好きなのですが、牧様もそれがお好きらしいというばかりでなく、よくご存じでいらっしゃるので申し上げますが、先日中国出土品展をワシントンへ見に行きました。四十八人の有閑マダム（紳士もちらりほらり）を連れて行って、昨年開いたモダン美術のハーシュホーン・ミュージアム（彫刻がとていいのです）、小さいけれどすぐれたフリーア美術館と National Gallery へ出土品を見せに行きました。

これはもちろん中国が革命以来出土した何千点の中から400点くらいえらんだものですが、東京に来ていたのとは違って、パリ、ロンドン、ミュンヘン、ウィーン、ストックホルム、トロント、を経て来たのです。出土品そのものも見事でしたが、ナショナル

・ギャラリーの展示のしかたがうまいので、ドラマチック効果満点でした。やはり青銅は商の末から周のものが良いと思いますが、この展覧会には前漢時代の雲南省の一地方、滇とかいう小さい王国から出た珍しいものもあって、一つとくに面白いと思ったのは貝入れ（お金の役をする貝を入れる、御飯櫃くらいの大きさ）の蓋の上に女地主を中心にしている女奴隷の一群が、土ひねり人形のような素朴さでちょこなんと乗っているものです。Primitive Art 特有の、重要な人物が大きい（なんというのか、特別な名称があるのでしょうか）という約束通りに、その女地主が帳場に座っているおかみかヨーロッパの売春窟のマダムみたいに見える愛嬌のある作品です。評判の「天翔ける馬」

（天馬ではありません。羽がない）後漢の青銅の馬は名声にたがわず美しいものでしたが、まわりを全部真っ暗にして、アクリリックの透明な円筒のなかに浮かび上がるように、そこだけスポットライトをあてた演出ぶりで、50%かたトクをしていたようです。秦代の陶器のそばくで味わいのある女性の坐像も親しみを感じさせ、その顔だちが実に無邪気で、そこいらにいる日本の女学生とそっくりなのに驚きました。

仕事でニューヨークへ行って、フィラ市にまだきていない Bergman の *Scenes from a Marriage* を見てきました。Liv Ullmann が十年くらい前にあんな百姓女みたいな人、と思っていた頃から、めきめきと成長して今では押しも押されぬ大女優ですが、この映画ではまた幅のひろい芸を見せて、ますます良くなったと思いました。そんなこともいろいろお話ししたいのですが、日本語で手紙を書くと手がつかれるし、それに牧様のお時間もあまり取るのでやめます。そのうちに正体をあらわしてもっとザックバランなお話もご相談もいたします。今はまだすこし遠慮してまじめなことばかり言っていますけれど、私は生来甘ったれですし、末っ子なのですぐ甘ったれ怠け者根性を出しますから。

この度はまずはお心のこもったお手紙とおくりもののお礼を重ねて心から申しあげます。大切にいただきます、というのが本当なのでしょうけれど、一度美味しいとわかったら、欲しい時に仇のようにじゃんじゃん食べましょう主義ですから。でもたのしませていただくのは100%まちがいないし。

今日は今から室内楽の音楽会へ行って参ります。

昨日今日ずいぶん寒くなりました。お体をおいといくださいませ。

Cecilia 淑子

=====

1975年3月3日（牧さまから）

お風邪がよくなりましたそうでおよろしかったですね。まずおよろこび申し上げます。相変わらずお忙しいでしょうにご丁寧なお手紙を頂き恐縮です。古代中国の青銅器宋磁器についてゆるりとお話をすると思いながら片付かない仕事で日を送っていてすっかり遅延してしまいました。今日もそんな次第でとりあえず、一月おめもじの節、本を間違えてお渡しできませんでした“他人からの出発”をお届けします。仕事のかたがつき次第またお便り申し上げます。

雛の節句

牧

淑子様

=====

1975年3月??日

牧羊子様、

先日は『他人からの出発』をありがとうございました。早速たのしませていただきました。読みながら、私も主人が生きていた頃、彼を茶目気の対象として悪口を言ってみたり、からかってみたり、夫婦というものを喜劇的に考えていたことを思い、それが急転して悲劇的に終わってしまったことを未だ信じられない思いで思い出しました。

昨日ロストロポヴィッチのすばらしいチェロ演奏をきいて、丁度来ていた主人の親友で主治医だった方の御夫妻の招きに応じて中華料理に行きました。ロストロポヴィッチのあとではまあ料理の味については言わぬが華でしょう。

その夫妻という間彼らと主人と四人で何度も食事や音楽会や観劇に出かけたこと、音楽会やレストランでも落ち合った老音楽家たちとも何遍も一緒に出かけたこと、二、三年前にもロストロポヴィッチを聞きに行ったことなど、思い出せば涙の種になるので、なるべく考えないようにしていましたが、この季節は特に憂鬱をそそるので、今日は朝から涙を出しっ放し。仕事にも行きませんでした。さっきサングラスをかけて階下の郵便箱に行ってみたら、おたくのご主人さまの一ページ手紙が来ていました。フィンランドの出版社と契約なさったとのこと。あめでとうございます。

昨日食事の帰りに汚い中華街にこわれた傘が落ちていたことから、奥さんが、高級デパートで買った傘が使わぬうちに壊れてしまったことを言い、私が昔日本には傘の修繕屋というものがあつた、という、と、医者が、そうそう、ここにもあつた、とその修繕屋が回ってくる時歌ったという、こっけいなような悲しいような歌を一節歌って聞かせました。そのとたん私は泣きたくなくて、それが今まで続いているわけです。物悲しい昔の物売りや修繕屋の呼び声がなぜ主人の思い出に繋がるのかわかりませんけれど。

御本を拝見してしみじみいい御家庭でいらっしゃるなと思います。お互いに空気か水とかなんとか大言壮語なさりながら、やはり根本の所では完全な理解と許容と愛があるのです。愛なんていうと生臭いなんて叱られるかもしれないけれど、何年も御一緒の御夫婦はやはりいいですね。とくに立派なお嬢様がおありだと。

今から花樹の季節になります。レンギョウ、すおう、こぶし、ドッグウッド（花みずき）、木蓮、泰山木、藤、つつじ、それからずっとあとになって槿、夾竹桃、など、日本にあるものがどんどん咲き始めます。こちらであまり見かけないのは、梅、桃、丁子（卯の花）、そのかわりよく見るのはりんご、桃と桜のあいのこみたいなクラブアップル、これはいやという程花がつきます。主人はそういうものを見るのを私がよろこぶの

でよくお花見に連れて行ってくれました。『細雪』調のお花見ではなくて、アルファ・ロメオを駆使して郊外の庭や公園を巡回する簡便お花見です。

今日のご主人様に書きませんので、同封の手紙（コピー）を牧様におとどけします。Tuttle と N.Y. Pantheon Press に同じ手紙を書いて出しておきました。Tuttle からは、Rutland の Manager が 東京にいるから手紙をまわしたとって、ていねいな手紙がまわりました。誰かが出版してくれるといいですね。私もこの頃になって褒め言葉をいただいています。

先日ひょっこり現れて又ひょうぜんと帰ってしまった昔の私の女子大時代の友達、韓国人の面白い女性は京城の大学の教授をしているのですが、灰わかめをさんざんほめ、その灰は韓国から日本へ輸出しているものである、と申しましたよ。そのわかめを使わせていただいて、四月の第一日曜に日本人と韓国人の若い音楽家たちと、アメリカ人日本人の数学者化学者などを十二人くらいお招きします。おすしやおすいもの、他はなんとなく東洋風だという国籍不明の料理でごまかすのです。主人のいる間は彼のお客好きのおかげでブツクサいいながらお客を招待しましたが、一人になって肩のはらないお客だけ招くことにしています。

では又、ごきげんよう。お心遣いほんとうにありがとうございました。
いつも乱筆でおはづかしうございますが、恥ずかしがってばかりいては手紙が書けない
と思つて……
淑子

=====

1975年3月12日（開高氏）

春だ。お茶目な日光がイタズラの妖精のように踊っておる。予は昼間から雨戸をたて、蛍光灯の蒼白のなかで書いちゃ破り、破っちゃ書いて、季節に背いておる。

フィンランドの出版社が“夏の闇”をだしたいというてきたのでモンブランのデイプロマツトという万年筆で契約書にサインしました。なお、タトルからペーパーバックが出たので送ります。

先日アメリカ人の文学愛好家と会ったら、英訳『夏の闇』を三度読みかえしたといい英語のみごとさを激賞していましたゾ。ドストイェフスキーがガーネットを得たように予はビヴァーちゃんを得たことを事件だと感じておりますゾ。
頑張らなくちゃ。

C. S. シーグル様

ごぞんじ

=====

(❖上掲と下掲の開高氏の手紙の間が二ヶ月もあり、私がある間に書かなかったということはないと思う。その手紙は見つからない。)

=====

1975年5月5日（開高氏より）

この一ヵ月サイゴンへいこうかいくまいかと、毎日新聞を読みながら、迷っていました。迷いに迷っていたというところです。

もし念願の第三部の冒頭部分が紙上に流れていなかったとしたら大地滑りが始まって一週間とたたないうちに飛んでいたことと思います。十年かけて命を賭けて追求してきた一国の命運が決せられるのですから、十年前からかねてより覚悟、予期していたことがそのとおりに起ったまでのこととはいえ私としては心安らかではられないのです。

これからもまた、これまでのようにあの国ではいくつかの段階があって、それからいよいよ“ビロードの手袋をはめた鋼鉄のゲンコツ”という社会主義化の段階が開始されるものと思われ、しばらくはもやもやとした“連立政権”時代があるのではないかと、くるのではないかと、4月28日現在思われます。私のような大物はそのうちどの段階で登場したらいいのでしょうか。

さて。

かねてからロンドン大学のチャールス・ダン教授が『パニック』と『流亡記』の英訳を完成したといって原稿を送ってきました。そのうち『流亡記』がさきに到着したので、とりあえずコピーをとってそちらへお送りいたします。一度読んでみて下さい。私は例によって理解することはできるけれど味わうことができないのです。ダン教授は十年ほど以前に日本にきたことがあり、そのときいっしょに銀座の飲み屋で飲んだことがあります。何しろ『役者論語』などを訳している人なので、サカナにでたヤマカケ（マグロの刺身にトロロをかけたもの）のトロロを見て、くすぐったそうに小声で「これは、昔衆道に使われましたね」などととんでもないことをいいだしたりします。『夏の闇』のあなたの訳にたいそう感心したという手紙をくれたこともあります。

教授はロンドンの出版界にコネがないらしくて、どこかで本にしてくれるところはないかとさがしあぐねているようです。いずれ『パニック』も送って来るでしょう。そうなれば、至急コピーをとってお送りする事にしましょう。念のために教授のアドレスを左に書いておきます。

Mr. Charles Dunn
c/o School of Oriental and African Studies
University of London
Malet St.

London WCIE 7 HP
ENGLAND

これで『パニック』がくると、『流亡記』と「岸辺の祭り」ともあわせると、ちょっとした枚数になりそうです。訳者が違うという点が残念なところですが、どうお考えになりますか？

フィラデルフィアの春はどうですか？
よく外出して音楽を聞いたり、芝居を見たりしていますか？
目下の私の生活は完全に隠者のそれです。
ときどき、これがオレかと、怪しみたくなるほどです。
ほんとですよ。

C. S. シーグル様

ごぞんじ

=====

1975年6月18日 開高氏より

今日は近況報告抜きで要件のみです。

小説家になるまえに私はサントリーの宣伝課でコピーライターをしていたのですが、その後当時の仲間が独立して"サンアド"という会社を作りほとんど名ばかりですが私はその会社の三文重役です。

この会社はサントリーやホンダその他の広告の制作をして食べています。物価高と不景気でアップアップ気味。しかし親玉のサントリーはリュウリュウとしています。商品が商品だから景気がいいといっちは売れ、わるいといっちは売れ、という次第。

さて。

サンアドからすでに別便で手紙がそちらへいったと思いますが、酒についての短編か随筆を私が来月初めに書きますから、それをあなたに送ります。それをあなたの珠玉、名文で英訳して頂きたいのです。他にはネイザン、ギャラガー各氏。このシリーズは新聞に毎月一回ずつ発表してきたのですが、海外からもオリジナル原稿をもらいました。アメリカからはサリンジャー、アップダイク、メイラーなど。フランスからはマンディアルグ、ガスカール、アルピニストのガストン・レビュファその他。なかなかいい顔ぶれです。マンディアルグ君やアップダイク君が書いているのなら私も一つ、とひきうけた次第。日本からは渡辺一夫、芥川比呂志その他。

これらを全部訳して本にしたい。それもちょうとコッタ本で表紙と裏表紙にウイスキー樽に使うホワイト・オーク材を使おうというのです。
翻訳料は300ドルです。

私の分はぜひあなたにやくしてもらいたいです。
いずれ原稿を送ります。

中国はどうでしたか？

ほんとに用件だけになってしまいました。

C. S. シーグル様

ごぞんじ

=====

1975年6月、日付なし

開高様、

お手紙拝見いたしました。ほんやくの件喜んでつつしんでお受けいたします。サンアドからはまだ別にお話はございませんが、私の迷訳ではさぞ迷惑なさるでしょうけれど、お名指し下さったことは感謝いたします。
ネイザンはいいいけれど、ギャラガーはだめだとストのおじさんが言っていましたよ。ギャラガーの三島訳はダメでクノッフで全部やり直したそうです。私もギャラガーと同類項でしょうけれど。

中国から帰り、おたくの牧先生とおはなししてたのしかった。
中国はようござんした。プラスの分とマイナスの分と秤にかけるとプラスの方がだいぶ重いからよろし、というわけ。

それはそうと、PRELUDE TO FLIGHT を拝見しました。とても律儀にそしてよく出来ています。ダン先生あまり律儀すぎるな、まじめすぎるな、と思う所もあります。私だったら軽くする為にチャットずるく抜いちゃうんだけどなと思う所もありました。でもたいへん立派な英語だからよろしいでしょう。

私は実をいうと一年喪に服す気でいたのにある人から言い寄られてちょいと頭に来ています。フラフラなりそうなので一生懸命主人に祈っています。助けてくれって言って。彼は建築家なのであほらしい、『挽歌』じゃあるまいし、止めとくれ！と怒鳴っています。イヴ・モンタンに似てるからよけい具合が悪いのです。私はモンタンには映画のなかでちょっと岡っぼれすることがあるので。
でもモツアルトのオペラ “Cosi fan tutte” の女たちのようには絶対にならないつもりですよ。

=====

(❖ 6月から9月まで私が手紙を書かなかったということはないと思うし、次の手紙で開高氏が私にソヴィエトへの旅について質問しているので、私が行くことを知らせた手紙があったはずである。紛失している。)

=====

1975年9月16日（開高氏から）

◎ モスコオはどうでした？

◎ 芥川賞をもらってちょっとたち、ちょうど30才になった頃から私の外国ホッツキ歩きが始まりましたが、社会主義諸国がその手始めでした。中国、東欧、ソヴィエトと作家同盟の招待でいったわけです。ブルガリアをふりだしにバルチック海まで＜ヨーロッパ回廊＞の赤い諸国を縦断したのも、今は昔の思出。

◎ この後は二度と招待では外国を訪問しないことや、いろいろのことを決心したのですが、これらの国にその後起ったいろいろの悲惨の原因はあとから調べてみると私が訪問中にも着々と進行中だったのにまったくそれに気づくチャンスをあたえられなかったという事実があります。それからすっかり疑い深くなり、用心深くなってしまいました。のみならずその後の旅行はたいてい観光旅行ではありませんでしたから、いよいよ社会主義国から足が遠ざかってしまいました。モスコオではずいぶん私の本が訳され、印税がたまっているらしくて、よく遊びにおいでと誘いがくるのですが、ウダウダいって返事をごまかしています。

◎ それはさておき。

アルボレダさんに「岸辺の祭り」の訳稿を送って下さったとのこと。これでアルボレダさんの手もとにはダン先生訳の『パニック』『流亡記』とあわせて三つの訳稿がたまっていることになります。あと二つ何かを訳したいとあなたの手紙に有りますので、何がいいか、これから考えてみます。秋の水で頭を洗って。

あなたにいい選択が有ればどんどんお進め下さい。尚、キーンさんの短文がでた『波』をお送りします。これは新潮社のPR誌で愛読者向けのものです。ここ数年わが国の出版社ではこういう小誌を出版するのが流行になっていますが、ときどき非常にすぐれたのがあります。

◎ 『酒の本棚』の短文の件では御面倒をかけました。目下進めつつある第三部で使いたいイメージやエピソードがあのホテルについてあるものですから、そちらで本腰を入れようと思ったため、ついつい包丁さばきを手控えることとなり、氷ぬきのマーティニみたいな原稿になり、ちょっと恥じているところです。お見のがしあれ。

◎ イヴ・モンタンみたいないい男はその後どうなりましたか？

C. S. S. ビーヴァーさま

ごぞんじ

=====

1975年10月13日（開高氏より）

6月と8月に一度ずつ猛烈な胃ケイレンが有り、生まれてはじめてのことなので人間ドックに入って精密検査をしてもらおうとウズラの卵をひとまわりでかくしたくらいもある胆石があると判明し、さっそく入院。開腹。とうとう胆嚢ごと切除されてしもたんや。石は15年物やという。15年間もそんな大きくて硬い石を抱えながら痛飲豪食して何ともなかったという事実におれながら呆れてますが、たまにはそんな体質の人、そんな気質の石もあるので、医学ではこれを名付けて“サイレント・ストーン”というんやテ。これがほんまに“度肝をぬかれる”というやつ。おかげで後半生を私は肝の冷える思いをしないですごせそう。

のこった輸胆管と肝臓でチビチビと胆汁を出してくれるので大事はないと云いますけれど、城でいえば外堀を埋められたようなもんですから、飲と食についていえば今迄のよ

うに質と量を同時に探求することはで
（❖ここから一枚抜けている、開高記念館に残っているのではないか） ???

スト・おっさん宛の手紙のなかでこの二作を出版するようあなたが強力な推選をして下さったことを思い出します。訳がいい訳なのかどうか、全く私にはわかりません。エリオット氏をさらに刺激するためにいい材料になる、もしくは他の何かのために必要だとお思いになったときは教えて下さい。即日、一冊か二冊なら、お送りできるでしょう。

ランボーじゃないけれど、モウ秋ダ。
肝のなくなった私には風が身にしむ。
ではまた菜っ葉でもかじるとするか。

C. S. シーグル様

腑抜け男

=====

1975年10月20日（開高氏より）

お元気？

小生、その後は順調です。もともと基礎体力そのものは土方なみの丈夫さんなんですから、手術のあとは単純な外科の怪我人として傷口が痛まなくなるのを待っていればいいわけです。毎朝、散歩にいきます。今迄一度もしたことのなかったことですが、... それで

も、飲食については、これまた今迄に想像したことのなかった注意や警戒をしなければなりません。タバコはパイプにかえましたし、酒はもう二ヵ月近く一滴もすすっていません。黄昏になると身の置き所のない焦燥をおぼえさせられます。

さて。

アルボレダさんから電話で連絡が有りました。「岸辺の祭り」、たいそう面白く読んだとのこと。彼の話によると、ダンさんの訳した『パニック』と『流亡記』で短編集を一冊作りたい。そして、「岸辺の祭り」だけでは短いので、もう二つほどシーグルさんに訳してもらって、それで一冊作りたい。いずれも東大から出版したいとのこと。二冊とも出版は来年のことになるでしょう。

“もう二つほど”には何がいかと迷っています。作者というものはすでに書いてしまった作品をあまりいそいそとは読み返したがりません。排泄物と感じているのでしょうね。ひどくつらく感じます。だから右眼は冷たく、左眼はあたたかいという眼を持った第三者の批評を何よりもアテにしたいのです。いい御意見をお聞かせください。

もう冬です。

C. S. シーグル様

ごぞんじ

=====

1975年10月25日

開高さま、

大変な御無沙汰をしまして申し訳ございません。大病をなさいましたそうで、驚いたのですが、すぐお見舞い申し上げなかったのは、毎日駆け回っていたからです。此方でもとうとうビーヴァーと云われてしまいました。私もうかうかしてると大病をする年なのでしょうけれど、病気もしないでいます。お宅様はもともと土方なみの基礎体力、とおっしゃいましたが、私も病気をしない所をみるとヨイトマケのおばさん位、丈夫なのかしら。

でもお丈夫でも体の一部を切られるというのは肉体に大暴力を加えられたことになるのですから、体中の細胞と組織が大恐慌を起こすのは当然で、しばらくはいたわって上げないといけません。

胆石というのは痛いものといつもきいていましたけれど、そんなに大きい石が出来るまで何もしなかったというのは、開高さんはよほど胆が太いということわざのママ、胆

囊が大きすぎて気がつかなかったのか、識閥が低いということでしょうか。悪くいえばドン感なのであります。とにかくこれが赤信号になって、暴飲暴食をおひかえあれ。そうならないと今に肝ゾーへ行きますゾ。肝ゾーというものは大切ですゾ。中国人が肝腎という言葉を作ったのは妙なり、と私は主人のガンが肝へ移転したのを発見してから何とも肝にしみて感じています。だからお気をつけあれ。私は駆けまわっていて物事をよくそしゃくしない中にもう次のことをするという羽目になり、あまり吸収できないでいます。たとえばソ連旅行。15日間見て来て何という奇妙な国だろうと思い、色んな感想があるのですけれど、それをまとめる暇がないので残念に思います。

昨日は主人の命日でした。一日中主人のことを考えていたのですけれど、それにもかかわらず、夜はオペラへ行きました。以前のような強い悲しみでなく、やさしいあきらめのまじった愛情で考えつづけています。小型イヴ・モンタンはまだ私の周辺にいて、なかなか魅力が有りますけれど、知性は主人の半分くらいしか感じられないので比較になりません。磨かれないダイアという感じもしないでもないけれど、それはどうでもいいことです。私は忙しすぎる。身からでたさび、欲張りすぎるんです。バレエ、オペラ、お芝居、音楽会、映画、仕事の方での大切な会議、科学のオエラいさんたちがクンショーをもらう年中行事。それに続く諸々の行事、色んなデイナーパーティ。何という因果なことだろうと思います。

訳したい作品の一つは“笑われた”です。絶対に。もう一つは何にするか、今読みなおしています。

ではまたね。お大事になさいます。

セシリア淑子

=====

1975年11月30日

開高様、

又又一ヶ月たってしまいました。その間にサンアドの文章のことでご迷惑おかけしたようですけれど、あれはあちらも悪いので、原稿よこして今すぐやれ、早くはやくといわれたのでは、いい加減にならざるを得ないのです。気にいらなきゃ勝手にしやがれという気になります。それも山崎氏とかいう方が良心的なんでしょうけれど、重箱のすみをつつくようにして（私にも経験が有りますけれど）何かあると大喜びで鬼の首をとったみたいに持ち出すのでよくよくカンに触りました。もちろんあちらはそれがお役目なのだから仕方がないけれど。

しかしそのお蔭で（という事ではなく、他の、もっと大切な作品のときは何時もそうなのですが）「笑われた」は気をつけて一生けんめい訳しています。感謝祭のつづきのお休みがあったので、三日間でゆっくり下訳をしました。これからがたいへんなのです。それを何度も書き直すのですから。そしてもう私じゃどうにもならないという所で誰かに見てもらいます。私はこの作品大好きなのです。ものすごく沈痛でしかもユーモアに

溢れていて、要領良くまとまっていて、アルボレダさんもきつといいというでしょう。実はこの間手紙が来て、ぜひ他の短編もと言って来たのです。それでサンアドに腹をたてて、ナニヲ！二度とホンヤクなんかやるもんか、と思ってたんですけど、まあやりましょうという気になり、たちまちビーヴァーの根性がでて来てやり出したわけです。

でも又悪口言われるかも知れない。そうすると又ガタンといやになってしまいますから「笑われた」がすんだらすぐ又他のをします。まだ決めていないけれど、どれか特に好きなのがおありでしたらお教えてください。

それから質問：あなたの新潮社の全集小説6巻を見て下さい。

212 頁：下段終わってから5行目「ジュウ」これはユダヤ人の「ジュウ」ですか？それとも銃？218頁にユダヤ人という言葉がでて来るからそれじゃあないという気もするのですが、1963年くらいにジュウのために小さな国をいじめたおしてるってのはやはり中東ですか？

223 頁：下段9-10行「気まぐれを本気だと思ってひっかけられちまった」これはちょっと読むとすらすらっと来ますけれど、考えてみると反対のような気がします。もともと働き者のがっちり屋なのを（つまり本気なのを）気まぐれだと思っていたがために引っ掛けられたというのではないのかしら。よくわからないから説明してください。

223 頁：下段終わってから8行目——あまり度々おむつ作りが出てくるからぬかします。

224 頁：下段6行目。出典を御教示ください。よく知られてる英訳があれば使います。

225 頁：上段2-4行目。彼女のこの言葉は「男が買って来たものである」の後に入れ替えます。順序がその方が自然だから。

228 頁：下段終わってから7-6行「くたびれてすさんだ古鉄の騒がしい箱」と「野原をかすめる輝かしい深海魚」はイメージがあまり合わないんですけど、何か特別お考えがおありでしょうか？

229 頁：上段終行。「看護婦は控室のなかに入って行った。壁にも床にも白いタイルを張りつめたその部屋は. . .」とあるので、控室に血みどろのものが有るなんておかしいなと思ったのですが、その部屋というのは手術室なのですね。でもあとで男が廊下に出る時控室の前を通るでしょう？そうして女は手術台を押されてとなりの部屋に入っていく、どうも地理的位置がはっきりしません。出るときに控室の前を通らなきゃ廊下へ出られないのに来たときいきなり手術室の前に立っていたのはどういうわけですか？

とにかくこの作品好きです。それでも訳してると同じ言葉、同じ表現が何度も繰り返して出て来て困る事が有りますよ。アメリカのEDITORはそんなのをパッパッ

と削ってしまうのです。少しけずってもいいですか？

お体の方はいかがですか？なくした肝っ玉（肝っ玉というのは肝ゾーですか？胆ゾーですか？）がなくなっても大丈夫？寒さが身にしみはしませんか？

私はご主人様の命日がすんだので少しずつデイトの申し込みを受け入れ始めました。今は精神科のお医者一人と印刷会社の社長一人とたまにつきあっています。何という事もないおつきあいで、一緒に食事してしゃべるだけ。今まで申し込んで来たのは禿チャビンのじじいばかりなので片っ端からことわっていたのですけれど、この二人は背が高くてみしてくれのいい紳士なのでデイトをお受けしたのです。でも私の主人とはくらべものになりませんから、浮いた話では有りません。本当はイーヴ・モンタン氏の方が気に入ってるんだけど、彼は結婚してるので考慮外なのです。

何と言っても仕事の方が忙しいので（夜働くことも多いのですこの頃は。色んな会合があつて）浮気なんかしてられないので幸いです。

今私の秘書が電話をかけて来て今日のニューヨークタイムス紙を見たかと云いますので、一日カンヅメでホンヤクしてたから見ていないと云いますと、クノッフのストラウス氏が亡くなりましたよと申しました。

シンゾー麻痺で68才だそうで、何ともお気の毒に存じます。ストじいとか海坊主とかいってたけれど、それはおおいに親愛の情をもって言っていたのです。いい人でしたから。せつかく引退したのにそれをあまりたのしむ暇もなく亡くなられましたね。開高さんもいい理解者を一人なくされたという事になります。残念です。

以前にも申し上げたのですけれど「笑われた」で全く面白くすてきだと思ふのは奥様のイメージが多分に使われていることです。そうなのでしょう？でなければあんなに真に迫って見事な二人の映像がかけるわけがない。ですから、あらためて牧さまに賛辞を呈してください。

私は字がますます下手になり、書けなくなり、おっくうになりますので失礼して書きません。けれど開高氏から是非よろしくお伝え下さいませ。

ごきげんよう

Cecilia 瀬川淑子

1975年12月9日（開高氏から）

◎ お元気？

◎ たまたま人間ドックに入ってレントゲンをあてたらぶどうのマスカットぐらいもある胆石が発見され、それをとるのといっしょに胆嚢までとられてしまったという度胆をぬかれるような話はもうしたかしら。どうやら手術後は順調ですが、ちょっと無理をすると背や肩や腰に疼痛が射し、一歩立ち止まってしまいます。ドクターによれば内蔵のレイアウトが変わったために起る単純筋肉痛だから気にすることはない。よく風呂に入り、おとなしくしてなさいとのこと。

これからは胆なしでこの世をわたっていかなければならない。

胆大小心がモットーであった私に小心だけがのこされたわけです。

どうしてくれるワ?

◎ ストラウスが死んだ。

ええおっさんやったと申し上げます。

南無森羅万象。

◎ 今度仕事場を建て、そちらに移り、一人で自炊して暮らしています。

ハンバーグを焼くと、どういうわけかバラバラになり、ソボロになってしまいます。批評家が小説を書くようなもんです。

◎ 新しいアドレスと電話番号。

神奈川県茅ヶ崎市東海岸南 6-6-6 4

0 4 6 7-8 7-0 5 6 7

=====

1 9 7 6 年 2 月 (?)

開高様、

御無沙汰申上げております。日本文の手紙がますます面倒になり（タイプできませんので）次第に書くことが稀になり従って字も文も下手になります。この頃その徴候が特にはげしいようです。

まだ新年のご挨拶も申上げていなかったと存じますので、改めて、

初春のお喜びを申し上げます。今年もどうぞよろしくお導きのほどを。

最後にいただきましたお手紙には茅ヶ崎で自炊をなさり、ハンバーガーがぼろぼろにくずれて非常に御困惑の御様子でしたが、その後ハンバーガーの膠着状態はいかがですか？

その時すぐ、卵をお入れになるとよろしいとお知らせしようと思いながらその前に質問を書いた手紙を杉並のお宅に送り、お返事を待っておりましたのでそのままになりました。その後お返事が来ませんので、翻訳は私の自己流解釈でやってしまいました。

多分奥さまのご指導のもとにハンバーガーのくっつけ方については今では世界一流に上達なさったことと存じますけれど、念のため卵でくっつかなかったら、セメダインなどいかがでしょう。歯科医などの使うアクリリック合成樹脂ならば必ずやハンバーガーはくっついてくれると思いますけれど、よくかたまってから召し上がらないと胃や食道にくっついてとれなくなるかも知れません。又、ガンのもと、発ガン要素となるかも。

その後私は健康で相変わらずビーヴァーのごとく働き、昨日「一日の終わりに」をタイプし終え、今「笑われた」をタイプしています。一月初めにアマデオ・アルボレダ氏が『家』のほんやくのゲラ刷りを送って来ましたので、その校正で少し時間をとられました。この二つの短編を送り次第、又三つほど翻訳したいと思います。東大の方は六つくらい入れてもいいということです。

なるべく違った時代のもの、色んな傾向のものを入れたいと思うのですが、どうか、特にお好きなのがあったらおっしゃってください。あなたも、他の方も「兵士の報酬」がお好きのようですから、もう一度吟味してみます。

クノッフのようにベテランの Editor が手をくわえてくれればいいのですが、アルボレダさんはあまりタッチしない人ですから、すっきりとは出来上がらないかもしれません。

『家』はほとんど変えなかったようです。そうして藤村の原文のように、何となく土くさいのです。でも開高さんのは原文が難しく込み入っているので単純にはならないと思います。複雑なことをすっきり書くのは困難きわまりない仕事です。

フィラ市もずいぶん寒くなりました。日本もしばらくお寒かったようですね。暦でいう大寒に入ってもっと寒くなっているかもしれませんね。

大病後のお体で、ずっと茅ヶ崎でお仕事でしょうか。

今年は仕事の方がたいへん忙しくまだ休暇はどこへ行くかきめていませんが、五月ごろに三週間ほどヨーロッパのどこかへ行こうと思います。そうして又、無給休暇がとれたら十二月にちょっと日本へ帰りたいと思います。

ではご報告かたがた新年（もう旧年ですけど）の御挨拶まで。

かしこ

セシリア瀬川シーグル

開高健様

=====

1976年2月？（開高氏より）

お手紙ありがとう。

じつは正月からタチのわるい香港風邪をひき、ずっと寝こんでいました。治りかけてはムリをし、治りかけてはムリをし、するものだからいつまでも治らず、微熱が全身に苔のようにはびこり、中年疲れもあって何もする気になれませんでした。あなたのホンヤクのための注解もおくらなければならないのに、ひどい無気力とメランコリアに犯されるままですごしてしまいました。賢いあなたのことだし、私はあなたに白紙委任状をわたしているのだからと、いいわけにならぬいいわけを毎日寢床のなかでつぶやいていた次第です。

思いついたので短編のコピーを同封して送ります。二三年前、『文学界』に発表したものです。読めばお分かりですが、他のものとテーマその他の点できわだって異なりますから、一冊のなかへ入れたときはインテルメッツオか何かの役をしてくれるかもしれません。モンダイは作中のヴィヨンの詩ですが、これは有名なものですからすでにそちらで名訳ができていることと思います。もしなければ至急お知らせ下さい。原詩を送ります。この短編は、マ、現代のメリメといったところかな。一句一句にひどく苦しめられました。

「兵士の報酬」は私にはあまりいい出来のように思ってません。何か他のものを考えてみます。「ロマネ．．．」をもし入れるとすれば、あと何篇ぐらい必要ですか。教えて下さい。

今年は第三部をいよいよ仕上げるカクゴですから沈香もたかず屁もひらずといった暮しに終始することでしょうが来年は雄飛します。アマゾンの上流へ行ってピラルクという怪魚を釣り、チチカカ湖へいき、それからできたらフロリダ、アラスカなどを考えています。徹底的に水浸りになるつもりです。もし北米へいくことになったらフィラデルフィアへあなたをたずねていきます。いっしょに釣りにいきませんか。いい穴場、何がいつ、どこで釣れるか、ホテルはあるかないか、モーターボートはなど、たいくつしたらしらべておいて下さい。

ビーヴァーさま

ごぞんじ

=====

1996年 日付なし（開高氏より）

しばらくあなたから手紙がこないのが気がかりになり、手紙を書くことにしました。前の手紙にロマネ・コンテイの短編のコピーを同封して送りましたが、届いたでしょうか。気に入って頂けたらと思っているのですが、それも気がかりです。他の短編とくらべるとテーマも内容もコロッとちがうのですが、一冊のなかに入れると、異化効果というものが生ずるかもしれません。同化効果は大事ですし、自然なものです、異化効果もそれとおなじくらい大事にしなければ。

新しい家にいくらかなじんできました。ツバキ、モクレン、ウメなど咲いています。ここは海岸の砂地でまったくの不毛地なので盛土をたっぷりしてやらなければならないのでそれが一仕事でした。

仕事のほうはボツボツです。詩は跳躍で散文は歩行だという定義がありますが、ヨチヨチ歩きです。もう四年めになるので今年は何とか仕上げなければと思っています。仕事にかかるときは濃淡の差こそあれ、たいてい抑圧症に陥ちこむのですが、今もそうです。ひとりになると泥のようなメランコリアがたちこめてきて息苦しくてなりません。これにつけるクスリはありません。私の宿痾です。死ぬまで共棲することになるのでしょうか。

C. S. シーグルさま

ごぞんじ

=====

1976年春 日付なし、4月16日より前（開高氏へ）

お手紙いただいて恐縮してしまいました。

先のお手紙を、短編をいただいた時お返事差し上げたと思ったのですが書けなかったんですね。ごめんなさい。あの頃アルボレダさんとか、他の方々に色々書くことがあったので、お宅にも書いたと思ったのです。

やはり海岸の御新宅（別荘ですか？）におひとりでお住まいなのですか？

作家の生活というものはきびしいものですね。飯炊きおじいさんもないのではご不自由でしょうね。でも新潟の山の中ではなく人里近い茅ヶ崎のことですからしょっちゅう東京へお帰りになれるのでしょうか。ハンバーガーくらいくつつかなくてもビクともなならないでしょう。夏のお客がワンサとやって来ないうちにお仕事が終わりますようにと祈っています。

さて、私は「五千人の失踪者」の下訳はとっくにすんで、三分の二ほど、一度手を加えた所で立ち往生しています。私は誰かそばでせつつくか、はげましてくれるか、圧力をかけるかしないと、時々パンクしてしまうのです。自信がないからでしょうね。一つには忙しくていつも疲れているからということもあります。

「ロマネ・コンテイ一九三五年」は拝見いたしました。こりにこった感じの作品で、こういうのはとても私の手にはおえません。今迄あなたの短編を読む時、純粹に日本人として文学作品をよむのではなく、これは英訳したらアメリカ人乃至英語でよむ人間にアピールするかどうかということが第一気になりました。それから私に翻訳できるかどうか、やっていて私が楽しめるかどうか、ということもいつも頭にあります。あまり密度の濃いものはどのカテゴリーからも外されます。誰か他の人に訳して頂ければ（本当に上手な人）一語一語味わえる作品になるのですが、私にはできません。

短編集の中ではたしかに異色を呈すると思いますけれど、『夏の闇』でお酒の描写、セックスの描写の蘊奥を究めた感じをもう味わってしまった後なので、余分のような気がします。それは私の趣味が淡白で――濃厚なものを好まないからかもしれません。

来週は仕事で四日ほどボストンへ参ります。仕事の合間にはいまだにあちこちダイナーパーティ、招んだり招かれたり、音楽会、オペラ、バレエ、映画という調子で、あまり意味のある人生ではありません。頭も、もともと粗雑な詰め物でごまかしてあったのですけれど、それが次第に分解してスカスカになってしまいました。

今年はアメリカの二百年祭で、三週間続けてお休みが取れませんので、六月に二週間フランスへ行ってフランス語を練習することにしました。何年やっても不勉強と頭の悪さとはにかみでしゃべれませんので、英語の話せない家族を捜してもらって、一週間ロワール地方で、もう一週間はパリで過ごします。ニューヨークの **Agency** を通じてそういうプログラムが組めるのです。二週間くらいではどうにもなりませんけれど、やらないよりはましでしょう。

この二三日とても寒い春です。木蓮は美しく咲いていますのに。
では又、ごきげんよう。

毎週いろんな行事の連続で、日とか、曜日で区切られるよりも、行事で時間が区切られるようです。Rat Race とよく言いますが、全くそうです。ビーヴァーが又一段と落ちて、ねずみになった所です。

人生ねずみの競争とはなさけないではありませんか。しかもそれはお金の為でもなく、名誉のためでもなく、勉強のためでもなく、一種の自己満足の為だけですから変だともいいます。

開高健様

PS: つかぬ事をお聞きしますが、開高というのはご本名ですか？

あまり聞かない姓ですが、日本でもめずらしいのでしょうか。

=====

1976年4月16日（開高氏より）

手紙をありがとう。

<開高>というのは奇妙な名だけど本名かとのお問い合わせ。

全くこれは本名であります。原産地は福井県丸岡市周辺。全日本で三家族か四家族が残存しているくらいで、トキやモアのような稀少鳥となりました。しかもその残存族どうしの連絡がまったくないという孤城落月。

インディアンじゃないけれど政府にサヴァイヴァル補助金を申請したくなるくらいです。しかし、この名の＜開＞というのは江戸時代には女のプッシーのことだったのでからひどい。それが高くてすこやかだというのだからいよいよひどい。いまはみんなが無学だし、オープン・セックス時代だから誰も気にしないで

「カイコウセンセイ」などといって呼んでくれますが、ときどき小生はイライラすることがあります。子供のときからのひそかな傷です。

仕事はうまく行かないし、中年疲れがカビのように全身にはびこるし、このところ泥に首までつかったようです。前便であなたはフランスへフランス語を勉強にいくとのことでしたが、あいかわらずの不屈の **eager beaver** ぶりに感心しています。

「ロマネ・コンテイ．．．」は此方で誰かいい訳者をさがしてみましよう。
アルボレダさんと話しあってみます。

健康，健筆，健心を祈ります。

C. S. シーグルさま

ごぞんじ

=====

1976年5月24日

開高様、

今夜は「五千人の失踪者」の三度目の書直しをやっていて、先からお訊きしようと思っていたことを書きます。下記の言葉の意味をお教えいただきたい。

1. ガメでやったんだ。
2. ヤク（薬？）
3. バイニン
4. デイリ（出入り？）
5. スケコマシ（スケが女だってことは知ってます）
6. タレコム
7. ヤチモロ
8. テガタ（約束手形？）
9. カラスガネ

10. ヤアさま

11. 大まら—この言葉の意味はもちろん知っています。この表現は此方で言う **Big Schmuch** というのと意味も表現もそっくりだと思うけれど、どうでしょう。でもこれは **Jewish** の表現だから日本の小説につかうのはヘンだと思う。

12. タコヤキ—道ばたで売ってるタコを焼いたあれですか？それとタイヤキみたいなもの？

13. 大谷石—オータニ？オーヤ？ダイコク？この石はいろんなホテルの庭で見たことは有るけれど、読み方がうろおぼえです。

14. 鉄平石—これはどこから？どんな様式の石ですか？

15. ハモの皮—これは日本の通が好きな物ですが、外国人に通用するかしら？

以上。

『酒の本棚』立派に完成しておめでとうございます。コピーを品田様からいただいて、御礼状は書いておきました。私の訳じゃないんだけどな。いやそうでもないかな。
Nathan 氏タイプしなおしたけどあんまり変えていなかったかな？

土曜日四人の日展書道審査員と津金さんという先生と新聞記者のために一日通訳に引っ張り出されて仕方なくお世話しました。

日曜日友人の医者が日本から来て、共通の友人の音楽家の夫妻が晩餐会をしました。一週に四五回ひどいときは七八回いろんな所へ出かけるので、ソーシャルバタフライと悪口をいわれてしまいました。**Beaver** 変じて **Butterfly** となるというのはどういうことでしょうか？

Cecilia 淑子

=====

1976年6月26日（開高氏から）

しばらく取材旅行にでかけたり、ギオンのお茶屋でうだうだと遊んだりしていたものだからすっかり返事が遅れてしまいました。速達で送ります。お役にたてるかどうか。

先日ランダムハウスの社長が来る。ランチを一緒に食べる。クノップのストラウス氏が死んでから日本文学紹介のドアが閉じたが、今後、ランダムで再開したいという話。ランダムとクノップは資本が共通であるという。そこで毎月一回、

現代日本文学についてリポートを書いてくれるいい人がほしいというので私はあなたを推薦しておいた。リーダーでアドバイザーになれるような人が欲しいのでしょう。キーン氏も同席していろいろの意見を述べていた。エリオット氏は日本文学のみならず文学そのものに興味を持っていないのではないかという印象だということ社長はうなずいていた。ランダムがドアを開いてくれると有難いのですが．．．

一歩前進、二歩後退の毎日。トンネルのさきに光がまだ見えない。

Eager Beaver さま

1. ガメルはヤクザ言葉。バクチ言葉。稼ぐ、ひったくるなどの意。
2. 麻薬。ヒロポンなども。睡眠剤，覚醒剤も。すべて麻薬をさす。
3. 密売者。ヤクのバイニン＝麻薬の密売屋。
4. 喧嘩。刃傷沙汰のこと。
5. 女を誘惑する。するヤツのこと。
6. 密告する。
7. すけべいの意。
8. 約束手形。
9. 朝貸し手夕方利息をとる金。カラスは夕方鳴きながら巣にもどるからそう呼ぶ。たいていは貧乏人相手の市井のこれまた貧しい小金貸しがする。
10. ヤクザのこと。ヤクザのやをとってヤアさま。
11. 男根のこと。大きな男根のこと。マラはサンスクリット語からきている。すべて修道の障害となるものを呼ぶ。嫉妬もマラ。憎悪もマラ。怨，恨，怒、すべて。そのうち男根だけがとくにマラと呼ばれるようになったのはもっともくるしめられて修道の妨げとなるのはこれだからだという説がある。
12. タコの一片を入れて焼くお団子。銀座の屋台でよくやっている。関西が発生地。タイヤキみたいなのではござらぬ。ゴルフ玉大。今度きたら食べさせてあげる。
13. オーヤと読む。柔らかい自然石で美しいシミがある。ライトが帝国ホテルを設計したときにはじめて壁に使った。それまではただのドブの敷石に使われていた。ライトの天才ぶりを語るときにはきっとひきあいに出される。

14. アメリカにもある。硬くて平べったくて、薄い。スレートにちょっと似てるが自然石である。表面はすべすべしている。塀、壁、敷石などに使う。

15. ハモをあぶって肉をとったあとの皮。関東にはない。夏この皮をこまかくきざんでキュウリとザクザクにして三杯酢にしたので夕方、ビールをやったら、こたえられませんか。おそらく外国人には通じまいと思うが、フランス料理やスカンジナビア料理の一つに魚の皮を使うのがある。ただし、ごく稀れ。アメリカではどう？ニューオーリンズあたりにありませぬか？

P. S. すべての魚でうまいのは頭、ハラワタ、下腹、そして皮であります。身は最後。アジア人はこれをわきまえているけれど、西洋人はまだ気がついてないみたい。それともアチクシの観察不足か。

=====

1976年7月3日

開高様、

フランスから帰るとお手紙が来ていました。

Tours に一週間、巴里郊外に一週間。フランス語の勉強のためにフランス人の家庭に泊まったのですが、大体 20 何年もアメリカに住みながら英語の完全でない人間がフランスに二週間行って上手になれるわけがないでしょう。

でも聞く方は大分上手になり、ゆっくり話してもらえば大体何でもわかります。話すのは相変わらず下手。

Loire Valley は以前素通りしたので、ガンバッテ Châteaux を九つほど見て来ました。Chartres にも寄りました。今年の France の 6 月は 102 年来の暑さでした。フランスはいつまでも Air Conditioner がないのですね。パリは何度も見てるし、毎日暑いから汽車に乗ってパリまででかけるのがおっくうで、泊まった家でうだうだしていました。これは祇園のお茶屋でウダウダしてるのと大分ちがって、sexless, alcohol-less です。此方はたいへんお堅いものですから。それでは何をする！とお驚きでしょう。

一番おもしろかったのは、Tours の 70 になるお祖父さんと毎日フランスの音楽、政治、経済、文学について話し合ったことですーといより私が聞き役で彼がしゃべり役。労働者あがりのお祖父さんながら、ひとかどの意見を持っています。それに比べて、パリ郊外の貴族上がり銀行屋さんはあまり教養を感じさせませんでした。その奥さんと毎日八百屋へ行きました。

さて、もろもろのインゴのご説明ありがとうございました。今度来たらタコヤキとハモの皮をごちそうになる。フグよりも安上がりですよ。パリのレストランでエスカルゴをたべながら、開高さんの書いてらしたおしっこ街、うんこ通りのモツをたべさせる

店は何処かな、と思いましたけれど、描写を読むと美味しそうなものでも、私はすごく香りに敏感だし、暑い時そんなものを食べる気がしない。折角のフランスパンも私はほとんどタッチしませんでした。

ランダム社長氏にご推薦くださったそうで恐縮。私も遊んでいないで少し勉強せんとアキマヘンな。『文学』か何かの日本の雑誌を **subscribe** するベキですね。日本文学の状況を知るには何が一番いいのでしょうか。『中央公論』『文芸春秋』？それとも何か他の新しいもの？お教え下さい。そうしたら **subscribe** します。私はこちらの **subscription** さえ多すぎて、読む暇ないんだけど、そろそろ本来の姿に（Beaver の）たちかえってキンベンにならないと年をとるばかりでお恥ずかしいです。

今日最近日本へ六週間行って来たアメリカ人の友達と買い物に行き話を聞き、日本へ行きたくなってしまいました。彼女は画家の未亡人で、娘が東京に住んでいるのです。娘はニューイングランドのどこかに画廊を持っていて、日本の絵や版画を毎年買います。私は焼き物が大好きですが、彼女も美しい焼き物をうんとこさ手に入れて来ました。帰って来るなり結婚を発表したので皆が日本で誰か見つけて来たのかと驚きましたが、そうではなくて、前から話があったのだそうです。ふくぶくしい感じの女らしい人で、有能なデザイナーです。そんなに親しい人でもないけれど、彼女が幸福になるのは嬉しいことです。そうして私はちっとも羨ましく感じないことについて、自分で満足に思っています。これはまけおしみではありません。

私は少々非人間的なヘンな所が有ります。もう少し異性に興味を持つべきだと思うんだけど、海岸で見るはげ頭やぶてぶてした背中やビアだる腹や、たるんだ脚などに対する嫌悪が先に立って、誰にも興味がもてません。つまり自分にそういう年令の人間しか **available** でなくなったというきびしい現実なのです。きれいな若い人（男女とも）を眺めるのは好きです。オペラの近くのキャフェにすわって（Café de la Paix では有りません。あそこにも座りましたが。なんしろ暑くてむしように喉が渇くものだから、あちこちで座った）見ていると、通りがかりの女たちに大真面目な顔でゴムのネズミを突き出して「ヒヤー」という奇声を発しておどかしてる放浪人を見て、はからずも、『夏の闇』のカエル男を思い出しました。そうやってキャフェに座って見ている連中を喜ばせてはお金を集めるのです。これもまた、ああいう生き方もあるのだ！と感嘆させる人間の一人でした。メトロでフォークソングをガナッてる男のそばで、いともあわれな顔をして、無言で帽子を突き出してる若いアメリカ人の女にも同じことを感じました。パリという所はああいう人間が特に多く集まっている所ですね。

明日翻訳の四度目の書き直しをします。明日は七月四日の独立記念日ですゾ。そのらんちき騒ぎお祭りさわぎの最中に一日中働くというキンベンなる女性を他に御存知か？！

でもこの頃毎晩花火が美しいのです。花火の大好きな私は大喜びで、口をあけて見えます。

セシリア淑子

=====

1976年8月31日（開高氏へ）

しばらくご無沙汰申し上げております。それでも二ヶ月にはならないでしょう。

今日は質問が主ですので、暑さの御挨拶もいたしません。お暑さと申しまして、此方はただいま信じられないくらいの爽快な秋晴れで、少し肌寒く感じられます。

八月三十一日ですから、まだまだ暑さが後もどりするはず、これはまだ本当の秋ではありません。あちこち地震が起ったり、火山がバクハツしたり、フィラ市では原因不明の奇病が発生したり、天変地異の世の中ですから、このお天気もその一部かも知れず、マゴマゴしてると開高氏の短編集も立ち消えになるといけないと思って大急ぎで書きます。

アルボレダさんは夏休み中なので「五千人の失踪者」は出来たのですが、送っていません。この間から「決闘」と「エスキモー」の一度目をざっとして、今二度目をやっている所です。

その間にはせっせと働き、デイナー・パーティを催し、パーティの他にもお客をもてなし、コンサートへ行き、映画を見、日曜の朝は一時間余り公園に自転車のりに出かけ、たまには屋上のプールで十分ほど泳ぎ、友人と食事に出かけるなどいつにもましてビーヴァーぶりを発揮しています。先日など友人夫妻と、十三になる男の子と自転車乗りに出かけ、朝早くから起きて用意しておいた果物の盛り合わせトコッテージ・チーズとムース・オー・ショコラの昼食に招き、その後泳ぎに出かけた所、すっかりくたびれて、ぐうぐう眠ってしまいました。やはりあまり頑張らない方が安全ですね。

質問を書きます。頁数は『七つの短い小説』から。

1 p. 115 : 日光はまだ…軽い湯のようにゆれていた。これはかげろうみたいにゆれて見えたのですか。ゆれるというのはわかるけれど、軽い湯というのがわからない。

2 p. 117 : 「みなさん、お茶になさいますか、云々」これは "Coffee, Tea, or Milk" というのが笑い話のきまり文句になっているので、ミルクを加えますよ。よろしいですか？

3 p. 118 : むっちりした肩ごしにタコ壺のほうをふりかえると……云々。

これは不自然じゃないかしら。何故ってハックは「おれ」と話している…壺は「おれ」のそばにあって、現にハックが「その壺は何だね」と言っている。ハックは「おれ」と向き合って話している筈だからふりかえるというのは変じゃありませんか。

4 p.119 : コンタン・コンスタンのスペリング Contan Constance? Contan Constant?

5 p. 123 :サリヤンカのスペル。料理の本をひっくりかえしたけれどみつからない。あいにくロシヤ人の友人が英国へ行って半年ほど帰らないので聞く事が出来ません。

6 p.121 :「文芸手帳」の人名簿。これはただの文芸人の名簿ですか。それとも「文芸手帳」はとくに大切なのでしょうか。大分ぶ厚い文芸人の名簿がペン大の日本ライブラリイにあったけれど、あれのことかしら。

7 p.123 :ヨーデラー。Yödeller?

8 p.125 :コンタン…迷信家らしくてこの期に及んでもポケットから木の切れっぱしを捨てようとせず……十字架のことですか？

「童心によるマルチン・ルーテル」人間の童心をよりどころとして人間社会を改革する人間という意味ですか？

9 p.127 :「無名の陶工が漁師の求める必要のないまま」漁師に求められる事なしに、つまり頼まれて作った（せかされて作った）ものではないという事でしょうか？

10 p.136 :リヤビンキナのスペリング

11 p.150 :袋のなかの変化には敗れていた。衣類の下の痩せようにうちひしがれていたという意味でしょうか。

12 p.150 :「お世辞づかいをされるお気持はよくわかる…云々」この意味はわかりません。

13 p.161 :いくらかの力が酸敗して痛い肉にさして来た。これもわからない。わかるような気がします。

14 p.166-167 :ニコジムの言葉の中で最後の方の「革命を輸出できないのがくやしかった」という言葉はそこまでずっと言って来た事がだんだん自由世界に近づきつつあった気配なのに、急に転換して共産主義的な革命を外国に紹介できなかったのがくやしいと言っているのですか？少し続かないようだけれど。その二行くらい前にアメリカの企業家が憎らしいと言ってるのはわかります。彼らがつまりこの大破壊をもたらしたのだから。

15 質問は以上ですけれど、アラスカはもう合衆国の州の一つだからエスキモーもアメリカ人であり、その点ちょっと難がありますね。どうお思いになりますか。次に「生者が去るとき」を考えてるのですけれど、いかがでしょう。

では又、いつも変な質問ばかりしてお忙しいのにお邪魔いたします。

牧様にどうぞおよろしく。ご無沙汰ばかりしていますけれど。

セシリア瀬川淑子シーグル

(❖ 1976年の8月31日から1977年の1月5日間で文通がないのは変だと思う。上記の質問に対する開高氏の返事もあったはずである。それらがなくなっている。)

=====

1977年1月5日（開高氏へ）

開高様、

元気で帰って来て、もうこの冬は一度風邪をひいたのだから大丈夫と思ったのも束の間、又々大風邪をひいてしまって、十二月の二十六日から寝たきりお正月になってしまいました。

昨日初めて仕事に出て、日本式に白いガーゼのマスクをかけたものですから、皆が「何時に手術開始ですか」とか「銀行破りでもするのかね」なんて言います。此方ではふつうの人はマスクなんてかけないから。けれどもわが説を披露しますと、これはバイキンを吸ったり人にうつしたりする事の予防ではなくて、簡易吸入器なのです。外気は冷たくて、あなたのお好きな言葉でいうと苛酷で容赦なく乾燥していること甚だしいので、それをやわらげ、湿気を内にこもらせ、その上外からの塵埃の侵入を防ぐといった多様の効能があるのです。この簡単明瞭、プラグマチックな工夫を、見るたびに笑うのだから、アメリカ人はバカであると私は断定しました。

でもこれは古代人的な小道具だから日本人でもこの頃の人には笑うかしら。

茅ヶ崎ではありがとうございました。牧様は信じられない位思いやりの細かい、行き届いた方ですね。私にはそういうこまやかさがありそうで、ないので――自分では私は古代の女で昔風にしつけられて来たのだから、細やかさがあってもいいと思っているのに、外国菌を接種したので漸進的変異を起こしたのです。いつも自分を恥ずかしく思う次第です。私はもっともっとお近くに住んでいてしょっちゅうお話をうかがっていれば、私の冬眠中の頭脳も、退化してしまった女らしさも、すこしは発奮して人間らしい活動を始めらるうと思いますのに、その機会が少なくて残念です。私は牧様が全く好きです。ラブレター書くのならあっちへ書きたいと思うくらいです。でもおつむがよすぎて、私の粗雑な頭と下手な字で手紙を差し上げるのが恥ずかしいから、開高様からその点はよくお伝え下さいませ。

私は頭脳の発育遅延性の上、学校は最後の学位を取った大学だけが共学でその前は修士号迄ことごとく女の学校でしたため、猿の年令で申しますと十才くらい迄女性の教授方に熱を上げていました。でもレズビアンではありませんよ。

茅ヶ崎では陽光が春のようにうらうらしていましたね。此方へ帰ると陽はうらうらしているようでも、空気がすごく冷たいのでドギマギしました。日本はやはり黒潮に抱かれていてと確認したわけです。でも日本の古い家の中は非常に寒く、とくにおトイレが寒いから、それで私は日本へいくとしょっちゅう風邪を引くのです。そう云うとしょっちゅうトイレへ行ってるようだけど最小限度でがまんしてるんです。

12月の19日でしたか、日曜日に昔のクラスメートたちと川崎の民家園へ行ったのです。そうしたらあまりお天気がぽかぽかとあったかくいい気分だったのでやたらにそこいらを徘徊したのです。一時に三井ビルのマンダリンパレスで二人の姉の家族たちと会う約束だったのにおくれてしまいました。でも民家園たのしみしました。

帰ってから病気になったのはやはりあちこち動き回り過ぎたからだろうと思いますけれど、23, 24, 25, 26とパーティへ行きましたからそれもあると思います。お宅はパーティがお嫌いそうですが、私も実は嫌いなのです。そのくせむやみにパーティに行くようですが、それは怠け者が何とかして仕事をしない口実を作ろうとするからです。家にいると何か仕事をしないと気がとがめる。それで外へ出るのです。

25日のはパーティというより友人の一族郎党の集まり。イラン人の兄弟五人皆医者ですが、その二番目とその奥さんも医者で（ダンの患者だった人達で今でも友達です）五人のお母さんはペルシャの豆狸みたいな人で一家に君臨しています。一族はアレンタウンと云う市の長男の家で毎年感謝祭に集まります。クリスマスはハンサムなアラビア馬みたいな次男の家で、イースター（ペルシャのお正月）はお母さんと黒豹みたいな四男の家（三男はドイツに住んでる）と決まっていて、イースターに彼女の家へ行くと、お米を使った料理を17種類くらい、一週間かけて作ったのを出してくれます。それに五種類の魚とか、何種類かの肉が出るのですが、何もかも一週間ごった煮をしたような味がします。私は日本人だから御飯料理は好きですが。

豆狸さんは今でも朝晩祈りの絨毯の上にひれ伏すのです。私の友達、次男はクリスチャンで（奥さんはアメリカ人でクリスチャン）、他の息子たちは多分無宗教でしょう。にゅーよーかーの小説にでてくるような一家です。

（❖この豆狸のおばあちゃんは何年か後にテヘランで亡くなった。交通事故だった。）

横道にそれましたが、今年から風邪がなおり次第勉強するようにします。怠ける口実は断固として退けます。よくこせこせと動き回るので、変なあだ名を頂戴しましたが、あれも一種のカモフラージュで、動き回るわりには何もやっていないのです。ビーヴァーという名は返上します。的確でないばかりでなく、先日トルーマン・カポーテの何だか読んでいて、その言葉にへんな意味があるらしいのを発見しました。開高さんいわくの玄とか開とかいう言葉と関係があるらしいのです。ですから私をビーヴァーと呼ぶのは絶対にやめて下さい！！！！

今ラジオで四川省の大地震で65万人以上の死者が出たらしいなんて大へんなことを言いましたが本当かしら。これも白髪三千丈じゃないかしら。でもまさか中共が自分のとこの災害をそんなに誇張したりしないでしょうね。方々の暴動反乱に地震では中共もこの頃は叩いたりぶったり（この日本語ヘンですね。叩いたりけったりだったかしら？この頃ますます言葉がわからなくなりました）。

出来るだけ早く開高氏の伝記的序文をこね上げます。之は東大のニナ・ラジさんに言われたものです。ラジさんは日本人と何国人かのあいの子で、御主人はインドの方です。可愛らしい人です。彼女のおっしゃるように、東大出版局の本はやたらと高くて一般市場に向きませんから、序が出来上がったら東大だけでなく、他へも持って行ってみるかもしれません。

ランダム・ハウスの社長さんのお名前 (complete)をもう一度教えてくださいませんか。

では又、ごきげんよう。牧様にどうぞよろしく。

Cecilia 瀬川 Seigle

=====

1977年1月？日（開高氏より）

お手紙頂きました。

小生のはそちらに着きましたか。（❖その手紙はなくなっているようである。）

風邪には気をつけて下さい。小生、年末からやられっぱなし。以前はこんなダラシないことなかったのですが46才になったら体内にあちらこちらいろいろの物音が聞こえてきました。酒に弱くなったり。物覚えがわるくなったり。おめでたくなったり。

お手紙中、中国が地震やら内乱やらで“叩いたり、けったり”とあるのは日本語のイデオムとしては“踏んだり蹴ったり”のことではございませぬか。

ランダムの社長の名前は **Mr. Robert L. Bernstein** です。ああいう王国の大統領となれば多忙すぎて東方の賢者のことなど、おぼえていられないかもしれません。「ニューズウィーク」の東京支局長の **Bernard Krisher** の家でいっしょにランチを食べた二日酔いの小説家だといえは思いだすかもしれません。『青い月曜日』の語版『日本三文オペラ』のドイツ語版とポーランド語版をプレゼントしておきました。❖

今日は用件のみで失礼します。

もの凄くいそがしくなってきました。

ごぞんじ

❖当時の手紙でお伝えしたかと思うのですが、ランダムとしては現代日本文学についてのレポートやアドバイスのできる人をどうやって探していいのかわからないとのことだったので、あなたの名をあげておきました。
同社としてはストラウス以後もつづけて日本文学をだしていきたいとのこと。

=====

(❖次の手紙にある「他日の愚問への御解答はしかと落手いたし候も」というその手紙がない。これも紛失。)

1977年1月31日（開高氏へ）

謹啓

御書信有難く拝読つかまつり候。その間（かん）、他日の愚問への御解答はしかと落手いたし候も再度の行き違いを憂いて（とは賢察にはござ候わずや）返信差し控え候いしまま、失礼のなんお許し願ひ上げ候。明快なる御回答をうけたまわり、ただちに翻訳慾を再燃いたし候に着き、苦心のすえ「決闘」と「エスキモー」を脱稿いたし候。ほんやくというものは原文の微小なる難点をもことごとく露出する恐ろしきものにござ候。それを隠蔽することこそ訳者の腕前にござ候えば、われらいささかの暴力を発動いたし、順序不同の所、繰り返しの多き所、英語で言うところと少々噴飯物に聞こえ候所、ハックがアメリカ人らしからぬ箇所などことごとく添削つかまつり候ママ、ご了解くだされたく願ひ上げ候。

(❖一例上げてあるが複写がずれていて読めないのを削除する)

この上はこの二編をスターン女史（亡父の従姉にていつぞや『昼の闇』と「岸辺の祭り」を賞賛せし夫人を御記憶ありや）に送り、彼女の意見をあおぐ所存にござ候。

承れば尊台には「風邪のひきっぱなし、飲酒に弱くなり、記憶力減退」のみならず、頭脳は四六時中元旦祝賀状態とか、まことに心外に存じ上げ候。愚生こと尊台とほぼ同年にござ候えば、まだまだ若いつもりにござ候えば、はなはだ迷惑千万、思いもかけぬ濡れ衣を着せられし如く片腹痛く存じ候。如何なる理由によって年々来々暴飲暴食も喫煙もつまみ喰いもいたさず、石仏のごとくチンと行い澄ましおりたるやと遺憾この上なくござ候。

貴殿様には日頃栄養ゆたかに皮下のあぶら数層お心がけよくお蓄えおかれ候われしにより、少々のごことで弱気にはなられまじく、と樂觀いたしおり候。さりながら、先年肝胆とやらの半分を喪失なされ候いしみぎわ、お氣勢も半減いたしそうらいしかと案じあげ候。まことに不当なる次第にござさうろう。「ふんだりけったり」してもびくともなさらぬ御体格とお見上げ申し候らいしに、心外なる紙風船におわされしかと驚嘆いたしそ一ろ。反面体中胃と称せらるる開高アンコー先生もやはり怪魚ならぬ人間なりきと安堵もこれいたしおり候。この上は風邪は万病のもととの真理を肝に銘じ（失礼、肝の半分はお所持なきを失念つかまつりさうろう）それなければ何にあれ残存の臓腑のことごとくに銘じ、くれぐれもお気をつけくだされたく――

和漢混合の候文を 無骨な口調で書くはまことに難しうござります故これにてやめにいたします。長い間本もよみませず、べんきょもいたしませぬ故、読めば文体のまねなどお茶の子なれど、この頃は日本語の会話も容易にはこばず情けなきおもむきにござります。

朝晩ふりつもりましたる五寸ほどの雪も、とけかかりのぬかるみも、ことごとく凍り、お寒さは生まれてはじめての零下何度という人の噂でござります。日のもととならばいざ知らず、めれけんの異国にござりますれば何ごともおおぎょうで、このほどはまた自然ガスのしょうてえじ（足りぬということ）とやらで、上を下への大さわぎ、今日はやれ学校をしめる、明日はそれ大工場をしめる、あさっては観光場か博ぶつかん、しにせのではあと、かいしゃなどみなしめるしめると申しまして、首までいつしめられるかと空恐ろしく、生きた心地もいたさぬ世の中にござります。

くだらぬ手紙で時間を費やしますよりも、一刻も早く、アンコウ先生の伝記ならびに紹介文を書き始めねば、と心は火のようにせきますなれど、それには全集を始めから終わりまで再読いたすのが本筋ゆえ、またまた時間のかかることにござります。私も仕事を持つ身にござりますれば、お昼べんとうの時間、おといれの時間、夜のすいみん時間、あれこれ節約いたしまして、読む所存にござります。時々は、らじおとてれびを天秤につけて読むという芸当もじしませぬ。

大先生のえっせいを再読いたしまして、『紙の中の戦争』『フィッシュオン』などのたくみさ、洞察のたしかさに深く感じ入り、とくに『紙の中』はわたくしがせんそうっ子でございますゆえ、いろいろ思いは溢れてつきませなんだ。それから昨日『昼の闇』を再読いたしましたれば、心の琴線にふれるところ多く、おもわずかんるいにむせび、これは「ますたあぴいす」とやら申しますものの一つにちがいなしと心に銘じたことにござります。

べとなむせんのこと、ただ今読みかえしてみますれば、まことに理を尽し、奥をきわめ、がてんのいくことばかりでござりまして、かあたあ大将様が、招集のがれの若うどをお許しなされましたことゆえ、もう一度にゆうようくたいむすの

誰それがれびゅうを書いてくれるならば、べすとせらあにはならずとも、同感をもって読んでくれる若者もあまた出ましようにとざんねんに存じます。

それでは今日はこれにて筆をおきます。

ありがとうございます。なむまいだ、なむまいだ

あらあらかしこ

開高あんこう大先生、まいる

せしりあしいぐるより

=====

（❖このへんに開高氏の手紙が一通はあったはずである。）

=====

1977年6月5日

開高様、

しばらく御無沙汰いたしておりますけれど、あなたは日本にいらっしゃるのでしょうか？相変わらず立派な御本が後から後から出て、森は花盛りのようですが、まだ三部作の泥沼で呻吟していらっしゃるのでしょうか。それとももう南米はアマゾンの **Rain Forest** でワニでも釣っていらっしゃるのでしょうか。

御本は『孔雀の舌』『叫びと囁やき』（イングマー・バーグマンの映画の題と同じけど内容はもちろんおおいに違う）非常に面白く読ませて頂きました。開高さんは御夫妻ともエッセイが実にお上手ですね。Essay と Short Story のけじめのつかないものもあります。開高氏の Short Story——というより日本の短編はエッセイ的ですからでしょうか。

短編小説は、どこ迄ご報告したか忘れましたが、カズン・ミリアムが「エスキモー」は入れない方がいい（単純すぎるというのです）と申しました。「穴」を訳しておくたら大変褒めて、これは男性読者にアピールするだろうから **Collection** の準備ができるまでに **Esquire** に送ってご覧、と云いました。それで先日 **Fiction Editor** に手紙を添えて「穴」の訳を送ったのです。

結局できあがっているのは：

- 岸辺の祭り
- 五千人の失踪者
- 一日の終わり
- 笑われた
- 決闘
- 穴

序文さえ出来ればもう **Random House** かどこかへ送ってみることが出来るのですが、それがなかなか、遅々として進まず、どころか、はじまってもいません。どこから手をつけたらいいのかわからないのです。Short Story はこの頃全然売れなくて **Agency** も手をつけないそうですよ。でも **Collection** だったら **Agency** が出版社をみつけてくれるかもしれないそうです。私は今年はあまり遊び歩かないと宣言したのに、又又一週に三回は何らかの招待が来るので全部断るわけにも行かず、何となく時間の無駄をしています。一週仕事のあと、五日間は外出してる人が多いのです。

暇もないくせに、non-fiction を読んでから『輝ける闇』を訳してみたくなっています。とても売れる本じゃないけれど、大切ですものね。売れるのは三文小説ばかり、悲しいことです。日本は出版者の天国ですよ。文学作品もガラクタも皆出て売れてるようすから。

ではご報告迄。乱筆お許し下さい。牧さまにおよろしく。

ハチミツお好きですか。お送りしましょうか？

Cecilia 淑子

=====

1977年6月??日

開高様、

同封の手紙をたった今書いて、封をして、少し思いをはせていた時、急に *a quoi bon!* と私の中の何かが言いました。「こんなことして何になる」という意味ではなく、私が急にあなたの短編集の為にと思って訳した七つの（この場合出すとしたら六つの）**short stories** が、あなたという偉大なる人間作家の、ほんのくしゃみみたいな一つつつ無関係な部分であって、それをたとえ集積してみても、決して開高健の人間像ではなく、盲人のさぐった象の鼻や、脚にすぎないことを痛感したからです。だから結局あなたという作家を紹介するにはその全作品を読者に読んでもらうしかない、私は72年頃からあなたのお書きになったものを出るかたはしから送って頂いて読んでいますが、「何だ、開高さん、また同じことを書いてる」と思いながら読んでるうちに、次第に、つまり **Osmosis** ですよ。あなたのえらさがわかって、その観察の鋭さ、歴史、社会を見る眼のたしかさ、表面に出る現象の裏をさぐる触手の敏感さに感嘆するようになって来たのでアリマス。で、人間開高像をいかに紹介するかということは、結局とてつもない序文を書くよりほかないのでアリマス。でなければ、アメリカ人にその膨大なる作品を読んでもらうしかない。ところが彼らはとても読みますまい。出ている翻訳は少ないし、あなたの作品は面白い筋書き本位のベストセラーではないからです。それで、いい序文なしに6つか7つの短編——アメリカ人の好きそうな独立できるものだけ——を出すのはあなたに害あって易なし、どころか大迷惑をなさる所でしょう。だから、この夏私はどうしても大上段に構えた序文を書いて宮本武蔵的な世界人開高の正確な映像を（宮本ムサシは正確ではありませんね）多角的な、夏目漱石じゃないけれど、お多角の健ちゃんの紹介をしなくちゃいけないなと思っているのです。同封の手紙ではそんなことちっともおわかりにならないでしょうから書き添えました。そうすると短編だけでなく、エッセイのあちこちも引用したくなります。エッセイには本当に私をうならせるものが沢山あるのですけれど、私は怠け者で、その度にノートを取っておかなかったから、さて引用するとなると又読みなおさなくてはならない、読んでると面白いからどんどん読むばかりでちっともノートをとらない——そういうことのくりかえしです。では、まあ、以上、ご説明迄に付け加えました。あらあらかしこ

セシリア淑子

=====

1977年6月30日（開高氏より）

久しぶりのお手紙。

あいかわらずの勤勉と精力。おかしい意味ではなく讃辞として、やっぱりビーヴァーのようだと申し上げたいのであります。フランス語ならカストールでしたかね。

あなたはまったくカストールです。ダム・ビルダーです。

小生、第三部がようやくヤマ場にさしかかり、いよいよ泥沼のなかで足掻いています。トンネルのさきに光がみえません。曲がり角を曲がったとも感じられません。『夏の闇』ではたった一人の女の一夏を描くのに500枚使いましたが、今度は一冊のなかで三人の女を扱おうとしているので、ヘトヘトです。最後は“そして誰もいなくなった”というところへ持込む考えですが泣きたくなくなってきます。

ノンフィクション集が続々そちらへ届いていますが、五冊、総計5000枚になります。ことごとく三十才から四十才までの十年間のめちゃんな年令の所産。よくもマアと、ときどき我ながら呆然となります。ところどころダブるところがあるのは発表誌が違ふ為や、強調したいためや、いろいろの事情からですが、いずれ小説の材料に使おうと思って経験を伏せるためにノンフィクションとして品不足に陥ちたためということでもあり、恥じているのであります。生きるとは恥をかさねることにほかなりません。キャアー。

三部作が完成したらもう一度三冊まとめて最初から読んでみてください。12年間かかったので各作で文体や何かが変わって行くとおもいますが、これは自然の律動みたいなもので、私としては抵抗しつつ同時に服従するという態度をとろうとしてきました。私はスロースターターですから、今後生きのびて書きつづけられたら前半生よりはよくなれるかもしれません。大器晩成。男子三日見ざれば期して待つべし。べし。べし。べし。

短編集の品選びについては従来申上げてるとおり、一切おまかせ。白紙委任状。迷える仔羊のために南を指して下さいますよう。

アマゾン8月。とうとう46才のオッサンになってしまって大事な胆もなくなっちゃったけれど、こんなことで負けてられるカイ。おれは生をむさぼるつもりであります。身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、谷のドングリ。

ごぞんじ

=====

1977年7月17日

開高様、

アマゾン行は八月との事なので取り急ぎおたずねいたします。もう発っておしまいになったのではないかと心配ですが（そしてお忙しくてこの返事どころではないでしょうが）もし出来ればお発ちになる前にお返事いただきたいのです。序文を書いたのですが満足できないので書き直しています。それに手を入れなおした訳を全部タイプしつつあるので時間がかかります。

全作品エッセイ3付録の谷沢永一氏の開高健論「あかでみあめらんこりあ前後」の中に（p.6）吉田定一氏が「昨夜経験したばかりの恐怖を語った」あとあなたが「眼を光ら

せて『ネタ頂けませんか』と強い関心を示し」それが『一日の終り』になったとありますが、その原材は「一日の終り」のどの部分なののでしょうか。オートバイの事ですか。それとも夜のひそやかな大移動？

序文は開高健論的なもののあとに一つ一つの作品について短い解説を加えたいので、「決闘」「穴」「笑われた」「一日の終り」「五千人の失踪者」「岸辺の祭り」について何かおっしゃりたい事、参考になる事がありましたら、お知らせいただけますでしょうか。

私の思ったとおり、従姉が「笑われた」(The Laughingstock と訳しました)をたいへんほめてくれました。非常に感動したそうです。ただし途中で急に一人称になる所がとてもアメリカの読者には頂けないというので、全部三人称に変えると云ったら、その方がいいと言いました。作品としては私も前に何度も申し上げましたように大好きです。

何時だったか考えもなくハチミツをお送りして、あとで考えたら夏だからべたべた流れ出してはいないかと心配です。割れ物ですし、郵便局のお爺が「こんなもの航空便で送るやつがあるかよ」と言ったのでおとなしく船便にしたのでよけい心配です。でも質はいいので割れていなかったらいい紅茶にお入れになったら美味しいかも知れない。

ではどうぞ河に落っこちないようにして下さい。隅田川なんぞと違って危ないですからね。熱帯樹もぼうぼうと生えていますし、人食いピラニアもいます。アメリカにいらっしゃるのだったら早めにお知らせ下さい。歓迎します。

シーグルセシリア淑子

=====

1977年8月3日受け取り、開高氏より

アマゾン エクスペディションの山のような装備品を汗みずくで野郎どもといっしょに釣具は釣具、カメラはカメラと、荷造りしているところへあなたの手紙。そそくさと書斎へ入ってこの手紙。

おたずねのお答えはお手紙のその部分に赤線を弾いておきました。よろしく処理して下さい。たのしみにしています。

来年のトランス アメリカ ドライブ、朝日新聞もゼロ成長の不景気気分で準備がとてもスローです。アマゾンからかえってからネジを巻く事になるでしょう。これが実現できるようならそちらであなたに会う事が出来る筈です。愉しみにしています。うまいもんを食べさせて下さい。パーティーにはぜったいつれていかないでください。家でひらくのもやめにして下さい。私は社交恐怖症です。

いそいで書きました。

ごぞんじ

=====

1977年8月7日サンパウロ到着後に、開高氏から

いつか北海道の十勝平野をふらふら歩いているときに森かげでハチの巣箱を並べ得ているオジサンに会ったことがあります。聞いてみると春に鹿児島から出発し、花を追って北上し、いまここでアカシアの蜜を集めてる。これが北限なんで、ここが終ったらそろそろ東京へもどろうかと思ってるとのこと。つまり花と蜜のジプシー暮らしというわけなんです。例によって競争激烈のうえに開発開発でお花畑がなくなり、ハチを飛ばしてやってもおなかがペチャンコで帰ってくる。農薬にやられてどこかで自爆してしまう。もうこの商売もそろそろお手上げだと、悲しい話ばかり。送ってもらったクローヴァーの蜜を食べながら久しぶりに思いました。わが国は乳も蜜も流れない忘却の河の彼岸にあるのであります。

ハチミツだけではとても足りないから水飴や何かで割るしかないのです、その道のプロたちはこれをハチミズと呼ぶとか。

小生は酒についてはやたらくわしいのですが、甘いモンのこととコーヒー、紅茶のことはまったくわかりません。しかし、そのオジサンにいわせると、スミレの蜜ぐらいうめえモンはねえよ、ということでした。アメリカは東西南北に広大だからいろいろな蜜があるのでしょうね。蜜というものは花によってそんなに味、香りが変わるものなののでしょうか。ボルドーとブルゴーニュ、コニャックとアルマニャック、一人の開高氏と九九人の現代日本作家ぐらい、異なるものなのでしょうか。よほど珍しい、変った蜜があれば送ってください。

——ごぞんじ——

P.S. 8月8日のパンナムでブラジルへ行きます。ピラニアにやられなかったら10月初にまたこの地獄へ帰ってきます。
例の東大出版会のホンヤクはその頃出るそうです。

=====

1977年10月18日（開高氏から）

- ◎ ノンフィクション全集五巻の最終巻を別便で送ります。
これまで出版されるたびに送っていたと思いますが、足りない巻があったら教えて下さい。至急送ります。
- ◎ これだけやってもまだ短文がどっさり余っているので、それらを集めてべつに一冊出そうかと文春が言ってくれました。紀尾井町に足を向けて寝られなわけでありませう。このゼロ成長の不景気に（だからこそか）ほんまに日本人はよう本を読みよる。エライもんや。

- ◎ 朝日新聞が南北アメリカ大陸縦断旅行に大乗気になってきて、どうやら冗談からでたコマがホントになりそう。そうしたらきっとあなたのところに寄ります。オフィスと自宅の電話番号を教えてください。
あらかじめ予告しますから御馳走をつくってちょうだい。

◎ 8月9月10月13日までブラジルにいました。アマゾンとラ・プラタ上流と日本の一倍半あるといわれるボリビア国境のパンタナル（大湿原）をうろ　うろしていたのです。サンパウロに這いだしてきてからあなたおのところに　電話をかけようと思ったのですが、番号がわからなかった。ブラジルはアメリカや日本と即時通話ができるのです。残念。無念。電報で私の下宿の電話番号をあなたに知らせてそちらからかけてもらおうかとも思ったのですが、　いろいろな人がつぎつぎとやってくるものだからとうとうチャンスを逃して　しまいました。

◎ お元気？

◎ 今日は要件だけ。

C. S. シーグルさま

ごぞんじ

=====

1977年10月20日（開高氏へ）

- ◎ お手紙有難く拝見。
- ◎ 開高氏のお手紙がだんだん寸評的になるので此方もその調子になることにします。その方が早くていい。その上此方は反応度が非常に強いので（とは影響を受けやすいということ）まねをしやすいのです。大阪の人と話しているとその口調になり、英国人と話すとアクセントをまねるという風です。
- ◎ お電話を下さるおつもりだったそうですが、かけて下さらなくてよかった。多分ギリシャへ行っていました。帰って来た所です。フィラデルフィアがますます好きになった。
- ◎ 電話番号は家（215-568-6284）オフィス（215-448-1537）です。いつでもおかけ下さい。家は私だけですから私しか返事をしません。でも間違っても金曜の日中におかけになるとお手伝いのおばさんが返事をしますから、金曜の日中は避けて下さい。オフィスは私の直接番号ですから私がいれば返事をしますが、いないと秘書が返事をしますから、名指しで **Person to Person** でかけて下さるほうが安全です。

- ◎ 御馳走を作ってちょうだいなぞと云われるとまあどうしようと思います。開高氏のように舌の肥えたぜいたくな胃袋の料理の目利きにそう居直られるとこちらは手がふるえて包丁で手を切るのがヤマでしょう。あくまでも「お芋の煮えたのごぞんじない」のおじょうさんおままごと料理とご承知下さい。アメリカ人には褒められますけれど、日本のちゃんとした方のためにお料理したことなぞないのです。何も知らないアメリカ人をつかまえて、之は美味しいのであるとだますのは実にやさしいことです。あまり期待しないでちょうだい。
- ◎ アマゾン私の行きたい所の一つ。けれども蛇やムカデなどが大嫌いでピラニアも怖くてしょうがないので、何時になったら行く気になうかわからない。あなたの記事が出るのをたのしみにしています。
- ◎ 序文は従姉がよくできたとほめてくれました。その二度目の稿が今日帰って来たのでタイプして、短編のタイプしなおしていなかったもの一つをすませ、手紙を書いたらもう送れます。人にタイプを頼めないで（私がやってるときに又書き換えるので）たいへん不便でまた非常に長くかかります。
- ◎ この間結婚の申し込みを受けました。ちっとも興味のない人ですが、もしその人と結婚すれば、一生翻訳だけして生きて行ける（つまりお金のことは考えなくてもいい）事はたしかです。三年でも四年でも考えろ、というので都合よく、又何の要求もしないので、大変大変有難い。私は男性にそばに寄られると、99%の場合ぞっとするのです。その人も99%の一人。
- ◎ ギリシャに行ったら王子さまのようなのを一人連れて帰ってくれと私のオフィスの慢性欲求不満女性、30才のタイプストが言ったけれど、ギリシャには美男は一人もなし（彫像の他は）ロシアはあんな百姓国なのに三人ほどすてきなのがいましたかねえ。ガテマラにもかわいい男の子（ガイドの）がいたのですがねえ。私はこんな事を云っても言うばかりで何もしないから小説の種なぞありません。
- ◎ ではさようなら

十月二十日夜

セシリア瀬川シーグル夫人

=====

1977年11月2日（開高氏より）

- ◎ オレの手紙が短くなるばかりだといってボヤいていらっしゃるけれど前回は風邪で寝こんでるときに書いたもの。アマゾンを便所舟に乗って上がり下 がったりしてたときはパンツ一枚ですごし、土人なみにまっくろに焼け、ロ イヤル・パーム（大

王ヤシ)のように頑健不屈だったのが羽田空港のヴィー　　ルスでひとたまりもなくやられ、花のように衰えていた。そういうときの手　　紙だったのさ。

- ◎オレが帰国するとさっそくセッカチ秋元がとんできてヤイノ、ヤイノとさわぐのだ。それによると、こうである。朝日新聞でかねてから練っていたパンナムドライブ、トヨタが聞きつけて大乘気になり、車は希望のものを何台でも出す。メカのできるドライバーを何人でも提供する。南北アメリカにある六十何店かの同社のデポーに全部訓電をうって万全を期させるからゼヒといいだした。そこで朝日はカッカッとなり、秋元はカッカッとなり、オレはタジタジとなった。何しろ第三部が未完なのでヨロヨロとなった。
- ◎ ヤルとすれば来年の6月から。アラスカの最北端をフリダシにして。ハイウェイ沿いの川や道路のついた湖などではあまり釣れないし、偉大なカテドラルとしての森は味わえないからブッシュパイロットをやとってセスナで奥地へ飛ぶ。それをとこるところでやりつつ、カナダを経由、北米、中米、南米と下って行くというプラン。気力体力を張った大旅行はオレとしてはこれが最後のものになるのじゃないかと思っています。
- ◎ フィラデルフィアにはゼヒ寄ります。日に焼け、少しはやせて、ちょっと背が高く見えくたくたにくたびれた47才のヒッピーをお目にかけます。やさしくしてちょうだい。
- ◎ お願いがひとつ。全米の釣りの穴場案内書。いつ、どこで、何を釣ったらいいか。一冊にまとめた厚いハードカバーの本がでています。何年かまえに入手したのですが、なくしてしまいました。著者名も本の名もわすれたのですがそちらでさがして航空便で送って頂けませんか。分厚いハードカバーの本です。カナダの分はこちらにあります。❖
- ◎ 東大出版会からたった今電話。例の本が出来たと。11月2日に拙宅へ持って来て下さるとのこと。入手次第に至急送ります。
- ◎ 前便であなたに例の文春のノンフィクションの5冊全部洩れなくとどいてるかどうかつねたハズですがお答えがないのはとどいてるということなのでしょうね。グアテマラで二人、ロシアで三人、いい男の子がいたという話は読みましたが。

(❖文春のノンフィクションの5冊届いたかと言う質問の入った手紙がない)

- ◎ 男が寄ってくると99%ゾッとすると手紙にあります、オレはどうなのでしょう。来年アラスカからおりていって数万キロのドライブの果てにゾッとされたのでは残り少いオレのローソクの火が消えてしまいます。それともこれはマンジュウこわいということなのかしら。ドドイツの一節にいわく。イヤ

よ、イヤよは好きのうち。とか。

ごぞんじ

⊙全南米の釣りのことを書いた本いくらアメリカでもないのじゃないかとおいいますが、もしみつければそれを。

=====

1977年11月4日（開高氏から）

⊙ 11月2日ニナ・ラーズ女史来る。おなかふくれてる。来年2月、細胞分裂 とのこと。短編集出来上る。なかなかによいデキである。感動する。

⊙ 別便で3冊送った。『夏の闇』のペーパーバック版3冊もつけておいた。今後どこかへ私を売りこんで下さるときの、相手への参考資料として使って下さい。足りなくなったらいうて下さい。

⊙ 私はオリオンをエージェントにしてるのだけれど彼らは絶望に沈んでいるのかいっかな動こうとしないので私自身が工作しなければならないということになります。『プレイボーイ』のアメリカ版に「岸辺の祭り」を売り込んでみようかと思っています。ほかにアタってみます。そこで、あなたの訳のコピーをとって私宛に送って頂けませんか。あなたの序文のコピーもいっしょに。アタるかアタらないか、まったく見当が付きませんが、やってみようと思います。

⊙ アメリカの映画界にヴェトナムブームがきたと教えられる。いつかあなたが手紙でヴェトナムはきつともう一度ブームになるような気がするを書いていたことを思いだし、あらためて“女の直感”に脱帽します。この風が出版界にも吹いてそれがオレにもまわってきて、『輝ける闇』『夏の闇』目下書いてる第三部一挙に三冊買手がつかうという結構な事になってくれませんか。来年フィラデルフィアで微笑したいもんです。おっとりと。どこかの川岸で。

=====

1977年11月21日（開高氏へ）

こんにちは。

この間からエクスプレスやら何やらでせせこましく三通もお手紙が来て、耳のそばでわんわん言われて頭がカッカとする位ですけれども此方も忙しいのです。私も時間はないし、仕事は山とあるし、年の暮はせまるし、それまでに解決しなければならない事が山積しているし、で、もう自殺しようかと思うくらいです。フィッシングの本をいろ

いろさがして見て、**Fishing Across North America** なるものがよさそうなので買いに行ったら絶版だそうで、あちこち探して、ニューヨークの、バーンズ・アンド・ノーブルという大きい本屋（古本もあつかいます）に電話した所、電話じゃ扱えない、手紙を書け、というので書いて、返事を待っているのです。カズン・ミリアムも知り合いの古書など扱っている本屋に聞いて上げようと言いましたし、色々探してはいるのです。

とにかく、やっとタイプをし終って、頁の続き番号を打ち込んで、明日あたりランダムの社長さんに手紙を書いて手頃な箱をみつけて荷造りして土曜日の朝ぐらいには送り出そうと思うのです。通し番号で219頁ですゾ。それをみな自分でタイプしたのだから、いやハヤ、ビーヴァーにちがいない！！

ランダムが社長さんがだめだったら、誰か **Agent** を見つけます。短編集はほんとに今だめだそうです。めったに出ていません。**Japan House** にも連絡して見ます。東大でもかまいませんけれど、ニナ・ラージさんが私に言いましたが、あそこから出すと売値が高くなって人が買わないからだめなのですから。私はもちろん、お金が目的じゃないから、東大から出してもらえれば大いに有難いのですが、あなたをアメリカ人に紹介する目的ならば此方の出版社でないとだめです。行く行くはチャールス・タトルにも行ってみます。

その間も身辺でいろんな事が起っていて、わさわさしてて、うるさくってしょうがない。ほんとうに死んでしまおうか、と思う事もしばしばです。十二月二十二日から一月三日迄ロンドンへ行ってきました。そうしてよく考えて結婚するかどうか決めます。結婚したら二ヶ月半ばかりあちこち行くから、六月には此方にかいないかわかりませんよ。つれないことをいうようですがそうなるのです。

それからね、いつか変な事をおっしゃいましたね。男が寄ってくるとゾッとするというのはマンジュウ怖いという事か、ですって？失礼な事いわないでチョーダイ。私はドドイツなんて趣味ないから開高さんのおっしゃったようなのは知りませんが、落語のマンジュウコワイぐらいは知っています。私だって女だから素敵な人は好きよ。けれどもあなたのいわゆる動物電気、私のいわゆるケミストリイがあわないとだめなのです。それが十万人に一人くらい。

結婚を考慮中のおじいちゃんも、ケミストリイが合わないどころか、大反発です。けれども都合のいい事に傍へよって来ないのでとてもいいの。たいへんにいい方で、仏性で、私の事にまるきり夢中で（こんなビーヴァーみたいな女の何処がいいのでしょうか！！！！）非常に寛大です。彼が言うには、もし結婚しても部屋は別々で、旅行すればホテルの部屋も別々で、そばには寄らないけれどそれでもいいかということです。願ったりかなったり！です。こんな物分かりのいい人はちょっといませんよ。二十才年上で、マンガみたいな顔をしています。とてもとてもいい人なんです。そして尊敬できます。

（❖2015年の視点から見ると、なんとまあ私は自分のことを省みもせずに、好き勝手なことを言う嫌な女だったんだなあと恥ずかしく思う。）

お話は変わりますが、『路上にて』が着いていませんのでお送り頂けますか？チャールス・ダンさんの翻訳なさった東大の本いいですね。とても奇麗によく出来ています。一冊、タトルの『夏の闇』とともに、ランダムの社長さんに送りましょう。此方にいらっしゃるの、夏の終りにできないの？そうしたら（もし結婚しても）此方へ帰ってるようにします。まだ『ハイ』と言っていないから、六月に此方にいる事も10%くらい可能です。もしすれば四月のなかばだから五月一杯日本です。

忙しいのにノンフィクション四冊残らず読みましたよ。おめでとうございます。

十一月二十一日

淑子

=====

1977年11月15日（11月22日受け取り、開高氏より）

先日、あなたに手紙を出したあと2、3日経ってから「岸辺の祭り」のあなたの訳稿は以前に送って頂いたこと、それを新潮社の出版部が拝読したいと言って持っていったことを思い出しました。アマゾンボケか風邪薬の呑みすぎかでウロが頭に来ていたようです。お詫び申し上げます。もしもう発送してしまったあとなら到着次第に私の手元に大事にキープしておきますが、まだだったら送らなくてもいいです。

日本版の『プレイボーイ』の編集長と私は親しい関係にあるのでその人物を通せばアメリカ版の編集部へじかにあれを送りつける事が出来ます。ただし、アメリカ人が日本人作家によって書かれたヴェトナムを読みたがるかどうか。ヴェトナムのVの字は

‘Vomit’のVに通ずるようなアレルギーがいまでもあるのではないかなど、いろいろ考えますけれど、ほかに妙案も浮かばないので、訳者としてのあなたのアドレスや電話番号もつけて送ることにします。今月末に。

もし何か連絡があればうまくやって下さい。

あなたの手元にある訳稿を短編集として陽の目を見させてやる、その一助にとも思っただけのことをするわけですが、ほかに何かいいアイデアがあれば教えて下さい。

日本で英語で出版してくれるところが東大出版会以外にあるかどうか、これから考えてみますが、やはり日本よりそちらで出すほうがいいのではありませんか。この点どうお考え？

日本でどこかが出したいといったらOKしますか？

C. S. シーグルさま

ごぞんじ

=====

1977年12月10日（開高氏から）

- ◎ またしても、ものすごいそがしくなってきたので要件のみ。
- ◎ 『路上にて』を一冊送ります。
- ◎ 「裸の王様」の英訳をのせた『ジャパン・クォーターリー』を一冊送ります。

これはプリンストン大学の卒業生が、卒論に私の初期の作品のことを論じて提出し、そのときに訳したものです。ホワード・カーチス君という一メートル95センチのやせた大男。

- ◎ 短編集、御苦労さまでした。ほんとに。感服しています。
- ◎ パン・アメリカン・ドライブの件、次便で少しくわしく知らせます。

C. S. S. さま

ごぞんじ

=====

1977年12月、日付なし

開高様、

毎日結婚の支度でいそがしくて手紙が遅くなりました。明日、明後日、とオフィスに出て、それで終りです。一月二十七日に小さな式を挙げて、二月二十六日に披露宴です。その間の一ヶ月間に私のアパートの家具やクワドロフォニックのシステムや様々のものを寄付したり、売ったり、引っ越したりです。でも六ヶ月くらい此のアパートを据え置きのもりですから、手紙は此方でよろしいのです。その内にあちらの名前と住所をお知らせします。あちらも町の中で、美術館のすぐ前、公園の中です。このアパートも大きいし、便利だし、コーポだからとっておきたいのですが、コーポの規則として、子供か孫以外の誰にも譲ることを許されず、また不在家主をゆるしません。たいへん残念なのです。しばらく結婚したことを秘密にしてすえおくつもりなのです。どうせ知られてしまうでしょうが、六ヶ月くらいは何とか延ばせると思います。

同封のエリオットの意地悪ジジイ（私より若いかも知れない）の手紙が来て、がっかりしましたが、之からは、エージェントをみつけて出版社を探すつもりです。落着き次第そうします。望みを失わないで下さい。

私の日本語ますます変テコになって絶望です。結婚するのは勉強の為ですから、之からはもう少し日本語の本を読んで少しブラッシュアップします。

東洋のあちこちに行くのは三、四、五月、日本は五月になると思います。六月は此方へ帰っているかもしれません。日本に着いたら御連絡しますから予定をお知らせ下さい。二月はまだ此方にいますから、どうぞお手紙下さい。

私の主人になる人は六十六のじじいですから神経痛が時々出るので今、ホノルルのダイヤモンド岬の方にコンドミニアムを買って冬は三ヶ月そこに住もうと言っています。私はハワイは好きではないけれど、ハワイ大学にいい東洋学文化センターがあり、浮世絵のミッチナー・コレクションがあるので彼（私の主人になる人）の浮世絵の友達も二三人居ますし、行ってもいいかと思っています。

では又。

七十八年がすてきな年になりますよう。短編コレクション楽しみに待っています。牧羊子さまにおよろしく。道子さんにも。

セシリア淑子

=====

1977年12月12日

開高さま、

あれよあれよという中に時間がたつので驚いています。町の気配はもうすっかりクリスマスなので困ってしまいます。毎日忙しくて、気になっていたことも手が付けられなかったのですが、どうにか釣の本を探し出して今朝航空便で出しました。この間申上げたのは何処にもなく、どの古本屋にもなく、仕方がないのでフィラの一番評判の本屋から一番良さそうなものを買って来てとりあえずお送りしました。これは州別ではなくて、魚種別なので少し探しにくいと思いますけれど、本の始めの方に淡水魚と海水魚の表があって、何処でどの大きさのものが取れたかということを示してあります。それと地図をにらみあわせたら全貌が少し見えるかもしれません。

それから先日『路上にて』と『言葉ある曠野』が参りました。シーメールですから、お願いした前に送られたものでしょう。どうもありがとうございました。だけれどお願いしてから又お送り下さるのではないかと心配です。『言葉ある曠野』は以前に一冊頂いたのに、又来たのでどういうわけかといぶかっているのですが、余分は友達か、ペン大の図書館にあげることにします。

この間は六月にここにいないかもしれないと脅かしましたがけれど、私は二、三ヶ月フィラを離れたらすぐフィラへ帰りたくなるので、大丈夫六月にはここにいると思います。五月には日本へ行きますからその時お目にかかって説明しましょう。

十月に中国へ行かなきゃならなくなるかも知れないのですーというより行かなくちゃいけないんですけどー面倒臭いし、シンドイから他の人に頼むかもしれません。そのためにも夏は此方に居なくてはならないだろうと思うのです。というのは、フランクリン・インスチチュートの理事会や後援会員のために中国へ手紙を書いて旅行の許可を取って上げたのですけれど、行ったことのあるのは私だけですし、私が火をつけて歩いたので責任を感じるのです。それで、一月半ばにもうインスチチュートを止めますけれどその旅行だけはリードするかもしれません。

昨日は私の誕生日じゃない（明日です）Unbirthday だったのですけれど、シドが私の友達だけ（私の友人を彼に紹介する意味で）十五人ほど招いて盛大なカクテルとデイナーパーティーをしてくれました。もう誕生日なんて来てくれない方が有難い年なのですが、好きなお友達ばかり、何人か集まるということはやはりうれしいものです。

ではよいクリスマスと新年をお迎え下さい。来年いらしたら御馳走しますから、御心配なく。

セシリア淑子

=====

1977年12月19日（開高氏より）

◎ ノップの釣りのガイドブック、ありがとう。これなら穴場に辿りつけそうです。求めていたことが皆書いてある。これからこの本をネタにして作戦を練らなければなりません。

◎ 『新潮』と『文学界』に久しぶりに短編（60枚）を一つずつ書きました。新年号と2月号。もう一つ短編の素材があるので、20枚ぐらいの珠玉にして3月号の『文芸春秋』に出しましょう。これらはすぐに集めて以前に書いたのといっしょにして短編集にする。それをあなたに送りますから、雑誌は送らないことにします。たのしみにして待つてちょ。

Merry Xmas と Happy New Year を

——ごぞんじ——

=====

Cecilia Segawa Sielge
and

Sidney A. Tannenbaum

Announce their marriage

*Friday, the twenty-seventh of January
Nineteen hundred and seventy-eight*

In the chamber of

Honorable Lisa A. Richette

=====

1978年6月21日

開高様、牧様、

五月にはお目にかかれて嬉しうございました。お二方ともお元気そうで安心いたしました。又、その節は優美な京塗りのお菓子盆とお皿を恐れ入りました。荷物が納まらないので色んなものをあちらの、この夏来ることになっている友人の家に置いて来ました。八月に持って来ていただくと結婚祝いを二度頂戴したことになります。へへへ、というのは冗談で、何も欲しくなかったんです。第一私が勝手に人にことわりもせず何遍も結婚するのにお祝いなぞ下さっていたら、この先何度結婚するかわからないのに、破産してしまいます。いつも（といっても二篇目ですけど）年寄りとはばかりするくせがあるようですから。でも本当にありがとうございました。

帰ったら『面白半分』の細川さんからお手紙が来ていて、記事のご依頼があったので、喜んでお受けしました。実をいうとお目にかかった時お名前だけうかがって、どなたともおっしゃらなかったのも、雑誌出版社の記者の方じゃないかなあと思ったのです。してみると私のカンも中々馬鹿になりませんア。

私は気が早いものですから記事をさっさと書いてしまったのです。どうせ浅い人間ですから何も深遠なことは書きませんでしたが。そうしたら、又昨日お手紙が来て、こうこうかくかくについて書いていただきたいということなので、又書き直さなければなりません。何だか気の早いビーヴァーがあつという間にダムを作って、あつ、このダムにはおトイレをつけるのを忘れましてと言って建てなおすようなものですなア。昔から「あわてる乞食は貰いが少ない」と言いますがあわてものは損をするというのはたしかにホント。

私はこちらへ帰ってきて引っ越しの後片付けをするのに大わらわ。前のアパートは9月1日に出ます、と宣言したのですが、家具が多すぎてそれまでに売れるかどうかわからないし、又なんとなく13年住み着いた所に愛着があつて去り難いので、私どもが田舎住まいをしているのなら、ちょっといい町のアパートとして使えますが、車で7分の所ですから無駄です。私の仕事場にしては大きすぎるし、とにかく出ないでそのまま持っています。誰にも貸せないし、ゆずれないのです。不便です。なにしろ900人の人たちが入りたくて待っている建物なのです。

川島様に御紹介くださってありがとうございました。いい紳士ですね。こちらのカズンミリアムに相談しましたら、今原稿を送ってある **Literary Agent, Curtis Brown, Ltd.** の **Senior Vice President, Mrs. Emilie Jacobson** に手紙を出して、こういう話があるが、あなたから原稿を送っていただけないか、という風に言ってごらん。そうすれば売れるものなら彼女のコミッションも確保できるし、将来おねがいする時のしんしょうがいいでしょう、ということでした。早速手紙を出しました。彼女はたいへん良心的なエージェントだけれど、ほっておいたら何カ月も何年もかかるということです。彼女が脈があると思ったら講談社へ売りつけてくださるでしょう。そうでなかったらこちらへ返して来るでしょうから、私から講談社へ送ります。

先夜 **Amerian Ballet Theatre**（『愛と喝采の日々』を作ったバレエ団）がバリシュニコフと、同じくソビエトから離れたナタリア・マカロヴァと、その他映画で可愛らしかったレスリー・ブラウン等と一緒に来て、『ジゼル』を上演しました。今迄で一番すばらしい『ジゼル』でした。バリシュニコフはこれで **ABT (American Ballet Theatre)** を離れてバランチンの **New York City Ballet** に行くので、マカロヴァと一緒に踊るのはこれが最後だし、見るのができて幸運でした。マカロヴァは踊りも芸もうまいので、彼女だとバカバカしいストーリーも信じられるのです。失恋で狂ってそのまま息絶えるなんて、こんな不自然な話はないのですけれど、わりと自然に見え、しかも彼女は40近いはずなのに、可憐な少女に見えました。

ところが第二幕、もちろん踊り手は皆すばらしく申し分ないのですが、悪いことに、その前夜にバレエ・トロカデロというニューヨークのグループで男ばかりの女装のパロディ・バレエが来て『ジゼル』の第二幕をやって抱腹絶倒させたばかりなので、時々思い出して真面目な顔ができませんでした。バレエとかオペラとかは筋書きや動作の非現実性を考えればパロディと紙一重で、下手な人たちがやればどんなに真剣に取り組んでもそのままパロディになりかねませんね。『ジゼル』なんか特にそうなので、オルガチェカブンスカヤとかネヴァセネヴァ（**Never say never** のシャレです）、ナタリアドウミアフェヴァ（**Do me a favor**）とかいうふざけた名前の連中が踊るバレエは涙が出るほどおかしかったのです。私はドタバタ喜劇は大嫌いだけれど、諷刺物は好きなので、これだとか、クラシカル音楽を茶化した **P.D.Q.バッハ** などが来ると見に行って大笑いをして来ます。人間が単純にできてるのかしらん。（たしかに単細胞ですよ）

同封の名刺、モリスのです。ハンドバッグの中でがらくたにもまれて汚くなりました。ごめんなさい。電話したけれど返事がなかったので、開高さんからお電話して「あわれな小説家の開高ですが、ふびんな翻訳家のセガワさん(マリニさんと一緒に来たおばさんと言ってくださればわかる)にきくとお宅は天下一品のマルチャーニを作られるそうなおっしゃって予約してください。新しい客は入れないそうですから（誰かお得意さんが引っ張って来ないかぎり）とても気難しくて虫の居所がわるいと客をおっぼり出すそうです。私は飲まないから味はわからないけれど、その作り方を見て、これは美味しいに違いないと思いました。なにしろまごころをこめて作る人です。マルチャーニと他の酒

とステーキだけの店で、小さくてわかりにくい所ですから、もしいらっしゃるのなら、よく訊いて確かめてからいらしてください。

良い夏をお過ごしください。こちらはメインにちょっと行くだけで、ずっとフィラにいます。空調のきいた部屋から一步も動かずに夏が楽しめるように、と赤と白のゼラニウムを27、バルコニーに入れさせました。きれいですよ。花見の幕みたいにダンダラではなくて九つの花箱に三鉢ずつ同じ色のです。そこからフィラデルフィア美術館が眼下に見え、ベンジャミン・フランクリン・パークウェイやスクールキル河が見えます。汚い工場もだいぶむこうにみえます。つまりフィラデルフィアが見えるということです。

ではまた。

Cecilia 瀬川 Seigle Tannenbaum

私の今までについた名前を全部いれますとね、Yoshiko Cecilia Beatrice Segawa Maxwell Seigle Tannenbaum というのであります。どうです、長いでありましょうがや。

=====

1978年7月15日受信（開高氏の手紙）

◎ 手紙ありがとう。あなたの名前の長さにはおどろかされもし、笑わせられもしました。ただしこの笑は無邪気のそれです。誤解なきよう。

◎ 本を2冊送りました。一冊は“白いページ”の完本、一冊は短編集です。ただし短編集としての出来ぐあいや、好きキライの点からすると、私としては“ロマネ…”の方がはるかに気に入ってます。

◎ 暑い、じめじめした、うっとうしいモンスーン地帯の夏。東南アジアやアマゾンのように一年中、濡れるか乾くかの二つがあるだけとなればカクゴがついて暑熱にも耐えられますが、日本のように四季があると、ついつい秋や冬に膚がなじんでしまって、夏がくると、苦しめられます。まるで暑熱のアマチュアみたいに。

◎ 今年はこれから後半期が私にとってのウオータールーです。ヒマなときに念力を送って下さいな。オンナの、選りぬきの、すごい。しつこくて持続するやつをお願いしたいです。

◎ 川島氏があなたから英訳原稿が送られてくるのを待っています。

Y. C. B. S. M. S. タンネンバウムさま。

ごぞんじ

=====

1978年8月13日

開高様、牧様、

しばらく御無沙汰したので大分御報告しなければならない事があるようですけれど、順序不動に思いつくままを書きます。

まず象彦のお菓子皿をどうもありがとうございました。八月にはいってヘンリー・マリニ（今度 Revlon Japan の社長になります）が日本に置いて来たものを持って来てくれたので、あらためてウヤウヤしく開けてみて、その美しいのに驚きました。前にも申し上げたように、結婚のお祝いを二度いただいたような感激にかられて、こういう時に神棚でもあれば又ウヤウヤしく箱に納めて祀るのに、と思いました。いつか特別な物をお客様に出す時に使わさせていただきます。めったな物はのせられないという感じです。と言っからといって、又ヨーカンなど送らないで下さいね。私は少し漆について研究論文を書いた事があるので、いい塗りだという事くらいわかります。

それから御本をありがとうございました。『白いページ』はまたたのしみつつ読ませていただいています。大抵はもう拝見した物ですが、どこにも入っていなかったものもありますね。とてもたのしく読んでいます。早く読んでしまわない理由は今中国についての本を一生懸命読んでいるからです。やはり24名の旅行団の団長さんだから少しおさらいをしないとイケないと思って読み始めました。実は11日から25日間でパリとアムステルダムへ行く筈だったのです。ルーブルでピカソの集めたセザンヌやマチスやミロやルオーなどの珍しい絵の展覧会があり、アムステルダムの王室美術館ではヴァンゴッホの集めた浮世絵を見せてるので主人がぜひとも見たいといったのです…暑いから嫌だけど、私も見たい事は見たいから、ホテルも飛行機も予約していたのです。そうしたらパリ空港コントロールのストで方々大渋滞をきたし、空港で9時間待ったとか、2、3日もおくれたとかいう話ばかり、それで待つのが大嫌いな人間が二人たちまち意見が一致して旅行は取り消しと相になりました。私は大喜びで毎日ピアノを弾いたり本を読んだり、家具を売ったりしています。展覧会が見られないのは残念ですが、この暑いのにヨーロッパなんぞ行きたくありません。そのかわり、中国から帰りに友達と二人でインドへ一週間行き、チューリッヒまで、シドニーが来るので、そのあとヨーロッパを二人でふらふらする事になっています。

話がそれましたが、私も『ロマネ・コンティ1935年』の本の出来の方が好きですね。あれは大変たのしく読みました。本の感じもとてもいいと思いました。

それからやっと短編集の原稿を川島氏にお送りする事ができました。一週間以内につく筈です。そうして同封のエミリー・ジャコブソン夫人の手紙も川島様へお送りしました。彼女はいろいろ言いわけをしています、私は先にお話したようにこちらへ帰ってからすぐ彼女に講談社インターナショナルの申し出について知らせ、早く原稿を返すか送るかしてくれといったのです。それをさっさとしなかったのは彼女の怠慢だと思いますが、私はニューヨークに四五度電話をかけて催促したのです。始めの二度は彼女は休暇でいず、三度目にお父さんが亡くなって家に取り込んだとか何とか云って、それでも大謝

りにあやまって、気に入らなければすぐ返したのだが、大変いいと思ったのでこちらで商業的に売れるかどうかいろんな人に相談していたのだ、とか何とか言いました。そうして、日本の会社に売り込むのは私の権限外だから国際部門の人に聞かなければならないということだったのです。それから一週間たってもなんとも言って来ないので私は業を煮やしてもう二度ほど電話でもうどうしても返してほしいと秘書に頼み込みました。ほんとうに無責任だと私はカッカとしたのですが、大きい **Literary Agent** となると、そういう事もあるらしいですね。私は一時は原稿を無くしたのだらうとカンぐりましたが、そうでもなかったようです。こちらでオリジナルがさっさと見つければ何という事はない、コピーを作って送ったのですが、引越しでどこかへしまい込んで、どうしても見つからないのです。のんきな話ですけど。

ジャコブソン夫人は大変褒めてくれています。お世辞を言わなければならない義理はない人ですから、まんざらウソではないと思います。講談社が出してくださればいいのですが。

さて、念力を送れとあります。つかぬことをおききいたしますが念力とは何ゾヤ。兵糧のことなりや。選り抜きのしつこくてすごいのは又おそろしい。鮫の白子というのはどうでっしゃろ。こちらにはすごくてしつこい、お酒のみの好きそうな食べ物とうのはありませんなあ。やはり自然から食物を探し出すのは東洋人の方が天才です。今晚食事に出かけてアラスカのカニの脚のフレッシュなのがあると聞いて、キンキジャクヤクとして注文しましたが、冷凍らしくパサパサしていてがっかりしました。それでもそんなものがあるのは珍しいので食べる事は、脚をくるみ割りで一つ一つ割ってほじくって一つ残らず食べましたけれどね。冬の日本海の美味しいカニとはだいぶ違うなあ、開高氏の、志賀直哉の文章を思い出しながら食べたのです。

そんな事で、何がものすごくて鼻血がでそうになあるかわかりませんが、もし見つかったらお送りします。私は **Brie** や **Camembert** チーズなど、単純なものが好きなんですけど、あれもちょうどいい時、ねっとりとした時でないとい食べられたものではありませんね。開高さんチーズはあまりお好きじゃないのでしょうか？何しろこちらの缶詰ビン詰めは皆外国から来て棚ざらしになったような物ばかり、いい事ありません。

私は友達がみな **Cuisinart** と言って大騒ぎするのでこの間大金を出して買いました。この料理用道具は万能だという謳い文句なのだけれど、私はハナから信用をなくしました。すき焼き用の牛肉の薄切りさえ作れないのです。いろんな電気で動かす混ぜる物、切るもの、すぐものと刃がそろっていながら、私にとっては料理上、必要第一条件と思われる、卵の泡たてさえできないのです。この間から私のアパートの物を **Garage Sale** で、一束三文、大安売りで持って行ってもらったので、「コンチクショウ、**Garage Sale** か蚤の市で売ったるか」なんぞと言って憤慨してるのです。私の友達など、パセリが一秒で刻めるとか、玉ねぎが二秒で薄切りにできるとか言って喜んでるのですが、そんなこと、包丁でお茶のこさいさいに切れるでしょう。それより一々機械を洗わなければならない方がよほどめんどくさい。人のいうことなんぞきくもんじゃないというのがこの事件から得たモラル。

では又書きます。サヨーナラ。

淑子

=====

1978年11月11日 (開高健氏より)

◎中国からハガキをもらったのですが、このところずっと雑用に追われて塵労にまみれていました。(いつもそうですケド……)『オーパ!』という本が出て、これはそちらにもうとどいていると思いますが、今年は日本の出版界はひどい落ちこみようで、単行本、週刊誌、月刊誌、マジメ・マガジン、フマジメ・マガジン、ことごとく頭打ち、下降、地盤沈下。達者なのはマンガ・マガジンだけという。そんなところへ2800エンもする『オーパ!』なので、こりゃもういけねエとあきらめて目をつぶっていたところ、これが奇妙に売れ、三週間たつたないかに三版になってしまい、うろたえています。スゴイ量の汗をかき、数百匹のダニに血を吸われして書いた本ですから、その血だけ回収できたらそれでいいと思っていたところがこの分だと、どうやら今年は女房子供にモチを買ってやれそう。

◎さて、同封したのはアメリカ版プレイボーイの副社長の手紙です。じつは『オーパ!』を日本版のプレイボーイに連載していた頃、その編集長の岡田朴氏が私と同年輩のせいとか、私にたいそうリキをいれてくれていましたが、アメリカ版から買ってばかりじゃつまらない。何でもいいからこちらからも一発、アチラへうちこみたいというものですからちょうどあなたの訳した「岸辺の祭り」の訳稿が手元にあったので、『夏の闇』、『流亡記』などの訳本といっしょに渡したのです。当時のあなたの手紙に、プレイボーイはあかんでと、一言で片づけてある一節があったのをおぼえています、それはすでに訳稿をアチラへ送ったあとでした。私の一存でしたことなので、すべて責任は私にあります。

◎講談社インターナショナルの川島氏に会ったのはその後のことです。川島氏はあのあとあなたから短編集の訳稿をうけとり、検討中でした。今も中です。そこへこのリー・ホール氏からの手紙がきたので、岡田氏はもっと何かありませんかと乗りかかる。コレコレコウコウでと説明すると、ウン、ソレソレという。川島氏は川島氏で、それはいいチャンスだから、ウチとはべつにやってごらんないといっぺあなた訳稿を全文コピーをとって送ってくれる。それを岡田氏に渡す。岡田氏はそれをもう一度、全文コピーをとり、コピーのほうをリー・ホール氏に送る。そういうことになりました。これまた私の一存。すべての責任は私。リー・ホール氏は手紙のあとを追っかけ、プレイボーイ編集部は大乗気になったとテレックスをうちこんできてせつついたものですから、あなたに何も相談しないでやってしまいました。しかし手紙にはあなたのこと、アドレス電話番号などを書いてホール氏に送り、何かする気になったときはきっとあなたの意向をたずねてからにしてくれと、いっぺおきました。岡田氏にはくれぐれもその点をしっかり書いておいてくださいヨと、しちくどくたのんでおきました。

◎というわけで、あなたの訳稿は、目下、講談社とアメリカ版プレイボーイの二つの、マージャンでいうリャンメン（両面）待ちという姿勢にあります。しかし今日（11月11日）現在はどこからも決定的なゴー・サインがきていませんから。ソチラはソチラで、もしどこか、あなたがいいと思うところがあったらどんどんことをはこんで下さい。私に無断で結構です。私はあなたに白紙委任状を渡してあるようなものなんです。むしろ今度の件についてあなたと相談しているヒマがないまま、一存で事をはこんでしまったことを私は苦にしています。すみませんでした。今後はすべて、あなたと相談します。ひょっとしたら電話をかけるかもしれません。

◎『ロマネ・コンティ1935年』という短編集のなかの「ロマネ・コンティ1935年」という短編をこちらで訳して見たいという話が持上っていますが訳者が誰なのか、タンネンバウム夫人ぐらいに英語と日本語と文学と人生と芸術がわかってる人なのかどうなのか、何もわかりません。ただ、あなたがもし持前のビーヴァー気質ですでに訳にとりかかっていたらしゃったらダブりますから、おたずねしたいわけです。

◎ヘンマツ。

ごぞんじ

PLAYBOY ENTERPRISES, INC.

Mr. Sunao Okada
Shueisha Publishing Company
2-15-10 Fujimi
Chiyoda-ku
Tokyo 102, Japan

Dear Mr. Okada:

At last I am able to respond to your request concerning Takeshi Kaiko, the author whom we discussed during my last visit to Japan. First, I have read most of the material (in English) that you gave to me. I find the work, especially "Darkness in Summer," completely fascinating. He seems to tell a story with great depth, to create the extraordinary from the ordinary.

I have passed along the material, and my comments, to the American Playboy editors and am sure they will answer you directly or through me very soon. Meanwhile I would be most grateful when an English translation appears of his latest works, including the report on Vietnam, if you could send a copy to me.

I look forward to seeing you again soon and renewing our friendship. As you can imagine we are quite busy with the starting of new editions of Playboy in Spain and Australia, but I hope to be in Japan again before the end of this year.

Best regards,

(signature, Lee Hall)
 Lee Hall
 Vice President
 International Publishing

/ep

=====

1978年11月25日

開高様、

そろそろ開高氏に一筆啓上しなくてはと思っていました所へ先を越されてしまいました。御立派な御本がまた出来上がっておめでとうございます。そのものすごい売行きだそうで、この金詰まりの世の中にまことに御同慶に耐えません。（私の手紙は例によってウソ字誤字だらけだと思いますがお許してください。ヘンマツとあったので大急ぎで）。

あの御本は第一美しいのに驚きました。実は私の仕事場の引越やなんかで忙しくしていて、まだ読ませていただいていないのです。たのしみにしているのですが、でも写真だけは拝見してどんなカメラを使ったらこれほど精緻でしかも芸術的な写真ができるのかと感嘆いたしました。多分私と同じようなカメラを使っていらっしゃるのでしょうか、そこが腕のちがい、モデルの違い（モデルにはあなたも入ってます！）。

私はインドへ行って沢山写真をとって来たのですが全部スライドでまだちゃんと見ていません。タジマハールを横から縦から見て、桜島ほどの溜息をつき、こんな美しい建物を建ててもらうにはどんな人と結婚していかなる妻であらねばならないかと（時機すでに逸したけれども）思いにふけた事でした。まあこの世に於いてはかなわぬ望みですね。でもあんな愛妻家が世に存在したのを知るだけ、その証拠を見せられただけでも嬉しくおもわねばなるまい。

さて、お申越しの件、私がやるべき事をそちらでどんどんお運びくださってありがとうございました。私には全然異存はございません。プレイボーイ、ペントハウス、なんでもよろし。出してくれるならば、以前にアカンデと申しましたのは「穴」を送って脈がなかったからです。脈がなかったのは私のホンヤクがまずかったせいではなかろうかと今も氣になります。これからは一生ケンメイ努力してもっとホンヤク上手になります。私の仕事場が出来たし（前の William Penn House で一部屋にバスルーム、キッチンの efficiency apt.を借りました）そこへタイプライターと椅子を持って行き次第仕事を始めます。今は『三四郎』の英訳の書評を書き終わった所です。訳はとてもうまい人だけれど、そのあとの分析がまるきり的はずれなので、やっぱりアメリカ人にはわかってないなと呆れ、ほめたりけなしたりした所です。その間に読んだ本はアンナ・カレーニナ岩波文庫七巻と、Gothic novel と Irwin Shaw の Beggerman Thief、これは Richman Poor man の続きで、全くテレビのソープオペラですけど、読み出したらなんとなくつる

つると読んでしまう Page-turner という所です。それにくらべると開高氏の作品は味わいながら読む本だからつるつるというわけにはいかないのです。

「ロマネ・コンティ 1935 年」は今またざっと目を通してみましたが、とうてい私の手にはおえないので、どうぞその方をお願いします。

私はタイプライターと椅子が動き、じゅうたんがクリーナーから帰って来、壁に絵を沢山かけ、本棚がつれ次第、ほんとうは明後日月曜からでも、『輝ける闇』の翻訳を始めます。そうしてそれが済んだら『青い日曜日』この二つは誰にも上げないでください。出ても出なくてもやります。

(❖『輝ける闇』を訳す決心を述べた手紙がなくなっている.)

『面白半分』は皆さんの開高観を面白く感心して拝見しましたが、私はバカな事を書いたものだと恥ずかしくなりました。どうぞお許してください。私の友達が「あんたの言ったことはチラリズムだ」と東京から書いて来ましたので、私は真っ赤になってしまいました。そんなつもりは全然なかったのですが「腿をそいで」というのはエログロらしいのです。私は中国の故事（昔勉強した『十八史略』でしたかしら）を思い浮かべていましたのに。とにかく私どもの尊敬するカイコーさんの世評はたいへんよろしいようで私まで嬉しくなりました。あわれなカイコーがだんだんあわれでなくなるのは残念ですが、今後もいいお仕事をなさってくださいませ。そうして第3部の『闇』ものが出たら訳させてください。私はまだまだ下手ですけれどこれからはおおいにベンキョーするつもり。

ではごきげんよう。 奥様にどうぞおよろしく。

セシリア淑子

(❖今グーグルで調べてみると、腿をそいで客をもてなす故事はやはり『十八史略』で、「介子推の具体的な行動として、亡命中飢えた重耳に自分の腿の肉を 食べさせた」とある。私は昔漢文学のクラスでその話を読んで覚えていたので、もし開高氏がフィラに現れたらそのくらい誠意を見せてもてなさなければならないだろうと思ったのである。昔の『面白半分』を引っ張り出して見ると、[毎年「来年はアメリカへ行きますからね、ご馳走してチョーダイ」と宣う。牧さんも傍から「開高が行くと瀬川さんの冷蔵庫がカラになりますよ」とおどかす。それが一年一年延びるので、利子が積もり、開高氏が愈々アメリカに乗込む暁には、私は熊掌燕窩猿の脳ミソどころか、己がももをそぎ肝を料って供給しなければ事足りなくなるのではないかと恐懼している。]と書いている。

=====
1978年12月25日

開高様、

さっき友人の家のクリスマスディナーから帰ってきた所です。ディナーといっても二時ごろから始まったので今まだ夜の八時です。クリスマスに母の所へ電話をかけようと思っていたのに24日の朝忘れ、夜忘れ、今朝忘れで、もう少しあとでかけようとおもいますが、13時間違いなので26日の朝になってしまいました。

ビーヴァーぶりを発揮して仕事の事でクリスマスに手紙を書きます。そうして翻訳の方はざっとした下訳が新潮社の『開高健全作品、小説8の部』の235ページまでできました。一ヶ月の間に134ページくらいやったわけですが、これはほんとうに片っ端から雑にやるので自慢にもなりません。このあとがたいへんなのです。日本語で読むと考えもしないですらすら読める文章が英語に直すと「これ何のことやろか」と思うことがしばしばで困惑するのです。そして理性的客観的には絶対にわからない感覚的な表現が多いので、まあ一体なんといえましょうや、と途方にくれることがしばしばです。たとえばですね（ちょっと本をあけて赤線を引いた所をさがしますと）、p. 225の「死の予感が昂進するにつれて生は上昇しはじめ、あまりに私は自身に憑かれていたのでどう避けることもできず…etc.」

p. 226-飢えかかった農民について蒼白で苛烈だがまさぐりようなない量に似た観念を膝にのせて…

これらは日本語だとスーッと抵抗もなくよくわかり名文でさえあるのですが、それほど感覚的でない文章でさえ、そのまま訳すと全く意味の通じない英文になってしまうので、私は頭をかかえて、開高さんあなたは どうしてこんな文章を書くんですか！とどなりたくなるのです。それからまた閉口するのはこの小説を英語に訳すと、きっとすごくセンチメンタルになる映像がいくつもあること。たとえばウェイン大尉 p.115-117, p. 164-165, チャン p.220 上段、クエーカー老人

p. 227-234, など。これらは日本語で読んでも少々感傷的にすぎはしないかと思えるのですが、英語だと観察が全部主観的なので非常にセンチメンタルになりそうだと少々心配です。できるだけそんな印象をさけるように adjective と adverb を減らしたいと思います。日本語には「いたましげに」とか「恥ずかしそうに」「打ちひしがれて」

「弱々しく呟く」とかいうような表現がやたらに多くてこまります。それから、これは開高さんの癖なのでしょうが、「絶望もなく希望もなく」「憎しみもなく愛もなく」

「何何もなくーもなく」という言い方。それから無邪気と荒涼、虚弱と練磨、傷と力があらずにいた、という風にふたつずつ対照的なものを並べるやり方が、翻訳をはじめるとすごく目につきます。次に質問を並べます。Spelling のわからないのがたくさんありますが、地名など他の本で調べて見つからなければ別便でお聞きします…今日はわからないとはっきりしていることについてだけ。

P. 102 : トーガ。Toga でいいのですか？

P. 109 : 「グランドに入ってゆくフットボールの主将のような足どりであたりをゆっくりと歩いているアメリカ人の大尉」…普通主将だけでなく、フットボールプレイヤーは

グラウンドにはいるときは練習のときも、本番のときもはずみをつけて走ってはいるようですが. . . .

P. 115 下段：醜いアメリカ人。この場合 Ugly American は本が出た頃の意味なのでしょうが、今 Ugly American というのだいぶ意味がちがってきているのでちょっと困ると思います。よく考えてみます。

P. 117 上：「友軍のことは批評したくないけれど...etc. 将軍連中はポケットをいっぱいにしたらクーデターをやって帽子をまわしあうんですよ」 これは他の連中に順ぐりに権力者になってお金持ちになるチャンスを与えてやるという意味ですか？

P. 121 下：「チベット国境までにげのびて延安に拠点を作ったが」チベット国境の方へ大迂回したことはたしかですが、この文によると延安がチベット国境のあたりにあるように聞こえる。延安は陝西省の北の方だからだいたい距離がありますね。最終的にはという意味で eventually とかなんとか言った方がいいと思います。

P. 131 上：「二つの村では腐ったような関帝廟のうしろに藁小屋の小学校があり。青いズボンをはいた若い先生がはだしの子供たちを集めて何か合唱させていた。」二つの村でこんな詳細まで全部おなじだということは絶対にはずですから、一つの村に変えてもいいですか？

それからついでに申し上げますが、いつも二三人の子供何とか、一つ二つとか一人か二人という言い方にぶつかるのですが、五六人とか七八人のときはたしかに目ですぐにはたしかめられないことがあるのですけれど、二三人の場合、二人か三人かはすぐにはつきり見えるはずで。英語で two or three soldiers (p. 135 上)とか two or three children (p. 229 上)とかいうとすぐに「見えるのでしょうか、二人か三人かちゃんときめなさい！」と言われます。日本人は清少納言の昔から、不定数が好きで、それはそれとしていい効果があるのですが、英語で two or three とか one or two というとかバカかと言われるかも知れないから、時々はっきり一つの数にかえるかも知れませんが、いいですか？

P. 136 下：「物価というものはミサイルのようにシュートアップして消えるものなんだといった。」ここは比喩が言おうとしていることと正確に一致しません。物価はたしかにミサイルのようにどんどん上にあがるばかりですが、消えはしません。消えるのは大尉が国へ送ったお金でしょう。アメリカ人はこういう所とても logical でうるさいから、このまま訳すと必ず指摘されますよ。

P. 140 上：「爽快な惨敗が体にあつた。」

これは「私」の体にでしよう？マーク トウェインに「負けた！降参！」という感じなのでしょう。その爽快はわかるのだけれど、惨敗というのは？ただ、やられた！ということなのですか？それとももっとひどい？ 惨という字を見ると私はとたんにもものすごい戦争の惨禍を感じてしまう。

P. 143 上：ヴンタウの岬のー今ベトナムの地図を見たんですけど出ていない。Spelling を教えて下さい。これとおしゃべり岬(同ページ下)というのは違うのでしょうか？おしゃべり岬は英語かベトナム語でよく知られている名前があるのでしょうか。ふつうは何とって呼ばれているのですか？

P. 145：チャアオンとチャオコ、これはあきらかに愛称ですね。Spelling を教えて下さい。これが固有名詞的な二人だけの愛称でなく、Darling! とか Sweetheart!とかいうような general なものでしたらその訳を入れるべきでしょうか。

P. 151 にもチャアオンがありますね。これは愛称ではないハローということですか？

P. 145：この歌は何語なのですか？ベトナム語だと思いますが official な英語の訳があるのでしょうか。

P. 157 上：「また行方不明ですな」これはどういう意味ですか？

P. 163 上：「ビフテキにプラスチックを入れますよ」バクダンのことですか？

P. 166 上：コイコイーこれは花札です card game らしいですね。全然知らないのですが、card game でもいいですか？このくだりはすてきにおかしいのでコイコイという名前もとてもおかしく味を添えるのですが、訳しようがないですね。

P. 173 上：蠟腸（ラブチョン）とは何ぞや？ソーセージみたいなもんかいなあ。

P. 176 下：ヴェロ 自転車の名？Vello ですか？フランスのですか？ Spelling を教えて下さい。

P. 178 上：ドク・ラップの Spelling

P. 179 上：大越党 Great Vietnamese Party ですか？ Official な訳がありますか？

P. 180 下：キンマ。Spelling？ 香料？食物？

P. 183 下：或る哲学者の……これはラブレーの言葉ですか？もしそうなら英訳をみつけてそのまま使いますが、そのままではなく、スタイルを真似ただけなのでしょうか？

P. 191 上下：名前の読み方。健（タケシ、ケン）王維（オーイ？ワングウェイ？）
向井敏（ムカイビン？ サトシ？）洪（コウ？ ハン？）
晴（ハル？ セイ？） 安竹澄信（ヤスタケスミノブ？アンチクチャーシン？）
乾武俊（イヌイタケトシ？）

P. 195 下：ガリン, キヨ、チェン Spelling?

P. 198 上： ルトゥール Retour?
 エヴォリュエ Evolué?

p. 199 上：「タケノコの芽」とありますが、Bamboo shoots はすでに芽の伸びた物なのですが。 タケノコの芽というとは何でしょうか。 タケノコのごく若いものですか？

P. 199 上： カサヴァ Spelling?

P. 217 下：雲白肉—これは何の肉なのですか？

(❖これは今しらべえたら豚バラのことでウンパイロウというんだそうだ。)

P. 224 上：「私の内部にはがらんだ倉庫があって褪せた言葉ガキッシリつまり」
これはすらすら読めて sounds good だけれど必ず揚げ足を取られますよ。言葉がギッシリつまっていればもうがらんだのではない筈だと言って。英語ではこういう矛盾したことは通らないのです。たとえば P. 220 上の「奥の奥まで透明で奥の奥まで朧であった気配はなく……」というのなど、私にはよくわかるけれど、きっと問題になると思います。

以上。まだ相当ありますけれど、一応私が調べて見つからない物をお聞きします。

この最近読んだ本：Herman Wouk : *War and Remembrance*

John Irving : *The World According to Garp*

Wouk のはまるで Soap Opera ですが、第二次世界大戦がヨーロッパと太平洋であつかつてあって、ものすごく面白く、二巻の厚い本をつるつると読んでしまいました。

Irving はたいへん面白いドライでウィットのある作家で、始めの半分は大いに面白かったけれど後は途中でやめるのが悔しいので読んだだけです。おしまいにはよかったけれど。この人はまだ若いと思います。

私が結婚してよかったと思うのは本を読んだり翻訳したりできるようになったという事だけです。

その点大いにハリ切っています。では又。

どうぞおくさまおじょうさまともどもにいい新年をお迎えくださいませ。

Cecilia 瀬川 Seigle Tannenbaum

=====

=====

1979年1月11日（開高氏より）

手紙ありがとう。すぐコピーをとってそれから註をかいて返送申上げる所存でありまするが、目下ちょっと忙殺されていることがあるので少しお待ち下さい。そんなに日数はかからないと思います。

『夏の闇』がフィンランドの出版社からクノッフの装丁とそっくりで出版され、同時にあちらの作家協会から話をしにきてくれとの申込み。そのあとノルウェー、スウェーデン、デンマーク諸国でも、これはそれぞれ各地の日本大使館主催ですが、やっぱり講演をしろという。今年はちょっと無理なので、それにこの試みは一年おきにやる習慣だとのことなので明々年六月、いくことにしました。フィンランド版の本はあちらから航空便で到着次第にそちらへ一冊送りましょう。

この15年間にヴェトナムを舞台に書いた短編が九作になったので新潮社からだします。
（❖『歩く影たち』1979年5月15日発行）

なかにはあなたの知らないものも三作入っています。『新潮』『文学界』『野生時代』などの今年の新年号に発表したものです。短編はこの一冊でもうヴェトナムとはお別れです。武器よさらばです。今やっている長編でもちょっとヴェトナムを使いますが（何しろ『輝ける闇』以来の連作ですからね）それが終ればほんとにお別れです。永いつきあいでしたが、もうおそらくふたたび書くことはあるまいと思っています。短編集は5月に出ます。出たら送ります。

毎度のことながら翻訳の仕事、御苦勞様。全くあなたはよく働く。日本婦道の鑑。ピューーリタン顔負けです。感心します。すごい。ジュタドミール。

C. S. タンネンバウムさま

ごぞんじ

=====

1979年1月23日

開高様、

お体はその後如何でしょうか。

あちこちキリキリ痛くて針を打ってもらわなければならないということは、よほどのお仕事ぶりと思わせられますが、その後再発いたしませんか。

私は毎日書齋へ来ては猛労働ですが、私の方が若いのか、怠け者なのかそれとも摂生がいいのか、肩も背も痛まず（痛くなったら立ち上がって体操をするのです）順調にいます。

（❖上記の体の痛みを書いた開高氏の手紙がなくなっている。）

一回目の推敲が半分位まで進みました。こうやって読んでみると、開高氏に腹もたたず、やはり「名作なるかな！」と心から感激しています。下訳をやっていた時は本当に日本語の英語に訳すことの難しさ、日本語のくどさ、主観的表現の多さ、繰り返しの多さに閉口したのですが、推敲にかかるとそうでもありません。

私がとくに好きなのは素娥とベトナムの小さい通信兵、「隊長殿、あなたを好きになりたいのであります。メルシ」と書いたボール紙をくれる所、かわいらしくて涙がでます。

（私がよく泣くのはご存知でしょう）こういう所がちっともセンチメンタルにひびかなくて、かえってウエインやクウェーカーの老人がセンチにきこえるのは、私がベトナム人を知らないから盲目的に好意を持ってしまうのでしょうか。トガなんかかわいらしくて、私が男性ならめっちゃくちゃにあわれみ、好きになってかわいがられずにはいられなくなると思います。開高氏の筆の力は全くたいしたものです。この小説の中に流れるあらゆる人への人間愛が非常な魅力で、これはもうどうしてもいい訳を出してみんなに読んでもらわねえ、と思っているのです。

この間お電話した時、お話できなくて残念でした。ただ『輝ける闇』がケッサクであること、順調に行ってること、うまく訳せばいいが（というのは英語で立派な文学作品として独立できるものになること）と思うこと、これをやってる間、私は最高に幸福であること、などお知らせしたかったのです。

では又。ごきげんよう。

おくれませながら明けましておめでとうございます。

セシリア淑子

=====

1979年3月22日発信

（❖この手紙はゼロックスコピーした同じものが開高記念会から返されてきた。明らかに記念会では私の手紙類を全部コピーしたものらしい。）

開高様、

お元気でしょうか。先月『白いページ』をお送りいただき、一気に読んで大変感心しましたが、翻訳推敲の最中で、すぐお礼を申し上げようと思いながらお便りできませんでした。三度目の推敲を終えて、今主人に見てもらい、ヘンな所を指摘してもらって、それを書きかえてから四度目のタイピングにかかります。その度毎にタイプしなおすのでたいへんシンドイのですが、四度目くらいにはちゃんとしたものになってほしいと思います。

（❖コンピューターはまだなかった頃の話である。少なくとも私はまだコンピューターを持っていなかった。）

先におたずねした質問、全部帳消しにしてください。

色んな本を調べ、オーデンの本、マルローの本、グリーンの本、トウェインの本、ヴェトナムについての本で、大体わかり、友人の紹介でヴェトナム人に手紙を書いて、スペリングもだいたいわかり、二通目の質問を彼に昨日書いて出しました。今日はどうしてもわからない部分とご了解を得たいことについて書きます。

ページは全部開高健全作品（新潮社 1974）小説 8 に出ているページです。順序不同ですがお許してください。

158 上：「耳たぶのうしろのあたりに女の声が何度もひびいたり、とおざかったりした」

これはトガの声ですね。思い出しているのですね。

159 上：最後の二行「やっぱり面はうごきやまない生の流れの．．．にすぎない」

この文章はわかりません。だから面の中の眼でさえも死者の開いた眼のように怖くはないというのだと思うのですが、これをこのまま訳すと何とも意味が通じませんし、私自身、この表現の真の意味が分かっていないのだと思います。

180 下：「螺旋状に上昇することだけをめざして行進しているものを迎えると．．．．ガラスにひかれた傷痕のようにクッキリと眼に見えているのだろうか。」

このメタフォアはわかるのですが（ような気がするのですが、きっと問題になると思います。まだこの部分は誰にも見せていないのですが）

187 下：「衰頹が呼応した」ざわめきつつ走って行った川に呼応したのですか？これもこのまま訳したのでは意味が分からないと思いますが、私にもわかっているのかどうか。

195 上：「哲学に適用される“体系”という言葉は、むしろその言葉の力において、あなたの伝言の明白な存在をこばみはしますまい．．．．」
これは全然わかりません。

241 上：「ある晴れた日、空に閃光があっても、私には何事も起りそうにない。いまそこにいるのだから．．．．」

これは「私」があまり荒廃しているので原爆が落とされても何も起らないだろう、ということなのでしょう。閃光について何か説明的な「核爆の」とかというような言葉をつけなくてもわかるのでしょうか？全然私の思い違いでしょうか。

268 上：「それを超える言葉こそ核の力を解放するものであり、言葉は無数に与えられたが、どれも言葉を超えなかった。」

これは難しいです。口で言うばかりでなく、それを実行に移す時こそいよいよ核戦争が始まる時なのだ、と取れないこともないのですが、そうすると意味が前後とあまりつながらないし、つなげようとすると、「とにかく説教は多かったけれどどれもあんまり意

味をなさず、言葉の羅列だった」というのが主な意味だろうと思うのです。そうすると「核の力を解放する」云々はちょっと突飛にきこえるので、どう解釈したらいいか．．．どうぞ御教示ください。

=====

次はご了解を得たいこと、乃至、違った意味の質問。

101 上：ウェイン大尉は全裸で登場するわけですが（私はそこにいなくてよかった！）すぐ小屋を出て行きますね。そうするとすっぱだかで行ったということになって、こういうことはこちらの編集者はすぐ指摘するので、勝手ながら「パンツをはいてからベッドの下からウイスキー瓶を」取り出したことにしてもよろしいですか？

101 下：バーボンの「滴は軽く．．．枯草の匂いがした」

うちのじいさん主人は飲み助でギブソンとスコッチ専門ですが、他のお酒のこともよく知っています。彼は「バーボンは酒の中で一番重い感じで、果物の匂いがする。これは絶対に間違っている。私が読者だったら、ここ迄読んでこの文章に突っかかって先を読む気がしなくなるだろう」と言い張るのです。私はお酒の味など個人の主観だし、重かろうが軽かろうが飲む人がそう思って飲むのだからいいでしょう、と云うと、しかしある程度同感を感じなければ始めから作品を信じなくなるというのです。これは日本酒に比べて軽いというのでしょうか。だったらそれを入れたらどうかしら。アメリカ人はスコッチ飲みが多く、スコッチにくらべてバーボンは重いといわれているようですが。

それから「噛む」という表現。Bite という言い方は時たまギャングの Macho の表現でつかわれることもある、しかし普通には使わないし、そういう言い方をすると文章に品がなくなる、と主人がいい、カズン ミリアムは、これは絶対使うべき言葉（お酒に関しては）ではないと云います。もう少し色んな人に聞いてみるつもりですが、主人は文学者ではないけれど、ずいぶん手あたり次第に読む人ですし、文章を書いて広告業で成功した人ですから英語について彼が言うことにも一理ある筈だと思うのです。

149 上：「ヨウ．．．ヨウ．．．トイ．．．ヨウ．．．」と「チャア！」

この声、後にも出て来ますね。このスペリングについてベトナム人に手紙で聞いたのですが、セックスの最中の声だとはまさか言えないので、感嘆詞だといいましたところ、ただふつうの、「oi Troi.... Oi.... Chao」にして来ました。そうなのでしょうか。それとも、他に含蓄の深い、意味深長なスペルがあるのでしょうか。

ベトナム語の Chao はチャーオンとチャオコはその方の説明でわかりましたけれど、この場面の「チャア！」というとき、Chao にすると、イタリー語の Chao と同じになってちょっとへんですね。

???：「豚の腰からはじき出す精液は云々」これ又ヘンな質問で恐縮ですけど、私の性的無知に免じてお答えいただきたい。精液というものは、おシッコみたいに外へじゃあじゃあ出るものなのですか？さても奇態なるかな。これは。私の主人は私同様何も知らず、私どもは他人同様なので、絶対に私に質問をかけて来ないと思いますが、他の

エディターが読んだらきっと質問すると思うのです。それと私の後学のために（この中年のバアさんが後があると思ってる所が妙ですね。）

時々、くりかえしの多い所、それからいつも同じ表現がきまって出て来る所は切除させていただきます。たとえば、230 上と 234 上のクエーカーのおじいさんの顔、「深い皺に荒らされた醜い顔」というのは一度言ったら印象に残るので、くりかえしません。シートが炉のように熱するというのも二度くらいでやめておきます。

蚊帳が「雲のような」というのも二度位。これはグレアムグリーンも「雲のような」と書いています。他に沢山すばらしい形容があなたの本のなかにありますが、たいていすばらしい形容は一度ですごく印象に残るので、繰り返さない方がいいと思うのです。

では又、いつもうるさいことばかりいうババアだと思いいになるでしょうが、キンベンさにめんじてお許しください。今まであんまり早くやりすぎて雑になったと後悔していますので、今度はゆっくり、丁寧に、きつとどこかに出版してもらいます。もちろん一番先にかけあうのはクノーフです。そろえて出してほしいとおもいます。牧様にどうぞおよろしく。六月二十一日から四週間スキャンジナビアへ行きますが、それまではどこへも行きません。ごきげんよう。

セシリア淑子

=====

1979年5月1日（封筒の日付4月2日と違う）

これは辨解にならないのですが、あなたの質問状を机において悪質なカゼにかかって寝こんでしまったり、治ってまたかかったり、そのうち去年“文藝春秋”に書いた「玉、砕ける」という短編で川端康成賞をもらって、その週がまたニューズ種のない週だったので二、三の週刊誌にインタビューで攻めこまれ、そこへこんな本ができてきたりしたもので、すっかりあなたへの返事がおくれてしまっています。いま少々お待ちを。（❖こんな本というのはどの本かわからない。）

ごぞんじ

（赤ペンで）昨日（4・30）のお電話のあとになりますけれど、すでに書いてあったのでこのまま送ります。質問状の回答も送るだけは送ってみますが、それを待ってもよし、待たずともよし、すべてはあなたの御心のままにふるまってください

=====

（❖文藝春秋社の封筒に開高健とあって、宛名は
Mme. C. S. Tannenbaum
2401 Pennsylvania Ave 16-C-51 (The Philadelphia Apts.)
Philadelphia, Pa. 19130
U.S.A.

と気真面目に書かれている封筒（開高氏の字ではない）があるが、中身は失われている。1970年の5月の何日かに投函された物らしい。日付がはっきりしない）

=====

1979年6月12日

開高様、

お元気でいらっしゃいますか。先日から色々な御本をお送りいただき、何時もながらのご活躍ぶりに感嘆しています。川端賞おめでとうございます。それにしても本当にどんどんよくお書きになれますね。そういうのが脂が乗っているというのでしょうか、おたくはよく脂ののったものを召し上がるには違いないけれど、いくら脂を食べてみたって頭や手が動かなければ何にもならないのですから、あなたの超人的なご活躍ぶりは、何もかも揃って身につけていらっしゃる上での、ご努力の賜物とお慶び申し上げます。

こちらは6月21日にスカンジナビアにたちますが、この所、ずっとシケていて、これからの仕事の予定も立ちません。とくに今日はそうです。というのは5月15日に手紙をつけて（同封）クノフに『輝ける闇』を送り、今日その打診のためにクノフのグリーン氏に電話した所、今日原稿を送り返すところだ、それにグリーン氏の手紙がついてるから、ということでした。もちろんまだ受け取っていませんが、それが来たらコピーをとってこの手紙と一緒に送りします。しかたがないからリテラリー エージェントで有名な人に手紙を書いて、その人に売り込んでもらおうとおもいます。でも **Literary Agent** というのも自分がお金をもうけるためですから「売れる」という自信のあるものしかとりません。だから引き受けてくれるかどうかかわからないのですけれど、私が一軒一軒戸と叩いて回ってもダメだから、マーケットをよく知っているエージェントに頼んだ方がいいと思います。

五月の半ばにワシントンの **Library of Congress** で日本文学の **Symposium** があり、出席しました。二日半の会議でした。キーン氏は始めの夜だけ来て、詩を読んだそうです。私はその時ホテルについて、めんどくさいから今夜は出ないことにしよう、と寝てしまいました。翌日行ったらもうキーン氏はいらっしゃらなくて残念でした。知ってたら疲れていても出席しましたのに。有名一名翻訳家で来ていらしたのは、ハーバード大学のヒベット教授、イエールのマクレラン教授、アイオワ大学のライアン教授、ワシントン大学のライマー教授などでした。それぞれ皆さん、日本文学のすぐれた翻訳をもっと出版して欲しいものだというような話ばかりでしたが、だいたいワシントン大の（シアトル）ロイ・アンドリュウ・ミラー先生みたいにカチカチの学者肌の人が多かったので、全体的に私が直面しているような出版さえしてくれればいくらでも仕事はするけれど、というような問題とは程遠いもので、とにかくアカデミックに価値のあるのをといった雰囲気でした。出版社は講談社やタトルのチャールス・タトル氏、コロンビア大学出版局の

（❖ここで一ページ紛失しているらしい）

1979年6月19日

さて、上記の2ページまで書いてから、ぶらぶら（ではなく、いろいろあちこち当たって見たのです）クノフへ送った原稿が昨晚手紙とともに帰ってきましたのでコピーをとって同封します。その他私が始めにクノフに送った手紙やコロンビアの **Translation** という雑誌に送った手紙やその返事もお送りします。こちらでは原稿を返してもらうために、自分の宛名と所用額の切手をはった大きい封筒を入れておくとは必ず原稿を返してくれます。それに手紙までつけてくれるのだからていねいなものです。

コロンビア大学のダラス・ギャルヴィンさんに私が返事をもらったあと電話で聞いた所によると、「笑われた」がたいそうよかった。けれども長すぎるのだ。いつかまた機会があれば出すかもしれない。この作家はきいたことないけれど、とても面白いと思う、といっていました。それで、ぜひぜひ来たる **East Asian Issue** には開高氏のものを出していただきたいと思って――もうスペースはあらかた詰まっているそうですが――長さの丁度良い「穴」と「一日の終わりに」を送るけれど、それよりも小説の一部はどうかしら、と言ったら、それでもいいから見せてくれ、ということでしたので、又同封の手紙やらノートをつけて送りました。手紙に書きました通り、私は「穴」と「一日の終わりに」は軽すぎるので『輝ける闇』抜粋を出して欲しいと思っているのです。この雑誌は大学雑誌ですから稿料なんかくれないかもしれません。まだ聞いていません。もし出たら（どうせ少額でしょうが）規定額の三分の一をお宅へお送りします。今の所開高さんは私と同じで、お金なんかどうでもいい、とにかく出版してほしいという心境じゃないかしら。だって日本であんなにどんどん出していらっしゃるのだから収入はそちらからのので十分でしょう。アメリカからもどんどんお金を出してくれればそれに越したことはないけれど、私としては、とにかく活字にしてもらわないことには、と思っているのです。

川端康成だってサイデンステッカーさんがどんどん訳したからこそノーベル賞をもらえるほど世界の人たちに読んでもらったわけでしょう。とにかくお金なんかいらぬから、コロの雑誌みたいな毛並みのいい所へ出してもらえたら、と思うのです。「笑われた」は何度も申し上げたように、私も大好きですから、これが出ないでじっとしてるのは大変辛いのです。先になって出してくれるのを待つか、**Japan Interpreter**（朝日新聞の）か、上智の **Monumenta Nipponica** へ送ってみようかとも思っています。これらは皆限られた部数ですけど、評判はしっかりしています。こちらに **Short Story International** という小雑誌があって、いいものとくだらないものといっしょこたです。それにサイデンさんの訳した川端の「ほくろ」（私の大嫌いなストーリー）と幸田文の『黒い裳裾』が出たので、安心して、これなら、と思ってしらべた所、この雑誌は他の雑誌に英訳が一度出版されたもののみ転載するということで、がっかりでした。「穴」や「一日の終わりに」もこの雑誌なら丁度いい感じなのです。

それから先日川島氏へ手紙を書きました。講談社インターナショナルから『輝ける闇』を出していただけないか、という問い合わせです。もし興味がおありなら原稿をお送り

する、と書きました。それで開高さんからもお口ぞえ願えませんか。あさって発ちますが、もし返事が来てれば、帰ってからすぐお送りします。それと別に出版社の名を15くらい書き抜きましたので、その全部にこういうストーリーがあるが、見ていただけないかという問い合わせを出すつもりです。興味を示した所からだんだんに送って見るつもりです。これは Agent がする仕事なのですけど、この間書きました Borchardt という Agent は自分たちの知っている名のある著者（自分たちの client というのはもう決まっている、というのです）の作品だけしか扱わない、新しい人は入れない、ということでした。ずいぶん旧式だと思います。

ドナルド・キーン氏にお手紙を書いて、一方ではアカデミアでもっと日本文学の翻訳を出して欲しいと言ってるのに、出版界は少しも興味を示さない、そのデイレンマをどうしたらいいか、出版社を見つけるにはどうすればいいか、お聞きするつもりです。私はいくらでもやる氣はありますのに。

それではごきげんよう。この旅は私にとってちっとも楽しくありません。スカンジナビアの4国とアムステルダムへ行くそうです。帰る予定が7月20日ですけど、主人がまた怪我なんかして、二週間くらいで帰ってくるかもしれませんよ。それでなくても、「あー疲れた。動き回るのはもうごめんだ」とかなんとか言って帰らざるを得なくなるかもしれません。病人でもないのに、昼の12時1時まで眠ってるんですものね。夜もちゃんと1時から2時までには寝に付いているようですよ。つまり、世の中に楽しみがないから、エスケープのために寝てばかりいるのでしょう。寝袋みたいなおやじさんで、私はもう嫌になっていますので、夕方5時半から夜11時頃までだけのおつきあいです。土、日曜はお昼頃からですけどね。ごきげんよう。牧様におよろしくお伝えくださいませ。

セシリア淑子

=====

1979年7月17日（開高氏より）

この手紙がそちらに着くころには、私、アラスカの荒野の河でサケを釣りつつ、キャンプ生活をしているはずで。それからカナダ（ブリティッシュ コロンビア州内各地）、ネバダ砂漠、ロッキー山脈と転戦して、八月末か九月初、ニューヨークに入ります。たぶん、そこからあなたに電話を入れます。散歩のつもりでニューヨークに出てきませんか。河岸の灯の見える所で小さな、アンティームなレストランで、魚料理などたべようじゃないスカ。（今度の旅行のスポンサーは朝日新聞。つまり、親方日の丸というワケ。お金だけはたっぷり用意してあります）。

ニューヨークのあと、フロリダ、メキシコ、南米へわたってヴェネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、チリー、ボリビア、パラグアイ、アルゼンチン、パタゴニア、フエゴ島。それから南極大陸の突端部のどこかで海中に温泉のふきだしているところがあ

るというので、ここで入浴。それでチョン。双六のアガリというわけ。ポンコツ気味の48歳のおっさんが老馬ロシナンテに鞭うちつつの征旅、幾山河であります。

せんだってのあなたの手紙の要旨を講談社インターナショナルの川島氏に伝えました。そして『輝ける闇』と短編集、いずれかもしくは両方、出版しないかと、レトリックをつくして持ちかけました。『輝ける闇』の訳稿のコピーをフィラからとりよせるよう提言しておきました。もし、まだ、彼から手紙がそちらへいってなければ、コピーを送ってやってはどうでしょうか。

ダットンという出版社が日本の本のブックフェアで『オーパ!』に目をつけ、出版したいが本文の一部の英訳を読みたいと、集英社にいうてきまして、集英社は誰かええ人いたはりまへんかというので、私、その場で一も二もなくあなたの名をあげ、アドレスと電話番号を与えました。もし連絡がそちらへいったら、よろしくお願いします。（ひょっとしたらあなたがスキャンデナヴィアへ旅行している留守中にあったかもしれせん。）

あなたに会えるのをたのしみにしています。ニューヨークに心おぼえのあるレストランがあれば、考えておいてください。できたらネクタイをしなくてもいい、河岸の、静かな、小さい、親密な、とびきりの魚料理の店がいいス。私、タンノーがないから、肉料理よりは魚料理のほうがいいのです。

タンネンバウム夫人

ごぞんじ

=====

1979年12月22日

開高様、奥様、

ご無沙汰申しあげておりますけれど色んな突発事件でお便りできませんでした。もうすぐ開高氏第何回目かの御聖誕の日が近付きますのでお祝いをもうしあげるために書きます。

私は11月10日に二度目の寡婦になりました。本当に思いがけなく急な死でした。私は9月に25日間ヒマラヤに行っていて、帰ってきて3週間にもならないうちに主人が急病になり、テストのために入院して四日目に亡くなったのです。その後呆然として泣いたりしながらも、たいへんな忙しさで考えている暇もないくらいです。まだ主人が亡くなってから十日あまりですのに、もう遺産のことでごたごたしているのです。整理は一年以上かかりそうです。というのは、私も遺産執行人の一人なのですが、他の二人（弁護士と会計士）が私に悪意をもっているようなのです。会計士は始め好意をもっていて私に優しくかったのですが、弁護士はそうではありません。1976年頃、シドニーが寡夫になった時、遺産を全部美術館に残させようと思っていたのに再婚してしま

ったので当てが外れたのでしょう。自分が美術館の理事長になりたかったので、お金集めが手柄になるのです。シドニーも彼も美術館の理事ですが、いつもその人は会長の席をねらっていました。それで今度会計士を自分の味方につけていいようにしています。私は彼らに「今住んでいるところに同じ形で住めるほどの遺産はない」と脅かされたり、いろいろ敵意のある意地悪なことをされたりしています。私はもうどうでもいい、と思っているのですが、十一月十日以後のこの弁護士豹変ぶりは明智光秀の裏切りのようにめざましいものです。

『輝ける闇』の出版については大島さんにお知らせを聞いたきりです。そう言えば開高さんが八月末か九月はじめにこちらへいらっしゃるとおっしゃったけれど、待てど暮らせどお手紙もなく、お電話もないままなので、私はヒマラヤへ行ってしまったのです。ご無事で日本へお帰りになったのでしょう。

どうぞお二方ともお元気でよい新年をお迎えくださいませ。

早々、

セシリア瀬川のきょうこう

十二月二十二日

=====

1980年1月9日（牧羊子氏より）

お手紙拝見、おかわりなくお過しのこととばかり思っていましたのに、ご主人様のご急逝本当にびっくり致しました。心からつつしんでおくやみ申し上げます。どんなにかおつらいお気持ちでさまざまの出来ごとにぶつかりなされたのですね。ご書面からうかがって、少しも存じ上げなかったとはいえ、すっかり手もとの多忙にかまけてご無沙汰失礼申し上げて居りましたこと、何のお手伝も出来ませんで、このお返事さえもずいぶんと遅れてしまいましたこと深くお詫び申し上げます。どうぞこの上はくれぐれもご健康にご留意なさってご健闘あそばされますようひたすらお祈り申し上げます。

さて南北アメリカ縦断釣魚取材班のスタッフ一行は目下ペルーのリマに、ここもこの一両日に出発の予定ときいて居ります。実はお手紙を拝読致しますまでとくにNYでもお目にかかってお話し合いなさっていらっしゃったものと存じて居ましたから、これまたおどろきで、丁度正月にリマに入りましたのを幸い、やっと国際電話が通じて早速お手紙のむき本人に伝えましたところ、勿論ご連絡申し上げるつもりで居りました由。ところがNYに入るとサントリーの新聞とCMの撮影隊と合流しての仕事があり、その他に日本交通公社の『旅』編集部が日本から飛んできて、地元の人とのいくつかの会合がありで、それまで、といいますのは七月二十日日本出発でアラスカから南下北米両内陸の釣魚日程の強行軍でヘトヘトに疲れている上でのハードスケジュールのために、今日こそ今日こそと思い過ごすうちに全体の日程をすでに三週間近くも遅れ、あわただしく北米を離れることになったために、ご連絡出来ず、申し訳なく思っています。どうぞ他意のないことをおくみとりいただけるようにと、お詫び申し上げてくれとの事でした。

何しろ家にもハガキ一枚寄越さない人ですし、国際電話をかけるにも、ひとところに長く逗留しない旅なので、原稿をかくために珍しく数日を過すことになったカラカスとペルーのリマの二カ所でやっと電話が通じたぐらいのもの。瀬川さんのお手紙を私が拝受したのは、丁度暮れちかく、東京の家の掃除に帰っていて、ここでも少し遅れてしまい、お手紙の内容におこたえするにはさきのリマに連絡をつけることと、訳して頂きました『輝ける闇』の出版を問い合わせるためには正月の休みあけに出社する出版社の人をつかまえるまで、お待たせるする（ママ）ことになってしまいました。五日が生憎と土曜日になり週五日制になった当人は結局七日の月曜日でないと連絡できず、ところがこの月曜日が皆さん年始まわりらしくて、やっと火曜日になって講談社インターナショナルの川島勝様とお話が出来ました。

瀬川様のお手紙の大島様とお名前が違いますのが気になって川島さんにそのこともお話ししましたが、関係者で大島姓の方をご存じでないとのことですが、これは瀬川様の方で何かお気づきでいらっしゃいますか。

瀬川様のお手紙を頂きます一ヶ月程前になりますでしょうか。講談社インターナショナルの川島さんからお便りを頂きまして、これは電話でございましたが、『輝ける闇』を瀬川様のお仕事で出版させて頂きたいことはすでに瀬川様のご了解は得ていますとのことでした。ついては開高の許可をと云われました。といわれましても旅でたえず移動している主人との連絡はさきにも記しました事情で折り返しというわけにまいりません。週間朝日のデスクはむかしヴェトナムへ参りましたころも担当してくれた方でとてもよく世話がゆきとどいていたすかるのですが、それでも思いにまかせませんのは旅先がシテイではなく目的地は原野という不便なところだから仕方ございません。たまたまこのときは何日か後にカラカスに入る予定でしたから川島さんにはそのようにご猶予を頂き、カラカスで通話できましたときに本人に話しましたところ大変よろこんでどうぞよろしくとの事で折り返し川島さんにお電話申し上げました。本は五月ごろに出るとの事でした。でこの件についてはそれこそ一件落着と思っていましたところへ瀬川様のお手紙なので、これまた指名人名が一寸違っているしとたいへんこちらもあわてました次第です。

一月八日川島さんに瀬川様のお手紙のことをお話ししましたらば、大島さんのことはさきにも記しました通り、それと私が不思議でならないのは、川島さんに開高の返事を申し上げたはずなのに、私からの返事がないのでそのまま保留になっているとの事。それに五月ごろには本になりますというお話でしたわねと念を押しますと、それも開高さんの了解がなかったのと答えられ、では本人からの直接の電話でもなければダメということですかとおたずねしますと、いいえ伝言でもいいのです。私昨年お返事を電話で申し上げ、五月云々のお話だったと思いますと申し上げたのですが、きつねにつままれた思いです。それに電話のこと故お声をきいただけですので何とも言えませんが、昨年の方のお声は太くてはずみのあるもの、今度お返事くださる電話の主は細くおとなしく聞こえるのです。これが同じ方かしらと思いました。川島さんがおるすでどなただかが替りにかわりのものですとことわずに私の電話を受けて下さったのかしら。ともかく一

月八日のお電話で瀬川様がお訳してくださいました『輝ける闇』はインターナショナルが出版されこと（ママ）にちがいないようですが、それには電話だけでなくきちんとした出版契約をおXX（不明）にならなくてははいけないわけでございます。今この手紙をしたためていますのは九日の朝四時五十二分からただいま五時四十九分。八日電話のやりとりをしている最中に飼いネコのキンが奇声を発し、急に痙攣をおこして電話を了えるとすぐに獣医をよび、酸素ポンペをとりよせて吸入やらをひと騒動のあと、この子の親の代から数えると十六年なじんできたもとの（ママ、ものとの？）お別れになりそうこうするうち前からの約束のあった審美社（？）の方が夕方から来訪、キンの通夜をかねて雑用を手伝って頂き、家族が、といっても娘と二人ですが食事をとったのが十時を回っていて、少しくたびれ、早起きしてお返事することにきめ只今ペンを走らせています。とてもいそいでいてさぞお読みづらい字でと申し訳なく思いながらしたためて居ります。ごめんなさい。よろしくご判読のほどを。

『輝ける闇』につきましては右の通りです。ご不審のことがありましたらまたご指摘下さいませ。尚これまではあまりパツとしないお便りになりましたが、このあとは少しお心がなごんでいただけるお知らせになると思って居ります。瀬川様がお訳しになりました『輝ける闇』のインターナショナルにあります原稿のコピーを頂きまして、新潮社の沼田さんを通じてサルトル・ボヴォワール両氏におおくりしました。（この事務一切は沼田氏がなさいました。）これは朝吹登水子女史の紹介によるもので、朝吹女史の手紙をリマにとどけ、開高のOKをとり事務を沼田氏に依頼したものです。サルトル・ボヴォワール両氏からガリマールへ推薦して頂くわけです。いいお返事になることを祈っています。それともう一つ瀬川様がお訳しになった短編集の原稿、これは川島様に伺うと、一度おあずかりしたがとりあえず『輝ける闇』を出版してからということで、瀬川様のおてもとへお返ししましたと伺いましたが、沼田氏と相談しまして、こちらの方もサルトル・ボヴォワール氏へお送りしたいと存じます。で、もしご了解頂けるのでしたらさきにインターナショナルに寄せられたものを新潮社の沼田六郎太（出版局）氏宛にご郵送願えませんでしょうか。

勿論万事がうまくいけばガリマールから瀬川様の英訳を仏語に起こして出版にしたい、との沼田氏の意向と思われます。ただし後々の誤解がないように、どうぞご納得のいくように沼田さん宛に具体的なことを直接おたしかめ下さいまして塾考の上おきめ頂いてよろしいのではないかと思います。私も出版の契約の事務については海外のものはよくわかりませんので、瀬川様にご迷惑がかかることのないようそのみを案じ、しかしお仕事がひろく世界に知られるチャンスにはぜひご成功をと願う一念でしたためました。どうぞ良いお話でありますようにと祈りをこめて。

『輝ける闇』のお訳のコピーを沼田氏が瀬川さんの了解なしにサルトル・ボヴォワール氏へ送ったことについて、私は一寸引っかり心配しています。勿論開高がこれを希望したわけですが、あくまでこれは瀬川さんのご意向もうかがわなくてははいけなかったことではないかと案じているわけでございます。このあたりもどうぞご遠慮なくお気

のすむまで沼田氏と折衝して下さいませ。ご翻訳のことについては以後沼田氏が開高の代理をつとめてくれますから、どうぞなんなりと新潮社宛ご連絡下さいませ。

それでも尚不明の点（？破れている）がございますようでしたら、私でよろしければお話しうけたまわりお手伝い出来ますことならさせていただきます。要領を得ないながらもがしい文章でお目だるいこととございましたことと存じます。ひたすらご健勝と御多幸とご成功をと心から念じ上げつつ、これで失礼させていただきます。

五十五・一・九・未明

牧羊子拝

セシリア瀬川様

=====

1980年1月23日（牧様へ）

牧様、

長い御丁寧なお手紙恐れ入りました。誠に嬉しく拝読させていただきました。開高様もお元気でまだ南米で御活躍のよし、ニューヨークでの御事情もよく伺って謎がとかれ安心いたしました。つきましては私があわて者で、かてて加えて老化現象のため記憶が減退して川島様をうっかり大島様と申上げたために大そう御迷惑をおかけしたようで申しわけございません。どうぞお許しく下さいませ。

川島様にも先日前お詫び申し上げておきました。どうも覚えにくいというかよく間違える名前（簡単だからこそ間違えるらしいのです）があり、昨年五月にワシントンの会議に出たときもたしか「大島様という方が云々」と言って、出席なさっていた吉崎さまとかおっしゃる方をめんくらわせました。これからも又二三度位川島様を大島様とお呼びするかも知れません。私の頭の中の、そういうことをつかさどる脳のシワがちょっと足りないらしいのです。私は時々自分の主人の名前まで忘れましたが（ダンの方はよく覚えていましたが、愛情の足りない方の主人の名は、そのためではなくて、彼の名がそのシワタリン問題に属する名らしいのです。）よく覚えてる名や覚えやすい名はちっとも困りません。

それにしても御主人様はよく体力がつづきますね。長い長い旅ですし、野山谷川ろくなホテルもない所なのでしょうね。それにどこにも定着なさらずに常に動いていらっしゃるの、エネルギーを補給なさる暇もないでしょう。お魚だけは新鮮でおいしいのを毎日召し上がっていらっしゃるのでしょうか。

ペルーではマチュピチュやクスコへもいらっしゃいましたのでしょうかね。私も来年あたりぜひ行こうと思っている所です。今度いつかお二人でごゆっくり骨休みの御旅行がお

できになるといいですね。別々の御旅行をなさるのではあとであれがよかった、これがよかったというお話が出来なくてつまらないでしょう。私は今日、先年ネパール・シッキム・ブータン旅行に一緒に行ったおばあさん学者と一緒にニューヨークでお食事しましたが、やはりあれこれ思い出話をするのはたのしい事だと確かめました。いつもは一人でぶらりと行っても楽しさは同じ（どこかその方がいいと）思っているのですけれども。彼女は七十九歳で中国美術の専門家ですが、どこへもどんどん行くので大した元気だといつも感心しています。私はその点耐久力がなくてすぐに疲れてしまいます。

さて、先日川島様に契約書について私の考えを率直に申し上げましたのでそちらは開高様がおかえりになってから川島様とのお話し合いで決めていただきたく存じます。

この間の御書信ですとフランス語版を英語版からという風にとれたので、私は川島様にその事について大反対をしたのですけれど（というのは英訳の部分には、ずい分考えて英米人むきに表現を変えたり削除した所が少々あるので）今お手紙を拝見しなおしてみるとこれはそういう意味ではなくてただサルトル・ボヴォワール両氏から推薦して頂くためのようですね。私はとにかくきちんと日本語から訳して頂きたい、英語からフランス語に横うつしなどという怠惰なやり方は大反対だという意味で口をとがらせて川島様に抗議したのですけれど、これは全く私の思いちがいかもしれません。もちろん明治時代にはドイツ語やフランス語の原書が読めなくて英訳を日本訳にしたというような例もあったのですけれど、それは原始的な時代のことで、あらゆる国語の文学の勉強が世界中でなされているという今、私は作者の真意をよく汲み取ってなるべくその国特有の書き方で書くのが本道だろうと思っています。

訳のコピーを無断でお送り下さったことはたしかに御指摘のように少し意外に存じましたがお送り下さった先が先なので私は名誉に存じます。

とにかく開高様の御作があちこちで読まれるという事は私も心から望んでいる事ですので、訳の所属と出处さえはっきりしていただければ私に依存はございません。

お宅では長年かわいがってお飼いになっていらっしゃった猫の急死というような変事がおありになったそうでさぞ御心をお痛めになった事と存じます。今でも御淋しいでしょうね。あまり愛情をうつさないといわれている猫でさえ親子十六年の間お宅をにぎわしていた存在なのですから、開高様もお帰りになったらがっかりなさいますでしょう。いつかおうかがいした時、キンがずい分大きくて外をゆうゆう、あたりをはらって徘徊していたのを思い出します。猫の方が客よりも立派で威張っていた事はたしかです。

私の方は一人で住むのはもとより昔から大好きなので、この頃はだんだん慣れて来て悠々自適——とまではいかないのですけれど、気ままに食事など作ったり作らなかったり。やはり一人だとわざわざ作るにも心もこもらず面倒なので、いいかげんになり、不規則になってあまり健康によくありません。

この二三週間フィラデルフィア・オーケストラの拠金運動があり、私はそのためにカセット・テープ・レコーダーを持ってあちこち音楽界の名士の間を走り回り質問してその答えをテープする役目を買って出たのでずいぶん忙しく疲れました。それは私がせんに働いていた文化放送局（クラシック音楽専門）から流されています。おかげで拠金は順調に集まっています。その他お金及びいろんなものを寄付するのですが、その寄付の内容がなかなか面白いのです。二千五百ドルでフィラデルフィア・オーケストラを一時間指揮できるというのもあります。これは競売ですからもっと出す人がいるでしょう。その指揮棒にオルマンデイが記念のサインをして

くれるとか、いくら出せば有名な大邸宅に二日間とめてもらえるとか、中にはオケに千ドル寄付すれば離婚を取り扱ってやるという弁護士もいますし、それらが四五ページの新聞にぎっしり出ています。私も寄付金を去年より多く出し、それに六人分のデイナー・パーティーを売りに出しました。これはすぐに売れてその後も相当申し込みがあったそうです。私のアパートに六人のお客が来てカクテル、オードブルからメイン・コースとお酒は日本風、デザートとアフター・デイナーのリキュールはフランス物にするつもりです。幸い買って下さったのは昔から知っている人たちでオケの理事と日本名誉領事（というのは仕事はしなくていい領事）をしている人たち夫妻とその友達です。だから肩がこらなくて心配しないで済むだろうと思います。もっと大勢招くことはできたのですが、誰が来るかわからないのに十二人も招待するときと頭がヘンになって大失敗するだろうと思って少数にしたのです。

私は今でも懲りずに音楽会、バレエ、演劇などにせっせと行っていますが、せっかく浮世絵やそれに関する本がどっさりあるので、それを使って元禄から寛政あたりまでの文学と美術（浮世絵ですが）に現れた世相の研究をしてみたいと思っています。

五月の半ば頃から四週間か六週間多分日本へ帰るつもりです。川島様のお話だと五月六月頃に出版が予定されているということですが、そんなに早く出るものでしょうか。私は東大から出た『家』の訳が誤字だらけだったので（私の責任でもあります）『輝ける闇』はまちがいのないしっかりした形で出る事を望んでいます。またその時お目にかかれるのを楽しみにしています。

では今年が本当に平和でいいお年になりますよう、開高様牧様ご健康をお保ちになっていいお仕事进行をなさいますよう、心からお祈りいたします。

一月二十三日

かしこ

セシリア・瀬川・シーグル・タンネンバウム

牧羊子様

=====

1980年6月27日（開高氏へ）

先夜はたいへんご馳走にあいなり我ながら感心するほどいただき、また美女の大勢ウロチョロする穴倉へ連れて行ってくださってまことに有難うございました。

訪日中に二度もお目にかかり、二度ともご馳走になってしまいましたが、頭の悪いえせ翻訳者や飲んべえの出版社関係の人たちを、かく饗応しなければ気のすまない開高氏は世にも気の弱いやさしい方であることよと感じ入りました。ほんとうにいろいろお心遣い有難うございました。老いたる往年の美女やまだ若い美女を眺めるのも楽しいものだとわかりましたけれど、花ねずみか花もぐらか知らないけれど、女ばかりウヨウヨいるところでは次から次へ、半美女や醜女（しこめ）が現れて「いただきまーす、先生」と許可なしに次々と色つき水のグラスをあげるのには驚きました。あれはそちらの意見をうかがわないで勝手に結婚して結婚祝いをお宅からふんだくった私よりもよっぽどタチが悪いと思います。色つき水は本当のお酒じゃないんでしょう？ だけどそんなことを考

えるから私のような女はバーなぞに行けないのであって、男のかたは「ああいよいよいよ」とおうようにかまえて女に飲ませるのが楽しいのでしょうね。おうちで飲めばその二十分の一くらいで済みますでしょうに。男というものはしこめであろうが白豚であろうが自分の女房でない女に囲まれて「タハ！オモチロイ！」と絶叫する方がケンヤクすることより大事なのでゴザイマシヨウ。とにかく私にはその心理構造はわかりかねます。

けれども、鳥安、いわしや、くるみバアは文句なしに楽しく思いました。くるみさんは二十年前に見たかったと思います。今では私にはどうしても彼女の妹さんや、京都から来たみち子さんのほうがきれいだとしか思えません。彰子さんは特に気に入って、彼女なら浮気する男の気持ちもわかると思いました。くるみさんという人はババアのくせにへんな英語なんかしゃべって、よしときゃいいのに若がってあんなのはふるふるいやです。

帰ってみたら、弁護士から目の玉の飛び出るような請求書が来ていて、私はユーウツになってしまいました。これが何年も遺産整理のつくまで続くのだったらいくらあっても足りないでしょう。それに、もう一人の弁護士に税金、etc. etc.でたちまち剥がれてしまいます。この国の弁護士は全く追い剥ぎです。紳士面さえしていません。制度が何事にも弁護士を使わなければすまないようになっています。特に、私の場合のように二年足らずしか結婚していなかったものが、何やら漠然とした遺書で（それは遺書を書いた弁護士が誰にもわからないようにわざと漠然と曖昧な言葉で書いたのだとしか思えません）ある程度まとまった遺産を残されたものは、剥がれるのが当然のように方々から食い物にされます。

ですから八月二十七日以降、以前の住所に移ります。そこに移って生活を小さくして、自分のやりたい勉強と仕事をするつもりです。もし弁護士どもが私が生きていけるだけのお金を残してくれたら。でなかったら出て行って働かなければなりません、その結果がはっきりわかるのは二年くらい後のことだと思います。

先日お目にかかった時、今週はたいへんな週だとおっしゃいましたが、お仕事順調に行っているのでしょうか。何もかもうまく行って、来年か再来年あたり、ニューヨークでお目もじできることを望みます。

このノンビリした退屈でさえある（東京に比べれば）古都にも来ていただきましょう。私は東京は面白くてしょうがないのですが、やっぱり私の住めるところではないと思います。目がチカチカ、頭がクラクラしてどこへ行くあてもなくまっしぐらに走り出してトラックにぶつかるのが関の山でしょう。それに人々は食べることで儲けることしか考えていないような街です。

ではまた、どうぞお体を大切にあそばして、肝だの腎だの無くさないようにしてください。

牧様に今度はお目にかかれなくてたいへん残念でしたけれど、何しろ毎日できるだけ時間を図書館通い、本読みに使っていましたので。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それから契約書のことも有難うございました。

六月二十七日

セシリア瀬川シーグルタンネンバウム

マエストロ開高へ

=====

1980年夏、月日不明

開高様、

至急お尋ね申し上げます。先日お話ししたと存じますが、一度講談社からことわられた短編集、全編に手を入れ、序文30ページ（これが傑作ですゾ）も少し書き換えました。短編集はお知らせしたように「★穴」「★決闘」「★五千人の失踪者」「★笑われた」「一日の終りに」「★岸辺の祭り」などで、あまり早い時期のものばかりですので、この際もう一つ二つ加えて、もう一度川島勝ちゃんに提出して、ショウさんにでも見ていただこうと存ずる次第でございますが、先日「ロマネ・コンテイ」はたしかどなたかがお訳しになるということでしたが、「★玉砕ける」もどなたかがお訳しになったのでしたかしら。それをおききたいのですが、そのついでに「飽満の種子」「★貝塚をつくる」「★怪物と爪楊枝」「洗面器の唄」「戦場の博物誌」「黄昏の力」「渚にて」についてもお知らせいただけますかしら。そうしてその中でマエストロ開高が「これぞ!」とお思いになるものをお知らせ頂けますか。マエストロは「ロマネ・コンテイ」がお好きなのは知っています。（くるみさんの妹さんの彰子さんがあれ褒めた。彼女目があるネ）あれはもうお嫁入りしたからダメとして、私はここにあげた八つの中からできれば「玉砕ける」ともう一つやってみたいのです。短編集を川島勝ちゃんにどうしても出していただきたいのです。

（❖最終的には上記の★印のついたもの八篇が短編集にいれられた。1987年に *Five Thousand Runaways* と題されてニューヨークの Dodd, Mead & Company から出版され、ついで 1990 年にロンドンの Peter Owen 社から出版された。）

どうぞよろしく、お返事のほどをおねがいたします。

こちらは暑くて南では千人近くの人が亡くなり、まるで文明国の話ではありません。私は美味しいものをつくる努力は全くせず、食物をいかにまずく作るかのギネスブックレコード保持者のようにお鍋に野菜をぶち込んで、五分くらいで食事をすませています。

いま一番やりたいことはあなたの短編集を出すこと、『青べか物語』を訳すこと。浮世絵の研究の本を出すこと。遺産なんぞどうでもよろしい。

セシリア淑子

=====

1980年7月29日（投函）（開高氏より）

お手紙ありがとうございます。

いそいでいらっしゃるようなので、おたずねの件につき要用的み書きます。

私がペルーのリマにいるときにフランス文学の朝吹登水子さんの手紙が（パリ発）回送されてきて、それによると『歩く影たち』を読んで感動したこと、サルトル＝ボーヴォワール夫妻に話したらガリマールやレ・タン・モデルヌ誌に紹介してみようといわれたこと、ボ女史は英語が読めるからカイコー氏の作品何であれ英訳になったのがあれば至急パリへ送られたしとのこと。そこで新潮社の沼田氏が『夏の闇』、『流亡記』、あなたの短編集のコピーなどまとめてパリの朝吹さんのところへ送ったはずですが、しかしその直後あたりにサルトルが亡くなりましたから、この話はすべて一時か、永遠にか、ストップしたものと想像できます。朝吹さんからはその後連絡がありません。

「玉碎ける」はまだ誰にも訳されていません。「飽満の種子」「ロマネコンテイ」「貝塚をつくる」「怪物と爪楊枝」「洗面器の唄」「戦場の博物誌」「黄昏の力」「渚にて」、以上どれも手つかずです。誰も訳していません。どれからでも手をつけてください。あなたに征服されるのを待っています。あなたの短編集のオリジナルのコピーはまだ勝っちゃんの手もとにキープされていることと思いますが、その内容物とコントラストになったりバランスになったりするものを選んだらいいのではないのでしょうか。私としては、「怪物と爪楊枝」「戦場の博物誌」などが好きですが、こだわりません。「ロマネ・コンテイ」がしばらく好きだったことがありますけれど、その後は少し離れています。わざと意図してあまりにも文学的に書きすぎた、それがいまや乾いた厚化粧のように浮いてきたのじゃないかと思うのです。しかしそう思うのは私の“老化”現象であるかもしれません。これまたあなたのオメガネ次第です。従来通り、すべてあなたの解釈鑑賞演出におまかせします。

他に。

★ 「決闘」がシャール・シュミットという日本文学研究家の訳でフィッシュャーフェルラグの『ノイエ・ルントシャウ』という雑誌に発表されます。

★ コレット・ヒラオカさんというフランス女史が『日本三文オペラ』をひとりで訳しちゃったんですが、フランスの出版社がハカバカしい返事をくれないと人を介して訴えてきましたので勝っちゃんに話をしてみようと思っています。これは大阪弁のオカシサをどう他国語に替えるかという難問を抱え込んだ作品で、故シュトラウス・シーモンク氏も何度か手をつけかけては退却していました。コレット女史がその点をどうしたか。知性の秋になったら一度、会ってみるつもりです。

勝ッちゃんは短編集に首をふらなかったそうですけれど、新訳の分を入れてもう一度アタックしてみてはどうですか。あなたからサインがあれば私うごいてみるつもりです。何を訳すか、教えて下さり、その訳を入れた全稿を新しく作って、勝ッちゃんのところへ送ってください。ショウちゃんが読んでくれるといいのですが。

暑い。暑い。暑い。

家にたれこめたきりです。

人にも会わず、パーティにも出ず、バーにもいかず、沈香も焚かず、屁もひらず。
寂滅苦々。

7・27・80

ごぞんじ

=====

1980年9月1日

開高大先生、

EXPRESS で折角お書きくださったのにすぐお返事できなくて申しわけございません。
この一ヶ月髪の毛が逆立つような忙しさと心労で短編集のことを考えることもできませんでした。

引っ越しを一ヶ月延ばし、九月の終わり以前の建物に移ります。南向きの2 Bedrooms アパートで、リビングルームを大きくするために壁を一つぶっ壊し、広くして、その隅を書斎にします。寝室もいまのアパートより小さいのですけどぜいたくは言えません。その改造に許可が必要で、それがなかなかおりになくてそれで遅くなったのです。床も全部新しく **parquet** に変えさせ、今週はペンキ屋が入っています。

そこが出来上がればもう動くことなく、棺桶で担ぎ出されるまでいるつもりです。皆はまた私が結婚でもするだろうと待ち構えています、もうフルフルいやです。よほどすてきなのが出て来ればまた別ですが、そんな人にはもう皆ちゃんと奥様がいます。

それで「玉碎ける」と「貝塚をつくる」を訳したいとおもいますのでどうぞよろしく。
そんないばったことを言ってもいまの状態ではいつ取りかかれるかわからないのですが、できるだけ頑張ります。

日本は冷夏だったそうですね。でもいまは暑いのでしょう。こちら暑く夏でした。でもフィラデルフィアはハリケーンにもカンバツにもおそわれずまことに平和でした。何事もいい方を見ていかなければ生きていけません。私はこの頃肝っ玉がふとくなって、相当弁護士や会計士にいじめられても一晩くらい寝ずに腹を立てたあとはケロリとします。私が「書ける人間」だったら、この経験はぜひとも書き留めておくべきですが、それができないのは長年の不勉強のせいです。

牧様、川島勝っちゃんによろしくお伝えくださいませ。時々大師匠のおもしろい記事を週刊誌で拝見しますが、おおむね、こちらにいることはツンボ栈敷にいるようなものです。ごきげんよう。

九月一日

セシリア瀬川

=====

1980年12月6日受信、（開高氏より）

川島勝っちゃんが訳本を持ってきてくれました。なかなかよい出来です。例によって私の語学力では理解はできても（それすら怪しきかぎりではありますがー）味わうことができないので、せっかくあなたの苦闘をどこまで汲みとれるか。

このところ家にこもったきりです。たまに東京へ出ますが、バーへ行ってタハ、オモチロイと叫ぶこともなく帰ってきます。右半身、肩も背も腕も、ギクシャク痛んだり、しびれたりです。いわゆる“四十肩、五十腰”というヤツ。そちらに何かいいクスリありませんか。

とりあえず感謝を申し上げたくて。

ランボオの詩の冒頭をもじると。

モウ冬ダ。

ごぞんじ

=====

1980年12月7日

開高大先生、

ご丁寧なお礼状まことに痛み入りました。こちらこそ、本を受け取った途端にお祝いとお礼をただちに申し上げるべきでしたが、この頃気ぜわしいのと横道にそれた仕事に打ち込んでいるせいで、方々に義理を欠く行動に出ています。

そうして私は仕事が終わったとたんにその仕事に興味を失って次に移りたくなるので、出来上がった本にも目を通していません。ショウさんと東京でエッチラオッチラやった後、また彼がどの程度変えたか、変えなかったか、しらべてみるのも面白いし勉強に나と思うのですが、なかなかそれをする気になれません。

完全主義者の彼は一つの言葉にもずいぶん時間をかけていました。私も本当に見習うところが多うございました。

さてこちらは夏中いろいろ心をいためることも多かったのですが、とにかく何かしようというので、「玉砕ける」と「貝塚をつくる」は訳したのです。それを二度ばかり推敲

しましたが、まだまだ。前にも申し上げましたように、私は下訳はすごく早いのですが二三季度目を通したあとが二進も三進もいかなくなつて停滞してしまうのです。前の短編集も手を入れたあとタイプしなおしていないので、この二編になんとか形をつけたら、皆整理して川島勝っちゃんのところへ送れるのですけれど、今焦眉の問題は私の弁護士たちが税金と訴訟の費用をひねり出すのに、シドニーの浮世絵のコレクションを売らなければならないと言ったので、私は悲しみながらも仕方ないと諦めて、カタログの準備をしているのです。その中で一番値打ちのあるもの、というのではなくて、私が特に好きなのを15枚ほど手許においておきたいので、それも選ばなければなりませんし、どれもこれも心をひかれるもので、なかなか決心がつきません。私自身も幾つかいいものは持ってるし、それほどのものでないものなら沢山持っているのですが、彼のコレクションがなくなつても裸にされたようには感じないだろうと思いますが、本当に質のいいものが多かったので惜しいと思います。バラバラにされるのがまず悲しいのです。競売はロンドンかニューヨークのソースビー・パークバーネットで、ロンドンの方が権威はありますが、遠すぎるし、送ったり保険をかけたりにやたらにお金がかかるので、ニューヨークにするかもしれません。日本からも沢山買いに来て欲しいものです。少しは名のしれたコレクションですから。

昨日美術館での「未来派」の展覧会を見に行き、今朝へんな組み合わせながらモツアルトの『鎮魂ミサ』を聞きながら「未来派」のカタログに出ている知人の長論文を読み、日本では花袋、独歩、藤村などが活躍していた頃に、イタリアやフランスではこんなことやってたのだなあ面白く思いました。

この間ニューヨークのジャパン・ハウスで琳派の絵を見たり、黒澤のすばらしい「影武者」を見に行ったり、奇妙な殺人ミュージカルの「スウィーニー・トッド」を見に行ったり、音楽会へ行ったり、私の情操生活は実にとりとめのない、行きあたりばったりの様相を示して、結局何も得る所なし、みたいな状態ですが、そのうちに勉強して講談社インターナショナルさんに大著書を出してもらいたいと思っています。

今東京のアメリカ人の友達がニューヨークから大いそがしの仕事の旅で東京へ帰る途中で電話してきたので、たちまち又日本へ行きたくなりました。私の甥は昨日やっと結婚して、その結婚式にも出たかったのですが、六月までフィラ市を動けません。

あなたの老化現象につけるクスリはありません。あったらまず私が使っている所です。私は体は痛くないけれど、何か頭につけるクスリが欲しいのです。ではまた、どうぞお大事になさませ。

よきクリスマス、お誕生日、新年をおむかえ下さいますよう。

かしこ

セシリア淑子

開高大先生

=====

1981年4月22日

開高御夫妻様、

もう陽光燦々桜花爛漫たる（そんな言い方があるか！と言葉の先生に叱られそうですね）四月も下旬になりました。一体時間はどこへ行くのでしょうか。今年は毎日あっという間に過ぎて、その間病気ばかりしています。一月、三月、と、またまた病気で今寝ています。心配事が多いせいか、抵抗力が下がっているようで、いろんなヴィールスをどこかでとっ捕まえて来ては養っているようです。このヴィールスは日曜日のイースターに教会へ行かないで不信心にも友人たちと中華料理へ行き、その後で桜の花盛りを公園へ見に行ったのです。八重桜とドウダンのような、色の濃いびっしり花のついた桜の一種が見事でした。そうしたら、食あたりかバチあたりか、たちまちその日から病気になり、今日やっとだいぶ気分がよくなって起き上がり、食事もしました。一月と三月の病気はもっと長引いたけど今度のは軽いのです。

昨年お会いしたときに来年ニューヨークへ行くかもしれないとおっしゃったので、もう大先生がお見えになる頃ではないかと思い、お伺いを立てます。たしか、五月か六月ころとおっしゃったように思います。どういうご予約なのでしょうか。

『輝ける闇』の反応がないので、一ヶ月ほど前、ニューヨークのハーパー&ロウと講談社インターナショナルへ電話してみましたら、講談社のセールスマネージャーのお方も、ハーパーの方の女の方も、できるだけことはしている、コピーをいろんな新聞や雑誌に送ったと言っていました。それで、知人でフィラ市の文化放送の書評やインタビューをする人にも一冊送ったのですけれど彼は音楽会であったとき興味を示したにもかかわらず、なんとも言って来ません。今ベトナムが全然影を隠しているからかもしれません。カムバックしたのは1979と1980、すぐに又消えてしまいましたからね。こういうものはサイクルがあるので、また帰ってくると思いますけれど、うまく機会をつかむことは非常に難しいことです。本のできは大変よろしくて、ショウさんがとてもいい仕事をしてくださって磨きがかかりました。でも本当に95%以上の仕事をしたのは私ですから、本の表紙に訳者の名が出ていないと言って川島さんとショウさんにすこし文句を言ったらそれきりウンともスンとも言って来ません。プリマドンナだと思われたのでしょうか。でもクノフなんかはちゃんと名前を出してますし、本のうしろに著者翻訳者ともどもに略歴までいれてくれるのですものね。

この本は友人が見て、「あら、あんたの名前、これ以上小さい活字は探せないわよね」と言いました。そんなことでごちゃごちゃ言うのは嫌だったんですけれど、言わなければ「腹ふくるる思い」だから言ったのです。

講談社の方では、あんなプリマドンナはもうごめんだと思っているでしょうから、大著述をしても出してはもらえないと思いますが、まだまだ勉強しなければとても書ける事ではありませんから毎日勉強しているのです。大変楽しいのですが、浮世絵にも関係のある事なので、浮世絵を売らなければならなくなってからこんなに勉強するのは情けないなどと思っています。遺産問題の方はまだ片付かなくて、浮世絵を売る事についても

弁護士同士でまだ口論しているのです。それを全部こちらが払わなくてはならないという変な状態で、心痛が多いから、それで病気になるのだと言われます。

「玉砕ける」と「貝塚をつくる」は出来上がっていますが、もう講談社へは送りません。短編集にして送るよりも『ジャパン・クォーターリイ』か何かに送ってみましょうか。どうお思いになりますか。今は短編集という形があまり売れないらしいのです。今の所本当に毎日忙しく何かしているので退屈などすこしも感じませんし、病気するとほんとに時間の損をしたような気がするので、一日も早く元気になりたいと思っています。まあ、このくらいの事は、開高氏が肝ゾーじゃなくてタンゾーでしたっけ、何か大切なものを無くされた事やレーガンが撃たれたりした事に比べたら、蚊に刺されたくらいのことですけれども。

もうだいぶ前にお知らせしたと思いますけれど、私の住所は元の所の

1919 Chesnut Street, Apt. 908
Philadelphia, Pa. 19103 Tel (215)568-6284

ですからよろしく。アパート番号だけ違って、電話も前からのを使っています。

ではどうぞお大事に。いつこちらへいらっしゃるのか、お知らせいただけますか？

四月二十二日

タンネンバウム淑子

開高健様
牧羊子様

=====

1981年5月13日（開高氏より）

◎ 久しぶりの手紙頂く。いろいろと小さな病気が出てくるしめられていらっしゃるように読みましたが、われわれの年齢としてはある時代からつぎの時代へ移行する時点にあるので体質が変り、そのためにこれまでなかったシンドロームがたくさん這い込んできます。やがてそれが終わって安定に入ります。つまり脱皮と変貌が完了するのであります。これであと10年か15年ぐらい、持ちます。そのはずです。待てばし、汝（なれ）もまた憩らう、とか。

小生、先日珍しく激烈な腹痛に襲われ、二日半のたうちまわって病院に入ったところ、そのとたんに治ってしまいましたが、悪性のヴィールス性感冒がひきおこした急性胃炎と判定されました。その引金となったのは酒の飲みすぎであります。酒の飲みすぎはこれまでに数えきれないくらいやりましたけれど、こういう症状がでてきたのはこれがは

じめてです。つまりですナ、脱皮のとちゅうでの現象であります。今後いろいろとイヤらしいことがゴキブリのように出沒することでしょう。

What will come is coming! Just like ocean tide!...

◎ ニューヨークにいつくるのかとのお問合せですが、まだまださきのハナシです。二、三年かかるでしょう。しばらくアマゾンだの、南北両大陸縦断だのと遊んでばかりいたので、これから本職にもどらなければいけません。筆債というやつです。背骨がミシミシ音をたてるくらいたまっています。コンドルがアリに変らなければならないんです。コンドルがアリに。葉切りアリに。

◎ 『ジャパンクオーターリー』というのはたしか朝日新聞で出版している雑誌だと思います。あなたの手紙では「玉砕ける」その他の短編をここに出して見ようかしらとのことですが、私はこの雑誌の編集部にくらかカオがきくので、玉稿のコピーを私宛に送ってください。私はそれを持って走ります。何でも。いつでも。あなたの好きな作品を訳してください。（「玉砕ける」もいいですが、「怪物と爪楊枝」も悪くないのじゃないかと私はひそかにウヌボレテルのですが！…

「戦場の博物誌」も、また！…

◎ 病院から出てきてちょっとグンナリしているので今日はさしあたりの用件にお答えするだけでした。これではあまり愛想がないので南米で聞いた小話を一つ。ブエノスアイレスの薬局に上品でかわいいセニョリータが入ってきてトイレットペーパーをくださいな、という。店主が、ハイ、ハイ何色がいいでしょうかと聞く。セニョリータはそうねえといってちょっと思案し、白は汚れが目立つから何かほかの色にしてちょうだいといった。とか。

◎ ではまた。

=====

1981年5月13日??? 開高氏が出した日と同じか？

お手紙ありがとうございました。

おもしろいお手紙なのでグラグラ笑って他の部屋へ行こうとしたら、ちょうどペンキ屋が来ていて、つるつるすべるはめ木の床に布をしいて仕事をしていたので、たちまちすべってスッテンコロリン、頬をしたたかに打って驚いているところです。どこからも骨が突き出ていませんし、カラコロ音もしませんので、骨は折れてはいないようですが、今夜食事に出て音楽会に行かなくてはならないのに、紫色のアザが出てくるかもしれません。まことに次の時代に移行しつつあるもろき人体のお粗末さをつくづく感じました。老人になるとやたらにころび、やたらに骨を折るらしいので、まだ15年くらいは老人にならないつもりですが、体は新しいのを買うわけにもいかないのでこれからは足許を見て歩くことにします。

開高様も急性胃炎肝炎ならびに泥酔の千鳥足でおころびにならないようお気をつけくださいませ。

先日『ニューヨーカー』の短編小説の係りのリンダ・アッシャー嬢が電話してきて、今までヨーロッパの小説の翻訳は出したことがあるが、日本のは一度もだしていない。何か心あたりアルカと申しましたので、アルアル、といい、「玉砕ける」のことを言いました…もちろん開高さんの小説は全然ニューヨーカー型ではないので、今までも送りませんでしたが（一週に1,500篇くらい来るそうなのでただ送ってもダメです）注意を促す為「玉砕ける」と「決闘」にもう一度手を入れ（最近会った物書きに見せ、タイプし直しました）送りました…異質のものなので取らないとおもいますが、返信用の切手と封筒を送っておきましたので、帰ってきたらコピーを作ってお送りいたします。ジャパン・クォーターリーの誰かご存知でしたら大変結構ですね。カズン・ミリアムもその雑文書きの友達も大変印象深いいい作品だし、翻訳もよくできている、出版されるべきだと言ってくれましたので、もしニューヨーカーから返されてきたら、その二つを開高様にお送りし、脈がありそうだったら「貝塚」にももう一度手を入れてお送りします。「戦場の博物誌」や「怪物と爪楊枝」も行く行くはやりますゾ。

六月末暑い時に日本へ帰って九月まで滞在するかもしれません。図書館通いをするのであります。そうして吉原のオーソリテイになろうと思っているのであります。しかしこれを「枕絵」や「あぶな絵」に興味があるのだと誤解なさないでください。私は湖竜斎や清長や栄之や歌麿の描いたおいらんの道中姿や物思う姿が好きなのです。

ではごきげんよう。

セシリア淑子

=====

1981年6月22日（開高氏より）

今日は。

要件のみであります。

ちょっとええニュース。

ニューヨークのパンセオン・ブックス社のトム・エンゲルハート氏という編集者が日本へ来て、新潮社のヌマタ氏と会談をした。トム氏はその時、ヴェトナム意識がアメリカでふたたびひっそりと昂進しつつあり、やがて表面に達してどの程度かはわからないけれどブームがくると観測していると語った。氏はすでにカイコー氏の『輝ける闇』と『夏の闇』の翻訳を読んでいたく感銘しているので、カイコー氏のものなら何でも、とヌマタ氏にいうたと。ヌマタ氏はそこであなたの名をあげ、短編の翻訳がすすんでいると聞いてると答えた。

Mr. Tom Engelhardt
c/o Pantheon Books 201
East 50 St

New York, NY, 10022
Tel: 212-572-2358

こういう話はえてして行違いや思違いが多いものであるからして、あなたのほうからトム氏に連絡をとられるのがよろしいかと思うのですが。

川島勝ッチャンが『輝ける闇』でいい書評が出たから近日中に送ってあげると。それは批評がよいわるいに関係なく至急にコピーをとってあなたに送るつもりです。
ただひたすらに寛容。
冷たい夏。4月頃みたい。不気味。

タンネンバウムさま

6・22・81

ごぞんじ

=====

1981年8月15日（日本にて、開高氏へ）

傾国の酒を用ゆる事三味線に次いでの一芸なり。ひたすらの下戸は傾城三つの悪相のそのひとつにして、殊更にきらふことなり。上戸の傾城は上戸の客にあふて勿論よし。下戸の客にあひても酒のまぬ分にすむ事也。下戸の女郎の酒のむ男にあひたる時は座をもちかねる物也。上戸の客はたとひ容貌すぐれぬ女郎にても、酒のむ方をとる心なれば、いかにきよなる女郎にても下戸なれば何とやらうたてくきのどくなるもの也。

『色道大鏡』のこの部分を読み出して、私は何十年か前、うら若き乙女であった頃、もしその必要があって遊女に身売りしなければならなかったとしても、容貌でまず落第し、その次にお酒をのめないことでふり落とされて、端女郎にもなれなかったであろうことを知ってガクゼンと致しました。これは女性の自尊心にとって相当な痛手でありますゾ。

と同時に、そんな面白くない女をただひたすらに寛容の気持ちから度々饗応にお招きくださる大先生のご親切に痛み入るばかりでございます。

もう一度二十日後に何とかとおっしゃいましたが、またまた外でお招きに預かるのは誠に恐縮でございますので、いつか大先生ならびに牧羊子様の御都合のよろしい日に湘南は茅ヶ崎のオタクに伺候してお目通りがかないますれば本望にござりまするが、いかがでござりましょうや。さすればおん奥方にも拝謁かない、恐悦至極に存じそうろう。

先日 NHK テレビで「戦争を語る」を拝見いたしました。いかに耳痛い悲観論であれ、そういう見方に体験的に列座なさりそれをつらぬかれる大先生に感服いたしました。お話のお上手なのにもいつもいつも敬服いたしております。

犬はあいかわらず精神的横暴を続け、私は外出もできないでいます。

(❖夏ヨーロッパのへ行っている友人の犬の世話を頼まれて引き受けた。)

夜はもう絶対に出られません。私は犬にふりまわされているようです。この間、自動車屋さんが来たのでガレージに15分ばかり入っていて、犬を家のなかに一人でおいたら、仕返しにそこら一面……もうどんな洗剤消臭剤を使っても臭いはとれません。私が他の人間の相手をして犬をほったらかしにするとすごく嫉妬するのです。
ではまた。

8月15日

セシリア瀬川

P. S.

ひさびさに終戦記念日を日本で迎えて思うこと多いです。

=====

1981年9月20日

開高大預言者様、

日本を出て五日ほどソウルで過ごし、無事に帰って来て十日になります。
先日は西武デパートのお仕事に私をご推薦くださったそうでありありがとうございました。
東京の吉田さんからお電話が入り、二日して金曜にニューヨークからお電話があり、昨日土曜日に原稿がくるということなので、お約束事を全部破棄して翻訳しました。今日今からお昼ご飯のパーティがレストランであり、その後、夕方から、都合のいいことに従姉のミリアムの家でお誕生日のパーティがありますので、私の一応出来上がった翻訳を見てもらいに持って行きます。彼女は今夜はそれを見ることはできないが、明日の朝読んで私に電話で意見をいうことになっています。彼女がOKしたら明日のうちに出发しますので、運良く行けば吉田さんのおっしゃった25日という不可能な日までには着かないにしても、それに近い日までには届くと思います。もちろん速達にしますが、あなたからの速達は必ず普通便よりおそくつきますし、ついても誰一人扉を叩いてくれるわけでもなし、アパートの下の受付でつくねんと待っているだけで、普通の郵便より都合がわるいのです。今は一応受付に置いて行ってくれるからまだいいけれど、はじめの頃など私がいなくて郵便局まで持って帰ってしまって、取りに來いというので、また二三日遅れる始末でした。まあ、日本の郵便はもう少しましかもしれませんので、運を天にまかせて速達にします。

それでちょっと申し上げますが、開高大師匠の名文を名文になおさなければならないのでいつも苦勞しますが、名文というものは辻つまがあわなければいけません。英語だとすぐにそれが目についてしまいますので。私はいい気になって訳して、自分ながら名文にできたと思って読み返してみると、いつもどこかに大穴があり、クシャリとつぶれてしまいます。そしてなんべんかやりかえても、また新しい穴が出てきます。例えば、今回の大穴は開高大預言者の十五年前の予言、酒にそそのかされて、「推論の根拠は……次のようなものである」というところから、次の一ページと四分の三くらいはその時点での推論（15年前）であるべきなのですが、それがそう聞こえないのです。第一

にテンスが現在形です。十五年まえにはたしかに都市には巨大ビルが幾つかでき、すでに窓が固定していましたが、個人の家庭にそれほどクーラーが普及し、生活一般が快適になり、男たちは酒場にも寄らず帰宅して「ジョギングシューズを履いて」朝食以前に走っていたでしょうか。ジョギングがはやりだしたのは（とくに「ジョギングシューズ」のアデイドスなどわざわざ一般人が履き始めたのは）つい最近の数年のことです。こういふこと、その推論がどうも現在からの後ろ向きの展望になっているので少し困りました。こんなこと、日本語でなら少しもおかしくなく、ただ面白く読めてしまうのです。そして「セシリアの奴、また堅苦しい事云やがって。だから面白くねえ女なんだ」とお思いでしょうが、ただ英語は非常にロジカルであることを求めますので、念のため申し上げておきます。日本語はまことにあいまいでテンスが現在になったり過去になったり、主語がないまま読んでもすらすら読めますが、英語だとテンスや主語の約束事はきちんと守らねばなりませんものね。

普通「日本人は」という所は **They** であり、もっと抽象的だと **One** であり、「現今のニッポンの状態をごらんになれば」というと **You** になり、われわれという **We** になり、まことに雑多になるので、これはなんとかもう少し整理しないといけないわけです。とくに同じセンテンスのなかで変わったりすることは絶対いけませんので、全部 **One** か **We** にしました。特に最後あたりで **They** が急に **We** に変わる所は、日本文では「我ら」が強く出ているので、その前の日本人云々の所を全部「我ら日本人」としておきましたので御諒承ください。訳者は直訳よりも意識して名文調とユーモアを出すほうが大切だと思っていますので、誰かが「これは違っている」とか何とかいうかもしれませんが、私には私の考えがあるのです。まちがっているかも知れませんが。

フェラガモはわかりましたが、ヴァレクストラというのはこちらでは（というより私が無知なので）ちょっと聞かないのですが、今日と明日で調べ、分からなければ、何かに変えるが、吉田さんのほうで入れていただきます。東京に店があるのなら、スペルもすぐわかるでしょうから。

今回最後にもう一度御目にかかろうとお酒を用意していたのですが、茅ヶ崎へうかがえなくて残念でした。せっかく最終日にお誘いくださったのに。姉と美術館三つ（サントリー、太田、根津）を歩き回る約束をしていたので、ちょっと行けなくなりました。申しわけございませんでした。あとで姉に大叱られでした。「電話口でどなったりして失礼な、ちゃんとお受けして茅ヶ崎へいけばよかったのに」と。開高氏はセンサイな方ですから、私の蛮声に驚いてすぐ「いや、来なくてもよろしい」とおっしゃったのですが、私にもそこにはズルい計算が働いておりまして、どなたかが私の行く所を決めてくださるだろうと思ったのです。まさしくその通り、デリケートな開高氏の方が決めてくださいました。あなたはじつに遠慮深いやさしい方ですね。その思いやり、やさしさに私はいつも心から感嘆してしまい、おやさしさのためにずいぶん損をなさることもあるだろうと推察いたしております。

あの日は精力的に歩き回り、青山のヨクモク（なんてヘンな名なんでしょう）でコーヒーとケーキをしたため、こんなに地代の高い一等地で、ぜいたくな喫茶店を出してー

お酒もお料理も出さずにーそれで採算があうのは、客が日本人だからである。これは日本人のクリスタル趣味にかなうのである、と感心したのです。

ソウルはめちゃくちゃに面白く過ごしました。韓国のノーマンメイラーとよばれる朴承薫さんにも会って来ました。友人の同僚です。沼田六平太さんをごぞんじだそうです。新潮社から本が出るとか出したいとか。友人のパーティに二十五歳くらい年下の美人ピアニストの奥さん（新婚ほやほや）を連れてきて、冷やかされっぱなしでした。面白いことを言うために口をあけるような、テレビの寵児だそうです。早稲田出身だそうです、日本語がたいへん御達者でした。そういえば友人を通じてお会いした年配の大学の先生方は皆様日本語が御上手でした。

この手紙を終える前にステイブ・ショウさんから頼まれたことをお伝えします。彼はいつか開高先生にお会いしたいそうです。以上以下ショウさんのことに関する限り、川島カッチャンには御内密に願います。ショウさんはやはり自分がいろんな方の作品に当たるのだから、作品を通じていろんな作家を知り、その方達に会いたいのだが、川島勝チャンが絶対に会わせないように仕組んでいるのだと相当感情を害していました。ショウさんはちょっと暗い感じの人で、内攻的でブツブツ言う感じの物の言い方をする人ですが、文章を直す（書くのではない）のは大変にお上手。やはりオックスフォード英文出だ、と感心せざるを得ません。私も彼が作家に会いたいのは自然の要求じゃないかと思うのですが、川島さんはご自分が常に表で両方をつなぐお役をなさるのでなかなか会わせてもらえないと嘆いていらっしやいました。ショウさんは講談社インターナショナル勤務ですが、時々はお家で仕事をしているようです。お電話ではお話をなさった事が有るのでしょうか。何時か会ってあげてください。

（❖この時ショウさんが言った事は忘れられない。彼は自分にはオリジナル文章は書けないのだと言ったのでびっくりした。彼は編集推敲の専門であって文章家ではないと。もちろん私はそれを頭から信じた訳ではない。全然書けないという事はないに決まっている。しかし作家と推敲家（編集者）は専門化していて必ずしも共通のタレントではないのだという事を私は考えた事もなかったので驚いたのである。）

ではとりとめもない事を乱筆乱文で書きましたがお許しくださいます。
牧様にお会いできなかったのが本当に残念ですが、来年また。
またすぐ書きます。

セシリア淑子

=====

1981年9月28日（開高氏へ）

私の同僚で数年前からの友人にウィリアム（ビル）・タイラーという若い人がいますが、彼は石川淳で博士号をとったのかしら、何か石川淳の事ばかりやっています。この夏『普賢』の訳を完成したようです。あの難しいものをよくやったと思います。今からそ

れに序文を付け加えて出すのでしょうか。とにかくアメリカの大学では（日本もそうでしょうが）**Publish or Perish**「出版しなけりゃくたばる」という事になっています。私も今度はどうしてもワープロが要るなあ、と思っていますが、日本語と英語のワープロは凄く高いし、プログラムもいいのがないので、今首をひねっているのです。

（❖この後間も無くそれほど高くない万国語のかけるコンピュータが出てきた。）

秋が急に深まった感じで寒くなりました。日本でも紅葉が近づいているでしょう。この夏開高さんはアラスカの涼しい所で魚釣りをおたのしみになって如何でしたかしら。また九死に一生を得るような体験をなさいましたか？

勝手なお願いをいたしますけれど、短い箇条書きでよろしいから、「開高健のこと」について論じる（というほど大それた事はできませんけれど）のにつけ加えるべき事がございましたら、おしらせ願えませんかしら。

せんにいただいた象彦の立派なお菓子盆を大切にしまっていましたけれど、今度セミナーの学生のためにお茶の会をするときに初めて使わせていただきます。下手な講義を目を輝かせて聞いてくれる学生たちに、私は感謝のあまり最高のものを使ってあげたいのです。（ナンテ私はこの間は姉に、学生に食べさせたり飲ませたりするんだから、安いのでいいよ、なんて、お菓子やお茶を頼んだくせにね）毎週クラスでお茶お菓子を出して上げていますが、十一月一日はとくべつに彼らを家に招いて象彦の開高ご夫妻のお盆とお皿でおいしい羊羹を出そうというコンタンです。この間緑茶おうすをたててあげたら感激していました。

ではごきげんよう。牧様にどうぞおよろしく。

1981年9月28日

瀬川淑子——最敬礼

開高健様

=====

1981年11月15日（開高氏へ）

この頃手紙というものが書きたくなくて、方々へ無沙汰の限りを尽くしています。先日たいそうご立派なご本『もっと広く！』『もっと遠く！』をお恵みくださいますこととありがとうございました。『オーパ』と並べてありますが、今の所本を読む余裕がなく、ざっと拝見しただけで、あとでゆっくり読ませていただくのをたのしみにしています。こういう立派なご本があとからあとから出てくるのはどういうお気持ちだろうと推察し、まるで子供を生んだようなほっとした嬉しいお気持ちだろうと思ったりしています。（子供を産んだ事もない女がこんなこというのへんかな？）出て来るまでいろいろご苦労があたりでしょうけれど、その作品が見事な時、さぞご満足も大きいことでしょう。

私は今歯が痛くてむしゃくしゃしていて、満足な日本語も書けませんけれどもお許しください。三週間前に、6ヶ月に一度のチェックアップに行きましたら全然痛みも何もない歯の歯根を治療するのだと言ってガリガリやり始め、それが毎週木曜で、土曜の夜、つまり歯医者には何としても手の届かない時刻に凄く痛くなり始めるのです。昨夜もそうで、デイナーパーティで痛くなり、今朝母に電話して歯が痛いと言ったら、あなたの年齢の人は皆そうだ、といい、まるでそれが当たり前なのだからがまんしなさい、みたいな調子でした。

先週の日曜日はいつもいっしょに室内楽の音楽会へ行く連中を6人ほど朝昼兼の食事招いてあったので、がまんして料理をしましたけれど、とても痛くて、ちょうど歯医者の息子さんがオフィスに行くから、ということなので、お客をほったらかして歯を見てもらいに行き、そのまま音楽会へ行きました。その時は鎮痛剤とすてきな音楽のおかげで痛みはぴたりととまりました。今日はなかなか止まりそうにありません。歯医者は土、日は閉店だから全く不便です。私の主人のダンは良心的だったから、よく週末にわざわざ出かけましたけれど…それに、彼はこんな乱暴なことはしませんでした。今からその息子の方（がやさしいので）へ電話かけてあんたのオトツツアンがあんまり乱暴だからいい歯まで痛くしてしまった、どうしてくれる！と怒鳴ってやろか、などと考えています。抗生物質剤を先週の日曜からずっとのんでいるのに何かバクテリアがごそごそ活動してるような気配があります。

同封のものは洒落本の『三幅対』をよんでいたら魚づくしの手紙が出てきたので、ご参考のために。私に暇があったら魚づくしで開高大師匠にお手紙をさしあげるのですけれど、今の所そんな江戸時代の暇人のしたようなことはできそうにもありません。どうしてこんなに時間が足りないかとつらつらおもん見るに、余計なこと、やらずもがなのことをやりすぎること、頼まれたら「ノー」と言えないこと、記憶力がだんだん減退してきたので、頭のなかの情報集めならびに整理に時間がかかること、などです。

私もうフランス語などという無駄で時間ばかりとってちっとも身につかないものはやめようと思います。まあ十一月一ぱいは先生に義理があるので続けますが、あとはもうやめた方が「世の中のため」です。私がそんなつまらないことに一週に何時間か取られるので、もっと他の人のためにも自分のためにも役に立ちそうなことができないでいます。『もっと遠く！』を読む方がフランス語の本を読むよりもっとたのしいでしょう。いつまでたっても満足にものも言えず、本を読む時は同じ言葉に何遍もつかかって辞書を見なければならぬなんて、自分の知能を疑いたくなり、エゴにとってもまことに好ましからざる事態を誘発しますのでもうやめます。

ではごきげんよう。ご本のお礼のみにて失礼いたします。
牧様にどうぞおよろしく。お二方お体ならびにお歯をくれぐれもご大切に。

十一月十五日

セシリア瀬川シーグルタンネンバウム

開高大師匠

=====

1981年11月27日（開高氏より）

手紙ありがとう。あいかわらずピチピチしている。歯がガタついてきたとコボしていらっしやるけれど、気にしない。気にしない。罨にかかってはいけない。ジャスト・フォーゲット・イット・

西武デパートがこの夏に「オーパ」展を開き、ブラジルのジャングルや河から魚、蛙、タランチュラなどをたくさん生きたまま持ってきたので大ヒットになりそれに巻きこまれて私もいそがしくさせられました。そのあと『もっと遠く！』と『もっと広く！』が出版されて、またまたいそがしくさせられ、8月と9月、やたらアタフタしてたところへ10月に『ベトナム戦記』から『もっと遠く！』まで15年間の一連の卓抜なルポルタージュ文学の業績に対してといて菊池寛賞をもらい、それでまたアタフタ。11月になると西ドイツから『夏の闇』英訳を読んで感動したから映画にしたいという申込みがあり、これはアタフタしないで、おっとり、ヤー、ヤー、グートと答える。翻訳は半面訳者の発する放射能でもあるのですから、このいそがしい時代に出版後何年もたってからこういう感染症候があらわれるところを見ると、あなたはよほどダントツなんです。歯ががたつこうが目がショボつこうが歩いててひっくりかえろうが、自信を持って下さい。おら、おらで、一人、行（え）ぐもと。

（”ダントツ”とは”断然トップ”ということ。ヤング辞典）。

そういうわけで西武デパートのPR雑誌にムリヤリ書かされた短文についてのあなたの鋭くて正確な反論のお手紙に対して陳謝の手紙を書こう書こうと思いつつも、マ、ええわ、あんな賢い女（ひと）やから何とかやってくれはるやろと、いう気持もあって、ついついそのままにしまいました。まことに申し訳ございません。いつもいうように私はあなたに白紙委任状をわたしてありますので今後どうぞ自由に包丁をふるって下さい。これは本気でいうのです。たのみましたデ。

（❖上記の西武デパートPR雑誌文の批判という手紙はなくなっている。）

『もっと遠く！』の二部作は11月末の現在で総計9万4千部売れました。年内にはもう一版増刷して10万になるでしょう。それからさきのことは読めません。こうなってくると税金がものすごくて、7割から8割もっていかれてしまいます。物質的には骨折損としかいいようのない営為であります。著者としてのよろこびは何か他のことに見出すしかありません。わるい時代に生まれてきたと、あきらめることです。捨棄もまたひとつのドラマなんでありま。芸術は抑圧において芽生え、拘束において開花するという意味のことを昔、ジードが喝破しましたが、この理論をわがニッポン国の税務署は体得しておられるのであります。

しかし私はもうそろそろ芸術のいがい冬に沈潜しなければなりません。ノンフィクションを書くとき微妙な肉離れが起り、つぎにフィクションの文体を再獲得するのに人

知れぬ苦斗を味わわされます。抑圧よ、来れ。拘束よ、バンザイ。金よ、さらば。ビフテキをやめて串カツを食べよう。エッサイ・エロイム。

（❖これは日本人は水木しげるの「悪魔くん」でよく知られているそうである。

ヨーロッパでは伝承の悪魔学の呪文で、Eloim, Essaimと書く。）

=====

1981年12月30日（開高氏へ）

今日は開高さんのお誕生日ですから書くことに致します。いえ、書くことにしたのは先日お手紙をいただいた時ですが、志向と行動はまま一致せぬものでございまして、私のクリスマスカードのリストは十五年前の二百から百になり、五十になり、二十五になり、今やカードを貰っても絶対に返事をしないという、ソビエト的非社交、ふてくされ、博徒的尻まくりとでもいった構えで、時間を節約している（つまり、な）のですが、それでさえ「書こう」ときめてから実行に移すまでは約半月かかるのです。

まずおめでとうございませう。このおめでとうはまことに多角多彩意味深遠なるおめでとうでございまして、まずは開高大先生五十一歳の賀、それから千九百は八十二年、昭和で申すならばおろろくなかれ五十七年。まった、先生の栄光にかがやく菊池寛の大金賞、ソレもひとつ『夏の闇』のドイツ映画化、もそっとオーパにもそっと広く遠くの大ヒット、先生こそ現代文学界の英雄！ダントツ！蒼空高く飛翔するコンドル大鷲、大宇宙を月に向かって驀進するヴオヤジャーV（あったかいな、そんなの?!）なんでござりまする。

とまあ、茶化しはこのくらいにしておきまして、本当に心からおめでとうございませう。何よりも菊池寛賞お慶びを申し上げます（五十一歳の方はあんまりおめでたくないやろから）本当に開高氏のルポルタージュ文学への貢献はめざましいものであり、この賞には心から絶大なる声援と共鳴を表します。前々から開高さんのルポルタージュエッセイのうまさには舌をまいていました。世間はバカのようにバカでなく、御本の売行きがちゃんと開高氏のエッセイの優秀さを示してくれていますが、こうしてオフィシャルな賞が出ましたことは、もろもろのおえら方がタイコ判でみとめた事になり、読者にとって大満足であるだけでなく、開高先生も多年のご苦勞がいささかでも報いられたようなお気持ちではないでしょうか。税務署で人気上がるのはめでたくないけれど、まあ世間一般の意味からは本当におめでとうございませう。

と、またここからナニヤブシ調になりまして、

かえりみますればその昔、大師匠にお目もじの、榮譽にあまるそのみぎり、たべても死なないフグ料理、生きながらえて又十日、師走はみそ日の誕生日、アンコウの君の申すには、ヤレ四十二情けなや、中年男に成り果てた、首をつっても間にあわぬ、死ぬの死なぬの大騒ぎ、それから流れて又十年、つもる月日の年の瀬に、光陰矢とも電子とも、

学の成らぬは当たり前、年季を入れねば大成せず、庭の梧桐は枯れるとも、肝やら腎やら失って、深酒できぬこの日頃、それでも貰える菊池賞、川端賞に大ヒット、ベストセラーもおめでたや………とこうきりもなくあほらしい文句が出てきて大変失礼になるのでこのくらいでやめときます。

私も十二月十三日をもって半世紀生きた事になり、ガクゼンといたした次第でございます。これからはただ下り坂、加速度的にころがり行くのみ、とまあこう言えば又グチになりますから、下り坂の方が眺めはいいし、歩きやすいとでも申しましょうか。十二月も三十日ともなれば、胸に手をあて、この一年を省みて、物思う事も多うございます。

と、ここまで書いた時に翻然と思い当たり、同封の手紙をトム・エンゲルハートさんに書きました。そして翻訳文を探すやら（まことにウカツのきわみながらどこかへしまい忘れて探すのにしばらくかかりました）コピーの店にもって行くやら、やっとできましたので、この手紙と同便にてニューヨークへ送ります。

それではこれにて、おさらばじゃ、チョン。

又来年も………どうぞよろしゅう………たのみまするぞ………

ヒュードロドロドロ………

十二月三十日

セシリア瀬川シーグル（タンネンバウム）

広く遠く高き君へ

P. S. 正直な所、私はちょっと気がヘンなのではなかろうか、とお思いでしょうが、そんな事はなく、ちょっと浮かれてるだけだからご心配なく。

=====

December 30, 1981

Mr. Tom Engelhardt
Pantheon Books
201 East 50th Street
New York, New York 10022

Dear Mr. Engelhardt:

It has been almost six months since I heard about your interest in Mr. Takeshi Kaiko's work during my stay in Japan. Since I returned to this country in mid-September, I have been totally occupied with a project of writing my own book (on the Yoshiwara). It is entirely my fault not to have written to you earlier and I do hope I am not too late to rekindle your interest in Mr. Kaiko's work.

I enclose herewith, my translation of three short stories by Takeshi Kaiko: The Duel, The Crumbled Ball, and Building a Shell Mound. Mr. Kaiko was the first recipient in 1980 of the newly established prestigious Kawabata Prize for Short Stories for The Crumbled Ball

(1978). I have translated five more stories, all not yet introduced to the English speaking world. Eight stories should be more than enough to make a very nice collection. The reason I have not done anything about it is, the introductory chapter I wrote for the original idea for six stories is about six years old and requires much updating.

If you are interested in seeing the introduction and other stories (which can stand reworking) as they are, I shall be very happy to send them to you. At the moment, I cannot spare my time to work on them, unless someone shows enough interest in publishing a volume of Kaiko's collected short fiction. I will set aside all other work and concentrate on such a volume if you are willing to publish it.

Mr. Kaiko told me in his last letter of early this month that a German film company read my translation of his *Darkness in Summer* and asked for film rights. It is extraordinary that a book that came out in 1973 – a very moody plotless piece which will make it difficult for film making – should draw a film maker's attention now. I was delighted to hear the good news. In the same letter, Mr. Kaiko told me that he recently received the Kikuchi Prize on the past 15 years of outstanding work in reportage literature. He is truly an outstanding writer, very powerful yet sensitive, with a superb power of observation and magic of words. Unfortunately, he is not a slick story teller and his short stories lack the kind of plot ordinary non-literary readers seek. Nevertheless, I feel that his work should be read more in this country.

I shall be very appreciative of your comment on the enclosed three stories. If you decide not to use them, I would appreciate your returning them to me. Thank you very much for your courtesy. I wish you a very happy and prosperous New Year.

Sincerely,

Cecilia Segawa Seigle

=====

1982年11月15日（受信、開高氏より）

フィンランドはヘルシンキから来たカイニエミネン氏なる日本語と日本文学の研究者。ふいに某日、電話してきて、いささか早口で所々洩れるけれど全体としては端正な日本語で、『夏の闇』を翻訳出版した所、フィンランド文部大臣翻訳賞をもらった。ベストセラーにはならなかったけれど同国の高級インテリのあいだではたいへんいい評判になったとのこと。よく聞いてみるとこれが1978年。四年前のこと。全然こちらには何の通知もなく訳書も送ってこず、まさに寝耳に水一滴というところ。ヘルシンキとストックホルムの文学エージェントからクノッパ版の英訳本を提供されて一読し、昂揚したので、あらためて日本から新潮本をとりよせ、それから起したという。日本語にしばしばムツカシイ表現があって困ったが、それは英語版によって軌道修正できて大いにヘルプになったと、いいます。

いわゆる“純文学”はヨーロッパでもアメリカでも不振をきわめ、ドン底に近い状態にあるらしく、出版社の倒産、併合をしきりに聞かされます。それを聞いたたび、明日はわが身と、思いつめ、ズーンとつめたいものが背骨に沿って走ります。売れてるのはノンフィクションと、ポピュラーサイエンスと、エンタテインメント。あとはナーダ、ナーダとのこと。

小生の身も不振をきわめ、ビフテキを食べようか串カツにしとこうかと、しばしば迷うのであります。あなたさまからあたたかい泡のようないい手紙を頂かなくなってから久しくになり、これまたさびしいのである。たまには東風が吹いたら思いだして下さいな。あなたが散らしたタンポポのタネはあちらこちらでたしかに魂の土に着地しているらしいのです。信じて下さい。クレド。

尊敬していますぞ。

(とってつけたような文体で恐縮ですが)

いそいで書きました。

いつものように。

C. S. タンネンバウムさま

ごぞんじ

=====

1982年11月15日

開高様、

お久しぶり、全く半世紀とでも言いたいくらいのご無沙汰のあと、ちろりと、カプリカシシリイからの絵葉書を送った甲斐があって（送ったと思いますけどナ、違いますヤロカ）、お手紙が舞い込んできたので、これは吉報か、凶報か、とまずドキンといたしましたところ、まあまあ無難な、どちらでもないお手紙で、ほんとうに嬉しく拝見いたしました。もちろん、吉報ならばもっとよかったに違いないんですけど、今日この頃の世の中に吉報なんてものは「レー■ン死す」くらいのことではないもので、何も期待できませんからね。それにしても出版界の不況については、私も今年の夏以来、いろいろそのことを聞いて、「こんな時によりもよって本を書くとは何たるアホか」と自分をののしっています。95%書き上げて、エージェントへ送り、南イタリーとシシリイに17日ほど行って、帰ってきて、中々エンジンがかからないのを鞭打って、残りをちょろりと書き上げて（というのはやすやすという意味ではなく、お茶を濁したという意味）送りました。多分出版されないか、されるとすれば何ヶ月もあちこち、フットボールのように蹴り飛ばされた後でしょう。フィクションではない、吉原の生活をまじめにカルチュラルスタディとして書いたのだから、面白くはありません。このあとすぐ「吉原と文学美術」について書きます。

(❖これウソ、書きかけて、はて最終的にやめてしまったのはいつだったか???)

出ないとわかっていてもやりかけた勉強だからもうすこしするつもりです。徹底的というところまでは行きません。

この間エージェントが電話してきて、パンテオン・プレス（アメリカでも有数です）で三人目のエディターが読み始めたそうだから望みは無きにしもあらず、といいました。でも今はほんとうに確実に売れるとわかっているものでなければ出さないそうです。

開高さんのフィンランドでの賞はよかったですね。でも彼はたしかに翻訳をお宅へ送ってよこしましたよ。私はお宅でそれを見ましたから。ただ、カイ・ニエミネン氏がよく説明しなかったのでしょうか。それとも彼はフィンランド語だけの手紙をよこしたのかしら。

ドイツでの映画の話はどうになりましたか？ドイツではいろんな映画が出ていて、私も見たい見たいと思いながらいつも期を失っています。ファスビンダー、ハーツォグ、亡くなったのはハーツォグでしたっけ。まだいろいろいるようです。フランス映画は割と見っていますが、ドイツ映画はフィラ市のような田舎にはなかなか来ません。私は相変わらず忙しく、くるくる立ち廻っています。

先週は月と木はフィラ・オーケストラの仕事、金は美術館の仕事（皆ボランティアです）フランス語（まだくされ縁です）、コンサートが四つ（昨日のように一日に二回というの）美術館工芸展のレセプション、演劇が二つ、その間には弁護士とあったり体操しに行ったり、何やらの理事会に出たり、一体「何のために生きるのか」と問いたくなりますが、結局「忙しいのが好きなのである」としか結論できません。

今週は何もないのは水曜日だけでその日には頭に氷袋をあてて寝込もうかしらと思っています。というのは木曜日には私の大嫌いな「人の前で話をする」ことを引き受けてしまったし（浮世絵について）金曜日には法廷に出なければなりません。主人の遺産問題がまだえんえんと続いていて、乞食にされるかどうかといういわば天下分け目の関ヶ原です。

今年は二月にロンドンへ行ってとほうもない突発発作的買い物をして、浮世絵に大散財をしたから、夏中日本へいかないでフィラデルフィアで隠者の生活をした（と自分では言っていたのだけれどあまり隠者のでもなかった）のです。それで日本へ行かないで我慢したのだからと思って、もう来年の日本行きの日航の安い切符を買ってあるのですが、いつ行くかまだ決めていません。できれば出版の契約が出来てから、本のために使いたい浮世絵の許可を日本でとって来たいという一石二鳥の実用的考えからです。今度行けば本当に東京中歩いて、江戸時代の面影のすこしでも残っている所がみたい（ムリですか）。

年を取るとほんとうに趣味が変わって、昔は見向きもしなかった江戸時代がしきりと興味をひくようになったのです。永井荷風氏の心境がすこし解ってきたところです。

開高さんの不振というのは、書けないということか、売れないということか、ちょっとわからないでいます。多分前者なのではないかと思っています。ノンフィクションを多く書いていらっしゃるから、売れないということはないと思うのです。でも「書けない」はもっと辛いかもしれませんね。才能の全くない凡人にはそういう苦しみはわからないので、ボケーっとして、そうかなあと思っています。

私は *Into the Black Sun* が出てきた時に翻訳賞審査に出せばよかった、機を逸したと残念に思っています。こういうのは、いちいち申請しないと他の人はやってくれないんだそうです。これもボケーっとしているからーといえ、このあいだやっと1981年のライセンスを車の後ろにくっつけて、一年中走り回っていたのを発見してぞっとしました。つかまらなかったのは奇跡みたいなものです。日頃の善行の賜物でありましょう。

ではまた書きます。東風が吹かなくてもよく思い出していますから、もっと書くようにしますけれど、親にもあんまり書かない不幸者ですから、御諒承のほどを。
牧先生におよろしくお伝えくださいませ。

早く日本へ行きたいナ。

11月15日

セシリア淑子

=====

1983年4月・5月？（開高氏へ）

今朝立派な大きい御本が届き、ちょうど、今から仕事をしようか、『とはずがたり』の英訳を読もうか、と思っていたところなの、エイとばかりに『オーパオーパ』を読み、二時間かかって今すんだところです。大変面白く、大笑いしておなかの運動になりました。なんとまあ、すてきな雄大なお仕事とよくお取り組みになりますね。途方もない企てばかりで、さすがにマチョですなあ。いくら頑張っても女にはできないことですナア。

（❖今なら女性でもやるでしょう。時代は変わりました。）

私など五十以後の体は全く運動とかビタミンとかあちこちのつぎはぎとか、人工的に保ってるようなものですが、開高氏はとうとう決心して水泳をお始めになりましたか、良いですね。それでもう十年は持ちます。十年持つものなら二十年大丈夫デス。私も一週に一度美容体操とラジオ体操のあいのこみたいなものに出ていますが、それでも結構役にたって、手が床につかなかったのが、つき初めたり、床の上でえびみたいに尻尾を持ち上げてアンヨを頭の後ろの床につけたりできるようになりました。もっとも私はわりと柔軟で（おつむがお柔らかいせいで）四年前、まだ体操をしない頃でも、足の親指が赤ちゃんなみに口にはいるかどうかやってみて、うまく入ったので、主人に自慢したところ、パーティで、人が大勢来ていた時、主人に「ただいまからセシリアが足の親指をくわえてごらんにいれます」とすっぱ抜かれました。実演はしませんでしたかね。ま

さか普通の人間なら、おババにでもなれる年の女が人前で赤んぼのまねでもありますまい。

開高さんは水泳修行だとか。アラスカへいらした時はお困りだったでしょう。30秒で死んでしまう水のなかでは泳げませんものね。

今年ももうどこか洋々たる魚釣りにでかけていらっしゃるのでしょうか。

私は5月22日に日本に着きます。そして夏中日本の何処かにいます。6月の始め、母と旅行します。7、8月は東京に落ち着いて、9月始めにこちらへ帰るつもりです。体操もしたいし、ピアノも練習したいし（下手くそで練習などと偉そうなことも言えませんが）フランス語も忘れないようにしたいし（これも忘れるほど話せませんが、夏中やらなかったらマイナスゼロ以下になります）、また吉原あたりをみっちり見て歩きたいし（今はその影もありますが）東京中足の続く限り歩き回ってみたいし、本を買いたいし。

吉原の原稿は、パンテオンとクノフが同じ評をしたので、一月から書き直し始めてちょうど終わったところです。まだ出してもらえるかどうかわかりませんがどうだって良いのです。講談社インターナショナルは興味がおおありだそうですが、あそこは最後の手段としてとってあります。

この間『輝ける闇』のペイパーバック二冊送ってよこしました。ペイパーバックが出るくらいなら、日本では売れてるのですね。嬉しく思います。本当に良い本なので、もっと読んでもらいたいものです。でもこの間おっしゃったように純文学というものは売るのがなかなか難しいものなのですね。買ってくれる人に褒美くらいあげないと。くだらない週間雑誌はやたらと買うけれど、文学なら評判になっていても「マア、あんな、図書館へイタラナンボデモヨメルサカイ、カワンデモエエワ」ということになり、「マアトショカン行くよりトルコ風呂へイタ方がオモロイサカイヤメトコ」という事になるのでしょうか。

スチーブン・ショウ氏が開高先生をいつかお訪ねしたいと言っていましたから、いつか一緒にお伺いしてもいいでしょうか。日本へついてからご相談します。この間ペイパーバックを出す前にそれを知らせに電話をかけて来、そのあと送るという手紙をくれました。まじめなシンネリムツリ仕事をする人です。始めの時のまちがいや何やら指摘しておいたのもできるだけ訂正してくれたそうです。私はまだ読んでいませんけれど。

春いろんな行事があり、出かける事も多いのですが。この間ギュンター・グラス展があり彼がわざわざドイツから来たのでレセプションへ行っていました。よせばいいのに又一枚買いました。前にも二枚ほど買いましてね、後悔してたんですが（というほどでもないか）その事を言ったら彼喜んで、私の買ったエッチングの自画像の裏に「私の作品を集めているセシリアへ」とドイツ語で書いてくれたそうです。私には読めないけれど。たった三枚で集めてるも大げさだと驚いたことです。その昔、ベルリンで彼のブレヒト劇『民衆は立ち上がる』とかなんとかいう演劇を、ドイツ語わからないのに見

に行ったのでそのことを話しましたが、全集にガラスのエッチングをお使いになった日本の大作家先生のことを言うのを忘れていました。多分彼にお会いになったでしょうから、開高氏のことをいったら喜んだでしょうにウカツなことでございました。

三日前に美術館が「日清戦争の浮世絵展“最前線の印象”」という展覧会を開き、レセプションにいったら生花インターナショナルの志による草月派の花が二箇所にいけてあり、たいへん嬉しくなりました。それでも日本美術部長によるとアメリカ人の中には戦争絵展の場にお花を生けるのはふさわしくなかり、などとトンチンカンをいう連中がいるそうなので、「何たることか、日本の武士はえびらや兜に花の枝をさし、かぶとに香をたきしめて戦いにのぞんだのであるゾ」と言ってやったら、彼女は得たりとばかりそのことを今度から言いふらすそうです。けれども日清戦争にそんなことをした人はいなかったでしょうから、(ナイショですが)またしても日本に関する大ミスインフォメーションが流されることになりそうです。

この展覧会に関連して講演が三つあり、私も一つ請け負わされて明治の女性についてしゃべることになっています。この頃江戸時代とか明治時代とかよく知りもしないくせにますます好きになっていきますが、読むにつけ、昔の女性は偉かったと、感心するばかりです。今でも偉い人はえらいんでしょうがねえ。

では夏お目にかかるのをたのしみにしています。

願わくは開高健氏が魚釣りに出かけないでお家でカッパの真似をするか、プールでイルカのまねをしていらっしゃいますように。

かしこ

セシリア淑子瀬川シーグルタンネンバウム

開高健大先生、みもとに

P. S. 『オーパオーパ』とありますが、この調子で行くと、オーパオーパオーパオーパと限りなく続いてお困りでしょう。誰かが溺れかかって口をパクパクさせてるところを想像してしまいます。

もちろん青海流の水練の達人でいらっしゃる開高氏のことではありません。

御本どうもありがとうございました。

=====

1983年10月6日受信（開高氏より）

★ 9月にはちょっとNYにいたのですが、例によって例の如し、ブリキ車をまわすハツカネズミのような忙しさで、気になって気になってしかたなかったのですが、とうとうお電話できなくて帰国してしまいました。シェクスピアの言葉を借りま

すと，“響きと怒り”の人生ということになるのですが、いったい、いつまでこんなハッスル・アンド・バッスルにまみれて暮らさねばならないのでしょうかネ。

★ 8月にオンタリオ湖の北部、数百万平方キロただもう森と湖ばかりという地方の森の小屋で一週間を暮らしました。ここの湖と川では Walleye, ウオーライという30センチほどの魚が釣れます。スズキの一族。カナダ人の釣師は“bread’n butter fish”と呼びます。さしずめ日本人なら”ままかり“(ごぞんじなければお問合せの手紙をチョウ)とでも呼ぶところ。ジャンプもせず、突進もしないのですが、食べたら素晴らしい味がするのです。これは北の冷水の魚ですからフィラの近郊にもいるかもしれません。ただし、蚊と、ブヨと、モスキート・ジュースにまみれる覚悟でないといけません。釣師だけに味わえるよろこびであります。白身、淡麗。醤油で煮つけると、ふと、アイナメを思いだしたりするような...

★ 『新潮』に“耳の物語”というものを連載しはじめました。“青い月曜日”が失敗作だったので、それを含みつつ超克しようという気持ちでスタートしたのですが、うまくインキがのびてくれないので苦しめられます。アタマのなかにあるときはなかなかの名作だったのですが、いざ、取り出しにかかる、途端にもつれたり、プツン！と切れてしまったり、暗夜行路です。

★ お元気で。

★ また。

—ごぞんじ—

=====

1983年10月7日

開高様、

お手紙ありがとうございました。如何にありがたかったかを立証するために折り返しの手紙を書きます。今友人のお母さんのお葬式から帰って来た所、彼の母親は八十で私の母と同じく、十一月に八十一才になる筈でした。私の母はまだピンピン（でもない、ひんひん位かな？）していてこの夏私と日本アルプス立山黒部へ行ったり、十一月には句会で東京へ一人で出かけたりしました。

ダンが亡くなる前の何年か、私は赤の他人のお葬式へ行く度にやとわれ「泣き女」みたいに洪水なみの涙が出て、恥ずかしかったものです。主人の親友の医者が自殺した時など、彼の奥さんの倍ほど涙を出して、人が怪しんだのではないかと自分で自分の痛くもない腹をさぐるほど痙攣的に泣きました。それもダンの死の予感だったような気がしています。だから今日は母のことを考えて泣くといけなと、一生懸命たのしいことやらお菓子のことを考えていたので、泣かずにすみました。それにしても、私はクソまじめに黒づくめで行ったのに、赤だのピンクだの、死んだ人の嫁や孫たちまで赤々としたも

のを着ているのでびっくりしたことです。日本人やヨーロッパ人はきちょうめんに黒を着ますのにね。

この夏は長々と日本にいましたのに一度もお目にかかれなくて残念でした。奥様とはお話いたしましたけれど、こちらへ帰って来ましたのは9月9日。ですから開高さんと丁度すれ違いくらいになったのだと思います。お忙しそうな夏でしたが、十分な成果をおあげになって、又立派な御本が出ますでしょう。北の湖でおいしいお魚をお釣りになっていていいタンパク質をたくさんお取りになったけれど、ブヨや蚊にも栄養をずいぶん補給なさったようですね。でもまさかセント・ジョージのようなひどい所ではなかったでしょう。オンタリオの北の方はアメリカ人でもよく行く人がいます。すごいブヨと蚊の話は私も聞いたことがありますけれど、景色や静寂の境地はよかったです。私ももう少しお魚を、せめて食べることなりと好きだとそういう所にも行って見る気になるかも知れませんが。でも今年は十和田湖へ一人で行って、ぜんぜん人気（ひとけ）のない十和田ホテル（秋田杉の建築がご自慢の、バス停のある休屋からだいぶ離れた所にあるホテル； タクシーでないと行けない）に泊まって、さすがに心細くなっていると、アメリカ人の学者で、日本語も中国語もできるおえらいさんのおじいちゃんに会って大話をいたしました。帰ってからもお便りいただきました。

『耳の物語』というラフカデオ・ハーンの「耳なし芳一」の話なんぞ思い出してしまいましたが、『青い月曜日』を含むとすると自伝的なものなののでしょうか。私はあれは失敗作だとは思わないんですけどね。でも私の文学的美学的判断は非常にあてにならないので（つまりロマネ・コンティ1935年をあまりよく思わなかったりするのはいくらかに批評家として落第です）私一人で力んでもだめなわけですが。

今年の夏はほんとうに楽しく過ごしました。母や姉や、又ちがう姉たちと「ナイス・ミデイ」というへんなジャパングリッシュのグリーンカー・パスを使ってせっせと西へ東へ北へと行きました。国鉄は私たちのおかげでだいぶ損をしたでしょう。といっても車輛はガラ空きでしたから、誰も乗らないよりも乗ってあげた方が少しは威勢がいいのです。それに帰ってきてから国鉄のレイル・パスを宣伝してあげる記事を書きました。どこへ出るともあてのない記事ですが、私のエージェントがどこかへ出してくれるでしょう。そうすると国鉄の外人のお客がどっと増えて……ということになりはしないかと。だいぶ楽天的ですね。とにかく旅行して、そのあと東京でせっせと図書館通いをしたり、歌舞伎や「もとのもくあみ」というお芝居を見たり、さまざまな展覧会を見に行ったり、友人と会ったり、家族パーティをしたり、よく遊びよく働きよく食べて満足して帰ってきました。

いつものことながら、日本に住む所が欲しい、どうしようか、大金出してマンション買おうか、でもそんなことをしたら旅ができなくなる。それに地震で元も子もなくなったらどうする？とまことにみみっちく、現実的な結論を下して、結局現状維持のままで帰ってきました。それは大勢の友達が、「ゼッタイ買っちゃダメよ、賃貸になさいチンタイに」といつも言うからでもあります。

来年は三ヶ月も日本に滞在することはないと思いますが、できれば7、8月に行きたいと思っていますから、じっとしててください。暑い時だからじっとしている方が汗が出なくていいですよ。こちらから大汗かいて長道を、撃ち落とされそうな飛行機に乗って行きますから。だけど日本ほんとうに暑いですね。蒸し暑いんですね。じっとしていても、クーラーのない所だと汗の方で勝手に流れてくれます。地震はあるし、大雨台風はあるし、やかましいし、いいことない筈の国だけど、なんとなく面白くてしょうがないので日本へ行きたいと毎年思ってしまうのです。それに食物はだんぜんおいしいですね。この間ニューヨークへ行って（この間からわりと度々行っています）パークアベニュー59街に用事があったので、その近くの「ひょうたん」という大流行りの家でご飯を食べて呆れました。日本の場末でもあれよりはおいしいですよ。ひどいものを食べさせられてもアメリカ人は通ぶって満足しているのです。大入り満員でしたーと言っても私は自分の評価力がだんだん落ちていくのを知っていますから人のことを批判できませんけれど。ただ、高い値段をとって食べさせるのだから、少しはましな物を出しなさいよ！と思います。国辱です。

夏の間に『輝ける闇』英語版（ソフトカバーの）をほめた評がジャパン・タイムスとイースト・アジア・エコノミック・レビューに出ました。大変嬉しく思いました。これで少し人気が出るといいのですが。講談社のニューヨーク局が何もしないのでいけないのです。

信木さん（？）川島さん、ショウさんなどにも夏の間お会いしました。
では又。ごきげんよう。

=====

1984年3月22日（開高氏へ）

開高鈞聖のお誕生日が巡ってきた時にちらりと、これは書かなければ、と思った甲斐もなく、またまた何ヶ月か過ぎてしまいました。

セネガルから絵葉書を出しましたが、それも昔のことで、帰ってから一ヶ月にもなりません。ダカールではアメリカ公使が私ども13人のためにパーティをしてくださったおかげで、セネガルの女性要人たちに会い、そのあとの一週間、女性法律家協会の面々のお家、国会副議長のお宅、ただ一人の女性最高裁判事のお宅などに次々に昼食や夕食に招かれ、あまり人の見ない家のなかを見せていただけました。

帰ってきてから毎日忙しくしている所に先日東京のTBSエンサイクロペディアの斉藤さんならびにシカゴのバシルさんからのお電話で開高大先生が又、私を翻訳者としてご推薦くださいましたそうで、まことに恐悦至極に存じている次第であります。私はバシルさんにおまかせしておいたのですが、彼女が東京になんと言ってやったのか、東京から少し待てと言って来たそうです。日本の会社は何事も決めるのにすごく時間をかける

からと言いますが、アホらしい。私は気が早いのもう仕事にかかって大分やってしまいました。

それよりも、『もっと遠く！』『もっと広く！』はずっと凝縮しないと、とてもアメリカの出版社は出してくれないだろうと思うのです。写真もたくさんありますから、とても高い本になって買う人も限られてしまいます。

日本語での面白さもそのまま英訳したのでは消えてしまいますし、以前一章訳したオーパだって頼んだのはハーパー&ロウでしたっけ、アメリカの読者には不向きだといってやめたのでしょうか。私は二冊を一冊にして出すことを提案するつもりでいます。この頃アメリカ出版界は特にケチケチしています。私の本もまだ買ってくれる社はいません。エージェントはとても立派な本だから絶対に自信があるから今に誰かが出してくれるとのんきなことを言っています。私はもう考えないことにしています。彼女は日本の出版社は時間がかかりすぎるから、といって読ませてくれといっている講談社インターナショナルには送らないでいます。

(❖この本 *Yoshiwara: The Glittering World of the Japanese Courtesan* は1993年になってやっとハワイ大学出版部から出していただけた。講談社はその稿を長い長い間検討したが結局出さなかった。)

この間NYのメトロポリタン美術館で「Balthus(バルタス)展を見、あのヘンなオッサンの無邪気でエロチックなヌードを感心して眺めてきました。大部分はつまらないけれど、いくつかすばらしいものがありました。

もう何ヶ月も映画を見ていなかったのに、バシルさんが「ちょっと待て」と言ったとたんに三日間に二本見えてきました。デイアンヌ・キュリの *Entre nous* と、アルバート・フィニイとトム・コートニイ大熱演の *The Dresser* です。アントラ・ヌウの方はアカデミー賞候補に上がったにもかかわらず、何か納得のいかないものが残ります。結局ディレクターの矛盾した感情が反映しているのでしょうか。ドレッサーの方はもうただただ名演技にうなるばかりでした。重厚すぎて、もたれたという感じ。

こないだはアリアンス・フランセーズの *Carnaval des fleurs* 今週土曜も舞踏会（無踏会です私には）これは友人がたくさん行くチャリティのデイナーダンスです。私はもっぱら食べて眺めるだけ。先週は恒例のフィラデルフィア・フラワーショウ、春にさきがけて花と庭園の大展覧会があり、毎年大きく豪華になって、見ねば女がすたるという気にさせられるので行って来ました。見るのにずいぶん時間がかかってシンドイものです。日本の有名先生が世にもみにくい前衛の彫刻と花、10メートルくらいあるのを出していて、顔が赤くなりました。全会場で一番ひどいものでした。

私はこういう風にじつに付和雷同的に人の行くところへ行く傾向があるので時間が足りないのです。毎日毎晩何やら出かけることになります。だんだん年よりになりまして行

く末のことなぞ考え、外出もほどほどにして意義あることをしなければってんでちょっとエッセイなんぞ書いてみようかとセネガルで書き始めたんですけどね。「女が一人でいること」についてなのですが、たちまち音楽会、オペラ、「パーチー」などで邪魔がはいるわけです。しかし自分で書くのはどんなに難しいかってことがよくわかったので、また翻訳に帰ろうかと思っています。ベトナム三番目どうなっていますかしら。やらせていただけますか？

では又、今年7月半ばから9月半ばまで日本へ行きたいと思っています。

牧羊子様にどうぞおよろしくお伝えくださいませ。お話したいものです。

三月二十二日 セシリア淑子

コンプリート アングラー様

=====

1984年：日付なし（開高氏より、10月28日に受信か？）

7月にアラスカのキーナイ河へキングサーモン釣りに、9月に某リッチ氏（脱税しての．．．）の招待でおなじくアラスカの奥地へカリブー・ハンティングに出かけ、ウツをぬかしてたもんですから返事がすっかり遅れてしまいました。（おまけに紺屋の白袴というヤツで小説家は手紙を書くのが苦手と来てます）。

短編集に何かを追加するものはなきかの御下問。いろいろ本をおくりましたが、その中の一冊の短編集をさがしてみてください。

（❖その質問の手紙はなくなっている。）

私としては“怪物と爪楊枝”、“戦場の博物誌”の二つが気に入っているのですが、アメリカ的感覚からすると、いかがでござるか。しかし、昔から私はあなたの読解力を信愛していますので、つねに白紙委任状をわたされているものとして煮るなり焼くなり任意のままにやって下さい。日本も毎年出版事情は悪くなるばかりで Publish or Perish は同感また同感であります。

お手紙のこのコトバを各社の重役に伝えてやると、紀尾井町、矢来町、神保町、各社ことごとく呻唸して賛意を表しておりました。この病気はどうやら“先進工業国”すべてに共通のように思われます。いっそおちこむだけおちこみやがれ。とことんダメになりやがれ。そうしたら灰のなかから羽ばたく音がし始めるかもしれない。（カッサンドラ誕生ということになるかもしれませんが、それもよきではないか……）

目下小生は釣りと純文学だけに生きております。『新潮』に『耳の物語』なるモノを連載してもう二年近くになる。あと一年はかかるでしょう。『青い月曜日』が失敗作だったので捲土重来プラスアルファの雪辱戦のつもりであります。ほかには週に二回の水泳。

(この五月にはノンストップで2000メートル。25メートルのプールをじつに80回ちんたらちんたらと往復しました。意志の勝利であります。なせばなるであります)。

あなたの手紙はいつもビーヴァーのように勤勉精緻でありながらユーモアを忘れないので読むのが愉しみです。さびしくなったらいつでも書いて下さい。それから、日本のモノでほしいモノがあったら何でもほしがって下さい。

今日の手紙は短くて終わってしまいましたが、お許しを。

ごぞんじ

=====

1984年10月28日(開高氏に)

御本を沢山ありがとうございました。一気にたのしくいろいろ読ませていただきました。一番役に立った(とはヘンな言い方ながら)「コレクション開高健」の山崎正和氏の「不機嫌な陶酔」という一文でした。頭の悪い私が「ロマネ・コンテイ1935年」や『夏の闇』をただ感覚的にけげらいしたり傾倒してほめたたえたりしていたのは甚だ作者に対して失礼でした。この一文でじつにあざやかに明快にわかったような気がして、「ああ夏の闇を翻訳する前にこの一文を読んでいたら!」と嘆いたことでした。これは今からなんらかの開高論を書こう、開高さんをあらゆるところから眺めてその偉大さを(本当に大きいですね。人格もサイズも)アメリカの、私同様に頭の悪い奴らに説き聞かせようと思ってる人間にはじつにいい参考文でした。他の数々の開高論もたいへん面白く示唆の多いものでした。

さて、ここまで書いてしばらく忙しくしている間にご本人の御書簡が到来いたしました。珍客到来と大カンゲキいたしました。ご多忙のところわざわざ御丁寧にお便りを下さるのは本当に誠実な方だと思わずにはいられません。丸っこい円満な字まで、ますますきちんときれいになるようです。やはりお気に入りのペンだけありますね。私もモンブラン買ってやろうと、この夏ちょっと万年筆見たのですが、私はこんな栗のお菓子の名のような、あるいは山の名のようなペンは信用できぬと一蹴いたしました。惜しいことをいたしました。見直します。

アラスカでは脱税者とおつきあいだそうですが、御同慶のいたりです。相手がマフィアでない限り、殺されたり幫助罪に問われたりすることはないでしょう。かえって彼の税金控除の口実に使われていらっしゃるかもしれません(という開高氏がCharity Caseのように聞こえてたいへん失礼ですね。開高さんは多額納税者でいらっしゃいますものね)とにかくアメリカでは上は大統領から下はホットドッグの立売りのオッさんまで脱税していて(バカ)正直に払っているクソまじめな人間はジェラルディーン・フェ

ラーロさんと、かく申すセシリア瀬川さんくらいのもです。うちのダンナ（タンネンバウム旦那のほう）も税金を払うことが性（しょう）に合わなくて、会計士と相談の上、所得申告をだいぶ遠慮してケンソンに申し上げたようで、その追っかけ課税が私の頂戴分からどっさり取られるのだそうです。「江戸の仇を長崎で討つ」とか「親の因果が子に報う」とかいう場合、これからは「シドニーの脱税をセシリアが払う」と言おうと思っています。

だいぶ脱線しましたけれど、お手紙の中で「怪物と爪楊枝」がお気に入りとあり、私もあれがいい、もしつけ加えるならあれにしようと思っていたところなので嬉しく思いました。「博物誌」の方は、もちろん最近のものだし、緻密でいいのですが、長すぎます。でもとにかく大師匠のチョイスと一致しているようで嬉しく思いました。この間から週末ごとに以前翻訳したものを読み返して少し手を入れています、大学の合間合間なのでまだ序文の大開高論を一席ブツまでには至っていません。今のところできているのは「決闘」「玉砕ける」「貝塚をつくる」「岸辺の祭り」「笑われた」「穴」その他に「一日の終わりに」と「五千人の失踪者」がありますが、これは入れようかどうかと迷っています。五千人的方はとてもいいムードの橋尽くしがあっていいのですが。とにかくもし講談社が興味を示してミンナオクレといたら送ります。そうしてもう一つ考えられることは、新しいものを翻訳する時間が足りなければ開高論だけにして（オマエのカイコー論ナンゾイラナイヨ、と言われるかもしれませんね）「男と女のいる舗道」をバシルさんの了解を得て使うということも考えられますね。

1

来年は教えるのはやめにします。たのしくて面白いけれど、ペン大では契約を更新してくれないでしょうし（何しろ穴埋めですから）他の二流のところや遠い一流のところへこの年になって頭を下げて行く気は絶対ありません。やはり訳したり、落書きしたり、切ったり貼ったり、ブったりブたれたりして生きてくことにします。そうして時々若い人たちを招いてワーツとまづい食物やヘンな飲み物を出して若返りを企てましょう。

11月20日から1月半ばまで冬休みがあるのでその間に来学期教える『源氏物語』のプランも立てなければならぬし、開高論も書きたいし、なのですが、ドルが強い間に一週間ロンドンかもしくはパリにひさしぶりに行って来たいとも思っています。なにせ私は何やかやしたい事が多くて欲張りなのですね。そのくせ何をするにもありもしない力を全力投球なので疲れることおびただしい。第一エネルギーの放出も、政府から文句をいわれやしないかと思うくらい無駄をしてるのです。これが無能者の苦しまねばならぬ運命だと見えます。

開高大先生は最近水泳の御精進だということを御本でも知り、お手紙でもうかがって驚嘆しています。さすが！何でも奥義を極めなければ気が済まない方は違ったものだと思います。二千メートルとはね！チンタラだろうがノラクラだろうが、その体力！その闘

志、その遂行心！あなたを参謀総長にしていたらあるいはかの戦争も勝っていたかも。
（負けてたいへんよかったんだけど）。

大先生が『青い月曜日』が失敗作だったと繰り返しおっしゃるので、批評家達までそんなことを言い出したのではありませんか？私はそうは思わないんだけどなあ。ソビエトではたいへん評判がよかったそうではありませんか。あまり失敗失敗と仰らない方がいいですよ。『生物としての静物』を読んでたいへん楽しかったのですが、私はつくづく後悔しました。ダンのいいパイプがあんなにたくさんあったのに、つつい考えが至らなくて、四年前の引越しの時、縁も何もない人がワッと来て何もかもただで持って行ってしまいました。私は何も欲しくなかったのに、何もかもおっぽり出したのです。今あったら……と思うものもたくさんあります。パイプも上げてしまったあとで、昔のダンの友人が、「あなた、あのパイプはどうしました？あれは実に立派なコレクションだった」と言ったのでびっくりしました。私は人の使ったものをまさか——と思っていたのです。でも今度おあいする時はダンヒルのライターを差し上げます。これはシドニーの物で、お好みにあうかどうかわかりませんが。あの人はタバコに関する何かが必要だとすぐロンドンのダンヒルへ買いに行っていました。

あの『生物としての静物』の挿絵はすごいものですね。とても美しい本ですね。ノンフィクションの方の装丁も好きです。考えてみると『全作品』も『ノンフィクション』もいい装丁です。猪熊さんもギュンター・グラスもちょっと知ってる人たちなのも面白いと思います。猪熊さんはニューヨークにいらっしゃった頃、奥様ともどもにしばらくおつきあいをしていました。

とにかくあの大量の御本をぜんぶ航空便でドサリと送ってくださって私は恐れ入って、はるかなる茅ヶ崎に向かって最敬礼いたしました。ほしいものはないかとのご親切なお言葉ですが、もうぜったいに何も欲しい物はありません。この間から姉に何度か電話してたくさん送ってもらいました。学生や同僚にお茶を立ててあげるための物で、ヨーカンも駄菓子もお抹茶もたくさんあります。今夜は同僚およびその伴侶の方達が8人夕食に来ます。もうご馳走ちゃんと沢山作ってあって、三時頃からさっと手を入れるだけです。何しろ考えてみるとわたしが一番年上なので、よくぞ老いつるものかなと思います。が、やっぱり年かさだから、役は下っ端でもヤッタルデエとパーティをする気になるらしく、いつも人に食べさせたり飲ませたりしてるけれど、開高先生には反対にいつもご馳走になるばかり。まことにまことに申し訳ございません。今に東京の一番いいところにご案内いたします。

又とりとめもないことばかりでお耳を汚しました。プールへ行って洗ってください。今にアラスカのキングサーモンより早い、強い泳ぎ手におなりでしょう。何もかもしておしまいになってる方ですから、今度ひとつ鮭の産卵期にユーコン河をサケと競泳して遡ってご覧になってはいかがでしょうか。行き着いた先で雄渾なる成果が上がるかも（それで疲れ果てて死んでしまえと言ってるのではないぞヨ） どうも失礼。

10月28日午後1時半
セシリア瀬川シーグル拝

開高流水泳達人健泳氏へ

=====

（❖1984年の10月から、翌年の2月まで通信がないのはおかしい。その間の物が紛失したのだと思う。）

=====

1985年2月6日（開高氏より）

（MEMENTO・MORI という特製のたいへんな便箋）

今年の1月11日付の朝日新聞の外電コラムによると、パリのホテルリッツ内にヘミングウェイ文学賞委員会が設けられたと。

国籍を問わず、英語訳された作品ならエエという。賞金は5万ドル。3月までに〆切ると。

そこで『夏の闇』と『輝ける闇』の英訳のペーパーバック版、それに釣師としての証明書として『もっと遠く！』『もっと広く！』の文庫版を送りました。それに手紙をつけ、自己紹介した上で不審の折は左記の人物に電話でお問合せあられたしとしてあなたの名と電話番号を書いておきました。それはそれでいいのですが、あとでもう少しくわしく調べてみると、1984年度内に発表されたノヴェルであることという条件がついてるとわかってガックリです。もしあなたに何かの問い合わせがあったら大統領候補推薦演説並みにレトリックを駆使して一席弁じたてておいて下さい。

なお。来年度のことを考えあわせてあなたが進めていらっしゃるはずの短編集の翻訳、完成しましたらコピーを一つこちらへ送って下さい。

コーダン社インタナショナルにも持ちかけてみます。『怪物トロー』『戦場のー』の二編はどうしても収容したいと思いますがああなたの手紙にも賛成とありましたけど、訳は完成しましたか？

タンネンバウムさま

ごぞんじ

=====

1985年 日付なし 2月6日書簡への返信（Christie's auction 以前）

開高様、

先日はお便りありがとうございました。メメン・モーリのたいへんな便箋でガクゼンといたしましたけれど、そういう、わざわざお作らせになった私家版とおぼしきスペシャルノートペーパーでお手紙をいただけたのは甚だ光栄のいたりー公園の行ったり来たりーと思わなければならないと思い、そのお志を無駄にせざるべく、そのうち虫メガネでとくと拝見、研究しようと思っております。今のところ時間がなくて、まだ探究の運びに至っておりません。私のような性知識遅滞人間には大いに研究する必要のあるノートペーパーです。

なかなか時間がなく、それに時々時間を盗んではとりかかる序文がはかどらなくて（これは頭がカラッポのせいであると自覚しております）、この所春休みがすこしあるので「怪物と爪楊枝」を訳しています。これはもうすぐすみません。そのあと他のものをぜんぶコンピューターに入れてとにかく原稿が打ち出せるように用意しようと思っておりますが、やはり目を通す度に気に入らない所が出てきて、自信をなくし、やはり誰かに見てもらわなければダメだなあと思ったりしています。序文は前に書いて六つ七つ短編とあちこちに送った時皆に「あなたの熱心な絶賛のほどでもない」などと皮肉を言われたので（その時はまだ玉砕けるも貝塚も怪物も入っていなかった）やっぱり序文は一人でいい気になってほめるより、もっとしっかりした分析が必要だなあ、と思って書き始めたのですが、そうするにはやはり開高さんの作品を全部始めから読み直さねばならず、本当に頭の悪い人間はダメだなあと嘆息するばかりです。その序文はちゃんと伝記みたいなものも少し入っているし、深いものを求めるのでなければちょっと手を加えるだけでいいと思うのですけれど、やはりもう少し内容的にしっかり書かないと……と思うのです。短編の方だけでも全部コンピューターに入ってコピーができたならお送りしようかと思いますが、それはまた結局コンピューターに入れるということは全部タイプし直すということですからね。タイプすればまた欠点ばかり見えて変え始め、そのうちに原文と合わせてみたら変えてるうちに大分変わってしまったというような有様でどうも気に入りません。でもこの夏はきっとこれをすませるまで日本へ行きませんよ。意欲だけはたいしたものです。

ヘミングウェイ賞、残念でしたね。せっかくいい考えでしたのに。そういうことになんでも積極的にならないとダメなんですね。芸術家であろうが、学者であろうが、私はどちらでもないのとおおいに積極的であるべきですのに、本当に消極的でいつも損ばかりしています。講談社も『輝ける闇』が出た時にそれを翻訳賞に推してくれていたなら、どうにかなっていたかもしれないのに、と思いますが、その時もなんだかグズグズ言っている（つまり自分の社にいろいろ推薦したいものがあつたのでしょうか）なんの運びともありませんでした。

読んだ人はみんな褒めますけれどね。読まない人の方が多いから困ります。

エンサイクロペディア・ブリタニカの方からも、ロゼッタ・バシリさんがあんなに張りきっていたけれどその後音沙汰ありません。もう一年近くになります。

一月にロンドンへ行ってずいぶんいろんな演劇，バレエ，美術展見て来て面白うございました。浮世絵も何枚か買い，友人にも会ってきました。演劇はマギー・スミスの出た18世紀の *The Way of the World* が一番面白うございました。『キャッツ』も見ましたが、それはまあまあ、ミュージカルというものがそもそも好きでないので。

今年はいいい演劇がないそうで、ニューヨークも寂れているそうです。ロンドンまで見に行く気があってもニューヨークには見に行く気はしません。

三月二十日にニューヨークのクリステイで主人の浮世絵コレクションから相当いいものが売りに出ます。そのためにタンネンバウム・コレクションよりという立派なカタログがあざわざ出版されて、世界中から人が来ることになっています。私は悲しいから行きませんけれど、その前に打ち合わせに二度ばかり行きます。私のコレクションはそのまま、まだいいものがたくさん残っているからいいけれど、本当にシドニーの心積りで全部私に残してくれて一生それを楽しむはずでしたのに、情けないことです。もう五年半も後片付けが長引いているのですから、もろもろの弁護士と政府にお財布（なければの巾着というべきか）をすっかり空にされました

では又。お身体を御大切になさいます。開高先生は歯は如何ですか。私の歯この頃年のせいでペリオドンティスト（歯根と歯茎専門）に少し通っています。

まだ泳いでいらっしゃいますか？

息抜きにコンピューターで描いた子供のような絵を入れます。いつもこんなことをして遊んでいるんじゃないやありませんよ。でも面白くて二時間位すぐ経ってしまいます。気晴らしの必要な人にはもってこいの玩具ですー私はゲームは一切やりませんから。

開高様

=====

1985年4月22日（開高氏より）

お手紙落掌。

いつ日本へ来ますか。

私は6月と7月ちょっと海外へ出かけますが8月以降はずっといますから何度でもあなたと接触できます。たいへん楽しみにしているのであります。

短編集、全訳完成しましたらコピーを送ってください。川島勝ツチャンのところへ持ちこんでみます。“怪物と．．．”と“戦場の．．．”が入っていたら私としてはきわめて満足であります。来年のヘミングウェイ賞用に本仕立てにしてパリへ送ってやろうかと思っています。こういうことはヨーロッパやアメリカなら文学エージェントがとびまわってやってくれるのですが、わが国は不運です。

今年のヘーレー賞はバルガスリョサにいきました。

新聞の切抜きを同封しておきます。去年中に発表された作品というのが条件でしたから、ザンネンでした。来年は一丁あなたの短編集でやってみましょう。

ごぞんじ

=====

(❖この 開高氏の二通の手紙の間に少なくとも一通の私の手紙があったはず。何か『耳の物語』について批判したらしい。下の手紙のヒキガエルというあだ名もこれ以前の手紙に出てきたはずだがそれもない。)

1985年6月（開高氏より）

あなたの手紙は頂きました。メメント・モリのメモ用紙はニューヨークの文房具屋が売りつけたものに私が“メメント・モリ”とつけて、ルバイヤット風の皮肉を味付けしたつもりなのですが、露骨すぎるでしょうか。画のタッチに清潔なユーモアがあるので気に入っているのですけれど。

たしかにあなたは私の作品を知りすぎているので一人の読者としては『耳の物語』について客観的になれず、知りすぎた人の不幸を背負わせられています。しかしですね、あなたの批評はなかなかシャープであり、フェアであり、作者としては痛いところを突いています。感心しました。くやしいけれど認めざるを得ない。そういうものがあります。あなたはやっぱり依然として注意深くて周到で勤勉なビーヴァーであり続けています。私が言うのですからまちがいありません。信じてよろしい。

同封したのは最近ガリマール社から出版された“アントロジー・ド・ジャポネーズ・コンタンポレーヌ”という一冊本二収録された「玉砕ける」のフランス語訳のコピーです。この一冊本は森鷗外から大江健三郎までの短編の集成です。誰が選んだのか、私はまったく知らされていないので、これから事情を探ろうと思っているのですが、くろうと好みの作品ばかりが選ばれているようです。もし必要でしたら一冊とりよせてそちらへ送ってもよろしいが……

この「玉砕ける」という垢の小説、なかなか人気があります。これまでに英訳（あなた）ロシア語訳、中国語訳、そしてこのフランス語訳と進んできました。作者としては望外の倖せ。どこか垢抜けしたところがあるんでしょうね。そう思うことにしております。です。

今は来年の正月の毎日新聞のためのたった8枚の短編に没頭していて身動きできないですが、これが終わったら東京へ出て行って、幸福なヒキガエルと酒を飲もうと思っています。たしかあなたは吉原の原稿をヒキガエルにあのとき手渡したのではなかったかと思うのですが、その行方をさぐってみます。まだ手渡していないのだったら至急私当てに完稿を送って下さい。ヒキガエルはあのとき、どこかの大学の出版部に売りつけ

てみようと思っていたと思うのです。それはいいことですし、ヒキガエルはなかなかのウデの持主とわかりましたから、積年の深夜の呟きに日の目を見させてやりたいと思うのです。テレていないで、原稿を送って下さい。もしまだヒキガエルのところに有るのなら、突っついてみます。

=====

1985年一日付なし。開高氏の手紙

(❖これはこの前の手紙に私が返事をして、そのまた返事らしい。その私の手紙もなくなっている。)

同封したのはあなたの手紙のコピーです。赤線をひいた部分に目をとられ、さっそくコーダン社インターのイチバ君に電話をしたところ、まったく、知らナイ、ワカラナイ、とだけです。全然、寝耳に水だすです。あなたのところにレンラクしてきたのはコーダン社のどのセクションの、だれなのでしょう。教えて下さい。

なお、そのラインハート社のアンソロジーに収録される日本作家は「玉砕ける」とその作家だけなのか。どうか。それもしらべてチョウ、

ごぞんじ

(❖このラインハートというニューヨークの会社の本、*To Read Fiction* という本は、Donald Hall という人が大学で文学の教科書として編集したらしい本であるが、突然そんな話が入って来たので私は開高さんの許可を得るために彼に書いたのだが、講談社から来た話ではなかったと思う。どういうことなのかわからないが、一度こういうものがではじめると、開高氏の短編はよく許可無しに彼方此方に転載されたようである。一度飛行機の中でマガジンを読んでいて私の翻訳した開高短編 [この本に転載されたと同じ *The Crushed Pellet* だったと思う]を見つけて仰天したことがあった。又そのほかに転載されたものは:

The Crushed Pellet が *The Showa Anthology, in Vol. 2, ed. By Van C. Gessel and Tomone Masumoto, pub by Kodansha International, 1985.*

The Duel” in *The Oxford Book of Japanese Short Stories*, edited by Theodore W. Goossen, published by Oxford, New York: Oxford University Press, 1997.

“*The Duel*”(決闘)in *Beach: Stories by the Sad and Sea*, edited by Lena Lencek and Gideon Rosker, published by Marlowe & Company, New York, 2000. などである。)

(❖この手紙にも私は必ず返事を書いたはずであるがそれもない。その返事が次の手紙の「お手紙、落掌」とある手紙と同じかどうかわからない。)

=====

1985年7月31日、8月2日に投函されている（開高氏から）

お手紙、落掌。

短編集をめぐっていろいろ奔走して頂き、ほんとにありがとう。その手紙よりさきにあなたのところに電話をかけたのですが、朝も、昼も、夜も通じない。何日も。この手紙をもらってからさらにかけまくりましたけれど、やっぱりダメ。朝も、昼も、夜も。

（アラスカへサケ釣りに行ったのかしら？）

さきにジェッセル氏から来信。短編集におまえの作「玉、砕ける」をいれるについて瀬川さんと話しあいはいはついたがおまえ本人のOKがほしいと。それでOKの返事をおくりかえしておきました。

ところでコーダンシャ INTL の川島勝っちゃんがいつのまにか定年退職だという。かわって一場君という若い人。あなたと二人して一度この人に会う必要があります。ショウ氏にも。

小生は8・1日に大阪へ行き、8・4（日）にもどってきます。5日にまた電話してみます。朝も、昼も、夜も。委細面談です。

何もかもそのときに。

（何を食べたいか、よく考えておいて下さいナ。）

C・瀬川・シーグルさま

ごぞんじ

(❖この年に私は一年間国際交流基金のグラントをいただいて日本で勉強していた)

=====

❖このあと4年間に何通か通信があったはずであるがそれらがみんななくなっている。最後の開高氏の手紙は自分の病状を書いた手紙であった。

2009年7月26日の紅茶会で坂本氏と私に対談したとき、坂本氏が、私がお貸しした開高さんの手紙のいつくかを読まれた。

その記録は開高記念会「紅茶会」講演集V『ごぞんじ開高健』2009年12月9日発行、NPO 法人開高健記念会発行者、pp.271-291に出ているから間違いない。坂本さんが読まれた一通の手紙には次のようなくだりがあった：

「去年（注・1988年）の十二月頃から食事のたびにシャックリが出るようになりましたが、水を呑むと治るし、ビールを飲むともっと通りがよくなる。というくらいのことだったのですが、今年の三月になって突如として食べる物も呑む物もノドを通らなくなったので入院する……チェックしたら食道の一部がただれて細くなっていると。そこで手術。これがなかなかのもんで、……何やかやで七月にやっと退院。八月いっぱい自宅で生きる真似にふける。毎朝海岸のサイクリングロードを六千歩あるく。毎日だ。毎日。」（p. 289）

そうして坂本さんいわく。

瀬川さんの方からもお見舞いのお手紙を出されているんですね。これもなかなかいいお手紙なんですけれども。

「お身体も徐々に回復されていることと存じますが、まだサイクリングロードを歩いていらっしやいますか。葦はだんだんたくましくなっているのですが、枯れてしまわないで下さいよ。姉がいつだか新聞にお書きになったものを送ってくれて「もうご活躍なのだと安心しました」などと言ってまいりましたが、私もその位お元気がおありになるのなら、とホッとしました」

というのが、瀬川さんから開高さんに出された最後のお手紙なんです。これが十一月に書かれた物ですから、この一ヶ月後に開高さんは食道癌に肺炎を併発して亡くなられたんですね。

と言っていらっしやる。

この応答の手紙は両方なくなっている。

また坂本さんは私の一番初めの手紙での質問に対して開高氏が答えてくださったところを読まれた：

「フランスの J. Prévert の詩の冒頭に、やっぱりおなじことばがそのまま使われているのを読んだことがあります。”Beaucoup de l'eau a passé sous les ponts.” 古歌か、習慣か、よくわかりませんが、そういういいまわしです。主人公と女はその句を“久しぶりだね”のかわりに二つにわけていいあっているわけです。」（『ごぞんじ開高健』p. 278）

つづいて同じく『夏の闇』の原文で（ひっぱたいてやろうと思っているうちにふとうなずいちゃったりして）について質問したのだが、上記と同じ手紙のなかの返事を坂本さんが読んでくださった。

「からかわれたのを肯定するのですが、肯定しながら悔しくなってひっぱたいてやりたくなる。“救世軍”と女はからかわれてくやしくなってひっぱたいてやりたくなるが、内心では事実と認めるよりほかない気持ちにもなる、ということ。女が年にとって心が弱ってきたのでしょうか。」（上記同ページ）

そのほか、同じ手紙で、釣りの“毛鉤”についての質問「dry flies でよろしいでしょうか。ハリスはどんな spell ですか」にこたえて：

「毛鉤→ dry flies よりも artificial flies のほうがこの場合よろしい。ハリスは leader です。」（『ごぞんじ開高健』 p.279）

私が「帝力何ぞ我にあらんやとうそぶく」の出典を聞いたその答えを読まれた。

「『十八史略』の冒頭の部分にでてくるコトバ。帝王堯は非常によい政治をしていたのである日おしのびで視察にでかけたら人民の一人が王とも知らないで『オレはおなががいっぱいで満足だ。大地をたたいて歌をうたって遊ぶのさ。政治なんかオレは知らないよ。カンケイないナ』と大声をだしていた。中国の古譚。政治を感じさせないのが政治の理想だというのがこの挿話のいいところである。」（『ごぞんじ開高健』 p.279）.

これなど私も『十八史略』を漢文のクラスで読んだのだから覚えているべきだったがお恥ずかしいことにこの時は思い出せなかった。

この開高さんのお返事の手紙は非常に貴重なので紛失しているのが大変残念である。

これらの手紙その他何通かの最後の手紙が開高記念会から帰ってきていない。
開高氏は1989年12月9日に亡くなられた。

=====

1989年12月30日（私の手紙）

牧様道子お嬢様、

今日は開高先生のお誕生日です。五十九歳のお誕生を眼前にお亡くなりになった先生をひとしおお偲びになっていらっしゃることと存じます。先生のお誕生を悼む何十万人かの人々の末席から心からのお悔やみを述べさせていただきます。

十二月九日の朝（日本では夜です）横浜緑台の姉が電話して参りまして、開高様が今朝十一時にお亡くなりになったと今テレビで聞いたと申しました。私は夏と秋にお元気なお手紙をいただいて御回復中だとばかり信じておりましたので呆然といたしました。その知らせはその四日間に受けた三度めの訃報でした。その前日も日本に電話して、返事に出た息子さんからお母様のお葬式の日だと聞いたのです。五十代の方々がそうやって一人一人逝っておしまいになるという感じでしたが、開高先生のご逝去は特にとりかえしのつかない、大きい才能、大人物を失ったという喪失感に襲われました。一つの時代の終わりという感じです。

千九百七十二年の十一月に『夏の闇』の翻訳のことでお会いしてから十七年間、ほんとうにご親切な御指導とご交際をいただきました。私のような頭の悪い非才な人間を相手に根気よくお付き合いくださったことを深く感謝いたしております。一人でお聞きするのはもったいないような数々の面白いお話を、なぜテープにとらせていただかなかったかと後悔しながら思い出しております。でも皆様の思いも同じでしょう。

何百人の友人のどなたにも思いやり深く、せんさいなお気遣いをお見せになった無類のやさしい方でした。有名人におめずらしい、ほんとうに四方八方に気を配る方でした。私のようなものにでも箱いっぱいになる程のお手紙をくださったのは「手紙を貰えばきちんと返事する」という義理がたさがおありになったからでしょう。あちこちに義理堅くおつきあいになって気をお配りになって疲れておしまいになったのではないかとも思います。そんなに見えない方が思いがけず一番繊細なのですから、それをよくご存じの牧様はさぞ御心配なされたことと存じます。でもすぐれて賢い、なんでもお出来になる奥様とすばらしい才能のお嬢様に愛されて守られて看取られてお逝きになった開高さんはお幸せだったと思います。お仕事も最後の最後までなさったのですね。絶筆の掲載された『文学界』を求めに行くとどこでも売り切れだったから、注文しておいた、ともう一人の姉が言ってくれました。

私こと、不勉強なので、その後一冊の本につっかかったまま翻訳書も出しておりませんがこの三年間教えるのに忙しかったので仕方ございません。今年のペンシルヴァニア大学の冬休みは短くて一月早々に春学期が始まります。学生が近代現代文学の課目で「開高健」を読むのは三月終わりになります。今年は特に先生をお忍びしながら教えることになります。

こちらは先週の厳しい寒さが少し緩まり、今日は氷雨が降っております。先生のお誕生日を奥様とお嬢様がどんなお悲しみで過ごしていらっしゃるかと思うと胸が痛みます。ご家族のほんとうの淋しさ悲しさが来るのは告別式や初七日その他がすんで、弔問客がいなくなった時ということは私も再度の経験でよく知っていますので、すぐお電話やお悔やみ状を差し上げることを控えましたが、この頃はちゃんとした手紙の書き方もしなくて変な手紙になってしまいました。お許しくださいませ。新年もお静かにしめやかにお過ごしのことと存じますがお看護疲れを十分お療しになって、お身体を御大切に、徐々に新しい生活にお慣れになりますよう。今後のお幸せを心からおいのりいたしております。

十二月三十日

かしこ

セシリア瀬川シーグル

牧羊子様、開高道子様

=====

1992年11月22日

牧羊子様

ご無沙汰申し上げております。お元気で御活躍のことと存じます。こちらは忙しい大学教師生活で、毎日講義準備試験クイズ論文採点に加えて自分の研究など休み暇もなく、いたずらに年をとるばかりで、年々過ぎていきます。

この度、先日七年前に講談社インターナショナルから昭和短編集が出たとき編集にあたったヴァン・ゲッセル氏が、アメリカで文学者百科事典が出るので、私に開高健氏項を受け持ってくれという依頼の手紙を書いてまいりました。これは短編集のときとおなじ全くの無報酬の仕事ですけれども、非力の私でも日本文学をひろめる一端の仕事に携わっている身として、ゲッセル氏が私に開高健紹介を依頼されたことを名誉に思いますので、喜んでお引受けし、すぐに夫人にそのことをお伝えすると申しておきました。

最近の開高健研究の情報、それに私の知らない開高先生の晩年一、二年のことをお知らせいただければ、大変幸せに存じます。テレビの追悼プログラムだと思いますが、「悠々として急げ、開高健の大いなる旅路」や、遺稿『珠玉』の掲載された『文学会』などは家から送ってもらいましたし、開高健追悼号の『文学会』二月号、司馬遼太郎氏の弔辞の掲載された文春の二月号もあり、ラスキン氏の追憶の出ている『潮』もあります。『ユリイカ』の開高健特集はないのですが、コロンビア大学から借り出すことができます。雑誌掲載総索引で調べましたが、その後開高健研究がどれだけ進んでいるかわかりません。

雑誌とか、研究書とかで開高文学について出版されている本の情報などに疎漏があってはなりませんので、ご教示いただければ幸いと存じます。ペンシルバニア大学にない雑誌でも（私たちの大学はあまり日本の雑誌を取ってくれませんので）ほかの大学の図書館から借り出すことが出来るかも知れませんので。

牧さまもお忙しくていらっしゃると存じますので、わざわざお手を煩わせるのは失礼だと思いますが、もし、このことだけは、はっきり書いておいて欲しいとお思いになるようなことがございましたら、恐れ入りますが御一報いただければ非常に有難く存じます。

お寒さも厳しくなってまいりますおりから、どうぞご健康にご留意くださいませ。

かしこ
セシリア瀬川シーグル拝

=====

1992年12月26日

セシール瀬川様

お返事が大変遅くなりましたこと、深くお詫び申し上げます。お元気で愈々ご研鑽を重ねてご活躍のご様子、お喜びもうしあげています。開高のことお申し越しの件どうぞよろしくお願い申し上げます。

①. 著作権保持者—牧羊子、開高道子 T253 茅ヶ崎市東海岸南6-6-6 4

昨年（'92）この文面が年内にとどきましたら本年にあたります秋 10 月 27 日開高記念会を発足させました。実はお手紙をいただいたとき、この発足に併せて、以前から企画していました開高健賞アトラクションヌーボーの会、記念会地域支援ブロックの設定などの事業に、諸種の原稿が年末をひかえて、締切りに逐われ昨日 12 月 25 日漸く最終原稿を入稿し了えて、お返事を申し上げられる状態に。どんなにかお気づかいいただいでご迷惑おかけして居りましたことかと重ねて失礼をお詫びもうします。

さて①の項のエージェントはオリオンの酒井建美様
日本著作権輸出センターの栗田明子様
の両社でお世話願っています。それから開高健記念会の担当者は新潮社メディア室の沼田六郎太氏でございます。

②、③についてはより正確な報告の調に少しお時間をいただきたく、ただし、そちらの締切り期日もございましょうし、いつまでにおとどけ申し上げればよろしいでしょうか。お教えいただければ有難く思います。正月休み中に今年のこしました、ちょっと長い原稿を仕上げなければなりません、この期間は普段と違って、外部から多くの要件をもちこまれますことがかなり少なく為りますので、十分に連絡事項をまとめることが出来ると考えています。

よくご旅行をなさいます、いつごろなら、どちらへ、日本へお帰りになることなど等——お教え願えればありがたく思います。

お大切にお過ごしをいっそうのご加慮あって、さらなるご発展をお祈り申し上げます。
必要な資料本についてはご郵送申し上げます。 牧

=====

（❖ここに私の手紙が一通あったはずだがみあたらない。）

1993年2月8日

セシール瀬川様、

対応が遅れて、ごめんなさい。会組織にすると会ギにかけていることで、どうしても非連続になり、ご迷惑をかけてしまいます。さて1月26日茅ヶ崎での事務局（何と大仰な呼称ですこと、書いていてびっくりします。）のミーティングで、会からではなく、牧個人としておとどけする資料『開高健書誌』（これも目下、目につく大きな誤りだけ2箇所、朱を入れておきました。もっと丁寧に読んで調べる必要があるのですが、今日までのところ、その時間を持つことが出来ずにいます。しかし、可成よく出来ていると思いますので、お尋ねの諸問題に参考資料としてご活用いただくことが出来ようか、と考えています。）と追悼文等（文学的観点からそれぞれの筆者による発見を可として選びました。）に新潮社から目下も刊行中の全集のカタログを航空便でお送り申し上げます。（93. 2. 5（金）

これより先に、上記のミーティングのあと、会では個人の翻訳等を担当して出していた新潮社の沼田六平太氏（もと、同社外国文学部長、現同社メディア室担当）から、とりあえず、参考資料若干をお届けするように願っておきましたのでこの便の前にはお手もとに着いていますことと思います。瀬川さんの勤勉なることビーバーの如しとは故人が敬愛をもってつねづね話していましたが、筆まめであることも含めて、私もまったく同感、賛嘆しています。そのような研究者に対応、お気に召していただける程度のものは残念ながら、まだ当方にも出来ていません。あまりに俗事煩多であるこの国の人間関係、とくに故人となった人をめぐっての雑用が多過ぎかなりの部分切りすててはいますが、財団■■の仕様は官庁相手にまだまだ忍耐を要求されそうで、いまその峠にかかろうとする難所で、これをクリアするのが精一杯というところです。いずれ開高の仕事をじっくり読みこみ推察する作業を、手分けしてと、とくに有能な若い書き手に継いでもらうことも併せて計画はしていますが、『面白半分』の編集をしていた佐藤嘉尚が追悼のマガジンをまたマガジンハウス社刊の詩誌『鳩よ！』‘91年12月号『開高健特集』（この詩誌の特集シリーズの企画です。）は私がほとんど編集担当しましたが、作家の没後のことは座談会で、わかりやすく、まとめられています。しかし、いずれも開高健記念会資料として各一部しかなくて出版社でも在庫はとくに『鳩よ！』では零と聞いています。念のため連絡先を下記します。

佐藤嘉尚 KK アワ。プランニング T 2 9 4-0 2 千葉県館山市 犬石 1515. TEL: 0470-28-2511

三浦実『鳩よ！』編集長 KK マガジンハウス T 1 0 4 東京都中央区銀座 3-13-10. TEL: 03-3545-7180

なお、墓地は T 2 4 7 鎌倉市、山ノ内 5 3。円覚寺松嶺院内
文学碑は同封コピー 1 2。別に開高健基金が国際交流基金（外務省管轄，東都
千代田区紀尾井町）のアセアン文化センター（渋谷区宇田川町 3 4-5）
に‘90年設置され、’90年11月ベトナムから作家マーヴェンカーン氏，
‘92年11月にはモンゴルからガーダンバ氏を招聘して、東京，大阪，京都で記念講演会開催，’93年はスリランカの作家を迎えての講演会予定。

忙しいのと、この数年の想像をこえる諸事のクリアに逐われて、ご満足いただける情報をつくしきれないことを遺憾に思いますが、長期にわたっての整理が要求されること故、腰を据えてかかる外ありません。いっそうのお大切ご力嗜を祈り上げます。この健年を。

=====

1993年2月13日（牧さまへ）

前略

先日から『開高健書誌』『悠々として急げ』などのご立派な書籍を牧様からお送りいただき沼田様からもさまざまな材料をお送りいただいて喜んでおりましたところ、昨日は又牧様から「しゃりばり」を拝受、これでもう何一つ不足ない材料の揃い様で、恐縮し

ております。まことに行届いた御配慮、心から御礼申し上げます。私の記事が長くなりすぎて切られるおそれがあるかもしれないとちょっと心配になります。沼田様からの材料に銀山平の二体の碑の写真が入っていて開高様のお好きだったというすばらしい場所にすばらしい碑が建ったことを知りました。彫りこまれた感銘深いお言葉が、いつ迄も日本人の心をゆさぶってくれる事でしょう。私もこの夏ぜひとも訪れて水の味のする水、木である木、雨である雨を味わいたいと思います。

歴大な『書誌』のリストを拝見し、啞然としています。開高健はまことに偉大であったと（それは作品を読み返す度に思うことですが）感じ入らざるを得ません。それは才能が秀でていたと共に、実にまじめな勤勉な努力の人であり、稀にみる探究心にみちた人であり、人間味、あたたか味を太った身体に一ぱいに湛えた方であり、そして究極的には徹底的な愛妻家、父親であったのだと、このぼう大な作品のリストを見て思う事です。それにせい一ぱい答えて今御主人の事業と遺徳を顕彰し、後につづく人たちをたすけようとしていらっしゃる奥様、お嬢様もおえらいと思います。惜しい方が早逝なさったのだなあと、今にして悔やまれます。

牧様の記事で『毒蛇』という作品が開高健賞を受賞されたことを知り、快心の思いでした、というのはその作品を読んだわけではなく、すぐに開高先生の『決闘』を思ったからです。あの作品を訳したのは、実にあれが好きだからで、南の島の、海の、雄大な描写、ハブとモングースの、まるでアッテンボロウのドキュメンタリーを見ているような生き生きとした、しかしもっと詩的な描写が開高文学のすばらしさを如実に感じさせてくれるからです。今学期教えている最上級日本語の短編小説の課目の中でも『決闘』と『玉碎ける』を日本語で読ませます。（一学期に短編を十四か十五読みます）（近、現代日本文学（これは英語）のコースでも『夏の闇』『輝ける闇』を読ませています）『決闘』はもっともっと人に賞められてもいい作品だと思っています。あの、読者の視覚触覚をいきいきとよみがえらせるような描写は驚嘆の限りです。

ではいろいろお心づくしの材料を無事に受取りましたご報告と共に御礼を申し上げ、牧様と道子様のご健康を祈ってペンをおきます。春私の本が出てまいりましたら一冊お送りいたします。

二月十三日

かしこ

セシリア拝

牧羊子様

=====

これで開高・瀬川、牧・瀬川の文通の記録は終わりである。この後牧羊子さんからお手紙があったかどうか覚えていない。私の不注意からちゃんと手紙を数えたり記録したりしていないからである。その後二度ばかり茅ヶ崎鎌倉を訪れ、鎌倉円覚寺松嶺院のお墓まいりもしたけれどもその時のことも記録していないので老人には思い出せないが、円覚寺の山門を入ってから相当歩いたことは覚えているし、開高さんのお墓は立派だと思ったことも覚えている。

1994年に道子さんが鉄道に飛び込まれたことを新聞で読んで驚愕した。その時はまだ自殺だったとははっきり書いてなかったと思う…事故だった可能性もあったのである。私は何と言っていいかわからなくて牧さんにはお手紙を書かなかったと思う。書いたかも知れないがコピーはとっていない。

鎌倉へ行った時は牧さんにご連絡しなかった。私の正直な気持ちは、彼女はえらい女性、女史で私は尊敬はしていたが近より易い人ではなかったのである。その後いつだったかお会いしたときも一どの年の夏だったのか、いつものようにお電話すると、ちょうど開高健を偲ぶ会合があるから出席しないかとお誘いを受けたので茅ヶ崎へ行った。それは茅ヶ崎のどこであったのかも覚えていないが、ロシアから『青い月曜日』を訳された方がいらっしゃって、その方を中心になりたいそういい会合だと思ったが、その時牧さんは私に挨拶もなさらなかった。私はその会では開高記念会の方たちにも全然お会いしなかった。

初めて開高記念会の方たちにお会いしたのは2009年、その前年12月に手紙をお貸ししてから夏になって日本へ行き、開高氏没後20年の紅茶会でしゃべることを依頼された時である。その先夜は新宿でご馳走になった。記念会の会長坂本忠雄氏や、2008年12月にフィラデルフィアに来てくださった岩城利守氏と写真家のアリモトタカシ氏などがおもてなし下さった。その時は牧羊子女史はもう亡くなっていた。翌日紅茶会に事務局長森敬子氏、副会長の吉澤一成氏と藤本和延氏、理事の菊池治男氏と坪松博之氏などがご出席になり、初めておめにかかっているいろいろな思い出話をたのしんだ。

この十七年間の交友の記録は私にとって非常に大切な宝物である。開高氏と通信していた頃はずっと後になってからも彼の翻訳を出すつもりだと大言壮語をしているが、それは泡のように儚い空手形になった。これは私が翻訳というものにすっかり幻滅を感じて全然やめてしまったこと、教えるのに忙しかったこと、その後引退してからは他の研究に囚われていたことなどが理由である。しかし何よりも私にとって開高氏の存在の魅力は彼の生命力にあり、私だけでなく、みんなそれに磁石のように惹きつけられていたということもある。病気の開高氏、亡くなった開高氏など考えられないのである。

開高氏との友情は私の交友関係の歴史のなかでも特別にそっとしておきたいものであるにも関わらず通信記録を ScholarlyCommons によって発表することに決心したのは、私はもう何時死んでもおかしくない年であって、亡くなったあとは私の身の周りのガラクタは何も知らない人たちによって焼却されるだろうからである。開高健研究は今後も文学に興味を持つ若い人たちによって続けられるであろうから、この稀な生命力にあふれた稀有な日本文学者に接したことのなかった人々に、普通知られていない開高健の一面をお見せしたいと思ったからである。手紙のなかで何遍も言っているように、開高氏の楽しいお話をテープでとって置かなかったのは非常に遺憾である。しかし開高氏の生き生きとした語り口、底知れない博覧強記や知識は面白いノンフィクションや数多くの対談、座談会、対話集成などに記録されていて今でも十分楽しむことができる。

開高健の全作品は『近代文学書誌大系 1』の『開高健書誌』浦西和彦編、大阪：和泉書院、1990に収録されている。

=====